
和茶 6人席

イイポン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

和茶6人席

【NZコード】

N7224E

【作者名】

イイポン

【あらすじ】

高3になる主人公の優馬。入学した頃は高校生活は平穀無事を願つていたが入学式早々、率先躬行の四文字熟語の似合う『光』と氣炎万丈の四文字熟語の似合う『五右衛門』と出会ってしまう。そんな彼らによって優馬の高校生活は一転!!そして今年!!新たに3人の仲間が出来き、優馬達は集いの場を作った事にした。【和茶】といふ喫茶店のようなファミレスのような…とりあえず深夜までやつてる喫茶店だ。毎回同じ店の同じ席に同じ人数で座る。なんてつたつて6人用の席は一つしかないからね…【和茶6人席】…ココで色

々な思いで作りの計画を立て、勿論実行するーー今年は良い年になる気がする。

『新学期』

『……はあ、今年で俺も3年かあ……』
俺の名前は優馬。どこにでも居る普通の高校生だ。まあ色々と問題には巻き込まれるが、コレは俺のせいではない。結論、やっぱり普通の高校生だ。

4月9日

春休みも終わり、今日からまたニートから学生に戻される。まあ学校は好きでもなければ嫌いでもない。

授業中は寝て、休み時間はだべつて、昼飯を食つて、また寝て、そして帰宅。

強いて言えば朝起きて学校に行くまでの間が一番嫌だ。
そんな感じで小学校、中学校、高校1・2年で一度も学校が嫌だから行きたくないと思つた事は無かつた。
今年も例外ではない。

『おひさあー！！！』

登下校はいつも大体、友人の五右衛門と一緒にいた。おっと、勘違いされそうだから言つておくが五右衛門はあだ名で実際の名前は洋介だ。

長期休暇明けの登校日もいつもの待ち合わせ場所で合流した。

『おう！今年もお前と同じクラスかな？？』

『おいおい……それだけは簡便だぜ……』

『ハハハハ。ちげーねえ！！』

まあ当然つちやー当然の事だが、俺と五右衛門は春休みの出来事を話しながら登校した。

チャリを走らせ20分。ようやく学校に着いた。近くも無いし、遠くも無い距離だ。

『おお！！優馬！五右衛門！お前らまた同じクラスだぜッ！！！ついでにワイも！ハハハ。マジに腐れ縁やのー！』

彼の名前は光。男とも女とも取れる名前だが当然男だ。

『ヤツ・パリカ…』

『来る途中に何か嫌な予感がするなあつて優馬と話してさ…見事的

中！－ハハハ。』

『まつ。クラスわけの決定は変えられねえし。諦めるしかねえな！..』

『男3人：3年間同じクラスか…きもちわりいいい。』

『ブハハハハハ。』

実際、3人とも照れくさいのか公では素直に喜ばなかつたが3人同じクラスで嫌では無かつた、ココまで来たらとことん付き合つてやる！

俺らはそんな風に思つていた。俺らが知り合つたのは高校の入学式の時だつた。

『イツテ。気をつけろよ。』

『あ？誰だテメエ。テメエが気をつけろ！ボケが！』

『…クソ、高校入学早々最悪な日だ。あんな奴と同じクラスになつたらマジに俺の高校生活たまつたもんじやねえな。…』

俺は、高校時代はのんびり過ごしたかった。だからアホな不良とは関わらず何気なく3年過ごすつもりだつた。

『はい！皆さん。はじめまして1年4組の担任をすることになりました斎藤隆です。私は皆さんと教師として生徒という関係じゃなく友達のような付き合いをしていきたいと思つています。堅苦しい挨拶はこの辺で、じゃあ1年間よろしく…』

担任は教師風吹かせるようなタイプでは無い、結構良もそうな感じの奴だつた。

『じゃあ、色々な中学から集まつた事だし、とりあえず自己紹介でもするか…じゃあ伊藤から順番に…』

『はじめてまして、伊藤智之です、クラスに同中の人居ないので友達ができるか不安ですが皆と仲良くやつていきたいと思います、一年間よろしくお願ひします。』

交友関係より成績を重視する、嫌われるタイプの眞面目君だ。

パチパチパチ。自己紹介の後には良くわからないが皆拍手をする。

俺も適当に2・3回手を叩いた。

『ハイ！伊藤！宜しくなー次は…梅田』

齊藤は五十音順で自己紹介を進めて行き、俺の番が回ってきた。

『ハイ！次は高橋。』

『高橋優馬です。趣味は競馬です。一年間宜しくです。』

…パチパチパチ。今までで一番短い自己紹介のせいか、拍手まで少し間があった。俺は自己紹介だの自己アピールだのそういうった類の行事は苦手だった。

『出ました！最短記録！7秒！』

齊藤はウケ狙いなのかボケてきやがつた。クラスは苦笑し、齊藤は赤面していた。

『次は…田中』

…反応が無かつた。

入学早々で席順など決まっていなかつたので席は適当だったので、誰が誰の後に発表するのかわからなかつた。

まあ大抵同中の連中で固まつて座つていたので、クラスは田中つて誰？と言わんばかりにガヤガヤしてきた。

『おーい。田中！お前の番だぞ！』と俺の方に近づいてきた。

『…おいおい、俺は今自己紹介したじゃねえか。こいつまたボケるのか！？簡便してくれよ。…』

と俺の不安は一瞬の事で齊藤は俺の横を通り後ろの奴に話しかけていた。どおやら俺の後ろの奴が田中らしい。

田中は寝ていて、全然聞いていなかつた。齊藤が肩を叩いたせいか、ビクツつとして目覚めた。

『…！…！俺の高校生活は終わつたと思つた。
入学式の時に肩がぶつかつてもめた奴が田中だつた。

『触んじやねエ！…』

田中の突然の叫びにクラスが静まり返り。俺も不覚ながらびっくりしてしまつた。

『田中…どうした！機嫌でも悪いのか…？』

『つっせえー話しかけんな！眠いんじや』と言つて田中はまた眠りに付いた。

齊藤も悟り、これ以上は突つかからなかつた。

『田中の眠りは妨げるなー彼が田中です。いきなり良い事を学びましたね。』

齊藤は上手くクラスをまとめ、シーンとしていたクラスに笑いが飛び交つた。

『田中の次は…土屋。』

『土屋光。ヒカリやのーとヒカルな！漢字のままやと女みたいな名前やけど最高に男前さかい女と間違われた事はありまへんー皆ようしゅーー！』

自分流の方言を使い、普通に面白い奴だつた。クラスにも一気に溶け込み土屋の事を知らない奴も笑つていた。

『土屋はおもしろいなあーその面白さ半分先生に分けてくれー！』

『有料でッせー！？』

『こりゃまた…お高く付きそうで…』

土屋は齊藤とも打ち解けていた。

『先生には土屋の才能を買う金は無いので…次…中村』

土屋の自己紹介からクラスが楽しい雰囲気になり、ラストの渡辺まで詰まる事なく進んだ。

他の高校は知らないが、この高校ははじめの日の授業は全て学級の時間がとつてあり、自己紹介の後は寝ても良し、クラスの子と話しても良しと、かなり楽な高校である。

俺は同中の奴と少し話し、眠くなつてきたので眠りに付いた…キーンコーンカーンコーン。

チャイムの音で田中が覚めた。

『…つうう。良く寝た。一時間田終了かあ…』

と時計を見てみると昼飯の時間だつた。

『…やつべえ。めっちゃ寝ちまつたよ…』

昼飯など持つて来ていなかつたので、購買に買ひに行き、食ひ終わつたらまた寝た。

初日のせいか、小学校、中学校と寝てばかりの生活をしていたせいか…とにかく昼飯を食つた今、眠たくて仕方なかつた。

『高橋君…高橋君…』

眠つていると俺を呼ぶ声が聞こえた。

『え？…ん？…あ！悪い。』

ようやく起きた俺は、声が現実と氣づき前の女の子に謝つた。

『これ、みんなの連絡簿らしいから後ろの席の子にまわして。』

『あ…ああ』

プリントを一枚取り、残りを後ろに回わそうとした。

『！！！…おいおい、後ろの子つてあいつじやねえか、最悪だ…』

後ろを見てみるが、奴はやっぱり寝ていた。

『田中…おい…田中…』

俺は何故か小さい声で、呼びかけた。やっぱり起きそつて無い。

仕方ないので俺は、田中の肩をゆすり起こした。

『うるせえなあ！触んじゃねえつってんだろ！…』

田中が俺の手を思いつきり払いのけた。

ガツツシャアアン！…！

『イテツ！…！』

田中が俺の手を振り払つたときに横にあつたガラスに俺の手が当たつた、割れてしまった。

俺としては最悪意外何でもない。

腕を2〜3箇所斬り、血がポタポタとたれ落ちた。

流石の田中も同様していた。

『わるい。マジわるい。大丈夫か！？』

『ああ。大丈夫だ。気にすんな。』

全然大丈夫じゃねえ！とぶん殴りたかったが何故か田中の謝罪は心がこもつていてる気がした。

齊藤が放つておくはずも無く、走つてこっちに来た。

『高橋！！！大丈夫か！！！』

齊藤は急いでハンカチを取り出し俺の傷口に当てた。斬り所が良かつたのか、見た目より痛くはなかった。

『もお大丈夫っす。』

『何が平氣だ！！血が出てるんだぞ！！』

自己紹介の時の齊藤とは別人で、真剣さに圧倒された。

『は…はあ…』

周りのクラスの先生や、生徒が何が起きたんだと教室から顔を出してみていた。

おそらく、大半の先生や生徒は荒れた生徒がガラスを殴つて割つてしまつた…そお考えているだろう。

実際は違うが、第三者の目にはそんな感じにつづっていても仕方ない。

『…最悪だ、皆こつち見てるよ…』

俺は手を怪我した事より他の先生や生徒から目をつけられる方がよっぽど厄介だつた。

『誰か！保健室に連れつてツてやつてくれ！先生は周りの教室に事情を説明してくる。』

土屋が立ち上がり、俺の元に来た。

『俺がつれてきますわ。高橋、大丈夫か！？』

『ああ。悪いな。』

『土屋、ありがとな！保健室の場所わかるか！？』

土屋はうなずき、俺の肩を組むように自分の肩にまわした。

『田中…お前も一緒に行つてやれ！』

齊藤は田中にも一緒にいくよとに言い、周りの教室に状況を話しながら言つた。

『じゃあ汚した方俺が持つからそつち側頼むわ！』

と土屋の言葉にあと返事し、俺の手を肩に回してくれた。どうやら一番冷静なのは俺らしい。

足を怪我したのなら二人が肩を貸してくれるのも理解できるが、腕

を怪我して、肩を借りている。

かなり変な光景で妙に恥ずかしい気分だった。

渡り廊下くらいに来て俺はもおいいだろつと、腕を一人の肩からはずした。

『おい！勝手にほどくなよ！』

土屋がちゃんととした日本語を話した。

『あのなあ……わりいけど俺が怪我したのは手で足じゃねえんだ。』

『…』

『…』

『…』

少しの沈黙を挟み三人は爆笑した。俺も怪我の事など忘れてただただ笑えた。

土屋も田中も腹を抱えて笑っていた。

保険室について見てもらうと、バンソウ「カウ4枚で処置終了。

その内治るでしょ」と言われた。

教室に戻ると、斎藤に状況を話し、何でもないと伝えた。

さっきまでの殺伐とした空気が嘘のようになつて、30分後にはガヤガヤと何事も無かつたかのようになつていた。

俺は多分、斎藤が上手く周りの教室や生徒に話してくれたおかげだと、被害者ながら感謝した。

6現目が終わり、帰宅の準備をしていると、土屋が帰りにカラオケでもいかへんか？と俺と田中を誘いに来て3人で出かける事にした。

『野郎3人でカラオケはねエだろ！』

『田中に同意！！』

『俺の美声きかそおとおもたのになーじやあファミレスにするか！』

俺たちは5時間くらいファミレスで騒ぎ、今日初対面とは思えないほど、語りまくった。

明日も学校だしそろそろ帰るかと土屋と田中と別れて帰宅することになった。

俺は一人になるとチャリをこじきながら綺麗な星空に向かって全力で

「高校初日サイコー！！！！！」と叫んだ。

『おい！優馬！早くしねえと遅れるぞーー！』

五右衛門に引っ張れた。

『おお！わりいわりい！春休み明けで頭まだ回ってねえやーー！』

キーンコーンカーンコーン！！！

『やべえ！！』

俺ら教室に向かつて走り出した。

『コラア！高橋ツ！土屋ツ！田中ア！貴様ら初日早々社長出勤力ア

アーー後で俺のとこに来いーー！』

『優馬がボケてるから斎藤に呼び出しじゃねエか！』

『ハハハ。初日からついてねえなあ。』

『わりいつて！ジュースおーじるからさー付き合つてくれ。』

『あいあい！』

こおして俺の高校生活最後の年が始まった。

『班決め』

『3年4組の担任になつた斎藤隆です。もお知つてゐる人がほとんどだと思うが最初に自己紹介をするのが決まりだから、まあ適当に聞いてくれ！そして今年初めて俺が担任になつた生徒は最後の年に俺が担任で超幸運だ！！さて本題に入るぞ！今日からお前らも最上級生だ！俺もお前らと一緒にこの高校に来て3年目だ！俺は今年で卒業じゃないが最後の1年楽しく過ごして生きたいとおもう！勉強を頑張つて良い大学に行くのも人生！青春時代を満喫して高校最後の思い出を沢山作るも人生！俺は勉強も大切だとおもうが、最後の仲間との思い出はもっと大切だとおもつてる！だから、悔いの残らない一年にして欲しい！以上だ！』

担任の大聲での挨拶が終わつた。

初日は新入生を迎える入学式がある。くそ暑い体育館に集合して新入生を拍手で迎え、校長のくだらない挨拶を聞き、新入生代表の嘘の公約を聞いて終了。どこの学校でも一緒だとおもうが、あまりに教科書通りで最高につまらない。俺だけじゃなく恐らくほとんどの生徒がめんどくさいと感じているだろう。そんな俺らの思いを無視するかのように担任が言い放つた。

『よおし！そろそろ入学式の時間だ！本来なら番号順に並んで皆で一緒に行くのが普通だが、俺は教科書どおりと言うのが大嫌いだ！そして無断欠席や遅れてくる輩は居ないと思つてゐる。だから各自各自9時半までに体育館に集合する事！体育館では出席番号順に座つていってくれ！』

俺は1年2年と斎藤が担任だったからこいつの適当さは知つていたから何とも思わなかつたが、斎藤が初めての生徒はガヤガヤと話していた。

生徒の気持ちを分かる良い奴と言つ意見もあれば、今年は大学受験もあるのにこんなふざけた奴で良いのか…と意見もあり、教師と言

うのはつぐづく大変な職業であると俺は思った。

皆が体育館に向かい、俺も五右衛門や光と一緒に体育館に向かつた。

『おいおい！今年のクラスの女マジで可愛い子多くねエか！？』

『ああ！確かに1、2年の時は酷かつたからな…』

『力力力！ちげえねえ！』

今年こそはこいつらじゃなく異性と過ごすんだ！…と3人は誓った。実を言うと…五右衛門は2年の時に一度付き合った彼女が居た…彼女と言つより…まあ彼女だ！高2の9月…いつものように3人で昼飯をしていると、違うクラスの辻本真理と言つ女から五右衛門に手紙が渡されたのだ。

『明日の昼休みにまた来るからその時に返事頂戴！』

『エ！？ア…アア』

『じゃあまたね！…』

辻本真理…通称マリア…学校一とは言わないがかなりの美人だつた。当然俺と光は食いついた。五右衛門は俺と光の攻撃を全て受け止め、手紙だけは…このマリアからの手紙だけは…と死守した。結局、五右衛門の願いは届かず3人一緒に手紙を見る事にした。

【田中君。突然の手紙ごめんなさい。びっくりしていると思うけど1年の時からずっと好きでした。2年も半分過ぎて9月…このまま3年生になっちゃつたら就職や進学で忙しくなつて言えないまま終わっちゃいそうだから、気持ちを伝えようと決めました。もし良かつたら残りの半分一緒に居たいです。田中君さえ良ければ付き合つてください…(*愛O V*W)】

『…』

『だあああああ…つしゃあああ…ついにこの時が来た…1年の時から視線は気になつていたけどまさかと思い、言えなかつたのだが…とうとう愛の告白を受けてしまつた！…』

冷め切つた俺と光を無視し、五右衛門はハイテンションだった。

親友ならお前らも喜んでくれよと言う五右衛門、馬鹿言え…親友だ

から素直に喜べないんだ！！そりゃいつかは…喜んでやるけど…今は無理だ！
と俺も光も同じ気持ちだった。

…次の日の毎…

三人は腹は減つているがご飯が喉を通らない状況だった。特に五右衛門。昨日の時間過ぎてもマリアは来なかつた。

『ダハハハ。やっぱ昨日のは罰ゲームみたいやの』

『ハハハハ。マツ！マリアに限つて五右衛門を好きになる事は無いな！！俺や光ならともかく…』

『ハハハ。そりゃ言えちよるわ！…』

約束の時間を過ぎても来ないのを心から喜ぶ俺と光。目をウルウルさせる五右衛門。

『田中君！遅くなつてごめん…』

3人とも背筋がツビクとなりドアの方を見てみると…女神…いやマリアが居たのだった。

『ちょっと毎休み部活の用事で忙しいから、返事の答えがOKだつたら放課後、中庭に来て！時間は…4時で！じやあ待つてるね…』
と春の桜が散るように、良いたい事だけ言って走り去つてしまつた。恥ずかしかつたのか…本当に忙しかつたのか…

五右衛門は一気にハイテンションになり、俺と光は一気にテンションダウンだ…

まあ、何だかんだで俺と光も放課後、一緒に中庭について行つた。

五右衛門の要望で30分前から中庭で待機している。もちろん五右衛門は一人、俺と光は少し離れたところからの見学だ。

悔しい気持ちが無い訳ではないが、流石に親友の恋の邪魔だけはしてはいけないと俺も光も心得ていた。

4時になつてもマリアは来る事は無くとうとう4時半になつた。俺と光も流石にコレは騙されたかもしないと、少し五右衛門がかわいそうになつてきた。と言う俺らの思いを断ち切るかの様にマリア

が走ってきた。『おや、五右衛門に遅れてごめん。』と謝罪している様子だった。

離れたところにいたので、声が全然聞こえなかつた。

少しすると、もお一人女の子が来た。なんやら3人で話はじめた。少し話すと一人は帰ったのかどうかについてしまつた。2分後に五右衛門は膝から崩れ落ち、俺らが隠れている方を泣き出しそうな顔で見つめていた。

俺も光も流石にお話は終わつたと思い、五右衛門の方に行つた。

『おう！ どもしたん！？ 向こうから告つて来たんだし上手く行つたんだろ！？』

『せやせやー！』

『アア…告白もされて…付き合つ事になつた…』

ちッ！ と舌打ちし、何がともあれ良かつたなと俺も光も全く気が付かなかつたが、内心自分の事の様に喜んだ。

『マテマテマテ…聞いてくれ…付き合つことになつたのは…マリアじゃなくて…小沢聰子…』

『エー！？』

『ハア！？』

小沢聰子…通称…バス田キモ子…以下略…

何で？…どうして！？と中学生の餓鬼がエロい事を問つかのよつて

興味深深で田をキラキラとさせながら状況説明を受けた。

と、言つても俺も光も一瞬で理解が出来た。

五右衛門にマリアから受け取つた手紙を俺達に渡し、…裏…と弦いた。

手紙の裏を見てみると、…聰子…と可愛らしく書いてあつた。

その後登下校、昼飯、放課後デートを毎日して、キモ子とは1週間で別れたのだった…しかも振られて…

『確かにまあ今回のクラス可愛い子も多いけどそおじやねえのもチラホラ居るぞ！…』

『せやなあ。例えば…キモ子！…！…』

三人は昔が懐かしいと入学式の最中にも関わらず大声で爆笑し、後々、齊藤から本気のグーパンチを受けた。

無言で座り続けて25分…入学式も無事に終了した…俺達は無事じ
やないが…

10分の休み時間はあつという間に終わり、2現目のホームルームが始まった。

『おおい！ホームルームをはじめるぞお！』

『今日やる事は、【班決め】、【係り・役員決め】、その後は班長の指示にて【席替え】だ！じゃあまず【係り・役員決め】をさつさと終わらせるか！俺が黒板に書くから好きな所に自分の名前を書き込め！！かぶつたらジャンケンで決めろ！！』

皆が一斉に黒板に書きに行つた。そんな中、黒鹿3人は喋つており、齊藤の話を全く聞いていなかつた。ゆえに皆が何しに行つたのかも不思議だつた。ジャンケンしてる奴も居れば、言い争つている奴：『何やつてんだ！？』

まあどうでも良いやけど、また喋りだした。

『良し！意外と早く決まったな！！流石、俺のクラス！優秀だ！』

クラスはシーンとなり、流石の俺達も前を向き黙った。

「あれ！？皆書いたか！？俺が人数間違えたかな！？」と斎藤は一人ずつ名前をチェックし始めた。

今になつて3人に狀況が理解できた
そこへ名前を書いてない三人
は俺達だつた。

た。

とてつもなくでかい声で叫び、覚悟していた俺がマジにビビッた。

『俺…揉め事嫌いなんで…最後にあまつたところにしようつと思つて、あえて書きませんでした…』

『ふむ、そお言つ事なら良い。残りは…実行委員…実行委員…実行委員…の3つだ…』

クラスは爆笑したが、俺はたまらなく最悪だった。

『田中と土屋も実行委員だが文句は無いな！？』

『うい。』

『はい。』

二人もしぶしぶ了承した、せめてもの救いが俺と五右衛門と光が一緒の実行委員だという事だ…

俺達の学校での実行委員とは、学校行事に全て参加し、朝早くきて準備し、皆が帰宅後、後片付けもやらなければいけない…まさに囚人だ。

ただでさえ厳しくて最も皆が嫌がる役員なのに、今年は3年で修学旅行、卒業式まである。

『じゃあコレにて【係り・役員決め】を終了する。5分間の休憩後、次は【班決め】だ。解散！』

多分斎藤がトイレにでも行きたくなつたのだろう。授業中なのに5分の休憩がもらえた。

『実行委員とかマジありえねえ…』

『せやなあ…何が悲しゅうて実行委員なんぞやらないかんのや！』

『いや…意外に捨てたもんじやないかもしれんぞ…女子の3人を見てみろ…』

実行委員は唯一男子3人女子3人の巨大委員であり、他の係りとは男女各一人づつ、多くても男女各二人と言うのが主流だった。大抵この通り決めつて言うのは仲の良い子とペアになるケースが多く、今回も例外ではなかった。

『！…！…！』

女子三人の名前を見て俺達は心の中で小さくガツツポーズし、ハイタッチした。

3人とも今回初めて同じクラスになる子だが、可愛いだの綺麗だと結構有名だった。

『さて、そろそろ【班決め】をはじめるぞー！このクラスは42人なので、6人で一班！合計7班にわかれてくれ！ただし！男女各3人づつにわかれること！！この班は修学旅行とかにも影響してくるから真剣に決める事！！最後に実行委員の人は実行委員班として班を組んでもらうので班長だけ決める事！！質問は一切認めません！以上！』

齊藤が話を終えると、仲の良い連中で相談したり、一氣にざわつきだした。

実行委員班とか言つ事で勝手に決められたが、どうせ俺達は3人も同じ班になる予定だったの特に問題は無かつた。

皆が班を決めている間、俺達は暇なので話していると、実行委員の女子達が来て軽くジコショして班長を決めよと言い出した。結局俺達から言つ事になり、出席番号の一番早い俺から言つ事になつた。

『えっと、俺は高橋優馬！優馬って呼んでくれれば良いから。宜しく。』

さつき齊藤に大声で呼ばれた事もあり、名前の紹介とかしてもしなくても良いのだが一応言つておいた。

『俺は田中洋介！こいつらは五右衛門って呼んでるし、五右衛門でも洋介でも好きなように呼んで。じゃあ一年間宜しく。』

結局、五右衛門は五右衛門と呼ばることになった。

『わいは土屋光や！話し方に固定が無いのが特徴！まあ癖みたいなもんやし、気にせんといてや！俺の事は何て呼んでくれてもええから。ヨロシュー。』

光も普段となんら変わらない口調で淡々と紹介した。

男性陣が紹介を終えて、女性陣のジコショになつた。

『私は井上嬉紀。友達とかは皆キキって呼んでるけど好きに呼んで良いよ。よろしくね。』

これまた落ち着いた口調で言われて3人ともついつい…はい…といつてしまつた。

『あたしは内藤薰。キキと一緒に名前で呼んでくれて良いよ。カオルじゃなくてカオリね。皆カオリンって呼んでるしそおよんでも！ヨロシクウ。』

完全なる天然系だ。

『あたしは白鳥羽樹。羽樹つて氣に入ってるから羽樹つて呼んで！ヨロスウ。』

おじさんたちにはまぶしいくらい元気の良い子だ。

ジコショも無事終了し、質問タイムに入った。俺達にとつては今この感覚だった。

『ええっとカオリンさんは歳なんぼですか！？』

『25でエす。』

『エエエエヌツエヌエヌ…！…！』

『嘘でエす。』

『…』

『ハハハハハ』

光の意味不明な質問で場が盛り上がり、結局ホームルーム中ずっと話して結局班長は決められず齊藤の指名でキキが班長になる事になった。

4月16日。新学期が始まって一週間が過ぎた。

『ういっす。遅くなつてスマン！』

『おう。』

俺は今日も変わらず五右衛門と一緒に登校した。

学校に着くと光はもお来ており、キキとカオリンと一緒に話していく。た。

『オハ～。』

『オハヨー！』

いつもは俺と五右衛門が最後に来るのだが、今日は羽樹がまだ来ていない。

『今日はまだ羽樹来てないん！？』

『まだやの…具合わるって休むんじゃうかー…？』

『ふうん』

俺らの班の席はいつだ。

キキ・光

羽樹・俺

カオリン・五右衛門

何か自分の隣の子が休むといつもは狭く感じ机のスペースも無駄に広く感じ、心なしか何か寂しい。

斎藤の話によるとどおやら今日は休みらしい。

『やつぱり、休みみたいやねえ。』

『ネ。羽樹ちゃん体調悪いのかなー…？』

『いや、さつき斎藤に聞いてみたら、家の都合で今日は休むみたいな事言つてたぞ。』

『そつかア』

『マツ！明日は来れるやろー…今日は何かポカンと空いてて寂しい感じしよるけど用事ある時はしゃあないしなー…それより授業や！1現目は移動じやけん、はようしな遲れるぞ。』

1現目は科学、科学室での実験だつた。実験と言つても蛙の解剖とかグロいもんじやない。

今日はメタンの生成の実験だつた。

メタンは1個の炭素原子に4個の水素原子が結合した分子である。

化学式は CH_4 。

実は、俺と光は科学は結構得意である。

班長のキキは科学が苦手らしく、俺と光をメインに実験が進められた。

『常温、常圧で無色、無臭の气体。人に対する毒性はない。融点は

： 183 、沸点は… 162 。』

『せやせや、メタンは強力な温室効果ガスでもあっての、同量の二酸化炭素の21倍の温室効果をもたらすと言われちよるんやで！

!『

まさに知らない人にとってはオタクの会話だった。

五右衛門は昔から俺達と一緒にいたせいかなんら変わりなかつたがキキとカオリンはポーとして、天然記念物を見るような目でこっちを見ていた。

こんな可愛い子達に見つめられるのはいつ以来だろうと俺も光も一ヤニヤして悪い気はしなかつた。

科学の実験は大体2時間くらい取つてあり、終わつた班からレポートを提出し、解散だつた。

俺達の班は超優秀！俺と光で実験を20分で終わらせ、残りの3人がレポートを書いて、30分で終了した。

科学の先生に合格を貰い、教室に戻つて話していた。

『光君と優馬君ってめっちゃ頭良いんだね！？』

『うんうん！びっくりした！』

教室に戻ると、キキとカオリンからのお褒めの言葉がもらえた。

五右衛門はムスッとしていた。五右衛門は勉強はてんでダメで強いて成績が良いのと言えば体育くらいだつた。

その点光の場合は賢さにはキレがあるが運動能力のキレはいまいちだつた。

俺はと言うと、どつちつかずの平凡キャラだつた。理数系は出来るが光と違つて文系は全然ダメ。運動も自分の好きなものはできるが、五右衛門と違い、オールマイティではない。

まあ俺達はバランスが良いといえばバランスの良い3人だつた。

『勉強の事は光が一番かもな！』

『かもやない！確実や！』

俺らは、小さい話題でも大きく膨らませ、話が途絶える事はあんまりなかつた。あつという間に時間は過ぎ、チラホラと他の班のメンバーが戻つてきた。

3、4現目はホームルームだつた。初日以来で久しぶりだつた。

『今日は久しぶりにホームルームの時間をとつた。3年になつて一

週間がたつたわけだ。班員の奴らとも仲良くなつてきたみたいだし、今日は班で1年間のテーマを考えてもらおうと思つて。一言でテーマと言つても分かりにくいか……まあ何でも良いー例を上げるなら、【仲間】とか【絆】とかそんな感じで大切にするものを考えて欲しい。それを好きな言葉で言い表せれば良し!』

斎藤の不十分な説明で、微妙に混乱気味のクラスだったが、各自各自で少しづつ理解した。

まあ要するに、簡単に言つと自分の班で何か好きな言葉を考えると言つ事だろう。

『また、訳分からん事言い出しそつて……』

『好きな言葉かあ……斎藤が言つたみたいに仲間だと絆つてありきたりすぎる事ない!?!』

『キキに同意!』

『あたしも!』

『せつかく各班で決めるんだからこの六人!つてのを強調したいよな。』

『せやな。仲間だの絆だのは班やのさてクラス全体に対していくつちよるみたいやしのあ』

『それにしても今日羽樹が休みつてのは痛いな……』

『だよね……どあせなら6人全員で決めたいよな。』

俺らは、班員が一人欠席しているので、明日提出ではダメかと斎藤に聞きに言つた。

意外にも答えはダメだった。どあやらコレは班決めの時、初日に決めるはずだった事だが、皆、良く分からぬ今まで決めても良いのが出来ないと想い、斎藤が学年主任に頭を下げ、4組だけ一週間延期をもらつたのだつた。斎藤から詳しい話を聞かされて、俺らはしぶしぶ席に戻つた。

『ダメかあ。』

『羽樹も気に入る奴を考えるしかないな!!』

『うんうん。私が思うに、最後の高校生活だし、皆実行委員つての

もあるし、今年の出来事は一生忘れられない思い出になると思つ。

『せやな！友情…思い出…』

『願い系も込めた方が良くないか！？』

『願い系！？何それ！？』

『良く分からんけど、願い系！！』

この班員が珍しく集中して考えている中、五右衛門が言い出した。

『あ！コレ良いかも！どんな時も味方！…永遠の友達つて感じかな』

『良い！…！それ良いと思う！』

『たしかに、わるうないな！』

五右衛門からまさか名案ができるとは誰も思ってなかつた。結局、皆

同意で五右衛門の提案に決定！

友達なら間違つた時はおかしいぞと批判してやれと言う人も居るかも知れない。

いや、多分大半の人はそお言つだらう。親、教師にそお教えられて

きた。

本当の友達なら…本当に相手の事を考えているなら…悪い事は悪いと言つてやれ！…

でもやつぱりそおは思わない。

間違つた事をしたら味方になつてくれる人は少ない…そんな時に友達が味方になつてやらないと本当の友達だとは思わない。

どんな時も味方で居て、間違つていたら味方のまま解決する。

友達だからこそ間違つている時にも味方するべきだと思う。だつて正しいときにはだれだつて味方になつてくれるじゃん…

そんな思いを胸に…

… friend of eternity …

コレが俺達の今年の公約と今後の願いである。

『穴掘り！？』

『はい！そろそろ意見はまとまってきたかあ！？授業も残り30分になってきたぞお！－！できた班から順にコノ紙に書いて提出してくれ！！』

斎藤の大声でクラスは一瞬静まりかえった。もお11時半だった皆集中していたせいか時間を忘れて没頭してたらしい。俺達はもお決まったので斎藤に画用紙を貰いにいき、油性マジックで堂々と書いた。

俺達に続くように次々と画用紙を貰いに来て、一つの班を残して皆が提出した。

『皆、結構考えたみたいだねえ』

『やつやつやつやつ…斎藤画用紙に書かせたひちゅう事はひとつかに貼るとおもひ。ばひ。』

俺らの他の班は…

…夢に向けて…

…最後の道を共に…

…腐れ縁…

…友達はもお一人の私…

etc…

どれも意味深い内容だった。

ラスト10分。ようやく最後の班も提出し、全ての班が時間内に終了できた。

『よおし！全班出し終わつたな！－！』の画用紙は学年主任に提出する…残り10分でもう一枚コノ紙に書いてもらひ。クラスがざわつきだした。何で何枚も書く必要があるんだろつと言う意見と、もう一枚の紙のようなものは見慣れない紙で何だあれ…？と言う意見も混じっていた。

騒ぎ出した生徒に斎藤としては珍しく皆が納得するような理由を話

し出した。

『何枚も何枚もめんどくさいのは分かる！けどおしてもコレだけは譲れん！！お前らは俺が持つ最初の卒業生だ！俺にとつてもお前らにとつても決して忘れる事の無い年にしたいと思っている。今口ノ時間を使って皆で書いた内容！意味！思い！それを卒業まで…いや、卒業してからも忘れて欲しくない…少なくとも今年中は忘れないで居て欲しい！忘れないと誓えるかッ！？』

斎藤のいきなりのクソ暑いセリフに皆が有利巧になつた。

『鎌田！お前の班の言葉、今年中忘れず居られるか…！』

『はい。忘れないと思ひます。』

『渡辺…お前も忘れない自信があるか…！』

『頑張ります。』

『皆も忘れるなよ…覚えている自信が無い奴は挙手しろ…』

…こんな時に誰が手を上げる…

当然誰も手を上げるものをおらず。全員今日決めた言葉を忘れない事を誓つた。

『良し！流石は俺の生徒！仲間！今の誓いをお前らに証明してもらう…』

静かだったクラスがまたまたガヤガヤしだした。

『今から書いてもらう紙は特殊な素材で作つてあつてな…！何ヶ月も何年も保存しておける素材で作つてある！故に高い…！が俺が自腹で7枚購入した！コノ紙にかいでもらつてそれを昼から校庭に埋めに行く…！まあタイムカプセル1年間バージョンだ…！』

みんな大賛成だった。俺自身、斎藤にしては良い事を提案したと思う。誰からの異議もなく皆斎藤の言つとおりに紙にさつきの言葉を書き、提出した。

キンゴーンカーンゴーン…ちょうど授業も終わり昼飯の時間になつた。

昼飯中は大体男女別々で食べている。そりやそだ。同じ班になつたとはいえコノ班のメンバーだけが友達つてわけではない。

女子は女子のグループで固まつて食べ、俺達は…まあ3人で食つていた。

3年になつてからは、天氣の良い日は屋上や、中庭など外で食つケースが多い。

今日は屋上で食つ事にした。この高校の屋上は意外と良い場所で、ある程度の屋根があり、実際雨の日でも濡れる事はまず無い。そして、昨年の卒業生達もココを使つていたらしく、校長室で昔使つていたソファーアと落書きまみれの机が付属品としてはじめからつた。

今年の3年は珍しく、屋上を使う者は俺達意外居ない。よつて、ソファーは使つたら自分達で中に戻さなければならぬ。屋根の下で雨が降つても濡れないのだが、湿気などでカビたり、腐つたりすると捨てなければならないから、出したら戻す！を常に心がけている。

『ああ重てエ！…』

『今日天気めっちゃ良いしイス干そうぜ！…』

『せやなあ！…このオンボロ大切に扱つたらなわいらが卒業するまでもたへんで！…』

『ハハハ！だな！今の2年も使えるくらい大切にしねえとな！じやないと卒業式の日に粗大ごみを4Fから3人で運ぶはめになる…』
『ダハハハハハハハハ…』

俺達は、このソファーを自分達の愛用椅子として大切に使う事にした、ガムテープでの補正の後を見ると、恐らくコレまでの卒業生もそおやつて大切に使つてきたのであるつ。

『今日は皆、焼きそばパンとメロンパンか！…』

『ウお！3人とも同じじやん！』

『力力力！3年も一緒に飯くつてたらそないな事もある…』

俺達はもお今年で3年目の付き合いになる。振り返れば色々な事を共に経験してきたがどの思い出も昨日の事の様に思い出せる。

『そお言えば、昼からタイムカプセル埋めるらしいなあ』

『斎藤はそお言つてたけど授業としては数学と世界史だろ…？どつ

ちも斎藤の担当じゃねえし放課後になるんじゃねー…?』

『放課後とか簡便してほしいいの…貴重な青春の時間はたこひつ
くで!』

『ハハハハ！アホか』

まあ流石の斎藤も他の先生の授業をサボらると云ひ事は無いだろつ
と思い、恐らく放課後に皆で埋めるもんだと思つていた。

キーンコーンカーンコーン！

『やベエ！！もおこんな時間かよ！…』

『優馬早くそつち持て！…ソファー中入れるぞ！…』

『OK！光ドア開けてくれ！』

『ウイウイ！OKよお！』

話していると時を忘れてついつい盛り上がりてしまつ。楽しい時は
短く感じ、辛い時は長く感じる。AINシユタインの相対性理論は
実に素晴らしい事だとおもつた。

俺達は急いで教室に戻り、席に着いた。

『遅刻だぞ！…』

つと言つたのは数学の先生ではなく斎藤だつた。

『あれ！？今日つて数学じゃないんすか！…』

『高橋：お前話聞いてなかつたのか！？昼からタイムカプセル埋め
るつて言つておいただろ！…』

『それは聞いたけど、てつきり授業あるし放課後にやるもんだと思
つてて…』

『ふむ。まあ言いたい事は分かるが遅刻の理由にはなつてないな！…』

『…たーセン。』

『まいいい！今日の昼からの授業は俺の授業、哲学と交換してもら
つた。だから木曜の哲学が数学になり、金曜の哲学が世界史になる。
わかつたな！…』

そんな一方的な意見で納得するほど最近の高校生は理解できる兵隊
ではない。当然、ブウイングが飛び交い、斎藤も流石に自分の勝手
な判断で生徒を巻き込んだ事に少し考えていた。

『よし！お前らの言い分も分かる！だからといって昼からの授業はもお先生方に話したので変えられない。それを納得してもらうためにお前らにもお得な条件を出す！！』

クラス内がしてやつたりと勝利の笑みを浮かべていた。斎藤の一方的な意見だが所詮先生と生徒。従わせようと思つたらできたが斎藤は先生という権力で俺達をねじ伏せる事は無かつた。

『まずタイムカプセルを埋める場所を班員で話し合つて決める！その後そこの場所を地図にして俺に提出する！その地図は俺が責任もつて預かる。その後は班員協力して1メートルくらい穴を掘る！その後、埋めて穴をしつかりと元に戻す！故にどこに埋めたかどおり分からなくなるタメにも地図はかなり正確に書くようにな！！』

ういい！とクラスが返事をし、斎藤の言つていたお得な条件とやらに耳を向けていた。

『コレだけの作業に昼から放課後までの時間はまずかからない！本來、あまつた時間は実習したり、俺の授業をしたりするもんだが、今日は俺のわがままに皆を付き合わせている！だから終わったら帰つて良いぞ！！下校の時間より早くても帰宅して良し！』

やつたアアアと素直に喜ぶノータリンが殆どだつたが、クラスに一人一人居る優等生はその言葉をうのみにしなかつた。

『先生！けどそんな事を先生の独断で判断して決めて良いんですか！？当然他のクラスの生徒は皆、授業ですよね！？』

『ふむ。もちろんさつきも言つたように本来なら、自習してたりしないといけない。でもまあコレは俺とお前らとの約束だ！帰つても良いし好きにしてくれて良い！責任は俺が取る！』

『大丈夫なんですか！？先生下手したらクビになりかねませんよ！？』

『ハハハ！岩田！お前の気遣いはありがたく受け取つとく。だが若造は若造らしく他人の心配何かせず無鉄砲に生きろ！』

『…』

とまあクラスでかなり賢い岩田の意見でも斎藤は自分の言つた事を

曲げる事は無かつた。

『よし！そあと決まつたら班で場所決め開始！！』

斎藤の声でクラスが一気にうるさくなつた。普段のつまらない行事には、乗り気も無くダラダラと適当な奴も居るが、お言つ連中も楽しそうな行事には意外と食いつき、意見を出したり進んで参加しだす。俺もその一人だ。

『今日は殆どが班での授業になつたねえ』

キキはどこか寂しげに呟いた。多分、羽樹が休んでいるせいであろう。班長のキキとしてはちょっと複雑な感じだつた。

『まあ羽樹には後々びっしり報告すりやあええ！』

『光の言つ通りだな。羽樹なら状況も理解してくれると思うし、大して気にしないだろ！』

と言つ五右衛門と光の意見を聞いても、キキとカオリンは微妙に不安そうだった。俺にはさっぱりわからんが、女と言う生き物は自分が居ないときに色々な事が決まって、それを後から聞かされるのは置いてきぼりになつた感じがして、寂しい感情を抱くらしい。

中にはそんな事を全く気にしない女性も居るが年頃の子はノケモノなどに結構敏感だ。

俺を含めて男3人には理解しがたい事だつた。逆にめんどうな事は班員がやってくれたと喜ぶ奴も居るだろ。

女は深く見るが、男は遠くを見る。

男にとつては世界が自分で、女にとつては自分が世界。

とまあ俺が簡単に語れるほど女と言う生き物は単純ではない。俺より賢い光はきっともつと羽樹の事を分かつてゐるだろ。

『しゃあないの。キキやカオリンが言つよつに羽樹が気になつたら多分わいらの班は終わる。わいら5人は仲が良いままでも一人欠けたら絶対に終わる。今日考えた言葉も多分無駄になると思つ。そこで提案や！……』

まず、コノ時間はコノ時間でタイムカプセルを埋めないといけない。とりあえず穴を掘つてその穴には何も入れずにまた穴を埋める。タ

イムカプセルはそのまま教室に持ち帰る。その後、皆で帰宅して、羽樹の家に行く！それで羽樹を呼んで皆で一緒にもう一度埋めなおす！！

『と言つ提案だつた。

『でも、それだともし羽樹の家に行つて居なかつたり、まだ用事で忙しかつたらどおするん！？』

『優馬…あほやのあ。それならそれで俺達で学校に戻つて掘り返して羽樹が暇になるまでどつかにタイムカプセルを隠しどきやあえんちゃん！？』

『ア！でも羽樹の家知つてる人居るの！？』

『エ？おんどれらしらんのか！？』

アハハ…とキキとカオリンは苦笑いした。

『まあええ！羽樹の家なら斎藤にききやあ分かるやろー。』

とまあ色々と意見は出たが、最終的には皆それで行こうと同意した。とりあえず、埋めるのは適当で良いが、埋める場所はかなり正確に覚えておかないと羽樹を連れてきたけど何処に埋めたのか分かりませんでは話にならない。。

俺達は夜暗くても絶対にわかる所に埋めることにした。校庭の壁には木が埋めてあり、端から3本目の木の前方にキキの歩幅で20行った場所に埋めることに決定した。

善は急げ！！早速斎藤に作業かからせてくれと、埋める場所を書いた地図を渡した。

『井上の班が一番最初か。じゃあ倉庫のスコップを使って作業にかかるてくれ。くれぐれも怪我だけはしないように班長が責任持つ事！俺も全員が外に出たら行くから』

キキは斎藤に倉庫の鍵を貰い、俺らのところに戻ってきた。

『もお先にやつてていいつてえ』

『よかつた、じゃあ早速掘りに行くでエ！！』

と言つても掘るのは俺と五右衛門。五右衛門は運動神經も良いし全然平気そうだが俺は後日の腰痛が不安だ…

校庭に着くと、キキは何度も20歩をはかり、その後掘る事になつた。

指示だしは光とキキ。

掘るのは俺と五右衛門。

応援はカオリン…

何とも不満な役割である。まあ文句を言つても女の子に掘らせるわけにもいかんし、俺が光の様に上手く指示を出せるとも思えないのではしぶしぶ納得。

穴は腐敗などの影響で深い、浅いは斎藤に見せて合格なら埋められる。深すぎると雨水が溜まり、入れ物ごと腐敗してしまう。逆に浅すぎると運動部などが使つたり、雨や雪でぬかるんでいる時に出てきてしまつては危ない。

光の計算では約1メートル弱だろ?との事だ。俺も五右衛門も必死で堀、クラス全員が出てくる頃には丁度堀終わつた。

『御疲れ様あ』

可愛い声援に少しだけ疲れが飛んだ。

『だあ…疲れた…』

『五右衛門と違つて俺はマジに死ぬかと思つたわ!!』

『お疲れお疲れ!手洗つときいや!キキとカオリンは斎藤よんできてくれや!』

俺と五右衛門は手をあらつて水をガブ飲みし、一服していた。

一方キキとカオリンは斎藤を呼びに行つた。見事に一発合格。

『おお!良い感じに掘れてるな!よし!箱を貸してみろ!』

と言われ、班員皆…やばい…と思つた。光は箱を渡すと斎藤は穴に降りた。

『こんな感じで良いな!俺も暇だしお前らは一番早くかつたし埋めるの手伝つぞ!』

『いやいやいや、良いッですよ!俺りでできますから!』

即座に五右衛門の拒否がはこる。

『先生は他の遅い子達を手伝つてあげてください。』

カオリンも必死で拒否つた。

『まあ良いじゃねエか！！どせ俺は全員の手伝つつもりだ！』
斎藤の好意は普通ならかなりありがたい事だが、俺らの状況としては最悪だつた。本来穴だけ掘つて、何も居れずに土だけ埋めて、別の所に箱は隠しておく予定だつた。

そんな俺達の内心を踏みにじるかの様に斎藤は気合を入れて穴を埋めだした。

『ウオラア！田中！手伝え！！』

『ア…アア。分かつたよ。』

五右衛門も仕方なく埋めることにした。結局五右衛門と斎藤で全部埋めてしまい、もどどおりの状態に戻つた。

『田中アア！！お前体力あるなあ！！』

元通りになつてしまい、いや、箱が埋まつてゐるから、元通りではなくかなりマイナスである。皆、作戦失敗と…浮かない顔だつた。カオリンにいたつては、今にも泣き出しそうだつた。

『先生。お疲れはん！ほなもおわいら帰つて良いでっしゃろ！？』

光は意外と普通だつた。自分は掘つていなかつたら…また俺と五右衛門が掘れば良いから！？俺と五右衛門が…

『おう！お前らもお疲れさん！じゃあまた明日な！ゆつくり休んで腰痛だけにはなるなよ！…』

『分かつてま！！ほなおさき。』

俺らは倉庫裏にスコップを隠し、再び手を洗つて教室にもどつた。

『おい！どすんだよ！…また掘るのか！？』

『せやな。とりあえず羽樹を呼んで掘つてまた埋める！別に何もかわツとらせんで！？』

皆が深くため息をついた。特に俺と五右衛門は簡便してくれよ…と思つた。

『羽チヤンの住所はさつき先生から聞いたし、このまま行く！？それとも家に一回帰つて着替えてから行く！？』

『あたしはどうでもいいよお』

『わいもどつちでもええで。』

『じゃあこのまま行くか！』

俺も五右衛門も、もおどおにでもなれって感じだった。

帰る用意をして皆で羽樹の家に向かう事になった。キキの話による
と、学校から2kmくらいでそんなに遠くないみたいだ。

光とカオリンは電車通学だったので光は五右衛門の後ろカオリンは
俺の後ろにのつて出発した。

まあ2kmくらいだし、後ろにのつてるのはカオリン大して重くな
い。俺も余裕だとおもっていたが、橋越えをしなければならないら
しい。

尋常じゃない坂にもかかわらず、キキは普段上つている事もあり軽
く登つていった、五右衛門は流石だ…光を後ろに乗せてるのに普通
だつた。

俺はと…力オリンにしつかり捕まつて…と言ひ立ち「さあし
て何とか淀の坂を越えた。
橋を超えるとすぐだつた。橋があるぶん結構大変だが距離的には遠
くない。

住宅街に入り、白鳥と言つ家を探した。家は沢山あり、一つ一つ見
回つてようやく白鳥と書かれた家を発見した。

『玄関に羽チヤンの名前もあるしここであつてるね。』

『じゃあキキとカオリンで羽樹呼んできてヒヤー!』

『ヒヤー? づちらで! ヒヤー!』

『何でやねん! お前ら古い友人じやろおが! …』

『そおだけど…羽樹が引越ししてから、遊ぶときはいつもうちかカオ
リンの家だつたし…』

『んなこと知るか! わいらがいつた方がびっくりするちゅーに!』

『んだな。多分おばさんが出ると思うし、俺らが行くより顔見知り
のキキとかがいつた方が言いと思つぞ』

『うむうむ。』

このゆう時の俺らの決断力は大きかった。一瞬で話を合させられる

と言つたか…まあ言い逃れが上手いだけの事だ！

ちよつと恥ずかしそうにキキとカオリーンが呼び鈴を鳴らした。

ピインポオン。。。

『はあい！今開けます！…！』

中から出てきたのは高校生の子供を持つ親とは思えないほど若く美人だつた…！

『あ…キキちゃんにカオリちゃん。久しぶり元気にしてたあ？？』

『はい。羽チヤン居ますか！？』

『居る居る。ちよつと待つててね…！』

美人さんが羽樹を呼びに行つている間俺達は外で待つことにした。

『えらい、美人やのお羽樹のママさん。』

『うん。ありややべえな。』

『エ…？今の人？ママさんなんて言つたら殺されるよ…あれは羽樹のお姉ちゃんだよ。』

『なにい…！どおりでめっちゃ綺麗なはずだ…』

『ありや そおとお男食つてるぜ…』

五右衛門がキキたちに聞こえない程度に小さく声で言つた。

『ダハハハ…！』

ガチャ…！

『あれ…？皆どおしたの…？』

羽樹が出てきた。俺達は制服以外の羽樹を見るのは初めてだつた。びっくりするほど綺麗だったのでまたお姉さんが出てきたのかと思った。

最近は慣れなれしく班員と話してゐるけど冷静に見るとキキもカオリーンも羽樹もクラスで5本指に入るくらいの美人だつた事を改めて実感する俺と五右衛門と光だつた。ココでボーッとしててはただの気持ち悪い野郎になつてしまふ。俺は何気なく声をかけた。

『よう！今日はサボりか…！？』

『違う違う！部屋ん中リホームするから手伝つてたの…！』

『んなもん、休みの日にやれちゅーに…』

『今日は父さんが休みでさ、それで姉貴も休みだし母さんは専業主婦だし！つち意外皆家に居たからうちも休んで手伝ってたつて事…』
『んでもお終わつたの！？』

『ん！？ウん！それより五右衛門…なんで制服泥まみれなの！？』
『ダハハ。それは今から説明する！』

とりあえず近くの公園に行き、光を中心に話を進めた。

『そつかあ。ありがと…結構そゆうの嬉しい！！！』

皆、こおしてよかつたと胸をなでおろした。

『でも、今の話だと、齊藤さんに埋められちゃつてまた1メートル近くほらないといけないんじゃなし！？』

少しの沈黙が流れていきなり光が笑い出した。

『ハハハハ！安心せえ！俺が掘る！』

『掘るつて言つてもお前一人じや無理やし、まあ俺と五右衛門も手伝うわ！』

『優馬の言つてる方が正しいな！俺と優馬でもかなりきつかったのにお前一人じやとおてい無理やぞ！？』

『任せときいて！お前らにはどの道もう一回皆で決めた場所を掘つてもらわなかんしお！そん時頼むわ！』

とりあえず光の自信満々の発言で掘りなおしの話は打ち切りとなり、新しく埋める場所を考える事になつた。

『あたし良い考え方あるんだけど！…！』

『お！何や！ゆうてみい！』

『校庭じゃないんだけど良いかな！？』

『齊藤はダメつて言つと思つけどコレは俺らが決めることだし何処でも良いんぢやない！？』

『じゃあ中庭にさめつちや大きい木あるじやんね。その横に埋めない！？』

『うんうん！良いと思つよ！』

『私もカオリンと同じ！良いと思つ』

『せやなあ。確かにええ考えやけど、あそこつてコンクリやなかつ

た！？』

『殆どはね！でもそここの木の周りだけは土と砂利だから掘れない事もないよ！！』

『大分薄暗くなってきたし、とりあえず行ってみるか！！！』

『だな！』

俺達は今度こそ本当のタイムカプセルを埋めるために、再び地獄の坂を上つて学校に戻った。

4月だけに、そんなに日は長くなく、6時には結構暗くなっていた。今日は運動部も部活をしておらず、校舎に残っている生徒も殆ど居ない状態だった。

光の提案で俺達はもう少し暗くなるまで待つことにした。

帰りは遅くなつてしまつが、中庭の癒しの木の周りを無断で掘り返しているのが、もし先生や生徒に見つかつたりでもしたら大変な罰を受ける事になるだろ？多分、適当な理由では言い逃れできない。その事を考慮して光はもう少し時間を遅らせようといったと思つ。6時半になりさつきより人も減つてきた。

『そろそろ校庭に行つて畠に埋めた箱だけでもとつてこようぜ…』

『うん。あれ掘るだけでもマジで時間かかるしだ…』

『せやな…時間かかるかどうかは微妙やけどまあ向こうの作業なら見つかつても大して問題にはならんそうやしのあ…』

『じゃあいこッか！！』

『なあんかたのしそお！…』

『ネッ！』

俺ら三人とは逆で女性陣は気楽そ�でだつた。

俺らはまず、畠に隠しておいたスコップをとりに行つた。

その間、女子達は畠埋めた場所を見つけるためにキキを中心を探していた。

流石にまだ今日の事だけに、微妙に他の地面とは違つていたのでここだろ？と俺と五右衛門で掘り返そうとした。

『待て待て待て！スコップかしてみい！…』

『ん？お前…マジで一人で掘るんか！？』

『そおゆウたやろ！何べんもゆわすな！』

五右衛門からスコップを借りた光は少しづつ土をどかした。

『おいおい…そんなんじや朝までかかるぞ…』

『ピーチクパーク…「るさいやつちやのーだあつとれー..』

1~2分掘ると拳サイズの石が出てきた。光はスコップを置き、手で掘り始めた。流石に俺達は何も言わなかつた。

『よつしゃ！あつたで！』

『え！..』

『ハ！？』

羽樹意外皆が驚いた。そりやそだ。あの時確かに斎藤が俺と五右衛門が掘った穴の一一番下に置き、埋めた。

光は皆に説明した。

『わいらの作戦は斎藤が外に来た時点でおじやん。穴に埋めてないのがばれたらそれこそ問い合わせられて結局埋めさせられる。』

『実際うめられたじやねえか。』

『まあ聞けや。わいは急遽予定変更案を考えた。』

キキとカオリンが斎藤を呼びに行き、優馬と五右衛門が手を洗つてる間に、箱の中身だけ抜いて違う箱に移して、二人が掘った穴から少しずらして穴を少しだけ掘つて隠す。

『ちゅうこつちや！』

『…』

『す“い…』

『…』

やつてることは単純だが、思考の切り替えが普通はできるもんじやない。持ち前の賢さで光は女子達のヒーローとなつた。

『ほれ。中庭もどるで！』

光から渡されたものは光の筆箱だった。筆箱の中には折りたたんだ紙がちゃんと入つていた。

『…筆箱かあ…こいつマジすげえなあ…』

言葉には出さなかつたが俺は光を見直した。

スコップを持って俺達はまた中庭にもどつた。

外はすっかり真っ暗になつており、校舎の電気がついているところも職員室だけだつた。

『どおする！？掘り出すか！？』

『今は微妙やの。掘つとる最中に誰もこん保障ないしの、無音で掘れるとも思えへんしな。』

『じやあどおするの！？』

『ちよつと危ないけど、今はこの方法しかないんじゃねえかな！？』

『どないや！？』

『俺と優馬は堀係りだから「」で慎重に掘る。光はどおやつて掘るかとか指示出してくれ。キキと羽樹と力オリは三箇所から誰か来ないか隠れて見ててくれ。』

『それだと人が来たときに知らせるのが不可能だぞ！キキ達もばれたらまずいんだし。…あ…俺の携帯番号教えるから危なそつたらコールしてくれ！バイトにして、ブルつたら俺らも作業は中断して隠れる。』

『うん！一人のゆうとりの方法でいこまい！』

俺の番号をキキと羽樹と力オリンに教え、それぞれの持ち場に着いたら連絡を入れて作業開始。

『あ…モシモシ！？優馬！？キキだけど…OKだよー！』

『了解。』

最初にキキからかかつてきた。

『あのお。優馬君の携帯ですか？』

『ん？ おだけど力オリンか！？』

『あ…ウん！ 良かつたあ。準備OKです。』

『あい。』

次は力オリンだつた。

『モシ！ 優馬！？羽樹準備OK！』

『了解。』

最後に羽樹から連絡が入つてみんな持ち場に着いた。ただタイム力
プセルを埋めるだけなのに凶悪犯罪をしているように大げさで、後
から考へると笑えてくるような事だった。

『よおし。皆から連絡あつたぞ！』

『…』

『ん？ お前らどおした？』

『てめえ。後から俺らにも3人の番号教えるよ！…』

『せやで！ お前の悪知恵にはかなわんのよ！…』

『アハハハ。やっぱリバレタ！？ コレで3人の番号GETやぜ！勿

論お前らにも教える！』

・優馬アア お前つて奴は！… 感謝の現れか一人が一斉に飛びつい
てきた。

ブルブルブル！… ブルブルブル！…

『ウオ！』

キキから「ホールが入つた。

『ちょっとあんたら声こいつちまで聞こえてるよ！…』

『ああ。。 わるい。 今から作業にかかるから見張りヨロシク。』

『しつかりね！』

『あい。』

キキからのお怒りホールだつた。とりあえず打ち上げはコレが終わ
つてからと、作業に取り掛かつた。

俺はココからの会話は小声で話そうと言い一人は小さく頷いた。

『とりあえず砂利を端の方にどかしてくれ。』

『了解。』

『きいつけや！ 音立てたらまた怒られるで！』

慎重に砂利をどかすと土が出てきた。羽樹が言つたとおりココだけ
はコンクリじやなかつた。

『そおつと掘るんやで！…』

『ああ。』

俺と五右衛門。

五右衛門と光。

光と俺。

のローテーションで掘る事にして、順調に堀すすみ、40センチくらい掘れた。

『ハアハア。ちょっと休憩や……キキらにそつちの状況きいといてくれや。』

『フウ。OK……』

とりあえずキキから順番に電話した。

『あ……俺だけど。そつちの様子どお！？』

『こつちは誰も来てないよ！……そつちは！？』

『OK。こつちは丁度半分くらい堀り終えたと……じゃあ他の一人にも聞いてみる。』

『分かった。』

『キキのところは問題ないつて……』

『おう、次力オリンよろ……』

『あ……俺だけど。そつちの様子どお！？キキは問題無いみたい。』

『え？えつと、こつちも大丈夫だと思うよお。』

『了解。なんかあつたら連絡してな。』

『はあい。』

『カオリンの方も問題なさげだな。』

『うし。ラスト羽樹か……』

『あ……俺だけど。羽樹……そつちの様子どお！？一人は問題無いみたい。』

『ごめん！かけなおす！！』……ブチッ！！

『……かけなおすつって切られた……』

『え！？おいおいおい！それやばくないか！？』

『やばいかものぉ……』

ブルブルブルブルブルブル……！！

『羽樹だ！！』

『やよ出んかい！！』

『はい！優馬だけど、大丈夫か！？』

『ちょっと先生が見回りに来た見たい…何とか隠れてうちは大丈夫だつたけど…そっちはまずいかもよ…隠れる場所ないでしょ！？』

『ああ…見回りの時間はなるべくおとなしくしたほうが良いかもな…じゃあとりあえず一回切るな！』

『今、羽樹の周りを見回りが通つたつてよ…』

『そりや厄介やの…とりあえず全員で人気の少ない校庭に集合や。』

『その方が良さそうだな…』

俺は、女子3人に連絡を入れてひとまづ校庭に集合する事になった。集合場所は倉庫の横。

丁度倉庫で職員室からも見えないので、ここだけは大きな壁で外からも見ない。まさに俺達が隠れるために用意されたようなスペースだった。

最後にキキが来て、全員集合。

『じめんじめん。お待たせ！羽チヤンの後にすぐうちの周りに見回りきてさ、中々移動できなかつた。』

『OK！OK！気にすんなや。みんな見つからんでよかつたわ。さつきチラッと見たけど生徒指導の村田が今日の見回りみたいやの。』

『つてかこの学校見回りなんかしてたつけ！？』

『何か春になると五右衛門みたいな不審者がでるとかで4月の頭から末までは先生が交代で見回りするらしいぞ…』

『へえそおなんだあ。』

『おいおい！俺みたっておかしいし、羽樹もなんとくすな！』

『アハハハハハ』

『しツ！緊張感ないの！懐中電灯の光が一瞬こいつら照らしよつたで…』

『わりい…』

『ごめん…』

『まあええー！とりあえず村田つてのは厄介やの、優馬、今何時や

! ?』

『ああ。えー? もお 8時半や! ! !』

『ほおか。おなごりら帰らんで平氣なん! ?』

『あたしは平氣! ! 帰宅時間とか制限ないしね!』

『うちも大丈夫!』

『私も。』

皆時間には余裕があるらしく、俺らはひとまず休憩タイムに入った。6人とも晩飯を食つてなく、空腹だつた。

光と俺で近くのコンビニまで行つて何か調達してくる事にした。女子の護衛には五右衛門をつけているからまず大丈夫だろう! それにうちの班の女子は何か見た目はか弱いが、実際は五右衛門より強そうに最近になつて思えてきた。

『優馬、こんな事久しぶりやのお! ! !』

『ああ! 俺としては今年はお前らと違つクラスになつておとなしく過ごしたかつたけどな! ! !』

『ハハハ! わいもや! ! !』

『ま! 2年まではいつも俺ら3人で色々な事してたけど、今は + 3人居るし、しかも女だし何か新鮮で良いわあ』

『せやなあ。とは言つても女やぜ! ? 俺らの問題にあんまり関わらせんほおがええんちゃうか! ?』

『それは光に同感だな。こおゆう楽しみは連体責任になるし、俺らの娛樂につき合わせて叱られたりしたら悪いしな!』

『せやせや! 今日が最初で最後のつもりでやるで! ! !』

『おウ! ! !』

おにぎりを12個、お茶を6本買い皆の元に戻つた。

『お帰りい。めっちゃ買つてきたねエ。』

『お待たせ! といつあえず飲み物1本づつとおにぎり2個づつ買つてきた。』

『うちおにぎり1個で良じよ。』

『あたしも! ! !』

『私も…』

…』

結局男子がおにぎり3個づつたべ、皆が食べ終わつた頃には時刻は9時20分だつた。

そろそろ職員も帰るだらうと思つたとき、職員室の電気が消え学校は真つ暗になつた。

『おーできん消えたぞ…!』

『よし。戻るか!』

職員室の電気が消えたのを確認した俺達は中庭へと戻り、作業を開始する事になつた。もお見張りの必要はなさそうだし、女子達も一緒に木の下に集まり全員でラストスパートをかけた。

『フウ…今大体60センチくらいか…!』

『そのくらいやの。もおあと20センチくらいで多分OKや…』

『おし!』

作業も終盤になり、と言つてもひたすら掘るだけの単純な事だが、そんな事でも俺らにとつては最高に楽しい瞬間だつた。

春の夜で結構涼しいのだが、俺達は汗だくだつた。光と五右衛門の交代で最後は俺と五右衛門で掘る事になつた。

もお少しで全てが終了する。見回りも居なくなつた事もあり、作業再開時は皆で話しながらワイワイやつていたが、今は皆集中していた。

掘つている奴も掘つてない奴も皆が大きく開いた穴だけを見ていた。

『良し! ちょい穴の中に入れてくれや!』

『ん…? ああ… じつか! ?』

『よしそよしそや…! 掘るのは終いや!』

とつとう田標地点まで掘り終えたらしい。安堵の声が飛び交つた。

最後は皆で筆箱…今回のタイムカプセルを穴の中に入れ、残すところは穴を埋める作業だけ。

コレは全員で掘つた土を穴の中に入れて筆箱がつぶれない程度に圧縮して、何とか見た目上元に戻つた。

最後に砂利をばら撒いて作業終了！！

皆で顔を合わせて何がおかしいのか爆笑した後、綺麗に輝く夜空の星に届くくらいの声で皆で叫んだ！！

『ヨツシャアアアア！…』

『ヤツタアアア！…！…』

共にで作業し、共に汗をかき、共に泥まみれになり…達成できた。一人ではやりたいと思うことはあつてもこんな事実行する奴は居ないだろう。

全員が自分以外の5人のために…と言つ気持ちで疲労が限界に達してもあきらめずに最後まで頑張る事ができた。

こんな達成感いつ以来だろう。中学生の時？小学生の時？幼稚園時代？ひょっとしたら初めてかもしない。

もともと団体行動より個人行動や少人数行動タイプだった俺は、皆で力を合わせて何かを成し遂げる事は、クラスの合唱や運動会…そう、誰かの指示、強制、それ意外でやつた事はなかつた。

だから今日のこの達成感が凄く新鮮に感じ、素直に喜べるのだろう…今すぐ皆で打ち上げをしたい気持ちでいっぱいだが、もお10時半ということもあり、今日のところは解散して帰ることになつた。家に着くと吸い込まれるかのように風呂に入った、肉体労働の後の湯船はたまらなく気持ちよく、がちがちになつた腕や足をお湯でマッサージしてくれているかのようだつた…ゆっくり深呼吸すると、ふと哲学の授業で斎藤が言つていた事を想いだした…

…皆。ウイリアム・オスラートて人を知つている人はいるか！？…まあ居ないだろう。…

…彼は自分の人生を捧げて未来に素晴らしいものを残した。簡単に言つと医学の生みの親だ。…

…そんな彼が【青春の生活の中で、もっぱら幸福を与えてくれる本質的なものは友情の贈りものである。】…

…と言う言葉を残した。この意味を今日は考えて欲しいと思う…あの時は、友情の贈り物！？友人からのプレゼント！？それが青春

時代に一番幸せを与えてくれる！？何だそれ！ただの貪欲な人じゃねえか…とくだらない解釈をしていた。無理もない。友情の贈り物などと言葉を濁されでは頭の悪い俺は理解できるはずがない。でも、今なら…友情の贈り物とやらが青春時代を幸せにしてくれる…その意味が何となく…本当に何となくだが少しだけ理解できた気がする。

そして長い一日が終わった。

…次の日、俺達は皆学校を休んで打ち上げをした。飯を食つて、男VS女のカラオケ戦をやつて、男VS女のボーリング戦をやつて…良い一日で終わると思ったらその人生は甘くはなかつた。ボーリングをやつたのもあり、喉が渴いた俺達は喫茶店で休憩していたところに、斎藤が現れた。そんな偶然あるか！？俺達はばれずに出ようと試みたが、結果はアウト。結局、全員でサボリとばれ、後日…斎藤と生徒指導の村田から3時間にわたり説教を受け、レポート10枚の反省文を書く事になつた。たががサボリにしては重すぎる罰だつたが、誰も文句を言わず皆で図書室にこじもつてひたすら反省文を書いた。

『球技大会!!（前）』

特に変わった事もなくもお5月が終わろうとしていた。生暖かい風が俺の肌を舐めるたび、夏が近い事を語っていた。

5月25日（日）

今日は日本ダービー!! 3歳のサラブレットの頂上を決定する日..じゃなくて今日は球技大会だ!! パコの学校は他の学校と違ひ球技大会は何故か日曜にやる。

その代わりと言つたが当然と言うか、月曜は休みである。2年の時も五右衛門と光と同じ班で、同じチームだつた。あの時は五右衛門の頑張りと光の作戦で決勝まで行く事が出来た。え?? 俺は何してたかって?? 僕は..見学していた。まあ誤解を招く前に言つておくが、下手だの嫌いだのそんな理由で見学していたのではない。

たまたま、前日足をひねつて捻挫をしてしまったのである。そして今年も、たまたま前日足をひねつて捻挫..なんて事故は2年も連續であるわけもなく、僕も今年はメンバーとして参加する事になった。そうそつ。言つてなかつたがこの学校の球技大会はバレーと決まつている。

まあバレーの場合は何処の学校でも取り入れられているスポーツだし..なんら疑問はないのだが、今年からチームはクラスごとに6人7チーム。それぞれのチームの力の均衡を保つために班対抗試合だ。実行委員の俺達としてはこの方がチーム分けの手間が省けて正直ラッキーだ。

試合の内容はと言つと、クラス内で試合し、クラスの代表を決める。クラスの代表に選ばれると決勝トーナメントに進出できる。決勝トーナメントでは各クラス代表チームどおりの試合となる。決勝トーナメントまで来て、ようやく他のクラスと試合すると言つ結構珍しいルールである。

バレー事態のルールは足は使っていけないって言つのはあるが25

点先取ラリー・ポイント制の一般ルールとなんら変わりはない。

去年までは実行委員の人たちは試合には参加してもしなくてどちらでも良かったが、今年はども全員参加らしい…

当然やるからには勝つ！－その気持ちは俺にある。それに凄い事に俺らの班はバレー経験者が6人中4人と言う事態。

といつても経験したのは全員、中学生の時だが…経験者はと言つと、光！キキ！カオリン！羽樹！みんな中学の時はバレー部。

光の場合は1、2年の時に見てて分かるがそれなりに上手い！！女子達がどれくらい上手いのかは分からないがバレー部と言つてるくらいだしボールを怖がって避けたりはしないだろう。

その4人にバレー経験豊富ではないが運動神経抜群の五右衛門！！光や他のバレー部に引きを取りたくないくらい上手いのは言わずとも分かる。

最後に俺だが、正直いつてうまくもなく下手でもなく…とまあ出来なくはない程度だ。

おっと、そろそろ学校にむかわねば遅刻してしまう。
日曜日だからといって親に送つてもうなどとボンボンじみた事はない。いつも通りチャリで行く事になった。五右衛門も例外ではない。いつもの様に待ち合わせて、学校に向かった。

今日は校内出入り禁止！－よつて集合場所は運動場だ。

『こつちこつちい！－』

古いドラマのワンシーンの様に明らかに見えている所から手を振つて俺と五右衛門を呼んだのはカオリンだった。恥ずかしさのあまり俺も五右衛門も早足で班員の所に向かった。

『来ないのかと思ったよ』

『いやいや、来ない訳ないだろ！－』

『ホンマにきいひんかと思つたで！よつしゃ。とりあえず人数も揃つた事やし優勝狙つて頑張らなあかんな！』

『ア…ア…ア…テスティス。皆さん、おはようございます。今日は雲ひとつない球技大会日和になりましたね！－暑い中話を聞かせるの

も申し訳ないので手短に終わらせたいと思います。まず、くれぐれも怪我だけには気をつけてください。勝つても負けても楽しい一日にしましょう！－以上です！』

校長の話が終わると体育の先生がルールの再確認をし、保健室のおばちゃんが怪我をした生徒は本部のテントまで来るようことアナウンスを流し、最後に生徒会長から開始の合図がでて各クラスで試合を始める事になった。

俺らのクラスは体育館での試合だつた。さつきまで締め切つてあつた事もあり、中はサウナ状態。マジで簡便して欲しい。日が当たらぬ分ましかと思ったが、ガンガンの照りつけるお口様の下の方がよっぽど良い。

クラスで手分けして窓と言つ窓を全て開いてようやく風が通りぬけた。気持ちを仕切りなおして試合開始。

俺らの班は7班。嬉しい事にシードだ。

1班 v s 2班は2班の勝ち。

3班 v s 4班は3班の勝ち。

5班 v s 6班は5班の勝ち。

ようやく俺達の試合が回つてきた。試合相手は1班に10点差以上つけて勝つた2班だ。

『やつと試合できるなあ。』

『シードでトーナメントには行きやすいけど待つてただけつてのも退屈だな…』

『この試合は絶対負けられへんや…』

『絶対勝とうね！－』

『優馬！足引つ張らんようにな！』

どっちガだ！－と五右衛門くらいの実力があれば言い返したが、この中で足を引っ張るとしたらズバリ俺だ。

ピーピーピー。

『両チーム、コートの中に入つて！じゃあ2班のサーブ先取からで

始めます。』

シャーツス！！

サーブを打つのは相手の中でも一番下手な富田だ。予想通りアンダーサーブで威力は全然なかつた。ポジション的に力オリンがサーブを対処し、光がトスして、五右衛門がビシとまずは1点先取。

『ナイス！！』

時計回りにロー・テーションし、俺は中央の位置だ。こっちのサーバーはキキ。光がキキにぼそつと咳き、キキは小さく頷いた。元バレーボーイだけつて女子なのにサーブにはキレがあり鋭い！富田狙いだ！富田も一応、反応はできたのだが手の変なところにあたり、ボールは場外に飛んでいつてしまった。

やつた！やつた！と可愛らしくキキは喜んだが…弱者を煮て食う小悪魔に思えた…が勝負の世界では穴を狙うのは当然の事であり、皆もナイス！！とほめた。

次も同じように富田を狙い…キキのサービスエース？？バレーではそおは言わないかもしけないが、とにかくサーブだけで2ポイントGETして試合は3VS0と俺達がリードしていた。流れは完全にこっちに来ていた。光がまたキキにボソッと咳き、キキは少し驚いていた。

いつたいどんな事を吹き込んだのだろう…キキはサーブ前に『…本当に良いの？…』と聞きなおすかのようにもあ一度光を見た。光は大きく頷き、キキはサーブを放つた。

今度も富田狙い…と誰もが思つたがボールは富田とは逆の方向に綺麗に決まった。2班の奴らも馬鹿じやない…富田が穴と俺らにばれるとカバーに走る。光はそれも予測し、あえて一番上手いであろう飯田を狙うように指示した。

『ダアア…クソッ…!!』

飯田が悔しそうに頭をボリボリかいた。結局キキはサーブを全てプラス点に変え、ロー・テーションしサーバーは光になった。

普通のバレーのルールは良く知らないが、球技大会のバレーのルールはサーブは最高3回までで、3回打つたらサーブ権の移動がなく

てもサーブ側のチームはサーバーをチョンジする。上手い人がジャンプサーブでバカバカ点を取つてはそれだけで試合が終わってしまうからである。ど、ルールの説明をしてる間にもあつさり光は3ポイント決めてしまつた。結局の所チーム事態が強いと、サーブで結構しまうものである。

次は五右衛門のサーブだった。五右衛門も光のアドバイスを受け、サーブを打つた。

裏目つた。そろそろ察してカーバーにくるだらうと光の読みははずれ、ボールは飯田のところにまっすぐ飛んでいった。

五右衛門のサーブは強烈だつたが、決して取れない球でもなかつた。飯田は上手くボールを往なして、威力を半減させ久しぶりのラリー開始となつた。

飯田の受けたボールはフロントセンターの岡田の上に綺麗に上がり岡田も経験者だけあつてこんな所でミスなどしない。

岡田はフロントライトにトスするように見せかけてバックトスでフロントレフトにボールを回した。

完全にやられた。羽樹とカオリンは引っかかり俺のカバーをしようとレフト側に向かう頃にはもお飯田バイクの体制に入つていた。

『あかん！！ 飛ぶな！！』

と光の声が入つた頃にはもお飛んでしまつていて。飯田はチヨンとボールをはたき思いつきりジャンプしている俺の横に落とした。光がヘッドスライディングするかのように右手を前に出して飛び込み何とかボールには触れたがボールが生を取り戻す事はなかつた。

『イエーイー！ ナイスナイス！！』と敵陣でハイタッチが交わされている。

『マジワリイ…』と謝ると皆は気にするな！お前だけの責任じやない！！と俺の背中を叩いてくれた。

フウ…と大きく深呼吸して、汗で固まつた前髪をかきあげ、気持ちをリセットした。

光から一言、俺に助言があつた。

『……飯田はお前よか背が低い。自分よか背の高いお前にブロックされちゃあアタックしたところで早々壁は越えらへん。相手もそれはよおわかつとる。やでのお 2、3 点捨てて相手の足を見る。それだけや。……』

時間の無い中の意味不明な光のアドバイスに俺はちょっと混乱していた。

現在 7 vs 1 今ので相手にサーブ権はとられたものの、俺達がまだ勝つている。

サーブは相手チームの女の子。いまさらだが相手チームは飯田と岡田のワンマンチーム彼ら二人潰せば相手の核は壊れる。ポンと優しいサーブに五右衛門が鬼の形相で飛びつき、トスを貢つたかのように思いつきり打ち付けた。

バーン――！

すさまじい音がなり、威力も凄かつたが、ネットに引っかかりそのままボールはこっちに転がってきた。

『……』

場内は静まり返っている中、場外は爆笑。

光は五右衛門に近づき、『アホか！！冷静に運べば余裕やつたやろ！』と頭をどづいた。

五右衛門は頭をかきながらペロリと舌を出して『えへへ』と笑った。

当然もう一発どづかれた。現在 7 vs 2 の一点はもつたいない。またもや優しいサーブに今度はカオリンが対応した。

両手をしつかり前に出し、腰を落とし、綺麗なレシーブの体制をだつた。いつもポケーとしているカオリンとは思えなかつた。

『よつしゃ！こっちに回せ！わいが優馬にトスする――！』

『ハイ！』

『おう！』

勿論これは敵を惑わす作戦で光は優馬に出すだのキキに回すだの言うがそれは嘘。これは名前が出た右の人に対するぞと言つ合図だ

つた。

今の場合だと俺の右は羽樹。優馬と言われて羽樹の表情が変わり、いつでもOK！と言わんばかりの表情だつた。

勿論敵は俺に来るつて思つてるので俺がダラダラしていては意味を成さない。俺は俺で偽りの表情を作り、トスと同時に空ジャンプする予定だつた。

カオリンは少し緊張し、少し力んでしまつた。

『ウガツ…』

またもや場内は静まり返えり、場外は爆笑。という状況になつた。カオリンが出したボールは光に行つたには行つたのだが、力が入つた事もあり、ボールはバスではなくもはやパイ投げのパイ状態だつた。

綺麗に光の顔にボールが当たり、光の顔にはくつきりとタ日マークが付いていた。

流石の光も五右衛門みたいにカオリンをビグいたりはしないだろうと思つたとき、光がカオリンに歩み寄つた。

光はカオリンに近づき『こいつー』とカオリンの鼻を優しく突いた。カオリンは頭をかきながらペロリと舌を出して『えへへ』と笑つた。光は軽くカオリンの頭をなでた。

『よつしゃ！ミスはしやあない！気持ち切り替えるで…！』

五右衛門はブルブルと震えながら今にも噴火しそうな火山の様になつていた…そしてその怒りはボールに向けられる事になるだろう。7点差あつた試合もいきなり3点連続により7vs3と少しづつ点差を縮めていた。

サーブは今まで同様また、楽なボールだつた。

一回目同様ボールは五右衛門の所に来た。五右衛門は冷静差を保つて構えた。

『…ワイに高めに渡せ…』

と五右衛門に光が呴き、五右衛門はアンダーハンドバスの体制からオーバーハンドバスの体制に急遽切り替えた。

あまりにギリギリの体制変更だったから敵陣同様、俺達ですら1打目でトス上げし、2打目で…ツーアタック！？と思つた。

五右衛門から光に綺麗な弧を描いたトスが行つた。

『よつしゃ！！キメたるで！！』

と光は思いつきりジャンプし、軽く反り、スパイク体制に入つた。相手チームは皆腰を低く落とし、光からの攻撃に備えた。

と…その時…！

凄い勢いで五右衛門が走りだした。冷静になつたと思えた五右衛門が噴火直前に戻つていた。

1歩…2歩…3歩…ジャンプ！？？？

『ナアアイス！！！グッドタイミングや！！！』

と光が叫びスパイク体制からジャンプトスをした。

ポンッ！パアアアン！！

後ろからのクイック…あまりに一瞬すぎて、敵も味方も観客も呆然としていた。

『シャツアツアア！！！』

シーンとしていた体育館に五右衛門と光の声だけが響き渡つた。二人に続くよう全員が沸きあがつた。

す…すげえ…めっちゃこいつらかっこええ…！…って男の俺も思つた…なんだ…この空氣…いきなり体育館にイケメン芸能人が現れたかのように女子達はキヤアキヤアと騒ぎ、野郎どもは憧れのスポーツ選手の生プレイを見たかの様にすげえすげえを連発。確かにすげえけどさ…なんつーか俺…気まずいじゃん。

騒ぎで一時中断状態だつた試合も再開し、一点とサーブ権がこっちに回ってきた。ローテーションしてサーバーはカオリン。俺はセッター…フロントセンターの位置。

カオリンのジャンプサーブが綺麗に決まり、一瞬で2点取得した。

『カオリン！！最後も綺麗に決めよまい！！』

光からの背中押しに自信満々に頷き、ボールを高くあげいつもより高く飛んだ。

お見事の一言…コレで4点連続GETで試合の状況は11vs3。まあ楽勝だろうと誰もが思った。

え…!!

カオリンが足を押さえて倒れていた。着地失敗。足をひねつて捻挫したと思われる。

『齊藤はん…！…ちょっと…』

光が齊藤を呼んで、齊藤も急いできた。

『どうしたあ…！…大丈夫かあ…』

『サーブの時に多分足を捻らせて…捻挫じゃないかと思います…』

キキが丁寧に説明すると、齊藤は分かったと言い、近くにいた男子を一人呼んで保健室のおばちゃんの居る、本部席へと担いでいった。

『…』

『大丈夫かなあ…』

流石の光もいつもみたいに大丈夫や…！…大丈夫や…！…とは言わなかつた。

明らかに大丈夫ではなさそうだったし…カオリンの心配は当然だが、一人欠けた事に試合の流れも不安だ。

とりあえず一人欠けて、5人で試合再開。

カオリンが3点しつかり取つてくれたおかげで、点差は7点まで8点まで開けることが出来た。

ローテーションでサーブのバトンは羽樹に渡された。

ミスはしなかつたが、カオリンの事もあり、羽樹のサーブにはキレも勢いもあまりなく、富田にもすんなりと受けられてしまった。

富田のボールはお決まりの様に岡田にまわり、飯田に行き、あつという間にスパイクを打たれ、何も出来ず貴重な1点とサーブ権があつさり取られてしまった。

11vs4。

『審判！タイムやタイム！2分だけくれ！』

いきなり光が審判に少しの時間を貰つて、俺らを集めた。

『あかん…！…こんなんじやあかん…！…お前ら勝氣あるんかいな…！』

今のスパイクにしても全然カバーできたやろが！カオリンの怪我の容態を気にすんなどは言わへん！心配やしそれはしゃあない！！でも冷静に考えてみい！試合が終わってカオリンが抜けたで負けてもおた。つて怪我したカオリンに言つ氣か！？本当に氣にしてんならそんな追い討ちかけたんなや！…やる氣無いなら、さつさと試合投げ出してカオリンについとつたれ！…はつきりゅうて邪魔なだけじゃ！…しつかり試合に勝つて、めでたい報告もつてたろうや！

！』

光の厳しい発言にも誰も何も言わず、真剣な眼差しで聞いていた。光の言つている事は最もだ。俺らが負けたと報告すればカオリンは自分のせい…と思うに違いない、高校3年の俺達にとつては今年の行事は最後の行事…大げさに言うとクラスのメンバーで協力しあう事なんて人生で今年が最後かもしれない。それをカオリンだつてわかってる。だからこそカオリンは自分を攻めるだろ。あたしのせい…みんなの最後の思い出を…と。

光の言い方はきつかったが、ゆえに俺には光の思いがはつきりと届いた。いや、俺だけじゃなく多分全員に届いただろ…

長く沈黙が続いたが誰も抜ける者は居なかつた。

『よつしゃ！それでこそわいの親友や！抜ける奴いたら優馬や五右衛門だろうが女だろうが関係なく平手打ちひとつたで！…絶対勝つで！優勝するで！…』

誰も返事はしなかつたが、以心伝心と言つのだろうか…俺には皆が【おお！…】と叫んでるのが聞こえた気がした。

『審判。わるいな！再開してくれや！岡田らもすまんna中断してもおて…』

『アア…俺らは全然良いぞ！そつちは人数少ないしな…』

『おおきに…せやかて勝ちはゆづらへんで！』

審判のピーチという合図で相手のサーブから試合が再開された。サバーバーは岡田。

バレーの経験者だけに、油断は絶対出来ない。俺より一枚も一枚も

上手だ。

岡田はボールを高く上げ…パーン…！

体育館内に大きな音が響きボールは羽樹めがけて凄い威力で一直線に進んだ。

怖い…痛そう…避けたい…つと音つき気持ちがあつただひつ。女の子だもん当然だ。

羽樹はそんな気持ちを【勝ちたい…】といつ意思で跳ね除け、歯を食いしばってレシーブした。

体は少しよろめき、ボールはコート外に飛んだが、生きている！ボールは地に付くことなく宙にある。

五右衛門が羽樹の力バーに走り、必死のダイブでボールはコート内にもどった。

それを光が綺麗に返し、スパイクで終わる…までは行かなかつたが何とか生還した…

緊張が続く中15分が過ぎた。

24対18。

点の動きはほぼ一定で取られては取り…といつたりストー1点で勝てる！

光がサーブの位置に着き、即効でポンと楽に打ち、ボールは岡田の横にコロコロと落ちた。え？ 皆が不思議に思つた。

宮田は長時間の試合に疲れきつて全く動けなかつた。

意外にもあつさり過ぎるくらいに最後が決まった。ピーピーピー…！

審判が試合終了の合図を出し、俺達は勝つた…

他の試合…3班 vs 5班が始まつた。

結果は22 vs 25で死闘の中5班が勝ち進んできた。

時間の関係上、5班 vs 7班はすぐに開始された。どおなつてるんだ！？ つと思つぐらい圧勝した。

試合が終わつて相手の表情を見て気がついた。真夏日の気温の中蒸し暑い体育館で3試合田、2試合田と3試合田の空きの休憩時間は

5分くらいだけ。

ラッキーといつちゃ相手に悪いが、蓄積された疲労により、幸運にもクラス代表権を手にした。

まっ！ 実力勝負になっていたとしても俺達が勝つていたけどな…

そんな事を光たちと話しながら蒸し暑い体育館を出た。

『球技大会！－（中）』

一步でてまず思つたのは…涼しい！！

炎天下の下で、太陽の日は朝より増していたが、サウナ状態の体育馆の中に居た俺達にとつては外はまるで別世界。エアコンでも効いているのではないかと思った。それも長くは続かず5分間外に居ただけで体育馆のが涼しかったのではないか…と思えるくらい直射日光によつて俺達の体は焼き尽くされた。

午前中の試合も全部終わつたので、皆でカオリンの様子を見に本部へ行つた。

『あのお。内藤薰と言う生徒が足を怪我して來たと思うんですけど何處に居るかしりませんか？？』

キキが冷静かつ丁寧に保健室のおばちゃんにカオリンの事を聞いた。
『ええ。内藤さんね。齊藤先生と一緒に来たんだけど、どうも靱帯を痛めたみたいでね…軽くみても捻挫、酷いと靱帯損傷か骨折してゐるわね。うちではそこまで酷い怪我は担当外だからさつき齊藤先生の車で病院に行つたわよ。』

軽くて捻挫？？…思つていたより事態は酷いみたいだ：

『そうですか…分かりました。失礼します。』

『あなた達も怪我には気をつけてね。』

俺達は軽く会釈し、本部を離れた…人気の無い木陰に座り、何とか空をぼーっと見ていた。

本当なら6人でクラス代表になつた事を祝つて生温い水で乾杯をしてただろう…

最初に口を開いたのは五右衛門だつた。

『カオリンに電話して容態きいてみたら！？何かこんな状態だと落ち着かんしさ』

『そおだな…』と俺は携帯を取り出し…電話してみた。意外にも力オリンにだけはタイムカプセル事件以来の電話である。

トウルルルル…トウルルルル…

『はい。内藤薫の携帯です。』

出たのはカオリンじゃなくて斎藤だった。

『あ…高橋つすけど、薫の状態はどうなんすか！？』

『おお。高橋か。安心しろ、捻挫だ！捻挫！それも結構軽い捻挫らしい。1週間もかからず元通りだそうだ回復が早く安静にしてれば2～3日で普通に歩けるって医者は言つてたぞ！！あと薫が足引っ張つてごめん…って伝えてくれつてさ…』

『そっすか…こっちも薫に班員からのメッセージあるんすけど伝言頼んで良いですか！？』

『おウ！何でも言え。』

『ぜつてえ優勝するから安心しろ！！！と伝えてください。』

『…分かった。必ず伝える。お前らも怪我すんなよ！』

『あい、じゃあまた。』

電話を切り、皆に薫の容態と伝言を伝えた。保健室のおばちゃんが言つてた最悪の結果ではなかつたので皆、安堵の笑みを浮かべた。あとは優勝して、優勝メダルを貰うだけ！一人少なくとも問題ない！一人一人が1・2倍の動きでカバーすれば良いだけの事…！さつきまで殺伐としていた空気がしだいに無くなり、いつも通りの俺達の会話に戻つていた。

『ピーガガガガ、えー午前の試合が全て終了し、決勝トーナメント進出チームが決まりました。まず一年生から発表します…』

と1年、2年と発表され、いよいよ俺達の対戦相手となる、3年の発表だ。

『続きまして三年生、3年1組：3班、3年2組：1班、3年3組：6班、3年4組：7班、3年5組：1班、3年6組：3班以上で決勝トーナメント進出チームの発表を終わります。各々の学年に共通するお知らせをします。初戦の対戦相手は1組 vs 2組 vs 3組4組 vs 5組 vs 6組でスタートします。まずこの3クラスの代表達で総当たり戦をし、勝ち上がった2クラスで決勝。グループの2位

どうして3位決定戦をしてもらいます。以上で午前の試合と、午後の試合のお知らせを終わります。各自、

昼食にしてください。』

今日は昼飯も班員で食う事にした。地べたにすわり、光が小さい石と使って色々な作戦を話し出した。

5人という大きな問題をどおり越えるか・結局大きな作戦は午前中と変わらず、試合中に光が色々指示を出すらしい。あつという間に昼休みも終わり、午後の試合が開始されようとしていた。

『ピーガガピ…午後の試合を開始したいと思います。各クラスの代表チームは運動場に集合してください。なお一年生の午後の試合は体育館で行われます。一年生の方々は体育館に集合してください。2年生は運動所の北側、3年生は南側にて試合を行います。それは午後も怪我には気をつけて楽しみましょう。以上でお知らせを終わります。』

俺達3年は運動場の南側…プール側のコートを2つ使っての試合となるらしい。コートの周りに人だかりが出来ていたので俺たちもコート付近に移動した。

『三年生の各クラス代表チームは揃っていますか！？それぞれの班の班長さんはこちらまで来てください…！』

キキが俺達の代表で行き、他にも何人か班長が集まっていた。

『あと一人い…来てないのは5組の1班！！班長の方は速やかに集合してください。』

最後の班長が慌てて参上し、班長にルールの確認と、総当たりの対戦表が渡された。

キキが戻り、対戦表を見てみると俺達は初戦と最後の一いつだった。

4組 v S5組
5組 v S6組
6組 v S4組

またしても連戦回避。

『なんかね、追加ルールで時間制限がついたみたい。』

『時間制限！？何秒以内に相手コートにボールを返さないといけないとか？？』

『全体の時間。一試合15分だつてさ。でも15分以内に25点とつたら5分しかたつてなくとも試合は終了。』

『なんだ。それだけ！？』

『うん！絶対勝とうね！』

全員で円陣を組んで…おう！！と気合を入れた。開始まで10分を切った。さつきまでは敵だったクラスの連中が俺らのコートの周りに座り、応援体制になっていた。

中でも俺らと仲の良い奴らは直接、声をかけてくれた。…負けんなよ…！…

『はよおやりたいのぉ…！…10分がまちどおしいわ…！…』

『もおすっかり疲れもふつとんだしな…今は血が騒ぐって言つか体が動きたがってるって言つか…』

『まあ1敗すら許されて無いからな…！…氣いぬかず頑張ろつぜ…！…』

五右衛門が言い終わると審判がピーと集合の笛をならした。

『4組の代表と5組の代表はコートの後ろにならんでください。』
両チームの整列を確認すると、試合開始の令図がでた。俺達は全員前にでて、相手チームと握手し、コイントスで最初のサーブ権を決め、ポジションに着いた。

最初にサーブ権を手に入れたのは相手チームだった。ボールをポン軽くはたき、確実性のあるサーブを打つてきた。威力は無いがミスも無い。

ボールは俺の方に来た。

ドクドクドク…何だか異常に緊張する…ボールが凄く遅く感じる…立ち眩みしそうな緊張感…ミスはダメ…

『優馬ア！…！…』

ビク！光の声で我に返つてからはボールのスピードも普段の速さになり、張り詰めていた緊張からも何とか脱出できた。

『OK!…』

普段通り。特別に緊張する事もなく普段通りやるのがベスト。そお自分に言い聞かせ、オーバーハンドで光にパスした。

『ナイスナイス!! キキいくで!!!!』

五右衛門へのトスだ!!

『OK!』とキキは返事し五右衛門をちらつと見た。五右衛門は軽く頷き、光からトスが出された瞬間一人とも飛び上がった。

パンッ!!

五右衛門のスパイクが綺麗に決まり、先制点に場内、場外共に歓喜の声を上げた。

『二人ともええ感じやつたで!!』

『お前のトスもナイスやつたわ!!』

サーブ権の移動でローテーションし、サーバーは羽樹。光も流石にまだ誰が穴とかは良く分からずとりあえずバック側を狙えとだけ指示がでた。

羽樹はポーンとボールを少し手前に投げ、1・2歩、走ってスパイクサーブ!!

パン!!と大きい音が鳴り、相手コートのバックラインギリギリにストレートに決まった。

場外は大歓声!!午前中の羽樹のサーブはアンダーサーブでポーンと打ち上げるのばかりだった。

ゆえに場内は…皆が羽樹を見て【エエエエエエエッエエ!!?】である。俺や五右衛門は当然、この中の誰よりも上手かった。

羽樹は可愛くピースし、ウインクした。鬼に金棒、羽樹にバレーボーリル:

『羽樹には指示は不要やつたの』と光も笑い。また一步優勝の一文字が近づいた気がした。

立て続けに3本。相手に触らせる事なく羽樹のサーブは終了。

4 v 5 0

サーブ権は五右衛門に渡った。

五右衛門はコントロール重視のフローター・サーブ。当然相手も樂々つないでくる。綺麗に回しスパイク！！

光が飛び込み、それをキキが上げて俺のアタックでまたまたプラス1点。

5 v s 0

正直言つて一番最初に戦った岡田たちのチームのが強いくらいだった。このチームが相手なら負ける気がしなかつた。

あつという間に15分がたち、【17 v s 2】…コールド勝ちには至らなかつたが楽勝だつた。

勝利と言う刺激によつて細胞膜のイオン透過性が変化することによつて、電位差が生じ、活動電位が発生し興奮状態になる。普段なら絶対ありえないがこうゆう時は、男女関係なく抱き合い喜びを分かち合つ！…この時自分だけ冷静でいられたらどれだけ幸せか…あ…それだと自分だけ性的興奮に陥り…下半身がどんでもない事になつてしまふか…まあ何がともあれ、まず一勝して一笑！！

5組対6組の試合の他人事の様に観察していた…しかし、最初の5分くらいで他人事に思えなくなつた。

確かに5組の代表は強くは無かつた、それに2試合連続で疲れも残つているとおもう、けど…何だ！？彼らは何をしてるんだ！？…試合開始から1-2分…試合終了。25 v s 4。流石にクラス代表になつてくるだけあつて弱くは無い…5組はたまたまだ…。ココからが真剣勝負なんだと班員で円陣を組んで気合を入れなおした。

『それでは4組 v s 6組の試合を始めたいと思ひます。選手の人はコートのバックラインに整列してください。』

とうとう決勝を賭けた試合が始まろうとしている。緊張で手は汗でベタベタ、今になつてカオリンに約束した【絶対に優勝する】と言つて言葉が重荷になつてプレッシャーを感じる。

『優馬！いつもどおりでええんやで！勝てる勝てる…そつきの試合の疲れもあるやろーしな！』

『おう！頑張るしかないな…』

…光、サンキューな…ここでもまた光に救われた。精神的苦痛になる緊張やプレッシャーは光との会話で結構吹き飛んだ。

開始の挨拶をして、コイントスでサーブ権を決めた。今度はこっちがサーブ権を先取。サーバーは光からだ。

『よっしゃ！まず一本とつとくでえ！！』

こいつには緊張つてものが無いのか！？と俺は軽く尊敬した。

公約通り先制点を取るため光は全力でジャンプサーブした。ボールは敵の居ない所に一直線に進んだ。先制点GET！！

と誰もが思ったが、相手の一人がダイブし俺達の先制点を阻止した。威力もコースも申し分ないだけに、相手が取ったボールはシャボン玉の様に力が無く、ヒヨロヒヨロと舞い上がった。同時に相手の応援団からの歓声も大きくなつた。相手のセッターが打ちにくい場所からでも綺麗にトスをあげ、最後はスパイクで終わる形まで持ち直した。

一方こつちは相手が光のサーブをとつたのを確認し、皆が防御体制に入った。俺にいたつては…ミスれ！！と神頼みまでしてしまつた。

相手のセッターがトスを上げるとキキと羽樹はブロックの位置に移動し、相手のスパイクは思ったよりもするどくキキと羽樹の壁をすり抜けてしまつたが、コースは絞れた。ナイスや！！と光が叫んで、すり抜けたボールに飛び込んで相手の3段攻撃にも何とか対応が出来た。

光が取つたボールは俺の真上に上がり俺は羽樹にトスを出すために叫んだ。

『キキ行くぞ！！』

光意外がこの作戦を使うのは初めてでキキは一瞬どつちか戸惑い、俺の目を見た。

キキの視線を感じ、俺はチラつと羽樹に視線を流した。キキはそれで理解した。『OK！！』キキから声が上がつた。

俺の出したトスをキキはわざと空振り、敵の意表をついて羽樹がバ

シッと決めた。

1 v 5 0 …何とか先制点をものに出来た。

『羽樹ちゃんナイス！！優馬ナイスアシスト！！』

と場外からの歓声で俺は震え上がった。心のそこから【やった！！】つて思った。でも、本当に紙一重だった。

今の1ポイント相手が取つてもおかしくない展開だった。先制はしたが、油断はまだ出来ないと思つた。

試合は先ほどと同様、光のサーブ権。もお危ない賭けはやめたのか鋭いサーブではなく的確に相手の陣地に入れるよう、軽く打つた。当然相手も楽に取り、敵の猛攻に耐えるように皆で構えた。相手も綺麗に回し、鋭いスパイクを打つてきた。

バシ！…と同時に俺の腕にあたつた。…エ？全く見えなかつた：腕に残る強烈な痛みを振り払い試合に集中するため、腕に当たつた後のボールを探した。

再びバシ！…と大きな音が聞こえた時にはもお遅かつた。
何が何だか分からぬまま点が取られてしまった。

『ドンマイドンマイ…！…今のはしゃあない…』

と光の声が聞こえた。光に…どおなつたん？…と軽く今の状況を聞いた。

俺の腕に当たつたボールは高々と空に上がり、相手のコート側に戻つてしまつたらしい。それを綺麗に相手が合わせてアタックし、今に至るというわけだ。…完全に狙われた。いや、狙われてる？？今後も？？

サーブ権の移動で相手のサーブとなつた。現在試合は1 v 5 1。
相手もサーブは鋭くなかつた。綺麗な弧を描いて俺達のコート…俺の所に来た。

俺はいつもの【初手は光へ！】の作戦どおり、光にボールをまわした。

ミステイク！！！

あの作戦は光がフロント側…つまりネット側に居る時に行うものだ

つた。

…しまつた…………

班員からの視線が痛い…皆が『え?なにやつてんの?』とお言つている気がする。目のやつ場を無くした俺は思わず目を閉じてしまつた。

まさか目を閉じているとは思つていらない光は事もあらう!とか、ボールをリターンして俺に返してきた。

『おい…………優馬!…………』

『え? ? ? ? ?』

… もお最悪…

五右衛門の大聲で我に帰つた俺の目の前にはボールが転がつていた。光は審判に目にすなが入つたからちよつと待つてくれと嘘を良い、1分だけ時間を稼いぎ皆を集めた。

『球技大会――（中+）』

光に言われるがまま集まつた俺達は、輪を描くよしと丸く固まつた。

『あんまり皆緊張したらあかんで！？特に優馬。』

『あわるい…』

やつぱりこの中断は俺のせいだと、改めて実感した。
うつむいている俺にゆつくり光が近づいてきた。

『なあ優馬。大丈夫か？？』

『あ？』

『お前狙われ取るで？？さつきみたいにボケとつたらのおじさん
狙われてまうで？？』

『ああ。だからわりいって言つてんじやん。。』

最悪の態度だ。心配して言つてくれる光にも冷たく、自分でもこんな態度取つたらダメだつて分かつてるのに。気持ちとは反対の言葉がでてくる。

『おい！』

『ああ？？』

バチン！！！！

…え？…平手打ち？ダブル平手？…光に両手で平手打ちされるみたいにバチン！と顔をつかまれた。

『お”い”！……………われ！…！…やる氣あるんかいな！…！…？？
？われのミスに怒つとるんや無い！…！…われのやる氣の無さにイラつ
いとるんや…！…一度や2度ミスしたくらいでなんや…！…お前のミス
をカバーしたれなんだ俺らのミスでもあるんや…！…お前一人で抱え
込んでたらあかんで！？コレは個人競技とちやう…！…チーム戦や…！
逆に言えばおんどれがやる氣のあなつたら負けるんじや！…勝氣の
おなつたんやつたらとつとつせて薰の見舞いでも行つてこいや！
！ボケが…』

それだけ言つと光はコートに戻つた。

『…』

あまりにも的確に言われて、何も言い返せなかつた。…勝つために優勝するために…皆必死なのに俺は…罪悪感と自分の情けなさに、涙が出そうだつた。悔しさを下唇を噛み締める事で絶え、唇からは少し血が出た。

カオリンへの伝言を頼んだのは他でもない俺だ。光に叩かれて赤くなつた頬を自分でもお2、3回叩き。気合を入れた。

ピーピーピーピー！！

『 もお再開しますので選手の方はコートに戻つてください。』

審判からの合図でそれぞれがコートに戻り、俺だけが外に居た。

『 優馬！早く！…！』

キキに呼ばれトボトボと歩き持ち場に戻る途中で足を止めた。

『 光！…サンキュー！…絶対勝とうな！…』

何だか意味不明で強烈に恥ずかしいけど…お礼を込めて言いたかった。…言つたら雨雲が去つたかのようになかすつきりとした気分になつた。

『 おう！…あつたりめーよ！…』

また光に救われたつて思い、少し笑えてきた。

ピー！と審判が笛を鳴らし試合開始。今の事で俺達のやる氣や優勝への意識は改めて強くなつたが、それで流れが変わる事はなく、1vs5とあれから立て続けに点を取られた。…でももお一度とあきらめたりしない！！

相手のサーブはまた俺の所に来た。実を言うと、相手の最初のサーブからずっと俺が狙っていて、もはや必然的に思えるようになつてきた。

威力より正確性を重視しているサーブだけに、慣れればどおつてこと無い。冷静に判断し、誰にボールを出すかなども考えて動けるようになつてきた。

光がフロント側に居ないときはとりあえずセッターに！俺はキキにボールを回し、キキのトスで羽樹がアタックした。

少し、ジャンプが早かつたのかボールの的を捕らえられず威力はあまりでなかつた。

ピー！！！

相手のまさかのお見合い。思わぬ展開でサーブ権と要約2点目をGETした。

『よつしゃ！！今ので流れが変わつたで！！』

光の発言に皆は大きく頷いた。

ローテーションして羽樹のサーブ。ボールを自分の身長くらい高く投げジャンプサーブ。

バン！

バン！

バン！

バン！

と全く相手は触れる事が出来ず、ものの1分くらいで3点をとつてしまつた。

5 v 5 5

要約並んだ。が、毎回長いラリーをしてただけに、残り時間はもああまりない。

今度はキキのサーブ。キキは羽樹とは違い確実性のあるサーブを入れた。

ゆるい球なのに相手の反応はあまりよくなかった。

相手も触れたには触れたのだが何がぎこちなく、重心が定まらないのか、最後に腕だけ大きく動かして強引に取りに行つてるよう…俺には何してるんだろう？？？疲れたのかな？？程度にしか分からなかつた。

相手はキキのサーブを1打で返してしまい、こつちでボールを処理し、五右衛門のスパイクで逆転。

6 v 5 5！！

運が良かつたとばかり思つていた俺をよそに羽樹と光はキキに【ナイスサーブ！！】と良い。キキもブイサインで応答した。

この後のサーブに関しても同じで、キキのゆるいサーブに大して、

敵はミスを連発。

結局残りのサーブで2点取ってしまった。

8 v s 5 !!

ココに来て俺のサーブ。流れも運もこひにある今、俺も一回くら
いバシッつと決めたいと思い、あまりやつた事の無いジャンプサー
ブ!!

『ヨツシャアア!!! もお 一点プラスするぜ!!!』

バシッ!! ボールを光の顔と思い全力で振り切り凄い音が鳴
った。

流石男ってだけの事はあって威力も速さも羽樹の倍近く、例えて言
うなら…メジャーリーガーの投手が時速160キロくらいの球を投
げ空振りで見事キャッチヤーミットに突き刺されたかのようにネット
に突き刺さった。

『…』

『…』

ピー!! …つけ…所詮コレは現実…願つたり思つたりしたところで
ドラマや漫画みたいには上手くいくはずねえよな…

半分開き直ってる俺に、今度は本当に周りの視線が痛かつた。場外
からも無数の視線の針でチクチクと刺されている気がした。

しぶしぶ、場外に転がっていつたボールを自分で取りに行き相手選
手に渡した。

相手が構えた時…ピーピーピーと試合終了の合図がなり、最後はち
ょおつと集中が途切れたが俺達は決勝への切符を手に入れた。

最後はちょっとぐだつてしまふ結果になつたが、試合終了でそんな
事は一瞬で忘れ去られ、俺達は抱き合つて喜びを分かち合つた。
クラスの奴らも一齊にコートに入つてきて皆で一勝を喜びあつた。
正直勝てると思って居なかつた所を羽樹とキキに救われた。

キキが代表で報告に行つている間にキキのサーブの事を光に聞いた
ら、あれは無回転のブレ球サーブだった。そつとう打てる球じやな
く結構難しいらしい。一体羽樹やキキは中学校時代どれくらいの成

績を残してきたのだらう…そんな事を思いながらひとまず決勝に備えてキキの帰りを待ちながら木陰に固まつて座っていた。

『おまたせえ。決勝は15分後で相手は2組らしいよ！』

『お疲れ！2組かあ。。奴らの成績はやつぱり全勝？？』

『うん。クラス対抗の時から全く負けでなくて、しかもさつきの試合でも余裕勝ちだったみたいだよ…』

『せやなあ。さつき岡田がゆうとつたんねやけど、2連続試合やのにボロ勝ちやつたらしいわあ』

『強そうだな…でもまあ勝てるよな…』

『当然や…』

『だな！』

今は、考え込むより前向きに突っ走つた方が良い。誰もがそう思つていた。

俺達は少しだけ作戦を立てた。作戦と言つても試合の流れ的に効率が良いのを選んだ。

まず最初にサーブの上手い、羽樹 キキ 光の順番にサーブが回るようにして、一気に点差を広げようつて言う作戦だ。

相手は強い上に俺達より人数が多い。それを考えるとまともにやり合つたら、厳しい展開になるかもしれない。

そこで点差が広がつたらある程度時間を稼ぐ事にした、サーブは普通に打つのではなく、俺と五右衛門に關しては天井サーブ。

天井サーブとはアンダーハンドで高く打ち上げるサーブの事で普通よりほんの少しだが敵が触るのは遅くなる。そして今回の試合は外で行われているだけに太陽光の影響もあつて日くらましにもなつて「一石一鳥のサーブだ。

とりあえず俺達は勝つ！あの手この手を使って…

『ただいまより、決勝戦を開始したいと思います。一年生も2、3年生同様、決勝は外で行われますので速やかに移動してください。勝つても負けても悔いの残らない試合にしましょう。それでは決勝に残った代表のチームはコートに集合してください。』

『フウ… よし行こか！』

キキに言われ全員でコートまで向かつた。そこにはクラスの奴らは当然、他のクラスの奴らも集まつていて、若干興味無く来てない連中も居たが観客は200人以上だつた。俺達が5人つて事もあり、俺達よりの応援の方が多いつた。とは言つても真剣に応援してゐる奴らは各々のクラスくらいでそれ以外はどつちが勝つのだらうつて野次馬連中だ。

『えーこれより、3年生の決勝戦を行います。ルールは先ほどとは違ひ、時間が5分多い25点先取の20分です、なお長時間になるので10分たつた時点でタイムアウトを入れますので水を補給してください。それではリーダの方は握手し、サーブ権を決めてください。』

コイントスの結果は俺達だつた。… よし… これでさつきの作戦が有効になる可能性が出てきた！！！

『それでは4組のサーブ先取で試合を開始します。礼ツ！』

『（（オネガーシャース!!!!））』

皆ポジションに付き、羽樹はサーブの位置に付き、ボールをバウンドさせ、審判の合図を待つてゐる。

ピーッ！！！

合図と共にボールを高く投げ、ジャンプサーブを打つた。さつきより、綺麗なうち方で完璧なサーブだつた。

『ナイスサーブ』

光の声も觀客の声には勝てずあまり響かなかつた。

ボールは相手の人と人のを狙つており、何とも取りにくく良い狙い場所だ。

『俺が行く！！』

相手の一人が叫び、体制を崩しながら羽樹のサーブでのポイントを阻止した。

ボールは高く上がり、倒れてる味方をまたぐ様に飛び越え場外へと飛んだボールを必死で追いかけ、コート無いに戻した。

アタックで返す事は出来なかつたが、羽樹のジャンプサーブが初めて止められこつち側としては同様が隠せない。

『皆気持ち切り替えなアガンで！－！』

光の声で皆冷静になつた。まだまだこつちが押している事には変わりない。

ふわりと上がつたボールの落下点に行き、俺は光にバスを出した。

『行くぞ！－光！－』

『おう！－』

俺の出したボールは綺麗に光にわたり、光は【優馬！－そつちもどすで！－】と良い。五右衛門への合図だなどわかつた。

俺は俺でバックアタックを演じなければならぬ。軽く走り、光のトスに合わせて飛んだ。

それより少し遅めに五右衛門がとび、敵の意表をついた。

敵は俺の攻撃と信じ、ややコート後ろ寄りで構えていた。五右衛門へのトスだと相手が気づいたときには五右衛門はバイクを綺麗にきめていた。

先制点G E T ! !

羽樹のサーブが止められた時は本当にどおなるかとおもつたよ。何がともあれとりあえず1 v s 0作戦どおりとは行かないが、先制点を入れることが出来たのは大きな達成だ。

『よつしゃよつしゃ！－今のええ感じやつたぞ！－！－』

『おう！－』

さつきまでの緊張は嘘の様に晴れ、何だか楽しい気分になつていた。再び羽樹のサーブ。

さつき同様、今回もかなりのキレがある。応援してくれてるクラスの奴らも、当然俺達も、さつき止められたのはまぐれだ！－今回は止められるはず無い。

つて思つていたに違ひない。あの凄いサーブを見たら誰もがそお思うだろ？。

が…またもや止められた。

今度は以前の様にバランスを崩す事も無く、大きい音を立ててしつかりとレシーブした。

「マジかよ…

流石の光も驚きの表情が溢れていた。

敵はそのまま上手くボールを自分のものにし、俺らの穴…5人故の穴…中央…を的確に狙つてきた。1 v s 1。

『悪い…わいがカバーせなあかなんだ…！中央狙いはセッターが少し下がつて対応せな…』

『ドンマイドンマイ…！』

誰も、お前をせめたりしねーよつと。仲間は勿論、場外からもドンマイの声が聞こえた。

サーブ権を失い、点差もりになり、俺達の作戦とは程遠い結果になつてきた。

『サーブイッポーン』

敵陣から気合の声が聞こえるや否や、死守する体制にこつちも気合を入れた。

敵のサーブも威力が無いわけでは無いが羽樹ほどではなかつた。ボールは俺の方に来て、【よし…これなら上手く光に送れる…】と思つた瞬間。

『優馬…！…その球ブレるで…！…！』

光の声がボールがブレ出すより早く耳に入つた。

え？？…でも頭ではボールがブレるまでに理解する事は出来なかつた。

やばい…！…野球のフォークボールつていうのかな？ボールは行き成り降下し軌道を変えた。

とつさに反応して、何とかボールをそのまま地面に落とすつて事はしなかつたけど、ボールは後ろの方に飛んで行き、流石にアウト…

1 v s 2。逆転されてしまった。

『氣にするな…！…最初から分かつてれば何とかなる…！』

五右衛門の言うとおり。最初から分かつていれば取れない球じゃな

い！！

内心不安はあつたが弱気は付け込まれて、だた狙われ的にされるだけ…今は空元氣でも空自信でも相手にビビって無いって事を精一杯努力するしかない。

情緒不安定の俺達を待つてくれるはずも無く、試合は進んだ。またしても、無回転サーブで今度は羽樹の方に飛んでいった。羽樹は軽く体を横にずらし、横向きにそのまま敵に返す様にブレ球処理をした。

『ナイス！！OKOK！それで良いで…！』

敵陣に帰ったボールはすぐ様こっちに戻ってきた。凄い音のスパイクとなつて。

スパイクは五右衛門のブロックによって何とか阻止されたが、ボールが場外に落ちてしまい、結局敵の追加点。

1 v 5 3。

こっちがミスをしてるわけでもなく、それぞれ良い動きをしているのだが紙一重の差で敵に点を持っていかれる。

実力は均衡…それぞれ一人一人の差は無いだけに、俺らが一人少ないと言う事が決勝に来てかなり響いてきた。

敵のサーブは羽樹やキキにも引けを取らず、何とかしのいでラリー戦に持ち込んでも穴を付かれたり、戦術で一步相手が上回るなどと点差は縮まる事無く開くだけだった。『まだ15分あるお前らなら逆転できるぞ…!!』と誰かが言っているのが耳に入り、時計を見てみると試合開始から5分がたつていた。

まだ5分…異常に長く感じる…もしかれこれ20～30分くらいプレイしてるよな…

ピー…！

試合の流れは一向に変わる事無く、一方通行の道にいるかの様に相手からの攻撃が雨の様に降り注ぎ、俺達はそれをただどれだけ長い間耐えるか…

そんな感じで試合は1 v 5 7になつていた。

『フウ！…どないしたん！？元気のおなつとるやんけ！…』

状況的に光が言うのも分かるが、逆に元気がなくなるのも無理は無い。

耐えて…耐えて…耐えて…負ける。これの繰り返しだもん。相手のサーバーが代わり、いきなりゆるゆるのサーブが飛んできた。あ？…ついに目まいまでしてきたかと思ったが、実際にゆるゆるの誰でも取れるボールだった。

チャンス到来！！！

みんなの視線が一気に集まり、相手の一人を確認したのち互いに顔をあわせ小さくうなずいた。

穴…大穴発見！！！

『光！…行くぞ！…』

『よつしゃこいや！…待ちくたびれたで！…』

声を出してなかつたのは精々2分くらいだが、何時間ぶりに声をだしただろ？…そんな気がした。

この千載一遇のチャンスを誰も見逃さなかつた。

砂漠で迷子になり、絶望で頭を抱えいた俺達の目の前にオアシスが見えた！！

光は俺からのボールが来る前に【キキいくで！…】と叫んだ。自分で打つ合図だ。

俺はいつも以上に丁寧に、なるべく高めに光にボールを回した。光はキキの方を向き、若干早く飛び、トスの体制からパシッとさつき見つけた大穴さんの横に叩き落とした。

ピー！…！2 v s 7。

要約俺達の追加点：長かつた、遠かつた、でも何とかたどり着けた一方通行越え。

相手は相手で【ドンマイ気にするな】と肩を叩いて励ましあい、早くも意識を切り替えていた。

サーブ権が変わり、キキのサーブ。フロント側には俺、五右衛門、光と攻撃型2枚目の作戦実行だ！

え？作戦は一つじやなかつたのかつて？？

いやいや、頭脳派の光君がもしもの時を考えないわけないでようご。

約15分前。

：『サーブ先制点及び時間稼ぎ作戦がもし失敗に終わつた時の事も考えといた方がええ！！』…

：『いやいや、羽樹やキキにいたつては誰も止められんでしょう！…』

：『そお信じとるけどな、作戦はただやねんしもお一通りくらい用意しといて損はない！！』…

：『じゃあどんな提案があるの？？』…

：『クイック攻撃や！！』…

：『ふうん。それなら別にネット側に男子子じや無くてもできるんじやない？？』…

：『ちやうんや、殆ど合図なしのクイック攻撃や！！』…

：『俺達が男やでとかそんなんでこの策を言つとるんや無い！！ゆわば、いつつも金魚の糞みたいに一緒におつた俺達やができるんや。なら何か出来る気がした。

『…

：『キモ…』…

この後合図決めみたいのは無く…マジでぶつつけ本番となつた。まさか本当に合図なしで出来るのかな？？不安はあつたが俺達三人

ピーツとなり。

キキは当然大穴さんを狙い、それを察したベテラン君がカバーのつもりか…もお打ち返す体制の整つた大穴さんに向かつてダッシュした。

ベテラン君も頑張りもむなしく、大穴さんは飛んできたボールをオーバーハンドでポンとそのままこっちに返してきた。

彼女の落ち込み様からすると恐らく、返してきたじやなく、味方にパスしたつもりがこっちのコートに入つてしまつたが正しいだろう。やわらかいボールが来て最上無二のチャンスがまたも到来した。

羽樹はそのボールを光へと回し、俺と五右衛門は光からどんどんバス合図…が来るんだろうと見逃さないように見ていた。

『42！』

光はそお言つた気がした。

最初のトスは多分だけど俺に向かつて出されたと思つ…

が…何…？何…？何…？何…？何…？何…？何…？

42！？…あのが合図…？…それとも合図無し…？…見落とし…？
速攻に打つ球…？時間を開けて打つ球…？…とりあえず俺に出されたトスには間違いなさそうだし、頂点を捕らえて打つ事にした。

【あ…！？…光が言いたかったのはそおいつ事か…！…】…

『球技大会！－（後）』

もお2年も前の事。

1年の球技大会の前日、俺と五右衛門は光から色々なコツを教えてもらっていた。

『お前らホンマにスペイスのタイミングへたやのぉ！…』…

『だからお前にコツみたいのを教えてくれってたのんでんじやねーか』…

『良いか！？大体お前らセンスないねん！…』…

『好き放題言いやがつて…教える自信ねえなら他あたるぞ！…』…

『まあワイがおしえちゃるわ。教えたるつーかセッターからのトスを見ていつ飛べば良いかをまず判断する事やそれは自分の練習次第やで！…』…

『わいが中学の時の顧問は色々な作戦を教えてくれはつた。一番印象にのこつどるのは数字トスや。』…

『あ？何だそれ。』…

『Aクイック、Bクイック分かるよな？？』…

『Aが速攻でBが遅め？』…

『まあ本来の意味はちやうねんけどまあそれでええわ。AやBクイックを使えこなせたらかなり良い攻撃になるねんな』…

『ふう。じゃあそれ教えてくれよ』…

『そのつもりや！お前ら俺らが今から言ひ数字の意味考えてくれ。』…

『21と32と64、12と78と46と131の違い分かるか』…

『んー10の位の数字と1の位の数字の大きさか？？』…

『流石は数学トップクラスの優馬やな！…当たりや！…』…

『それを利用するんや！1の位のガ小さかったらBで1の位のガ大きかつたらAや。』…

光が何も説明しなかつたのも俺らにしか出来ないって言つたのも納得できた。

これを教えるのに恐らく5分10分では到底無理だ。それに、俺達が忘れてたら多分無駄に想いださせたくなかつたんだろう。言えば薄ら覚えて何となく分かる分かると言つて説明する時間が無いままやえに適当に懐かしいなあつて気持ちで終わつて試合で混乱を招く結果になる。…もし忘れてたなら作戦なんて無しでガチで戦うつもりだつたのだろう。

【42：Bクイック】

俺と五右衛門が理解しているA・Bクイックの意味のは恐らく普通のルールとは違つてゐる…光から以前指摘を受けた。

【…Aクイックはセッターのほぼ真上のレフト側からの攻撃、BクイックはAクイックよりレフト側に離れたところ。Cクイックはセッターほぼ真上のライト側からの攻撃で、DクイックはCクイックよりライト側に離れたところからのスパイク。…】

…が、ぶっちゃけると初心者には意味不明で…Aが速攻Bが遅い…こっちのが分かりやすいつつ全く聞かなかつたことも今になつて想いだした。

光のトスを見て俺は、ボールが頂上手前に来ると飛ぶふりをし、相手のブロッカが飛んだのを確認し、俺も飛んだ。

バン！！！これが俺の中でのBクイック！実際では一人時間差つていうのかな？まあなんでもいいや。

久しぶりに気持ちよく決めることが出来た。スパイクを綺麗に決めた事より、その後の光とのハイタッチの方が気持ちよかつた。

3 v 5 7。

『ナイスナイス！』と飛び交う中キキはサーブのポジションについて、合図を待つていた。

ピーとなると同時にクイックサーブであつてゐるのかな？？とにかくベテラン君のカバーにが入る前に大穴さんに速攻でサーブを打ちつけた。

もおベテラン君はカバーをしに走つたりしなかつた。彼女がこぼしたボールをカバーする側に回つたのだ。

そんな祈りが届いたのか大穴さんはじいたボールはベテラン君の付近に飛んできた。

すかさずボールの落下点に入り、2打目でもお完全に立て直したが、後ろから飛んでくるボールに合わせるのだから、以前みたいにキレのあるスパイクが打てていない。

当然俺達もろくに処理できた。キキがアンダーで光につなぎ、光は『29！』と言い。

ポンと俺に出した。すぐさまジャンプし、ジャンプした瞬間くらいに叩き付け、これまたかっこよく決まった。

『シャアアー！』とついつい吠えてしまい、応援してる奴らも盛り上がった。

4 v 5 7。

あと三点の所まで来た。

キキも流れをつかみたい一身で最後のサーブも大穴さんを狙つた。コントロール重視にしそぎたせいか、威力がさつより少なかつた。流石にこれには大穴さんも綺麗とはとても言えないフォームでセッターにボールをつないだ。

セッターからトスが出され、相手にしても久しぶりのアタックチャンスだつた。

五右衛門がブロックに入り、他の4人は下で待機した。敵は五右衛門のブロックごとぶつ飛ばす勢いで強引にスパイクを放つた。ボールは五右衛門の腕からすり抜け一直線に地面を目指した。と！！羽樹がダイブし、ボールの命を救つた。

球技大会で女の子がダイブする姿を見たことがあるだろうか？俺も光も若干心配だったが、このボールだけは殺せないと想い、羽樹のボールを生きたまま相手に返した。

軽いたまになつてしまつたが、死なせてサーブ権と一緒に渡すよりはずつと良い。

またもや相手はアタックで終わる体制だつた。

『ブロック3枚はるで!!』と光からボソッと言われ、トスが上がると五右衛門に近づき3人でブロックを張つた。

バン!!と大きな音を上げて放たれたスパイクは光の手に当たり、相手コートに落ち、相手も必死でダイブしたが、間に合わなかつた。5v57。

ビ-----!!

いきなりのブザーで驚いたが、時間を見て落ち着いた。

『タイムアウトです。少し水分補給をしてください。なお、コート無いからはです中で飲んでください。応援している皆さんも選手には近寄らないでください。』

俺達はとりあえず水を貰い、コート内に円を書いてよつに輪になつて座つた。

『大分流れがこっちにきたけどまだ負けてるねえ』

『うん…』

羽樹と五右衛門の暗い話題を搔つ切るように光が割つて入つた。

『これからや無いか!!今まででは相手の調査や!!穴も見つかつたし、こつからバンバン攻めるで!!』

『ヒカチンの言うとおりだね。』

『誰がヒカチンやねん!それだけはやめて』

アハハハ!!光とキキのおかげで場の空気が和んだ。

『まあこのままでは相手も終わらんと思つし、こっちも氣合入れてかないかんな…』

『せやせや、向ひつむこのままでは終わらへん。絶対勝ちにきよるで!!』

『だな…』

『次はわいのサーブやで、優馬に2打回すんやで!!んで優馬はあの作戦忘れんように五右衛門にトス上げたれや!たまには羽樹に山越トス上げてもええけどな!!』

『あ、五右衛門作戦の事分かつてる???』

『おう！お前らのやり取りってか光が数字言つてるので想いだしたわ。』

『OK！じゃあ確認するで！…一の位がでかい時は…？』

『（（A））』

羽樹とキキはハテナ顔だったが俺達はぱちりわかっていた。2年前のあの時に戻つたみたいに纖細に：

『よつしゃ！問題ないな！…じゃあソロソロ、ポジション戻るで！…』

光と同時くらいに審判からの試合再開の合図がでた。

各々のポジションに着き、光は大穴さん目指してジャンプサーブを打つた。

バーン！！！とものすごい音が鳴り、大穴さんは倒れた。

『お、おい…大丈夫かいな！？？』

光が心配して駆け寄り、鼻血が出て再起不能状態だった。

『大丈夫！！大丈夫！！』

と2組の先生は言つていたがあんまり大丈夫そうじゃなかつた。大穴さんは本部へと運ばれ、人数が一人減り俺らと同じ人数になつた。本当に優勝できるかもしれない！！同人数になつた事で誰もが優勝を意識した。

が…それは反対だつた。光が大穴さんを消滅させたおかげで相手には穴が無くなり、大穴さんから点数を稼いでいた俺達からしたら、最悪の展開。

乾坤一擲…光のサーブは大博打となつてしまつた。

試合再開で光はさつきと同じジャンプサーブを打つたが苦労しながらも相手は確実に受け、2打目はトスでつないでスパイクを打つてきた。

手のうちよつが無いくらい鋭い所を突かれて一点…取られてしまつた。

6 v s 8° 残り時間8分。

2点差で前半に比べれば全然望みはありそだが、俺らの周りにず

つと嫌な雰囲気が流れていた。

相手のサーブになり、意識をボールに集中させた。

相手もジャンプサーブで俺達の息の根を止めに来た。

サーブは光が受けたがタイミングが合わず、それた所に飛んでしまった。五右衛門が追いかけコート内にもどし、俺が確実に相手のコートに戻した。

休む暇…体制を整える時間も『えられず相手はすぐに攻撃を仕掛けてきた。

俺と羽樹がブロックに飛んで、光がダイブし、キキがダイブし、五右衛門が走り、守りオンリー状態になった。

ついには相手も決める所でも決めようとせず、ただただ長い、長いラリー…いや、また耐えるだけの一通攻撃が始まった。

光もキキも必死で【落とすもんか】とボールに食らい付き、流れた球を俺達が必死でカバーした。

点差が動かず何往復ラリーが続いたらどう…10?…20?…30?… 実際は4回くらいだったが瞬発に筋肉を動かす動作の連発でもおボールを追いたくないと…体は悲鳴を上げていた。

5往復目のラリーでついに相手はしとめにきた。光の足元に鋭いボーラルぶち込み…両手を高々と挙げ優勝宣言をした。

6 v s 9…

また振り出し…相手は容赦なく穴である中央にサーブを打つてきた。

【しまつた!!!!】

中央のボールはセッターが取る役…俺はボールを目で追い、『届け…

…と精一杯てを伸ばした…

『危ない!!!!』

『ウアアア…!!!!』

俺では無理だろうと判断した光が、カバーに入っていた事に俺が気が付いた時にはもう最悪の状態だった。

ボールしか見てなかつた俺は光の膝に顔面を強打し、大量の鼻血が出了。それに対し光は膝を押さえ倒れた。

審判が中止するかと促してきたが俺も光も中断なんてする気はさらさら無く、試合を続行した。

体操服は血で染まつたが元々毛細血管が強かつた俺は出るだけ出たらピタリととまった。

光は足を引きずる仕草を見せたが問題ないの一点張りであきらめる事だけはしなかった。

今のサーブは当然決まり、6v5-10とまた点差が出来てきた。残り5分強。

【チクショ――――】

心の中で思いつきり叫んで、俺はポジションに戻った。

『……ばれ！――』

ん？？何か聞こえたように感じた。観客が大声で応援しているのだから当然かもしれないが…

『……優馬！――』

え！？確かに聞こえた。周りを見てみると五右衛門達も誰かを探してゐみたいだつた。

『タカハシイイ！！！優勝するんじやなかつたのかアアアア――』

班員とクラスメイトが一斉に声の方をみた。

齊藤が叫んでいた。『――――』皆が齊藤に注目している中、班員だけは一瞬で齊藤から目を離しすぐ横の小さい子に目が行つた。

『カオリン…』

『キキチヤン！――羽チヤン！――光！――優馬！――五右衛門！――頑張れエエ！――』

齊藤の馬鹿でかい声に消されかけていたが、齊藤の馬鹿でかい声なんかよりも俺たちの胸にはカオリンの声のが大きく響いていた。松葉杖を使い、ぎこちなくトコトコとコートに近づき、応援席の最前列に座つた。

今すぐにでもカオリンのそばに行き、大丈夫？？痛くない？？頑張つて決勝まで来たぜ！――など聞きたいことや聞かせたいことが山ほどある。

近くに来て気が付いたのか、俺達のドロドロでボロボロな姿を見てカオリンは号泣しだした。

俺達はカオリンの気持ちは言われなくても分かっていた。

【『私のせいで…私が怪我なんかしたから…皆に迷惑までかけたのに私は何もしてやれない…』】正確じやないかも知れないとそんなような事思つてんだろ？？

【カオリンのせいでボロボロなんじゃなし、むしろカオリンのおかげでココまで真剣に頑張れたんだぞ！！安心して応援してくれ！！勝つたら打ち上げするぞ！！だから顔を上げてしっかり見ろ！】

と自分で想像したカオリンの思いに心で応答した。

ピピピ！！

『4組！！4組代表！！試合再開しますよ！！？』

審判の『K・Y』な発言で俺達は我に帰つた。皆、カオリンの登場で動搖していた。そして、諦めかけていた優勝の二文字をもう一度想いだした。

『すいません。大丈夫です。』

とキキが審判に答え、皆が真剣な眼差しに変わつた。今の空き時間で少しだけど、体力も戻り俄然、闘志が燃えてきた。

6 v s 10。残り5分。

泣いても笑つてもこのコートで優勝を賭けて戦えるのはあと5分。

泥だらけになつたつて良い…

また鼻血が出たつて良い…

酸欠でぶつ倒れつたて良い…

腕が真つ赤にはれ上がつても良い…

足が壊れても走つたるでッ…

俺達全員、5分…あと5分だけ本氣で頑張ろうと誓つた。

そんな思いが届いたのか、カオリンも顔を挙げ、喉が壊れそうなくらい声を出して応援してくれた。一人一人の名前を呼んで…相手がサーブを先ほど同様、穴の中央を狙つてきた。俺だ…！！

光も俺を信じ、その後のカバーだけを考え一歩も動かなかった。

ボールは意識があるかのように俺から逃げ、地面に吸い寄せられる。笑う膝を無視して落下点に飛び込みギリギリでボールと地面を引き離すことに成功した。

真上に上がったボールは【ワイが上がるで！…】と光が五右衛門にトスを上げる。

『28や…』

『おう。』【A…】

高く上がっていたボールを絶妙にいなし、五右衛門に軽くトスを上げた。

トスがあがった瞬間…光の手ごと引きちぎる勢いでバーン…と爆発するような音が鳴り、ピーッと甲高い音が鳴つた。

入った…綺麗に入つた…7VS10。残り3分弱。

ワアアア…と場外も盛り上がり。一点追加を一緒にになって喜んでくれた。カオリンだけは真剣な表情で俺達と一緒に闘つてくれていた。

サーブ権が入れ替わり、五右衛門のサーブ。

サーブミスだけは許されない。ここで3点取つて同点にしたいところ。

もおジャンプする事もままならないのか、いつもジャンプサーブをしていた五右衛門がただサーブを打つだけの弱弱しいサーブだつた。流石に死闘を共にしてきた相手も疲れはピーク。ヘナチョコなサーブにも少しながら苦戦していた。

動けるだけの力は残つており、口は是が非でも逃げ切りたいとスパイクを打つてきた。

バン…

キキは飛び込み、何とかサーブしたが、飛び込みの連続でキキの足はすり傷で血と砂でボロボロだった。

痙攣する足を引きずるように落下点に光が入り、必死の思いで『3

1』と俺に告げ、トスを上げた。

【B】と頭で確認し、絶対決める！！と言い聞かせ、ジャンプのフェイントをかけようとした時、ガクガクと貧乏ゆすりでもしているかの様に足が震え、その場に崩れた。【マジで頼む！！！動いてくれ！！】あざ笑うかの様に俺の思いを体は無視し、ゆっくりと落ちるボールをただ目で追うしか出来なかつた。

そんな俺を飛び越えるかのように羽樹が食らい付き、ギリギリのところでトスにあわせる事が出来たが、極度の疲労で飛躍力の減った羽樹の足は俺の肩に引っかかり、横転するように羽樹は転がつた。それでも、相手の意表を付いて何とか相手側の地面にボールを落とすことが出来た。

8 v s 10。残り2分弱。

何度も審判が中止するか??と聞いてきたがありがた迷惑とは正にこのこと。誰も試合の中止を申し出る者はおらず、試合続行。激痛が走る足首・笑う膝・震える太腿・苦しい…でも…いや、だからこそ…諦められない！！負けたとしても諦めて負けるのだけは絶対に嫌だ！！

五右衛門の2本目のサーブ。腕に入らない状態でのサーブは、ネットギリギリを通過し、絶妙な位置に落ちた。

相手もこれにはどおすることも出来ず、あっけなくボールは地面を転がつた。

予想外の追加点で9 v s 10。残り1分半。

五右衛門最後のサーブ。またしても力の無いサーブ。

相手も2度同じミスはせず、最後の力でボールを返してきた。

羽樹とキキでブロックに入つたがボールはブロックの横を抜け、光の1メートル手前に落ちようとしていた。

【よつしゃ…これとつて同点やー！…それにしても何ちゅう距離や…】

たつた1メートル距離がの永遠不变の距離に感じる。

ダイブというより倒れこむように光はボールを捕らえ、五右衛門がそのボールを死なせるもんかと氣力と精神力で動き、トスを上げよ

うと俺を見た。

【優馬！――死んでも決めろよ――】俺にはまつきりとお聞こえた。

立つてゐるのが精一杯の俺に容赦なく五右衛門からのトスが出た。
【ああ。死んでも決めるーー】 五右衛門に硬く約束し、最後の意地
で動いた。

かっこよくスパイクなんて出来ない…でもこれだけは入れてやる。
実践躬行：口先だけではいけない、まず行動せよ。

た。そのまま真下に吊き落とすよつて、相手のパートにてまほ垂直に落とし

『オーバーネットだろ！！！』

と詠子の声が耳に入り、恐る恐る審判を見た。

ビリ!!と笛が鳴り、得点表がへんりくとめぐらされた。備びの追加点だ。

『（ウオツォシャー……！）』

【『ふおふおふお。面白こ奴ひじや。わつ一矢だけ動けるよつてやるよ。』】

と神の御告げがあつたかの様に、後一点で逆転できると思ひと力がわいてきた。

みんなの瞳にもさつきより輝きが戻っていた。

的確に相手のコートにだけ入れることを考え、俺は慎重にサーブした。

『ナイスカーブやーーー』

決して良いサービスでは無かつたが声を出すのもしんどい仲間がナイ

スと叫んでくれた。

ボールは相手の中央に行き、冷静に対処してきた。スパイクで終わるほど相手にも体力が残つておらず、2本目でこっちに返してきた。

『よつしゃー！ワイが行くで！』

汗だくの光が落点に入り、それを羽樹につないで、羽樹からキキ貰い相手のコートに放り込んだ。

もおバレーというより、玉突き状態だった。
ビイイイイイイー！と激しい音が鳴り、『ラストイッポン』と審判が告げた。

同点の今、落とした方が負け…

時間切れのブザーが鳴ると相手も氣力でしとめに来た。
とココに来てスパイク…そんなこと誰も思はずもなく、ノーブロ

ック。好きな所に打ち落とせる。

中央！？角！？

バン！と相手のピストルのようなスパイクが放たれ、自らピストルの的になる様に五右衛門が飛びこんだ。

『ウオオオオー！頼む！…！』

五右衛門の声が響きわたるほど観客は見入つており、少數しか声を出していなかつた。

30センチで届く距離…

【五右衛門なら出来るさー！】

【五右衛門！われのとりえわ運動神経やろがー！】

【五右衛門頑張れ…】

全力を尽くしボールに触れた五右衛門は本当にピストルで撃たれたかのように倒れこんだ。

ボールは後ろに飛び、光が追う。

『任せろや…』

光が五右衛門に【よあやつた。ありがとうー絶対殺させへんー】と言つかの様に五右衛門の球を追いかけた。

【俺のダイブを無駄にしたらしばくぞー！】

【お前はこつだつて俺達に 何でもやれる！ そお思わせてくれたよなー】

【光頑張れ】

皆の想いに答へたいと光は必死でボールに追いついた。コートからわずか3メートルくらい離れた場所。

『もお無理や…誰でもええから返してくれ…』

と言い、コート内にボールを戻した。

誰でも良い…と言つたわりにはボールは俺の方に飛んできた。5歩前へ行けば落点。

【頼む！…頼む！…頼む！…動いてくれ！…】

200km/hあるんじやないかと思ひ乍を、一歩一歩だしてる間にも光からのボールは距離を縮めてくる。

一步前までの足とは別の足みたいに一歩一歩どんどん重さが倍になつていくよつに感じた。

『優馬頑張れ！…』とカオリンやクラスの奴らの声が聞こえているよな聞こえているよな…

意識が朦朧モウロウとする中光のくれたボールだけは目を離せなかつた。

全てがスローモーションに思えた。

観客の声も聞こえな…

ボールは静止しているよつな…

究極に眠い…

頭が重い…

地面に引っ張られる様にゴロゴロと倒れそ…ダタッ…

天を扇いだ…

その瞬間今までコマ送りだった映像が再生ボタンを【ポチッ】っとされたかのように普段のスピードで動き出した。

ポン…ポン・ボ・・・

ボールは俺の横に落ちた…

ビィー-----

試合終了の合図…

勝つたのか？？

負けたのか？？

キキ・羽樹・光・五右衛門・カオリン…両手で頭を押さえ肩を震えさせている…

相手は「一トで抱き合って喜んでいる…

そつか…負けたのか…負けた…

もおっこし踏ん張つて立つて居られたら…

ボールだけでも返していれば…

…たら

…れば

…たら

…れば

やり切れぬ思いが一気にこみ上げてきた…

血が出るほど下唇を噛み締め、泣いた…

生まれたての赤子に負けないくらい…

『和茶との出会い』

『優馬おはよー!……御疲れ様。』

どれくらいの時間寝ていたんだろう…

俺達は試合が終わり、負けた現実を受け止められず泣きじやくつていた。

そんな俺達の悲しみを無視し、表彰式及び閉会式が始まつた。負けたとは言え一応準優勝。この糞だるい中、表彰式には出ないといけない。

そお考えるとだるさがどつと押し上げてきた。

校長…体育委員…生徒会長…やたらダラダラと長話…もお何時間…何日…立ち続けるんだろ…

【ああ…】

ふと田が覚めると保健室に居た。

『優馬おはよー!……御疲れ様。』

『カオリンー?あれ??閉会式は??』

『ええ!?閉会式の最中に優馬気絶しちゃって保健室に運ばれたんだよ!…?』

『ああ…覚えてねーや…』

『今他の階もぐっすり寝てる。ほらー。』

カオリンの指差す方向は夕日が眩しくすぐには誰が何処に寝ているか分からなかつたが、次第に目慣れつて言つのかな?

目が明るさに慣れてきて、キキ。羽樹。光。がベットに寝ていた。

『あれ…?五右衛門は?..』

『五右衛門も寝てるよ。ほらそっちで。』

どおやら保健室にはベットが4つしか置いてなく、五右衛門はソファーに窮屈そうに丸くなつて寝ていた。

『叩かれた夜は寝やすい…まさに今日みたいな日の事やな』

『それ…意味ちがくない??』

『え？ 違うの！？』

『他人に害を『えるよりは、自分が害を受ける方が、心安らかでいられるということ！』と…これが本来の意味。』

『ふうん。』

カオリンに説明されてもいまいちピンと来なかつた。

：5分くらい沈黙が続いた。

一度一人きりの状態で沈黙になると何か話しがちには俺だけだろうか！？

何か話をつ話そつと思つても喉に言葉がひつかかって中々でないんだよね。

まあこれは誰にでも言え…

『ねえねえ。そおいえばさあ。』

俺だけのようだ…

『ん？？』

『皆起きたら良い喫茶店あるから皆で一緒に行かない！？』

『お！ 良いね！ あ…デモ…・・・優勝できんくてホント『めんな…約束したのに…』』

『え！ ？ 優勝したじやん！…』

『は！？』

『準優勝でも優勝は優勝だ！ 3位だったりダメだけどね！ ちゃんと約束守つてくれたじやん。』

『…』

何か…泣き声になつたから…とつさに布団を頭からかぶつてしまつた。

『え！ ！？ どおしたの！…』

何か変な事言つたあ！？ 優馬…！ 優馬…！ と布団に丸かつた俺を力オリンはゆすりだした。

『眠い！…あと1分寝かさせて…』

この時の1分は10秒くらいに感じた。

『1分たつたよー！…』

布団から勢い良くでて【ふああ、まだ寝たりんなあ】と言ご、出で
もいなあぐびをし、体を伸ばした。

『目充血してるけど大丈夫！？眠いなら寝ていいよ？？』

『…もお平気。それより足怪我してるので喫茶店なんていけるの？』

『優馬がまた後ろに乗せてくれるでしょ？？』

『…』

喫茶店について色々聞いてるうちにキキ・光・羽樹・五右衛門と
皆が起き上がり、起き上がった順にカオリンに謝っていた。
約束を果たせなかつた事を…

カオリンは一人一人に【準 優勝 してくれてありがとう。】と言
つた。

キキと羽樹はカオリンをギュッと抱き寄るといった反応を見せたが
男性陣は俺と全く同じ反応してた事に赤面する一方笑えてきた。
とりあえず皆起きた事でさつきまで話していた喫茶店の事を皆に相
談する事にした。

『そおいえばさあ。カオリンがオススメの喫茶店あるつて言つてん
だけど…』

『ああああ。そうそう。あのね。今日今からそこの喫茶店行かない
？あ…皆が疲れてるなら今度でも良いけど』

『おいおい！そんな意味不明な説明じゃ。謎過ぎるぞーーー』

『優馬に同感！』

『わいもー』

『あたしもー』

『私もー』

皆から集中砲火を浴び、一瞬ひるんだカオリンだったが、可愛らし
い口をパクパク動かせて、皆に説明した…説明しまくつた。

『ふうん。で！？』 光

『で？』 羽樹

『で？』 キキ

『ワンモアー！』 五右衛門

見るに耐えなく俺が説明することにした。

『まあ簡単に言つとや。そこの喫茶店にさ、6人専用の席があるらしいんよ。その店変わつてても、その席だけ月学制で3000円払うといつでも行つて良くて、ジュース飲み放題でさ。まあ頻繁に出入りするぶんにはお得らしいわ。それでカオリンはそのオーナーと知り合いらしくてさ。高校の間思い出を作る場としてその喫茶店を使いたいらしいよ。』

『ふうん。で！？』 光

『で？』 羽樹

『で？』 キキ

『ワンモアー！』

五右衛門

『…』

【テメエラアア】つて光に飛びついてヘッドロック！！

【わるいわるいギブやギブ！】と苦しみでる光をほどいてやり、少しして何故か皆で爆笑した。

結局…『騒いでるくらい元気ならもお帰りなさい…』と保健室のおばちゃんにじやされ、シーンとした廊下をカツカツと歩き、自転車置き場に集合した。

『んで、結局どないするんや！？その喫茶店俺は全然かまへんで！？』

『ああ、俺も全然良いよ。6人で3000円だつたら一人月500円でモミホでしょ！？』

結局何だかんだ言つていくんだけよね。

それなら最初から素直に賛成せーちゅーに！？と心で思いながらもまあこれが俺達の飽きない楽しさなのかも…と勝手に納得した。

『じゃあ五右衛門！カオリン足怪我してるから後ろ乗せたつてな！

！』

『おう！つて何！？』

『決まりや！五右衛門がんばりいや！』

『五め衛門…五右衛門。乗つて言ひ？？』

『ごめも…ああ良いよ。乗れ乗れ。』

『ゴメモオニ…！カオリンナビ付きだし、先頭走つてよお』

『ウツセエ…』

とカオリンナビを頼りにチャリを走らせることが1時間…1時間…！？

『ちょ…！…こんなに遠いんか？？！？』

『薰姉さん…！頼むでホンマ…！…ワイら死んでまうで？？』

『んー。間違えたかも…！…じやあとりあえず。戻つて…！…（爆）』
言われるがまま五右衛門は運転し、俺らも五右衛門の後を追いかけ
続けた。戻りに戻つて40分…！

『ウオオ…！』と勇往邁進する五右衛門。

『スト…！…ツプ…！…！』

俺達は一軒の家ともレストランとも喫茶店とも小屋とも言えぬ建物
の横に止まつた。

屋根…屋根に問題あり…！と誰もが思った。

『なんで屋根だけ草でできんねん…！』

『いやいや、あれ草が生え散らかしてるんでしょ…！…』

『あれ草で出来てるんだよ…！？』

『（（なにいいい…！…）（』

『嘘ツ…』

『（（帰れ…！…）（』

光が草で出来てるって言つてもおかしくないくらい屋根一面草のよ
うなものが生えていた。

オーナーの趣味なのか放置していく悲惨な結果になつてしまつた
のか…

無用の長物とはまさにこのことと言つただな…と国語の復習が出来

た。

でもまあ、レンガで造られており、入り口も綺麗で、洒落たオリジ
ナル喫茶店つて感じだった。

早く早くと急かす力オリンを待たせるのもかわいそうだし、とりあえず、中に入つてみることにした。

入り口の純白なドアには 和茶 という掛け札が掛けられていた。

『IZ 和茶6人席』

『マスターあー。こんなにちはあ。』

『おう！薰ーその子らがいつも話してたダチ公…友達の皆さんか！？』

『うんうん！…』

景気良くマスターとカオリンがルンルントークをしてる間に会話の疑問点を五右衛門にぶちまけた。

『…おい、今いつも話してるっていつたよな…』

『ああ…言つたな。』

『いつもの様に来てる店を「コモア」で迷つか！？…』

『まあカオリンなら…』

『だな…』

『お待たせ！…紹介遅れたけどマスターの若田さん…！…若田さんつて言つと嫌がるからマスターって呼んであげてね それと、もおお金は払つてあるから今日からあそこがあたしらの特等席！…！…ビシッ！…と小さな手で自信満々に指した場所は、丸いテーブルのいかにも喫茶店。ポイ場所ではなく…部屋だった…！…

『え！？』

『ん！？』

『は！？』

『あそこ…？部屋じゃん…！…個室じゃん…！…』

『だよお いい感じでしょ！？ 中にはちゃんと机もあるから場所

決めようね。』

予想外もいいとこ。個室が円3000円で貸切！？ジュークボックスも飲み放題で！？ありえない！…あの部屋「ミニ置き場とかなんじや…誰もが不安を抱えるだけ抱えて、カオリンの言つがままに部屋へと足を進めた。

『じゃあん！…！…』

『（（オオオオ！））』

ついつい、5人とも声を上げてしまった。『//置き場なんてとんでもない…6人には少し狭いが、とてもセンスの良い部屋だった。INアジアン！？って感じ？！

真っ白な壁と2メートルくらいの丸い窓、ガラスが見えないくらい綺麗で透き通っている。

そして床はシミの無い畳、ほのかに畳のにおいが部屋中に感じ、何ともいえない癒しのにおい。

唯一の家具ヒノキの丸い机。真ん中においてあるだけ…（え

！？）

つて言つてもどつともなく落ち着く、凄い良い空間だった。ますます3千円つてありんでしょう…！

『光ちょっと良いか！？』

『ん？あ？なんや？？』

光を呼び出し、他の4人を部屋に残し、外に出た。

『あれ3千円つてかなり怪しくないか！？』

『ああ。わいもそれおもッとしたわ。裏があつて後々どつもない請求とかがくるんじやねえかつてな。』

『推測じゃあ分からんし、マスターに聞いてみるか。』

『せやな。』

マスターを呼び、俺達は色々な疑問点をぶつけた。

『あの、ちょっと聞きたい事あるんすけど良いですかね！？』

『おう！…なんでも聞いてくれい！…』

『あの部屋…本当は月いくらなんですか！？ジユースとか貸切とかで月3000円は破格すぎじゃないですか！？』

おんじればアホか！…と光に叩かれた。どおやらあまりにもストレートに聞きましたらしい。じゃあお前が聞けよ！…ってね。

『ブヒヤブヒヤブヒヤブヒヤ…』

『………』

突然の大声の笑い！？吠え！？喘ぎ！？良く分からぬマスターの

行動に空いた口がふさがらなかつた。

『おおおおつーそんなビビるな！！笑つただけやないか！！』

『おやら笑いらしい。』

『あ…はい。』

『あの部屋薫は円3000円つていつとつたんか！？あそこは円18000円だぞ…！』

『（（エエエ…！！…））』

『まあ薫自身は3000円つて信じこんどるし、あながち間違いでも無いけどな！18000円つてえのは一般の客の場合だ…！』

『え！？』

『分からんのか…お前らアホやろ…！ブヒヤブヒヤブヒヤブヒヤ…！』

お前がだろ！…！つて一人で突つ込みたかつたが、流石に初対面で年上の大人…まあ「コは耐えて…

『おい…！突つ込まんかいッ！…』

どないやねん…！つて二人で突つ込みたかつたが、またまた堪えて冷静に聞いた。

『えつと、ちょっとどじぬことすか！？』

『薫は俺の甥っ子や…！あ…姪っ子や…！可愛い姪からお金なんて連れんやろ…！だから薫には6人で3000円だ…！つて言つてあるんだ…！…』

金とつてんじやん…！…つて突つ込みどじる満載のオッサンにいい加減…持病の突つ込みたい病が騒ぎ出した。

『そりなんすか。まさか俺らは一般料金…一人当たり3000円すか！？』

『当然だろ…！払え…はよ払え…3000円…！』

『…』

この糞イカレマスターこんなボッタ店一度とき一ひんわ…！…と光が言う3秒前…！

『ブヒヤブヒヤブヒヤブヒヤ…！嘘…！…嘘…！…お前らの事は薫から

よお聞いとる！…めちやめちや仲ええらしいな…！…薰の親友は俺の親友！…お前らも只に決まつとるやろ…。』

『ですよねえ…！…つと言いたかつたが礼儀正しく礼を盡つた。

『え…？本当にいいんすか！…？ありがとウソだいります』

『ま…！お前らが払いたいなら俺は貰い受けるぞ…。』

またまたあ堪忍してや…！…つといきなり慣れ慣れしくなつた俺達に【お前らはそっちの方が似あつとる…！…遠慮なんてスンナ…！】

と寛大な心で迎えてくれた。

これから戻りシクな…！…と昔の厚くそれでいて暖かい手を俺達に差し出し、少し照れくさかつたが俺も光もギュッつと握手した。

『（（戻りシクお願いします…！…）』

『おう…！…』

五右衛門たちの待つ部屋に戻ると、なにやら机に紙を広げ、ミーティング！？のような事をしていた。

『おまたへなにしてん！…？』

『おかえりい。ちょっとこの部屋ね殺風景じゃん！…？自由に使って良こらしいから、家具とか持ち込んで住みやすくしたいなつて。』

羽樹の意見に賛成でもなれば反対でもなかつた。

『まあ俺はシンプルで良いと思つけど、色々揃えたいなら計画的にやればいいんじゃない？…？』

『せやな。一編にいろいろな物の持ち運ぶと店側にも迷惑かかるしのよ』

俺達も加わつて、丸いヒノキの机を囲んで一枚の紙に色々な意見を出した。

『TVほしー…！…』 羽樹

『なんでやねん…！…家ちゃうで…！…？』

『エヘ…』

『冷蔵庫置きたい…！… キキ

『家ちやうひゅーに…！…何冷やすねん飲み物ならあるやないか…！…』

『テヘ…』

『ベッドほし』 カオリン

『（却下）』

『グス…』

流石にカオリンには光意外も反対した。

『あんな！ココは隠れ家みたいなもんやし、強いては他人の家を借りとるんやで！？TVだの冷蔵庫だの…ありえへんやん！？何かさあもつと別のもんにしよーや。』

『ものつて言う物や無いけど掛け軸掛けたいな。俺…渋すぎ！？』

『いや、わいは全然ええで！？』

『それなら文字は自分達で書こー？』

『羽ちゃんに賛成！？』

『私も。』

あれ！？思つたよりも批判が無いことに拍子抜けしたが、全員賛成で意外にも俺の意見が通つた。

『TVがダメなら…小さめの本棚欲しいかな～』

『ええやん。ええやん。本棚に日記だのココで練つた計画ノートとか入れとこいや…あと…教科書も』

こーしてとりあえず2品置く事にした。

『棚はなけど、掛け軸の新しいのならあるぞ！？』

盗み聞きしてたマスターがいきなり輪に加わつて、新しい掛け軸を持つてきてくれた。

『おおきにな！！マスター。』

『おう！お前らは俺の家族みたいなもんや！…何でも力になるで！…』

何を書こうかな…つと軽く始まつた話し合いだが、とんでもなく迷いに迷つた。

3年4組7班参上！！…ありえねー。

7人にして1人！！…くせー。

ド素人が考えとつても永遠におわらへんわ！！と光がかばんから

世界の偉人 THE 名言集 という本を取り出した。

『（（キモー……））』

『ほつとけーーーーーから皆が賛成するよおなのえらばーや。』

渋々、光の提案に賛成し、皆で 世界の偉人 THE 名言集 に
かぶり付いた。

『飲み物ココに置いとくぞーーーーー』

つと言ふマスターの声も耳に入らないほどもりあがり、1時間近く
世界の偉人 THE 名言集 を眺めていた。

決まつた決まつた！迷いに迷つたその選ばれし名言は
…

一日だけ幸せでいたいならば、床屋にいけ。

一週間だけ幸せでいたいなら、車を買え。

一ヶ月だけ幸せでいたいなら、結婚をしろ。

一年だけ幸せでいたいなら、家を買え。

一生幸せでいたいなら、正直でいることだ。

字の上手いキキがビシーーーーと書き、出来栄えをマスターに見せた。

『おおおうーーーー良い感じに書けたなアーーー西洋の諺かーーー俺もそれ
好きだーーーーブヒヤブヒヤブヒヤブヒヤーーー』

『（（（えええ？？？？）））』

『えつーーーって何がーーーー？』

『これつて諺なんすかーーーー？』

『おうーーーー間違いないーーーー』

自信満々のマスターを信じ、光の本がボツタクリなのだと考えた…

『何が 世界の偉人 THE 名言集 やねんーーーー！』

光は出版社に講義してやるといわんばかりの勢いで本を叩き付けた。

世界の偉人 THE 謠集

『あ…』
『あ…』
『あ…』
『あ…』

『はーーーーーあ…悪い… 世界の偉人 THE 名言集 はこひち

やつた。

とかばんから机の上に置かれていた本を取り出した。

『えへへ』と照れる光に皆で大笑いし、マスターも独特のブヒヤブヒヤブヒヤブヒヤブヒヤー！と言う笑い声を誰も居ない店内に響かせた。

『8時半か！－！時間も時間だし今日はこの辺で帰れ！－！毎日来ても

いいし、普通の土日なら泊まつていっても良いでも今日は球技大会だつたんだろ！？早めに休んで体を癒して明日にでもまた来い！！

！月曜は休みなんだろ！！

マスターに言われ球技大会を想したり、と、と疲労と欝々が襲ってきてきた。

ソロソロ帰ろう!!

とした時：

『蜀漢』卷之三

そう言いマスターは俺達に【和茶6人席】と書かれたキー ホルダー付きの鍵を俺達にくれた。

『大・暴・露・大・会』

時は休む事を知らず… 一歩一歩常に進み続ける。

今日という日、今という時間…

一秒一秒が最初で最後…

もお二度と全てが同じ状況なんて存在しない…

そんな事を考えさせられる意味深な夢を見ている俺。

【チュンチュン】と小鳥の鳴りではなく目覚ましの【ジリリリリ】という激しい轟音で意味深な夢からも開放され、目が覚めた。

一週間続いた梅雨も今ではすっかり終わり、キラキラと元気な太陽の朝日が眩しい6月10日…時の記念日…が祝日ではない。

そう、六月は年間、12個の月の中で唯一祝日が無い月。水無月…ではなく俺らの間では祝無月で通っている。

え!? 8月も祝日は無いぞつて! ? いやいや、だつて8月は夏休みじゃん。平日も祝日も休日も関係ないサーマーバケーション!! つーわけで、高校生の俺達にとつては祝日が無いのは6月だけとなる。実に萎える。

習慣病の様に布団からでて、ギャツビーで顔を洗い、めざましてVを見ながら朝食をたべ、クリアクリーンで歯を磨き、『行つてくるねー』と家族に言い玄関を開ける。

次はなんだっけ! ?

あ! そうそう、俺が家を出ると必ず吠えてくる(俺だけに…)隣の家の犬。

バックウェル!!

キヤンキヤンなく可愛い犬とは程遠く、グルルルルと常に牙を出し、鳴き方だつてワンワンを通り越してもはやウォンウォンに聞こえる次第だ。

そんな狂犬慣れしている俺は、平然と家を出た。

『ヤツポー!!』『ウツス!!』

『「つるせえ！！バツクウェル！！…じやないね…』

突然の非日常的瞬間。羽樹！？と五右衛門！？

『ん！？今日学校だろ！？お前ら一人でなにしてんの！？まさか…

朝帰り！？！？』

『ドキ！？！？』

『変なリアクションすなー！勘違いされちやつじやん！？』

悪ふざけする五右衛門を叩き、これまでの過程を説明する羽樹。

『…という訳なの』

『ほうほう。要するに…』

昨日の夜親戚のおばさんの家に泊まった羽樹は、そのおばさんの子供、春香と話しているうちに春香と五右衛門が同じ小学校と言う情報を入手。

『へ～じやあ五右衛門もこの家の近くに住んでるんだ。』 つとあります理解。

翌日の朝、つまり今日。羽樹は五右衛門に電話し、近くに居るから学校一緒に行こうと伝える。

五右衛門も断る理由もなく、いつもの俺との待ち合わせ場所を伝え、そこに来いと言つ。

五右衛門はいつも何故か俺より30分くらい前に来ており、ずっと待つていてる。

羽樹にも当然、自分（五右衛門）の集合時間を伝えてる。
早！？！？と思いつながらも羽樹も五右衛門同様、俺の来る30分前に到着。

『優馬は30分後くらいにくるよーっ』 とその場で聞かされ『化粧も、髪の毛の手入れも、色々短縮して急いだのに…』 と激怒する羽樹。

『え？？いつも通り可愛いから全然気が付かなかつた』 と五右衛門の軽すぎる言葉に激怒すると思いきや、『えへへ。そひへ。』 とアホ丸出しに許す。

気分良好 とは言え、元々待つことの苦手な羽樹。

『優馬の家も知りたいし、迎えに行こ』と五右衛門に提案。が名案になり、今、俺の目の前に居ると語り非日常的瞬間にたどり着くまでの過程を聞かされたのだつた。

『そゆこと 五右衛門と優馬つて意外と家近いんだね。』

『まあお前らに比べたら一番近いけどチャリで15分かかるぞ！？』

『えー。近いやあん。うちと同じ中学のキキとカオリンでも20分くらいかかるのに。』

『そんなにかかるんだ！！』

と実は班員（親友）のプライベートをあまり知らない俺達。親友とはいえ男女のうす〜い壁みたいのでプライベートとかにはあんまり聞いたりしなかつた故、2ヶ月以上たつた今でもこのしほ。

これじゃあいかん！！と思い、今日の学校帰りにでも、和茶にて暴露大会！！を提案しようと思った。

とりあえず、学校に行かねばと、世間話をしながら学校へ向かった。

キーンゴーンカーンゴーン！！

始業の鐘…じやなく終業の鐘。

『で、今から和茶で暴露大会するの？？？』

『おう！何か俺らもお2ヶ月もたつてるので、男女間ではお互いのプライベートって殆ど無知じゃんね。それを今日…皆で暴露しうつて思つてさ。どお？？』

『えー。プライベート侵害やあん』

『賛成！！！』

『わいも賛成や！！』

流石は光と五右衛門！！キキの反対そうな意見を押しのけグッジョブ。

『よーし。賛成意見しか出てないし。今からいつも通り和茶に集合

『……』

『はあい』

力オリンは相変わらず天然で可愛く返事してくれた。
ブツブツブツブツとキキと羽樹の憎悪を無視し、俺達は和茶に向かつた。

今更だが、和茶には学校から約10分で付く距離にある。初日に何で1時間40分もかかったのか不思議でしそうがないが、まあ力オリ…その辺は放置しよう。

あの日以来、和茶には殆ど毎日顔を出すようになり、マスターの【赤字】に大貢献している。

最近では店の手伝いを無給料でしたり、学校の連中に和茶の宣伝をしたりと、黒字にも大貢献していた。

イーブンイーブンって事だな。

『おう！！お前ら今日も来たのか！！！ブハハハハ！！』

ブハハハハ！？ちょっと前までは、ブヒヤブヒヤブヒヤブヒヤ！！という笑い方だったが俺たちが指導し、調教し、何とかまともな笑い方になつた。

それも黒字貢献の一部だよな。

『ちゃあっす。マスター。』

『今日も世話なるで！！コーラたのむわ』

『あたしはオレンジジュース。』

『あたしも』

まあこんな感じで、すっかり我が家氣分になつていていた。

俺達専用の部屋。和茶6人席も結構住みやすい空間になつてきだんだ。あの後、色々あつて何気にホワイトボードとか付いちやつてたりしてるので…これが意外に役立つんだよね。ほらつ。

大・暴・露・大・会

【ルール】

質問した内容には絶対に答える！！

男女交互に質問する。

嘘厳禁。

光が大きくホワイトボードに書き、皆が拍手。キキも羽樹も公開内容は漏らさないなら…と言つ事で乗り気になつてくれた。

『じゃあわいから女子に質問や！…！』

『はい』

『うん…』

『OK…』

『よつしゅー光…秘密あばいたれ！…』

『任せやーーとつておきのがあるんや！…』

ニヤリと笑い、親指をビンツと立て決めポーズを見せてきた。

流石にこれには俺も五右衛門も期待が胸いっぱいに広がり、ドキドキしていた。

『ほないくで…！…女子ってオナニーはどのへりこしてるんですか

！？』

『プチ・暴・露・大・会（前）』

一瞬にして空気が空気が凍りついた。いや、凍りついたなんてもんじゃなかつた。

光のとんでもない質問に俺も五右衛門も流石に、20秒くらい方針状態だつた。

光にとってのその20秒はとてもなく長く、2時間くらいの拷問に感じ、地獄を見たわ…と嘆いていた。

カオリソを除く、女子一人の鬼にこれでもかつてボコスカに蹴られ、殴られ…光の顔は原型をどどめてなかつた。

『さて ちょっとルール変更したから皆ボードに注目！…！』

ぶち・暴・露・大・会

【ルール】

質問した内容には絶対に答える！！

質問内容を書き、それを一つの箱に入れる。（注・いかれた内容は即フルボッコ）

男女交互に質問する。（注・質問した内容は箱から引いた物を採用）

箱から引いた質問の記述者の名前は伏せる事。（注・いかれた内容の場合は名乗る事）

嘘厳禁。

『皆も理解した所で質問内容を各自5つ、5枚の紙に書いてこの箱に挿入してね』

キキに渡された紙に、羽樹に言われるがまま、5つの質問を書いた。

俺の質問内容は… 内緒で

最後に箱に挿入したのは、他でもない光だった。まあ… 当然って言えば当然だけど。

光の挿入で全員の質問、計30個の質問が出来た。

この箱を2週回して各自2回ずつ質問するという内容だ。

質問内容と回答はボードに記述される。

『それじゃあ、わたしから引くね』

最初に引くのはキキ。

デパートのぐじ引きをする5歳児のように田をキラキラとさせて、箱に手を突っ込んで選んでいた。

『これだ!!』

キキが勢い良く取り出した紙には…

【皆の趣味!!】

と書かれていた。暴露大会つて言つのかなこれ…
とりあえず皆がそれぞれ自分の趣味を一つ答えた。
答えるたびにキキがボードに書き出した。

趣味

キキ：映画鑑賞

羽樹：読書

カオリン：生け花

五右衛門：スポーツ全般

優馬：海外ドラマ鑑賞

光：天体観測

ショベーハハエ…なんつうか、ねえつ。

今日、この日の目的は暴露大会で、あつて合コンではない。趣味など普段学校でもどこでも疑問に思つたときに聞ける。わざわざこんな大げさに集合して語り合つ事でもない。俺から言い

出した事もあつて、一回田の質問無いようにうそをついていた。

酒が入つて、酔つて勢いでしか離せないような事…それが今日の田的だったのに。

このままグダグダくだらない質問で終わるよつ…と思つてある提案をした。

『ちょっとね。これって何か暴露大会っぽくない…?』

『え?』

『こんなさあ、趣味だの、好きな食べ物だの、特技だの…そんなのいつでも聞けるしや。』

『せやせやー! わいの質問くらいは答えなあかんわな。』

『いやいや。あれは流石にプライバシーのかけらも無いしさ、度を超えてるつーか。』

内心、ちょっと氣になつたり、答えて欲しかつたりしてたけど、口で光に賛成して、セクシャルハラスメント的質問を再開しようなど言ひ出したら、女子達が『帰る』と言ひ出しそうな…いや、必ず言ひ出して、その後はもおギクシャク…なんて結果になりかねない。よつて、下心は封印。

寝る前にでも想像してれば良し…!

『うんうんー! 光の質問は確かにちょっと問題あつたけどさ。もおちよい、あんまり人には言えないような…まあ言いたくない事は無理しなくていいけど…』

五右衛門も俺に賛成してくれて、一時的に場の空気が固まつた。沈黙つてやつ…

『分かつたー!! でもワイセツ的な質問は無しね!!』

と沈黙を破つて最初に話したのは、光の質問に一番激を飛ばしていた羽樹だった。

『よしー!! キキもカオリンもそれで良いー? ちょっとベジタな内容の質問にしても…』

『あたしは良いよー!!』

『私もワイセツ的な事じやなかつたら極力答えるネ』

『よつしゃー！よつしゃー！じやあさつきの質問にはワビを入れる
！－無神経な質問ですまんのお。堪忍してくれや。』

と光も謝り場の空氣も和んで、再開した。

『じゃあまたわいが仕切るな！－今、思いついたんだけど、質問内容は一つにせんか！？質問じやないけど、各々一番聞きたい事をその場でわいから時計回りに質問する。もち、変な質問はなしや－！分かつたか五右衛門！－』

五右衛門は乗り突つ込みをすつかり忘れ、白い目で光を見た。

『OK！－何度も何度も紙に書いてやるのめんどいしね。じゃあ光質問してよ』

『よつしゃー！今までに一人でも異性と付き合つた事あるー？－これくらいはセーフラインやろ！？』

光の目は俺に向けられ【はよおセーフゆえやーーー】と声に出でずとも何となく分かつた。

『まあいいんじゃない？？ちなみに俺は…』『こつらのせいで一人だけ！－中学の3年以來ご無沙汰…』

『ええ！－そなのー！？意外やん。』

羽樹に驚かれ、これは…優馬みたいな子が今まで一人しか付き合つて無い何て…と言つほめ言葉なのか！？と内心ドキつとしたが、その後に続くキキの言葉を聞いて、苦笑した。

『もお高3なのにね…』

『そーいつたんなや。わいも、一人やで！－優馬と同じで中3の時に一人、まあその子も付き合つたつーか登下校一緒にしただけの仲や！－』

『それでも付き合つただけ全然ましやん！－俺は…』この質問が来たとき泣きそうやつたわ…』

『おい！－－－』

と俺と光から鋭い突つ込みが入った。

『やめる！－－－言うな！－－－言つたら…』

『ああ！？われえ暴露大会やねんで！？ゆうたら？？じばくか！？』

『言つたら…泣く…』

五右衛門のチワワの様に可愛い瞳を無視し、俺と光は坦々と語りだした。

『（（（ええええええ…）））』

カオリンまでもが驚き、女子達は普段から大きい瞳を田玉が落ちそうなくらい大きく開けて驚いた。

『五右衛門…小沢さんと昔付き合つてたの…？』

小沢聰子…覚えているだろ？…キモ子だよ…キモ子…五右衛門が早とちりで高2の時に付き合つ事になつた子ね…

『いや…まあ…その…ね…』

『どのへりこ付き合つたの…？』

『あ…』

『なんで別れたの…？』

『さあ…』

『どじままでやつちやつたの…？？』

『あ…』

女子達は興味深深に一方的に聞きまくり、もお質問攻めから10分がたつた。

ここづら…今は可愛いけど、40歳になつたらその辺のオバハンみたいになるんだろ？…と光も俺もがつくり来ていた。

『はいはいはい…！…とりあえず男子は全員答えたし、次は女子達の番やぜ……』

最初はニヤニヤと光と一緒にみていたがあまりにも可愛そつだつたし、まあ一応親友だし、救つてやつた。

『せやで…！…五右衛門への質問はこれにて終了…！…それにお前らもワイセツ的発言してたで…？彼氏とは何処までやつたの…？とかこれから質問で出でたらちゃんと答えるんか…？』

光の仕返し交じりの正論な意見に女子達は…興味心を抑え、光の質

間に答えた。

『私は3人かな…中3に一人、高1で2人。高1に最初に付き合つた子とはすぐ終わっちゃつてさ。その後もお一人付き合つたんだけど、去年の秋に終わっちゃつた。以上！…』

とキキが意外にも詳しく教えてくれて、ちょっとじびっくり。羽樹がキキに続くように答えた。

『うちも3人。キキと全く同じ感じだよ。うちの場合は冬までもつたけど、振られちゃつてね。酷く落ち込んだけど今は立ち直つて彼氏募集中！…以上！…』

『（（おおお…））』

男子に質問タイムを与えずカオリンも答えた。

『あたしは五右衛門と一緒に0人だよ』

『（（ええええエエエエエエエ…））』

声が裏返つてしまつた。

『まじで！？』

『つてか五右衛門0人やないし！…』

『いや、俺は0だ！…カオリン仲間やな！…』

『だねえ』

『カオリン今まで、色々告られてたけど全部断つてたしね。』

『うんうん。めっちゃ中学でも高校でも告つて来る子多かつたよね』
『え？？ちゅー事はキキとか羽樹は告白受けた事ないんか！…』
『まさか！？もお18歳なるんだよ！…告白受けたこと無い子なんて居るの！…』

『私はこれまでに7人くらいかな？？羽ちゃんも同じくらいだよね！？カオリンは20人くらいだと思うよ。光んたあは！…』

カオリンの20人と言う数字に驚く隙も与えてもららず、羽樹とキキのコンビプレイに答えるしか道はなかつた。

『0人ですが何か！？』

『光同様。0人ですが何か！？』

『同じく0人！…』

五右衛門だけ自身満々に答えた。

が、無視。

『プチ・暴・露・大・会(中)』

『「めん」「めん。ちょっと言い方悪かったね」俺達全員（一人嘘）誰からも告白されたこと無い、哀れな連中にキキと羽樹から謝られた。何かむなしいね。

『おやら恋愛経験、人気度、は当然の様に女子達の方が格段に先輩らしい。そんなのはルックスで誰もが一眼瞭然だが、何かちょっとと価値観の違いつて言うのかな…少しだけ寂しい感じになつた。

『あ…！でもさ…告白されてないのに付き合つた経験あるつてことはさ。告白してのくだつたつて事だよね！？それつてすごいじゃん…！ね』

謝罪の次は慰め…『ネッ』と羽樹からキキにバトンが渡され、『うんうん…！あたし告白とかしたことないし…勇気あるつて思う。それに成功したんだもん本当に凄いと思つよ。』

キキは相変わらずポーカーフェイスで、本音なのか羽樹同様慰めなのかよく分からぬ。

流石のカオリンもなんとも言えないこの変な空気を嫌になつたらし
い。

『ねえねえ。次は優馬の質問だよね 光の質問には皆答えたし、優馬質問してよ』

『え…？あ…ああ。んー。じゃあ現在好きな人つて居る…？憧れとかじやなくて恋愛対象でね…！』

【やつちまつた。恋愛がらみの事なんてもお聞きたくなかったのに、カオリンのいきなりの振りにとっさに変な事聞いてしまつた。】

『ちなみに。俺は今は居ないけど、高校卒業するまでにはちゃんとした恋愛してみたいかな…！』

【おこおいおい、何言つてんだ俺は…】

声に出しての自問自答。それもかなりの早口で、坦々と自分だけ語

つてしまつた。

『わいは一応おるで……まあせやかで、脈無しもええとこやけどな！！！アハハハ…』

『俺は、優馬と同じで探し中やなあ。まあこいつちも優馬と一緒になんだけど俺も高校卒までには彼女作つて同じ大学いきてえな…』

『あんた、大学なんて行けないでしょ。あほだし』

『ほつとけ！！お前はあるんかおらんのか言え…』

『うちは…内緒 はだめだよね。居るつて言えば居るよ。でも恋愛的に好きなのか、人？友達？として好きなのか分からぬいけど。』

『私も羽チャンと一緒に気になつてる子は居るけどこれが恋愛感情なのかな微妙やね。』

意外にも皆あつさり答えてくれて、心臓バクバクさせていた自分が恥ずかしくなつた。

【高3だもんな…好きな子の語り合い何て恥ずかしがる歳じゃねえよな…】

『あたしは好きな子いるよ』

『（（お”！？））』

今まで恋愛とは無関係つていうか20人もの狼（男）をことじことく断り続けたカオリンに好きな人！？

カオリンのとんでもない発言に俺達男子は勿論、キキや羽樹までもが驚いた。

『優馬』

『来た！！！！！俺の時代！！！』

【神よ…俺は…一生カオリン、いや薰を大切にすると誓います。絶対にしあわ…】

『と…光と…五右衛門の事めっちゃ好きやに』

【…】

最初に優馬つて名前出た時は神に一生カオリンを大切にすると誓つたのに…

放心状態の俺を見て皆、笑い転げていた。

『アハハ うちも優馬と光と五右衛門の事めつちやすきやで 羽樹がカオリンの頭をナデナデしながら、可愛いなあと頬擦りしていた。

：優馬の質問終了：

『おッす！！！差し入れもつて来たぞ！！！皆で食え！！！』

マスターがジユースとお菓子の差し入れを持ってくれた。すっかり・6・人・の世界に入っていた俺達はマスターの入室で現実に戻った。

外はすっかり暗くなり、さつきまで夕日が差し込んでレンガ色だつた部屋が、いつの間にか電気の明かりの白い部屋に戻っていた。

『おまえら、盛り上がるのはいいが、時間とかは気にしろよ！！！俺だつてこんな事言いたかないが、補導されたりしたらこの店にはもおこれなくなるぞ！！！そしたら俺も寂しいし、嫌だ。だから次の日に学校ある時は時間を気にしろ！！次の日が休みのときは両親に連絡を入れてれば泊まつていつて朝まで騒いでたつて良い！！』マスターに言われて時計を見たら21時を回っていた。流石にこれには俺達もびっくりした。

『まあ22時にはちゃんと帰るんだぞ！！それまでに菓子食つて、飲みもん飲んで、話をまとめろ！！明日は金曜だし、明日ならいつまででも話せるしな！！』

『あいよ！！』

光が軽く返事し、マスターはまた店に戻つていった。

『つてかもお9時かいな！！めっちゃはやいのぉ！！』

『な！！俺もびびつたわ。』

マスターにも迷惑はかけたくないし、和茶にこれなくなるのも嫌だったのもあり、今日は素直に帰宅し、明日は泊まりの予定で話し合う事になつた。

野郎同士で泊まる事も結構珍しいのに異性と泊まるなんて産まれて初めてで今の段階から遠足まえの小学生のように胸がドキドキしてやまなかつた。

俺、五右衛門、光は最も正常な成人男子である。

俺達じゃなくともこんな異例事態に遭遇したら世界中の男子は夢を描くに違いない。

『『で6人で寝るのかな！？』妄想は無限に広がる。全てのパターン、状況、時にはそのパターン事の会話内容まで想像する…完全に俺達は妄想天国状態になつていた。ありえない…ありえなすぎる…つと冷静に気持ちは違う方向に向けどが、下半身だけは言う事を聞かず、少しの間立ち上がることができなかつた。

『なにしてんの！？明日、お泊りでゆつくりできるんだし、今日のところは早く帰ろうよ！…マスターに叱られるよ！？』

『わっかた分かつた！…ちょっと先行つてくれ！…』

女子達に先に部屋を出でもらひ、ほつと一安心。

『この変体どもが！…』

『われもじやろ！…』

蛙や虫の泣き声に迎えられ、10分遅れて俺達も外にでた。結構田舎だけに外灯も少なく、一面真つ暗でだつた。

無数の星や月明かりなどの自然光源によるスポットライトを浴び、変体丸出しの気持ちを落ち着かせるために深呼吸をした。

『じゃあ帰るか！…女子送つてかんで平氣か？？夜道苦手ならワイらが付きそうで！？』

『平氣平氣殆ど3人帰り道同じ出しちゃ。』

『了解！…ほな皆きいつけてな！…』

『またね～』

俺は五右衛門と一人で明日の壮大な変体話をしながら帰宅した。

『それにしてもさ、あしたつて同じ部屋にねんのかな！？』

『あー俺もそれ考えてたわ。』

『同じ部屋なら部屋で俺としては嬉しいけど…かなりせまくねーか

！？』

『まあまあ。部屋同じならかなり隣接するぜーー。』

『そりや最高だわなーー。』

俺は夜が好きだ。何だか素直な気分になる。

暗くて周りがあんまり見えないせいか安心出来る。

とくにこの時期は暑くも無く寒くも無く、気候的にも最高だ。

俺達は家の近くまで来ると川原に自転車を停めて、少し話した。

『お前さあ、さつき彼女作って同じ大学行きたいっていってたよなー大学つてどつか行きたい所あるんか！？』

『まあよ』

お互に沈黙の間は石を拾つては投げを繰り返していた。

『どこーー！？』

『んーーーああ。決まってるような言い方で言つたけど行きたい大学はどこでもよくてさ、まあ一人暮らしして知らない土地に行つてみたいつてのが希望かなーー。』

『ふうん。』

『お前はどおなんよーー！？』

『おれかー俺は全然なにも考えてねーーや。』

『ふうん。』

仲の良い奴と居る時は盛り上がる時は凄い盛り上がるけど、意外と沈黙も結構あつたりするんだよね。

普段一緒に居るせいか話す事もないのもあるし、慣れてるせいで無駄に気を使わなくてすむのかな。

家族と居る時に会話を氣にして、自分から沢山話しかけるつて事がないみたいだ。

『おいーー俺さマジで彼女作るわーーー！』

『はーー！？』

五右衛門のいきなりかつ大胆な発言に少々戸惑つた。

『つくるつてお前まだ好きな奴もいねーんだろーー！？』

『ああ。今はなーーでもさ、俺らつて何かふしきじやねえかーー！？』

『なにがーー！？』

『俺らの班よ』

『俺らの班の何が不思議なの?』

『他の班つてさ、まあ班内での会話が無いわけじゃないけど俺らみたいに仲良くなっちゃんね。』

『んーまあそれは単に俺らの班員が氣があつてるんだろう??.』

『それ!...!』

『は!?』

五右衛門が何が言いたいのか全く分からず、少々混乱ぎみだった。

『俺さ!..あの3人の誰かと付き合つは!...!』

『え?..あの3人つてだれよ』

『羽樹、キキ、カオリン』

『はあ!..マジに言つてんの!..』

『おう!..お前はあの3人じやいやか?..』

『嫌とかじやなくてさ、あいつらルックスも良いし明るいしさ、他の男がほつとかへんつて。俺らには友達...親友までが限界だな。』

『まあまあ。確かにそれはあるけどさ...まつお前は指くわえてみとけや!..』

『あいあい。で誰かあてはあるんか!..?』

『いや、まだ今は友達としかみてねえしさ。やのうち変わつてくるだろ、男女間での友情は何とかつてよく言つしな!..!』

『ハハハ!..まあがんばれ!..!』

五右衛門は五右衛門で前進するらしい。

そもそも、五右衛門は大学に一緒に行きたって言つてたけど、光ほどではないが、キキ、カオリン、羽樹、3人とも頭は結構良いし、俺なら頑張れば何とかなるかもしねいけど...体育系の五右衛門がねえ..

俺はそこが少し、いやかなり心配だった。

明日の準備もあるし、俺達はソロソロ自宅に帰る事にした。

『開けて悔しき手箱』

『優馬あ……優馬あ……起きなさい……優馬あ……？今日学校あるんでしょ！？』

目覚ましの【ジリリリリリ】という音ではなく、【優馬アアアア】と叫ぶ母のスクリームで目が覚めた。

良く見るとまだ6時半…どおりで目覚ましがならないわけだ。

【ふああ】とアクビをし、再び布団にもぐり、むにゅむにゅと布団の気持ち良さを実感していると、ダダダダダダともの凄い音と振動で起き上がった。

ドンドン！ガチャ！

ノックの返事をする間もなく、母が部屋に飛び込んできた。

『優馬！……あんた！！今日、五右衛門君たちと泊まる準備あるから早めに起こしてほしかったんじゃないの！？』

朝から母の怒鳴り声…本当に鬱になる。

『ああそだつた。じゃあ準備するから出てつて。』

うるせーと反撃する気力も無く、頬むから黙つて退出してくれ…それだけだった。

【歯ブラシ、着替え、下着、財布、携帯、…】

とりあえずいつもより大き目のカバンに入れ、準備終了。

6時45分。

いつもどおり起きてても全然間に合つたな…と後悔した頃には目がパチチリ覚めていた。

昨日の夜は、色々な事を考えて…勿論ムフフな事も含めてね…寝付けないと思い、母に起こしてくれるよう頼んだのだ。

ところがどっこい、布団に入つて3分弱で寝てしまった。いつもより早く寝たくらいだ。

母に頼まなければ…30分…1時間は多く寝れたのに…とちやっちい思考回路を働かせながら、とりあえず朝の日常習慣を済ませ五右

衛門の待つ集合場所に向かつた。

3年にして初。五右衛門より早く集合場所に到着。3分くらい待つと五右衛門が来た。

『え！？なんでお前がいんの！？』

『おは～』

五右衛門は時間を1時間間違えたのではないかと、携帯を取り出し、時間をチェック。

『7時15分だよな？？？』

『今日はまあ…ゆうならば遠足前の早起きって奴よ……』

『キモ。小学生か』

『ダハハハハ。ちゃうわ！！糞ババアが起こしに来て、いつもより早く起きたんだわ！！』

『要するに遠足前に『お母さん、明日は遠足だから、早く起こしてね。』っていう小学生だったんだろ！？』

『…』

『ぶ！…キモ…！…今日の夜のネタ…いや学校ついたら即やな！…！…。』

『つけ。勝手にせえ！！』

学校につくなり、五右衛門は俺の話を報告。

五右衛門は必死に有る事無い事完全に作り話で、実話のエスカレートバーを皆に熱烈的に語った。

キキと羽樹は苦笑…頼むからそんな目で俺を見ないでくれ。

カオリンは良く分かつてない様子…實に可愛い。

光にいたつては爆笑され『お前死んだ方がええぞ！！キモ過ぎる…！』と連呼…お前が死ね。

朝、母親に怒鳴られ…学校ではレディーには苦笑され、親友からは死んだ方が良いとまで言われた俺つて一体…

『土屋！…うるさいぞ…！…』

と斎藤の声に救われた。

始まつたかと思つたらもお学校は終わつており、また今日も一日中

寝ていた。

過眠症なのでは無いかと…少々自分の体を心配しつつも周りを見るや否や安心して眠りに付くのである。

今日みたいな金曜日は絶好の睡眠日和でね…

今日学校に言つたら明日から休み…！今日くらいは頑張るぞ…！なんて、俺も昔は思つたよ。金曜が3回訪れて終了したけど…

キーンゴーンカーンゴーン…！

不思議なもんでね…学校が終わると凄い目が覚めるんだよ。充電完了…！？みたいな…！？

俺達は学校が終わると同時に、和茶へと向かった。

いつもなら学校から10分で付く道のりを今日は6分で付いた。最短記録だ。

6月上旬…中旬…なのに夏日の暑さの中、立ち止まらずダッシュしただけに到着し自転車を停めると風を切る事も無く、無風の状態になり今までずっと息を止めて我慢していた子が無理になり【ぶはあ】と吐き出すように額、首、背中から汗が噴出した。

この暑さがエアコンのカンカンに効いた部屋に入った時の感動を倍にする。

早速涼しい店内を指し、ペタペタと汗で学生服が足にまとわりつき何とも不快な状態で右左右左右と足を前にだす。

…CLOSE…

最初に目に泊まったのが5つのスペルから出来ている英語の文字だつた。

店内の快適な涼しさとは別の涼しさがそこにあった。

『え…？今日やすみなんか…？』

あれだけ期待してただけに俺達の落ち込みは半端なかつた。

駄目…拒否…却下…

状況を体が受け入れようとせず、CLOSE という札のかかつ

た純白のドアの前で座り込んでいた。

と言つより、何かすぐ帰れず座り込むしかなかつた。

10分…20分…30分…

夕暮れ時は30分で結構風景がかわるもんでね、真昼から一気に夕方に太陽が滑り落ちた。

6人で座り込むには少々狭い空間だつたが、広い部屋なのに身を寄せ合つカップルの様に何か悪い気分はしなかつた。

学校で放課後まで話していた生徒達の帰宅ラッシュ…俺達の前を自転車で通りすぎていく。

和茶の前の道を通りすぎる度にこっちを向いて、珍獣の塊でも見るようにな不思議そうな眼差しだけ残して通り過ぎていく。

俺達は誰も言わず、ただ座つていた。

明らかに店は閉まつてゐる、掛けまで出でているくらいだ。きっとマスターも急用が出来て今日は休みにするしかなかつたのだろう。

それは、分かつてゐるけど…

青春期の子供つて複雑でさ、大人の事情があるんだつて分かつてもこつゆう時つてなかなか受け入れられないもんで…

デートでディズニーランドに行く予定だつた日に豪雨に襲われるみたいな??

歩いていてタンスの角に小指をぶつけて歯を食いしばるしか選択しがないみたいな??

暑いのに夏の太陽は容赦なく平然と俺達に日を当て、俺達は肌を焦がすしかないみたいな??

当たり所の無い…というか、誰にこのイライラ当たれば良いのか分からぬ状況??

大人から…というか第三者からみたらそんな事でイライラしてるなよ!!って叱られるかもしれないけどさ…

天国から地獄つて言つたら大げさだけど、いきなりの期待破棄に『また今度にするか!!』なんて冷静な判断は俺達には出来なかつた。30分が40分になり40分が50分になりとうとう座り込んでだ

れも口を開く事無く1時間になつた時、痺れを切らして声をだしたのは光だった。

『帰りますか…』

『そやな。』

と膝をポンと叩いて立ち上がり、いつもより重いカバンがまたむなしに

俺、光、五右衛門、キキ、羽樹と順番に立ち上がり帰りうとしたがカオリンだけが立たなかつた。

『カオリン帰るでえ～』

『やだ！…今日みんなで泊まるもん！…』

流石にいつもならこの発言も可愛なあつと一言で終わるけど、今日は場が悪かつた。ただのわがままな発言にしか聞こえてこなかつた。

『あ？？何ゆーとんねや！もお十分待つたや無いか！…』

『でも…』

『光、ちょっとと言い方きついよ…！…』

羽樹がカオリンをかばうと、光とは思えないよな鋭利な目を羽樹に向けて言い放つた。

『きつつーゆわな、このハータリンの天然ツ子にはなんぼやぞしゅ一ゅうても伝わらん』

パン！…！

とキキの平手が光の頬を桃色に染めた。

『何するんじやワレ！…！…』

『あんただけ帰れば…』

と光に負けてないくらい冷たい目と言葉で光を両手で突き放した。

『後悔は美德の春』

キキに胸を押され、わいは大きくため息だけついて、背を向けた。

『優馬、五右衛門わりいな。わい帰るわ。』

『ちよ、おい、待てつて。』

優馬達は迷いに迷った結果、わいに付いて来てくれた、男女対立。わいは優馬と五右衛門と一緒に和茶を離れ、キキと羽樹はカオリンと一緒に和茶に残つた。

今日の朝…つてゆうより、1時間半前はこないな結果になるつては思ひもしなかつた。

わい達はとりあえずこの場を離れる。

つてゆう目的でチャリンコを転がし、ねきのコンビニによつて飲み物をこおて、和茶で散々座り込んだけど、ここでもまた座り込んだ。『ありがとうございます』と女性店員の声が外まで聞こえいく。

そのたびにカオリン達の事を思い出したのはわいだけとちやうじやろな。

『光…どおしたん??お前らしくなくなかつたか??』

座り込んでまた沈黙つてのはもお耐えられなかつたんやろな…優馬はちびつとした疑問をわいにぶつけてきたつちゅうわけや。わいはなんも返事できんかつた。

何やでゆーたらええんや??

自分でもわからへんのや…

何でないな言い方してまつたんや…

キキに叩かれてもしやあないわな…

わいは優馬からの問い合わせも忘れて、ひたすらお天道様を眺めてぼーっと一人で考えとつた。

『優馬と同じで俺も全くわからんぞ??なんでお前…あんなに怒つたんや???』

今度は五右衛門……なんか返事せないかんつて思い

『戻りたかつたら戻つてええで。わいは別に自分らに付いて来いなんてゆーてへんしな。それにまだあいつらも帰つてへんやろ。』

最低最悪の返事や……心配してくれるのは分かっているんやけど……

少しの考える時間も無く、

『いや、俺はお前に付き合つぞ？？』

『二三事』

ヤツと笑つてわいに言い放つた。

わいも素直な気持ちを優馬達に伝えよつて思い、まず謝った。

「おのせいで自分らしさを
あらわすことを何よりも大事に

『俺らは全然良いけどさ。光…お前の身勝手な怒りであんな事言つ

『たなら皆に謝つた方が良いぞ。』

よ。二十九年九月一日
さすがに現田さん、一
あんが風にい
かがり作道方さへ

優馬達の本音…「ワイを思つての言葉に涙が噴出しそうだつたが、歯

を食いしばって堪えた。

と、とったこ【ふああ】つとアグビしたふりで、マジ泣きだけは

ばれない用...下手に工夫したけど...

『泣くな』『うそだ』『うそだ』『うそだ』

ボタボタと涙だけ落とした。

今になつて、キキに叩かれた頬が痛む。

その痛みに比例して、心臓を氷の手で握られたように、脳が苦しくなる。

気持ちを落ち着かせるために、深呼吸した。

『大丈夫か！？』

『おうおうー、わいはもお 大丈夫や！！』

『そつか！なら安心やわ！！』

『ワンワン。泣き出したときは恥ずかしくてお前置いてどっか移動
しようかと思つたわ！！』

『わいなら即移動したで！？自分らの優しさのガ恥ずかしいわ！！
！』

ダハハハ！！

【久しぶりにわるたなあ。】 そない気がした。

笑いもおさまり、わいはさつき決めた事を話す事にした。

『なあちょっと聞いてくれや』

『ん？？』

『ここのさい何でも聞くから言つて良いぞ！！』

…サンキューな…

あのな…

カオリン達はまだ和茶で座り込みを続けていた。

私も羽チャンもカオリンも何も話さないまま時間だけが過ぎていた。

【光にあんな態度とつて、光がカオリンにとつた行動より酷かつた
かもしけないなあ…】

私は自分の行動と皆の行動を思い出し、自分の中で整理しようと思つた。

が…いつの間にか過去を振り返つっていたの。

私が初めて人を叩いたのは小学生の時だつたかな。
お母さんに買つてもらつたハンカチを確か…そうそう、隣に座つて
た勇次くんに貸してあげたんだよね。
なんで貸したんだっけ？？…あ…給食の時にお茶をこぼして…それ
でだ。

洗つて返してくれたのは、その日は一日かしてあげたんだよね。

でも…

次の日学校で返つてきたのは、私の貸してあげたハンカチじゃなかつたんだ。

え？？…これ違つよつて言つたら、勇次くんは…少しだけ時間かかるからそれまでコレ使つて…つて言つたよね。

私はてつきり…無くしたり、破れちゃつたりしたのを誤魔化されてるつて思つちやつてさ。

いきなり、明日返すつて言つたじやん…！…今すぐ返して…！…つて怒鳴りつけたよね…

勇次くんは一週間以内には返せるから待つてよ…つて言つたけど私はそれから一週間ずっと無視したよね…

消しゴム貸してつて話しかけられても…

勉強や当番の事を聞かれても…

私が口を開いたのは一週間後だつたよね…ハンカチ返せつて…

勇次くんは必死で謝つて、間に合わなかつたから…明日には絶対持つて来るつて言つたよね…

そんな勇次くんを無視して…泣きながら泥棒つて連呼して頭を何度も叩いちゃつたよね…

その日の夜…たしか12時過ぎくらいだつたかな…私は寝てて翌朝、聞かされただけだつたんだけど…

お母さん言つには…

深夜12くらいに一人で来て、

『本当にごめんなさい。キキさんのハンカチを借りてクリーニングに出して…それで…それで…』

ここで勇次くんは大泣きしちゃつたんだつてね…

『クリ・クリ…クリーニング屋が…ツク…昨日休みで…それ…その…その事をキキ…ツク…キキさんに伝えたら…』

ここでもお何を言つてるか分からなくなつて、お母さんがゆづくり

で良いから落ち着いてから話してって言つたんだよね…

『キキさんのハンカチを借りてクリーニングに出して、昨日返す予定だったんだけど、クリーニングのお店が昨日やってなくて、それで今日返す約束をまもれませんでした。ごめんなさい。それで、学校終わつてからクリーニングのお店に取りに行つて届けにきました。約束守れなくてごめんなさいってキキさんに伝えてください。』つて小学生とは思えないくらいしつかりした口調で言つたんだってね…

その事を聞いた時、沢山ないて、これからはもお絶対に人を叩いたりはしないって誓つたよね…

次の日学校で謝るつて思つたけど…学校ではもお話も何もしてくれなくなつたよね…

辛かつたよ…

光ともこんな形で終わつちやうのかな…

私の目から頬を通して泪が上から下へと流れ落ちた。

キキじおしたの！？

と心配してくれる羽ちゃんの言葉に、私の雨は小雨から…大雨になり…豪雨になつた。

なんであんな事しちやつたんだろい…

光が羽ちゃんやカオリンに酷い事言つたから光が悪いんだよ…

そおじゃないでしょ、私が光の意見も聞かずに叩いちやつたんじやん…

光がそれだけの事したんだから当然だよ…

光の頬を桃色に染めた凶器、私の右手が小刻みに震えだした。

自問自答から自己嫌悪し自縛…私を縛りつけ、動く事が出来なかつた。

遠くの方で誰かが私を呼んでる氣がする…

誰だろう…光かな…光…「めん…

『 キイキ！－！－！』

『 キキチャン！－！－！』

呼んでも一点だけ見つめて全く動かなかつた私の頭をポンッと羽チヤンが優しく叩いた。

ゆっくり振り向いた私の泪と鼻水でぐちゃぐちゃになつた顔を羽チヤンは優しくハンカチで拭いてくれた。

『 キキ大丈夫？？どうしたの？？』

『 キキチャン…』

羽チヤンとカオリンの優しい言葉に、今感じている私の全てを話す事にした。

あのね…

『光　of　past』（前書き）

あのな…と

光は優馬達に誰にも話した事の無かつた自分の過去を語りだした。

『光 of past』

あのな…わい…ほんまは…ほんまは関西弁やないねん。

『（（（はー?）））』

俺達が驚いたのは、じゃあ何故今は関西弁風に話しているのか…それを聞かされた時だつた。

まず最初に思ったのが、『フィクション!?!』

とても光がそんな体験をしてるとは今まで2年と数ヶ月つるんで来てそんな風に思つたことが…考えた事が無かつた。

…光は小学校3年生の時にいじめにあつていたらしい。まだ体も出来上がりつてない小学校3年生には…知識も少ない…限度を知らない…小学生の度が過ぎたいじめは過酷なもんだつたらしい。…それと…もう一つ…

1999年5月12日（水）

「おはよー!光!今日はサッカーせえへんか!?!」

『おう!…俺の学校のグラウンドに集合で良い!?!』

「よし!!決まりやな!!」

『じゃあ学校終わつてから、着替えて集合!…』

「OK!!来るのが遅かつた方がジュースおごりな!!」

この頃俺には、友人と呼べる存在が少なかつた。少ない友人の中でも一番仲が良かつたのは幸一だつた。

幸一の誕生日は12月25日、クリスマス!!血液型はB型。

光は…周りの子達は彼のことを、 錢形 と呼んでいた。当然苗字は錢形ではない。

ルパン三世の【とつあん】こと、錢形幸一。

名前と誕生日と血液型が一緒と言う理由で錢形つて呼ばれていた。

いかにも小学生がつけそつた典型的なあだ名である。

幸一もルパン三世は好きで、銭形と言つ愛称も気に入つていたので問題はない。

実を言うと銭形とは同じ小学校ではない。

家、5軒違いで北小学校と中小学校と別の小学校に通つていた。家が近所つて事は変わりなく、ゲームしたり、遊びに行つたりして、一人で遊ぶ時間が多かつた。

『力力力力！！お前の負け！！今日もジユースGET!!』

「カー！！光には、かなわんna…」

30戦2敗。俺は小学校の時から競いごとに強かつた。この日は銭形と二人だけのサッカー（つて言うのかな？）をして帰りに賭けのジユースをおごつてもらい、俺は友人が少なくたつて、こいつだけ居れば楽しくやつていける。

例え学校あんな事をされても…

俺は学校ではN○1の嫌われ者！！…とまではいかないがクラスでN○1は間違ひなく俺だろう。

銭形…別の小学校の奴とばつかり遊んでいた俺は自分と同じ学校の生徒との付き合いは良くなかった。

2年生まではそれなりに友達もチラホラいて、遊びの誘いも少なからずあつた。

が…3年生になり、誘いも減り…無くなり…誘つても遊んでもらえなくなり…クラスN○1になつた。

俺も頑固で、わざわざ遊んでくれだの、仲良くしてくれだの、媚びるのは願い下げだつた。

遊んでくれない奴はそれで良い、嫌う奴は好きに嫌えば良い。

そんな強がつてる俺をクラスの奴らはうざつたかつたんだろつた。

クラスからの集団無視…その次は…

私物を隠され、汚され、破壊され…その次は…その次は…

と、どんどんエスカレートし、物理的ダメージまで『えらわぬよつになつた。

「ん？自分その傷じゃないしたん？切れてへん？」

『力力力！！図工の時に切つてさー・めちゃめちゃ痛かったわー。銭形も切つてみるか！？』

「どないやねん！勧弁してや、せやかで氣いつけや！！大怪我したら洒落になれへんべ！？」

『お前に心配されるよつじや俺もまだまだやな……』

まだまだ、と言つよりこいつにだけは『いじめ』の事を知つてほしくなかつた。

心配かけたくなかつたし、いじめられてるつて分かつて、態度が変わつてくるかもしれないって言つのが怖かつた。

1999年10月25日（月）

とつといひの時が來た。来てしまつた。

一ヶ月くらい前から銭形は少しずつ、気が付きました。

「友達とプロレスでもしたんか？？」『おうーーまあ苦戦したけど

俺が勝つた！』「ダハハハ！！流石や」

「誰かと喧嘩したんか？？」『おうーーまあ苦戦したけど俺が勝つた！』「ダハハハ！！流石や」

・

・

・

「お前にじめられてる？？」『おうーーまあ苦戦してたけど俺が勝つ！』

いつもみたいな銭形の笑い声は聞けなかつた。

焦つた俺は必死で『いじめつて言つても…』と付け加えた。

『いじめって言つても、単なる嫌がらせだけで俺自身大して気にしないし、テレビとかでやつてるような残酷なもんじやないから全然平氣！…』

「いつから？？」

『え？？』

「いつからいじめにおおとるんや？」

『3年の頭くらい…長期戦やな！！ハハハ』

「だれや！？」

『ん？？』

「誰にやられとるんや？」

『まあクラスのやたら体格良い馬鹿な佐藤とか言つ奴が主犯だけど！！それがさ、名前同様、嫌がらせも砂糖みたいに甘くてさ。ぬるいぬるい。やり返したら俺のほが悪者になりかねんわ。力力力』
「ハハハハ！…なつたけないやつちやのぉ！…それでお前体中に傷おおてるんか！！』

『ハハハ！戦に傷は付きものだ！！』

俺はこの時に気が付くべきだったんだ。

まだ小学生の俺の思考回路では錢形の考えてることなんて分からなかつた。変な心配は解けたと思つたんだ。

『光 of past 2』

1999年11月25日（木）

この日は、体育館裏と言つたりな場所に呼ばれて、佐藤との不愉快な仲間に腹を数十発と顔を数発殴られた。

いじめって言つうか、もおサンドバックのおもちゃにてはれていた。佐藤達にとってコレは日常でもはや罪意識や罪悪感なんて無くなつていた。

罪悪感？？そんなものは最初から無かつたかもしれないな。

今日だつて友達を誘つよつに、『おうー！土屋、今日の放課後ちょっと体育館とまで来てくれ！…』つて誘われた。

田に日に増える傷に両親にもバレ、学校に講義や、いじめ主犯の親、本人にまで会いに行き、結果…悪化。

これ以上、口出しするのはやめてと俺が頼むと『転校するか？？』とまで話は進んでいた。

この状況は打破したかった…でも俺は転校だけはしたくなかった…
錢形…あいつだけは離れたくない。

1999年12月20日（月）

俺にとつて忘れられない日。

今日は5日後にひかえた錢形の誕生日プレゼントを買おうと、何故か錢形と一緒に出かけていた。

普通こおゆうのは本人以外の友達と行くべきだけさ…俺…この時期には友達なんて居なかつたしさ…

当然の様に錢形からも突っ込みが入つた。

「何で俺が自分の誕生日プレゼントと一緒に選ばなあかんねん…！」

『そおゆうなつて！－』

取り合えず、誘いには成功。とは言つても付いてくるだけで選ぶのは俺だ。

実を言つと、俺はもお 錢形にあげるプレゼントを決めていた。さうに実を言つともお 予約まで取つてあつた。

今日はその予約した品を取りに行くんだ。

『ちょっと口々で待つて！－』

とおもちゃ売り場の前で錢形を待たせて、俺は予約の品を取りにつた。

「6800円になります クリスマス用に包みますか？？… + 200円ですけど」

『お願いします！－包んでください！－…誕生日なんだけど…まあいいか。』

『かしこまりました では7000円になります 少々お待ちください』

軽く会釈した店員は、冬っぽい真っ白な質の良い紙にクリスマスリースのモコモコとしたシールを貼つて俺に渡した。

当然値段は知つていたが財布からお金を出す時に【やつぱり高え！】とちよつと躊躇した。

この時の俺のお小遣いは月2000円…単純計算でも3ヶ月分以上になる。お金を払う時に手が震えたよ…でも…俺のたつた一人の友達だって思つだけで全然お金なんか惜しくなくなつた。

『ありがとうございました またのご来店を心よりお待ちし…』

最後まで聞かずに錢形の所に急いで戻つた。

『ごめん！－お待たせ！－』

「おっせー…うおー！－でけえ！－何こおたん！－？」

『ハハハハ！－あと5日後な！－…つ…』

突然の吐き気、とつさに錢形にプレゼントの包みを渡し、トイレまで走つたが、店内で嘔吐…

輪を描くように人だかりができ、駆けつけた銭形が人の壁を突き破つて俺の背中をさすってくれた。

数秒後に店員も来て、医務室に運ばれた。

2・30分休憩したら、気分は大分良くなってきた。

『（（ご迷惑をおかけしました。））』

と深深と銭形一人で頭をさげ、医務室をでて、そのまま近所の公園に足を運んだ。

少し鎧付いたブランコに座わり、少しの間何も言わずに、揺れていった。

「どないしたん？？…マジで言ってくれや…」

と銭形が首の骨が折れたかのようにガクンといきなり頭を落とし、泣いた…

銭形：友達の泣く姿を見るのは…初めてだった。銭形が泣き止むのを待ち、話をした。

『ごめん…今日さ…給食の時こそ…』

「うん」

『俺が…俺が給食を貰いに行こうとしたら佐藤に呼ばれてさ…』

「うん」

『お前の給食はこれだから残さず食べたらもお殴らない…って言ってさ…』

「うん」

『俺に…1週間前の牛乳と、1週間前のパンを渡してきてさ…食べろッつて』

「…」

『パンなのにカチカチでさ…所々にカビがあつてさ…』

「…」

『でも口へえ食べれば…銭形にも心配かけなくてすむし…』

『ボケが…！…』

と言い銭形は立ち上がり、俺の前にきてブランコから突き落とし、フザケルナ…！…って一発だけ顔を殴った。

佐藤の10倍…100倍…1000倍…それくらい身に染まる一発だった。

銭形はそのままブランコに戻り、俺も泥を払いブランコに座った。

『銭形…』

「あ？？」

『親も…先生も…誰に助けを求めてもいじめは終わらなかつた…』

『聞いてへんで…』

『え？？』

『俺は聞いてないゆうてんねや。』

歯を食いしばって…食いしばって…食いしばって…必死で堪えていた涙が…

殴られても、変な物食わされても…地に付く事のなかつた涙が…俺の顔に2本の滝を作つて流れ落ちた。

目は開けられない…開けると滝の勢いを強めてしまつ…

呼吸もままならない状態で、銭形に言つた。

『銭形…助けて…』

『親とか先生に助けを求めるのもええけビセ…』

『うん…』

銭形はムスツとしていた表情を緩め、100満点の笑顔で…「まず俺やろが！」

目を開けてないのに、俺の顔に出来た滝は勢いを増し、枯れるまで止まらなくなつた。

心で何回ぐりぐり…泣つただろ？…ありがと？…「じめん…ありがと？…」

泣きじやくつてる俺を置いて銭形がどつかに行つたのに気が付いたのは、涙が止まり目を開けたときだつた。

『銭形…？？？』

俺は、充血した目をしつかり開け、枯れるほど声をだし、銭形を探し回つた。

ふと頭を過ぎたのは佐藤だった…もしかしたら…

俺は佐藤が不愉快な仲間とよく行つているゲームセンターに向かつた。

さつきと見た光景…人だかり…

ノーストップで走つてきて張り裂けそうな心臓…本当に張り裂けるかと思ったのは、人だかりの男の人人が移動した時だった。

嘘だろ…

銭形の遺体…

その横には佐藤の遺体…

周りには不愉快な仲間達がぐつたりとした佐藤の体を揺すつていた。

俺の2分後くらいに救急車が到着し、銭形と佐藤の遺体はタンカで車に乗せられ病院に運ばれた。

早すぎる展開にわけが分からなかつた俺は、救急車に書いてあつた森山総合病院 という病院をただただ目指した。

死んでないよな？？

おい！！銭形…死んで無いって言えよ！！！

心でずつと同じ事を質問しながら、1時間走り続けて要約病院に着いた。

『あツ…あツ…』

声が出ない…

「光ちゃん？？」

俺の名前を呼ばれ、振り向くと銭形のおばさんが居た。

「あらあら…ふたりして 怪・我 して…光ちゃんはまだ見てもらつてないの？？？」

俺にはおばさんの言葉で安心し、その場に崩れ落ちた。

病院独特の変なこおい、それに比べて真っ白な綺麗な布団は落ち着くにおいがする。

「こつまで寝とんねん！光！光！」

『銭形！……』

「シツ……」は病院やねんで？？もつと静かにせえ！あと…勝つ

たで！…』

『え？？』

「佐藤とか言つて、勝つたから、もお奴も手出しこんなぞ

！…』

『は？？』

「まあええわ！…けどありやお前では無理やわな！ハハハ」

銭形の話によると、俺をいじめた奴を全員しばらく予定だったらしいが、よく見てみると周りに5人も仲間がいて、流石に全員しばらくのは無理と判断し、佐藤とタイマンで勝つたらしい。

『…』

「なんや…礼も無しかいな…」しつ痛に思いましたんやで！？

…まあお前方が痛そつやがど…』

『…』

「足いたないか！？ボロボロやないかい。公園から裸足で口口まで走つてくるアホお前意外にこてるか！？」

『…』

「わおいえば、俺、アメリカいくねん。おつとうの仕事の都合でな

！…』

『…』

「アメリカにはこつこギャング仰山あるやろ！？あのテープにも勝てへんなんだらアメリカで何か生きてられへんで…自分の実力テストのついでに光の敵もとつとこいたつたんや…」

『…』

「泣いてばつかおらんと何かゆえや…！…』

『…』

『サンキューな…』

「まずそれやろがーー！」

『（（ハハハハハハハ））』

2000年6月11日（日）

結局あれ依頼いじめは本当に無くなり次第に友達も出来始めてきた。でも俺は錢形がアメリカに行く事になり転校する事にした。

この日は錢形がアメリカに行く日だった。

「ほな光！！！元氣でやれやーーーわいがアメリカから帰ってきた時…18歳になる…8年後には、そのだっさい標準語やのあて関西弁話せるよつにしどけや。」

『おうーーーむ前こそ英語ばっかりで日本語忘れんなよーーー。』

「ほなッ！！！」

『またッ！！』

もお永遠の別れってわけじゃないし、挨拶はいつもとかわらず、またな… で別れた。

光は部屋に入り…少し微笑み…

錢形は車に入り…少し微笑み…

絶対また会えます様に… と神様にお願いした。

『キキ of past』（前書き）

あのね……と

キキは羽樹達に誰にも話した事の無かった自分の過去を語りだした。

『キキ of past』

あのね…私…大切な人に…もお絶対…つて約束したんだ…

と…羽チャンとカオリンに勇次くんの話をした。

『それでキキは勇次くんとはそれつきりなの…?』

ん…

次の日学校で謝るつて思つたけど、何日か来なかつたね…学校に
来た時は…

『勇次くん…おはよ…最近学校に来てなつたね…』この前は…

「なあ…!達也…!今日一緒にゲームしない…?」

「おー!勇次じやん…!久しぶりやな…!いいね!いいね!勇次ん家
でやる…?」

「おうおう…!」

「あ…でも久しぶりに皆でサッカーしない…?お前が衰えて無いか
チェックするためだ…!」

「アハハ、ないない。サッカー俺上手すぎるからさ、もおやらない
事にしたんだわ…!」

「言つてる。じゃあゲームな…!」

「おう…」

⋮

私はハンカチのお礼と、理由も聞かずに叩いたり怒つたりして…め
んなさい…つて謝りたかった。

『ねえねえ。勇次くん』

「…」

『ねえねえ。』

「ごめん…授業中だし…後にしても…」

『あ…ごめん…』

休み時間になつても私との話を避けるように友達の所にいつちやつたんだよね。

私は、仲の良かつた友達に勇次くんに嫌われちやつた…つてついつい相談しちゃつた。

ちなみにコレは間違い。勇次くんに嫌われる様な事しちゃつた。つてのは正解。

友達は、私の味方してくれて勇次くんに色々言つて…余計に険悪な雰囲気になつたんだよね。

次の時間勇次くんからこきなり小むこ声で話しかけられた。

「何で俺が悪者になつてるの??.?.?.セツセキキさんと友達から色々言われたんだけど…」

『え??.』

「ハンカチはもお返したんだしさ…これ以上色々言つの辞めてくれない??.?.?.こんな事なら借りなければ良かつたよ…本氣でね」

『ごめん…』

勇次くんは、自分の机をガツと横にずらし、私の机と少しだけ間を空けた。

【もお話しかけるな…】 そお言われてる気がした。

次第に私は…

何でこんなに怒るんだろう??.?.?

そもそも、貸したものを返してつて言つのは間違つてる事なの??.?.?.自分が返すつて言つた日に学校に持つてこなくて私が怒つて叩いた

りしても、持つてこなかつた悪いんぢやないの？？

大体、クリーニングつて意味わかんない……たががハンカチでさ…
根本的に捻くれてるんだよ…

私こそこんな人にハンカチ何て貸すんぢやなかつた…

友達に色々思つたことをぶちまけていた。勇次くんが近くに居ようと関係なく…

1週間くらいたち、私はもお勇次くんの事何てじおでも良かつた。
どおでも良いを通り越して隣の席なのがしんどくなつていた。

周りから…先生からも注意を受けるほど机を離したりしたんだ。人
が通れるくらいに…

『だつて、勇次くんの隣に居ると性格悪いのが移っちゃうもん！…』

『だつて、勇次くんの近くに居ると私まで約束破る子になっちゃう
もん！…』

『だつて、勇次くんが近寄るなつて最初に机はなしたんだもん！…』

だつて…だつて…だつて…だつて…

毎回の様に言い訳を考えては、でかい声でクラスに聞こえる様に言
い、顔を伏せて泣いたふりをした。

『だつて、あの子何か嫌だもん…』…友達と話してゐる時だつた。

勇次くんの友達が来て、呼ばれた。

「お前に勇次が何かしたのか？？借りたハンカチだつて返しただろ
？？少し遅れたらいで…自分のやつた事は棚に上げてさ…喚くな
よ。お前男子の間ではマジで性格悪いつて有名だぞ。今俺がこおや
つて話してるだけで俺が嫌われかねないくらいにな…これ以上勇次

の事悪く言つたらお前の事も言つからな、俺はお前みたいに嘘じやなくて本当の事を…じゃつ』

一方的に言われ、私が反論する時間も『えてくれなかつた。

【自分のやつた事は棚に上げてさ…喚くなよ。】『レだけはまつきりと聞き取れた。と言うか頭から離れなかつた。

…私のしたこと…?…なにそれ…?

…ああ返すのが遅かつたから叩いた事か…

…もしかしたら、最近色々言つてる事かな…?

…どつちにしても、別に良いや…

この時の気持ちはあまり覚えてないけど…多分こんな感じで自分に非は無いって思つていたことは絶対だよね。

…でも、やつぱり何か気になる…もし私が悪いなら反省しないこと…なんて事はこれっぽちも思つてなかつた。

…そんなくだらない事…?…つてその位なり別に言いふらしてくれて良いよ…!…つと言つ返してやりたかった。

私は、子悪魔の形相でさつきの昼休み時間に話した松田くんに直接聞きにいった。

『私のした事つて酷い事だつたの…?…んなわけないよね。

『私全然自分に心当たり無くて…』 どおせ叩いたとかでしょ…?

『もし、私が悪いなら謝らないといけない…』 謝る理由なんて無いけどね

『だから教えて…!…!…松田君や勇次くんに謝るために。』 あんたや勇次くんをもつと陥れるために。

『ちょっと来い…』

『うん…』

昼休みの図書館…殆どの生徒がグラウンドにボールを持って遊びに出る時間帯。

図書室には、私立の中学校にむけて勉強している高学年の先輩が3人と図書担当の人が2人居るだけだった。

静かで、古本の匂いがして、中には鼻がツンとくるような酸っぱい本のエリアもあった。

「これは俺と勇次しか知らない事で先生も知らない。んで勇次はお前にはつていうか誰にも言うなつて言つてる。」

『ふうん。』 叩いた事や暴言を言つた事なら皆知つてると思つんだけど…

「さつときは皆に言つふらすつて言つたけど…出来れば俺も言つたくないんだよ…」

『で、内容はなに？？？』 はやくいつてよね

「お前、勇次を前叩いたろ…」

『うん。勇次くんが約束守つてくれなかつたからね…あのハンカチ私にとつて凄い大切なハンカチだつたし…それで…』

ふつ。やっぱり叩いた事じやん。あー、心配して損した。無いとは思つてたけど、弱み握られたら嫌だつたし…

『うんうん。わかるよ。勇次も俺もお前に悪意が合つたわけじゃないつて分かつてるから、誰にも言わなかつたんだよ。勇次がもお大好きなサッカー出来なくなつたつて事…』

『え！？』 え！？

心の声がそのまま口に出た。

『キキ of past 2』（前書き）

勇次くんの友達、松田君によって衝撃的な事実を聞かされ、困惑しているキキ。

「嘘じやねーよ。アイツお前に叩かれて尻餅ついた時に足首ひねったんよ。それだけなら捻挫くらいですんだんだけど…あのアホ我慢してさ、その場で痛いって保健室でも病院でも行けばよかつたんだけど…それでは、あいつ…お前との約束守るためにお前の家に3時間かけて行つたんだわ、親の帰り待つてたらクリーニング店閉まって本当に約束破る事になるからな。それで次の日、異常に腫れてさ。流石に母さんと病院行つたって言つてたよ。そしたら、勒帯切れで、本当に昨日は歩けたんですか！？って医者も驚いてたらしい。それで少しすれば治りますが…スポーツは無理ですね。特にサッカーやラグビーそー言つた類のものは絶対やめてくださいって言われたんだつてさ。…」

この後も昼休み中、松田くんの話は続いたけど、全く覚えてない。話してた最中に、本当に泣き出しちゃって…

どうすれば良いのか全く分からなくなつて…

私は、この日の放課後、勇次くんを呼び出した。恐喝とかじやなく、勿論話し合つたためにね。

当然の様に勇次くんは拒否反応をみせたけど、お願ひ…つと何度も頼んで、渋々OKをもらつたんだよね。

そして放課後。勇次くんの手を引き昼休みに松田君と話した図書室にむかつた。

「いきなり、なに！？悪口とか嫌がらせならソロソロ辞めてほしいんだけど…」

『本当にごめん！！！！』 ただ謝つた。理由も何もないわざ先にまづ謝つた。頭を深く下げる。

「え！？」 私からの久しぶりの謝罪の言葉に勇次くんは凄い驚いてたよね。

『今までの嫌がらせだと悪口、あれは勇次くんにね嫌われたって思つて、それで…何で謝りたいのに無視するんだろ？…なんで…なんで…って考へてるうちにね、悪い方にばっかり考へちゃつて…』

「言い訳したいの？？」

勇次くんの目は凍りついたように冷たく、見てるだけで震えて泣き出しそうだった。

『違う！…言い訳してるように聞こえたならごめん。今日松田君と話して…』

冷め切つた目で私をじっと見て、「でつー？」。

真つ黒な尖つた目からは怒りが感じられる。

今更なんだ…？？

松田から聞いたから同情か？？

散々、人を「ミみたいに扱つて許してほしい…ふざけるな…

そお返事が返つてきそうで怖かった…でも…

『もお大好きなサッカーできないんだつてね…全部聞いたよ。松田君は言えないって言つてたけど私が強引に…』

「君はいつもそおだね。嫌がる相手を強引に…今だつて」

『…』

「はあ…なんで泣くのかな？？泣きたいのは俺だよ…」

『せうだよね…』

「もお良いよ、許してあげる。」

『えー…』

「悪口とかを嫌がらせした事はもお良いよ。これからしないなら、過ぎたことだしさ。」

1ヶ月ぶりくらいに勇次くんの笑顔を見た気がした。作り笑いかもしれない…でも…足の事は…許してくれるはずないよね…

『ありがと…もお絶対しない…』

自己弁解するわけじゃないけど、元々私は、勇次くんの事を悪く思つてなかつた。というより、無視されてムカついてた。ただそれだけだつた。

話したい…仲良くしたい…その気持ちが全然伝わらなくて気持ちが分かつてもらえないくて…上手く行かない事にイライラしてた。

本当に馬鹿な子だよね。今、昔の私に話しかけるなら、あなたのイライラは勇次くんの事が好きだからなんだよつて伝えたのになあ。「じゃあこれからは仲良くしような。」

その言葉について私は聞いてしまつた。

『でも、足の事は許してくれてないのに??仲良くしてくれるの??』

「え??」

『足怪我したから、無視とかしてたんだよね??』

「うう…」

『はじめから、足が原因で無視してたつて分かつてたら…』

『嫌がらせとかしなかつたつて??それってまた言い訳??』

『違う…』

「嘘嘘」と本田2回目の笑顔をくれた、作り笑いじゃない…と思つ。「俺、キキさんの事好きだつたの。話しかけられるたびに、あせつてさ…それが原因で無視してるように見えちゃつたのかも…」

『何言つてんの??』本気で意味が分からなかつた。

「…まあ良いや…でも足が原因で無視とか冷たくしたわけじゃないから…」

『でも…好きだつたら、何で机はなしたり…冷たく接したりしたの??嫌いだからおしたんじょ??』

「しるか…」

『…』

「俺は…キキさんのせいできなくなつたつて思つてないから、その事ではキキさんに対して謝つてほしいとか思つてない。松田に口止めしたのも…何ていうか…ね…心配かけたくなかったん

だよ……それだけ。』

『和輪羽私も勇次くんの事好きだよ……』

「意味不明……それこそ、え”？？？でしょ……それこそ……好きだつたら、何で机はなしたり……冷たく接したりしたの？？嫌いだからそおしたんでしょう？？つてそのまま返したくなるわ……」

『同感。』

「アハハハハハ』

『アハツ』

お互い意味不明すぎて笑えてきた。でもその意味不明なおかげで私たちは打ち解ける事が出来た。

小学生つて……単純だよね……つきさつきまでは犬猿だったのに。

「でも、もお人を叩いたりしたらいかんよ？？？」

『うん 分かつた分かつた』

『真剣に聞けよ！――！』

私は凄いびっくりした。親父の雷……その意味が分かつた気がした。「人を傷つけると相手も、自分も傷つく……だからさ……そんなこともおしないつて約束して。』

『うん・・・』

『絶対だよ？？？』

『絶対！――』

勇次くんとはこれ以上、仲良くなる事はなかつた。勿論嫌がらせはすることとは無かつたけど……

今思うと私の小学校時代つてミスばっかりだな……

初恋の子を傷つけ……将来を奪い……それで自分を傷つけ……

でも……良いんだ……最後に太陽に向かつて笑う向日葵みたいな笑顔を私にくれたもんね

ありがとう...そして約束をまもれなくて」「みんなさい...」

『合縁キキ縁』

『キキ……若干痴話話に聞こえてつまらない部分もあつたけど……それは置いておいて……自分も悪いって思つてゐるならさ……光に謝る……』

『ウンウン、あたしのために怒つてくれたのは嬉しいけど……それでキキちゃんが悲しんでたらやつぱり辛いよ……ちゃんと謝れば天国の勇次くんも許してくれるよ……絶対……』

キキはまだ少し残つてゐる涙を拭き、少し笑つて答えた。

『アハハ。そだね。また同じ間違えを何回も繰り返しちゃダメだよね。叩いてギクシャクしたら小学校の頃と何も変わつてない事になつちゃうしね……それと……勇次くんは生きてるから……ねッ！……』田は鋭くカオリンに向けられた。

『ギャ。『じめん！』』

『じゃあ。光たちでも探しに行こうか。』

『うん』

⋮

『えー？ つてことはお前、今日じゃねえのー？ 錢形とか言つ奴が帰国する田つて……』

『せやで……』

『おーおいーー良いくのかよ……会わなくてヤ。』

『いや、わいもな……幸一君、明日帰つてくるよ、つていきなり昨日の夜才カンから聞かされてな、一瞬……幸一って誰やー？ 思つたけどまあすぐ思い出したわ。せやかてワイにとつては自分らも大切な親友やんな……』

『だからか……』

要約、光があんなにもイライラしてたか分かった……

『せや、ワイとしては今日の泊まりが無いなら無いではよお帰つて

な、銭形に会いに行きたかったん。でも…カオリンには酷い事言うてこのままじゃあかんつて思つてる。会いに行くしてもその後やなつて…』

『その後の説明は俺達がしとくから、謝つたらすぐ行つてやれ！』

『おひー……ほんまおおきに……』

まだ和茶に居ると良いな…と自転車を走らせ、和茶へと向かつた。

：

少し風も出てきて雲行きも暗くなつてきた。と思つたら直後、額にポツと1滴落ちた。

『うへ～雨降つてきだぞ…』

『え！？マジ？？』

『やつかいな雨やの～もあちよびつと空氣よめや。』

ポツポツと小雨の中和茶に少し服を濡らしたが、自転車で10分で着いた。

『キキイ、羽樹～、カオリーン』

俺と五右衛門は、早いとこ光を親友に合わせてあげたい一心で一生懸命探した。

和茶には居ない…取り合えずTEしてみても…トゥルルルルトゥルルル…となり続けるだけで出なかつた。

『電話で一へんつて事は移動中やで…チャリンゴは置いてあるけど、ここにあらんのは間違いない。周り探すで…』

和茶の周りの道や、近くの店にも行つたりした…が何処にも居なかつた。

結局和茶で立ち往生するしかない状態に、光はまたイライラと頭に血が上りだした。

ちょっと頭冷やすと言い、雨にうたれに屋根の外に出て、和茶の前の道でもしかしたらソロソロ戻るかもしれないと左右見ながら立っていた。

俺も五右衛門も…光に何度もお前は先に帰つて良いぞつて言つたけど、光はそれはあかん！！！の一点張りだった。

ガチャ。

！！！

『優馬！？と五右衛門！？』

和茶の中から羽樹が出てきた。電氣も付いてなかつたし、居る事なんて想像もつかなかつた。

とてつもなく驚き腰を抜かしそうだつた。あまりの驚きに声が出なかつた…

『羽樹！？マジでビビッたわ…中にいたん！？』

『うんうん。光は！？』

俺は親指をクイッと光のほうに向け、『あそこで女子の帰りを待つてる』と伝えた。

『え！？びしょ濡れじやん。』

『悪いけどさ…裏からでて今帰つてきたみたいに光の所に行つてやつてくれない！？』

『うん…カオリンとキキも連れて出るね…』

『サンキュー…』

数分後、光が嬉しそうに俺たちを呼んだ。

『優馬！？五右衛門！？はよ来い！？』

羽樹達だな…と五右衛門を顔をあわせ笑い、すぐに駆けつけた。

『帰つてきたか！？』

『おうおう！？キキ！？羽樹！？カオリン！？遅いやないかい！？ホンマ心配したで！…濡れてるやないか…』

『光…』

キキは泣き出し、俺も貰い泣きしそうだつた。

五右衛門が、たまたまをよそおい、和茶が空いてる事に気が付いた

…ふりをした。

『うお！…鍵…かかるねえやん！…』

『…』

下手すぎる…やばいなこれは…

『マジか！…五右衛門やるやないかい！…』一矢つひとセホンマ
たよりになるわー！…』

『…』

『…』

取り合えず俺達も、喜んだふりをして、皆中に入った。

『まずゆわせてくれ、皆…ホンマすまんかった。ワイが取り乱して、
力オリンに酷い事ゆーてもおた。羽樹やキキにも…それに優馬や五
右衛門にもえらい迷惑かけてもおた。ホンマすまんかった。』

光はグツと目を閉じ、頭を上げなかつた。光に続いて声を出したの
はキキだつた。

『私もごめんなさい。特に光にはあやまらいといけないって思つて
る。だから光…顔上げて…』

キキの涙声に、光はゆっくりと頭を上げ、キキを見た。と同時にキ
キは光の胸に飛び込み、もお絶対離さない…つてくらい強くギュ
ツと腰に手をまわし…『「めん…光…」めんね…本当に「めん…』
と泣いているキキに光は動搖していた。

『おいおい…どないしたん！…大丈夫か？…なんでワイにあやま
んねん！…キキは何も悪い事してないやないか？…謝るのはワ
イのほうやで！…』

『私…私…光を叩いた…』

『はあ？…そんなもん当たり前のことやないかい！…んな事で

あやまらんでええ！－』

『光…良いから聞いてあげて…』と羽樹に言われ、俺も五右衛門も光も訳の分からぬまま、キキの話を聞いた。

『あのね…』

キキは俺達にも昔の事を話してくれた。

『そかそか…でもな…ワイを叩いたのは正解やで？？…そのまま見てみぬふりしどたら…それこそカオリンにあやまらなあかんで？…コレは一方的に暴力ふるつとるんとちやう…せやから、やつぱりあやまらんでもええ。なつ。』

と光にしては珍しく優しい言葉をかけてやり、キキの頭をなでていた。

【ん！…】

一瞬光と目が合い、ニヤリと笑った気がした…まあ氣のせいだろ？…この時、五右衛門も俺と同じ事を考えていた。

光は、じゃあ俺の話も聞いてくれ…と俺と五右衛門に話した事をそのまま包み隠さず全部話した。

いじめられてた事も…親友がアメリカに行き、今日戻ってきている事も…

『せやから、悪いけど、わいはソロソロ銭形に会いにおもてる。皆にはホンマすまん気持ちでいっぱいや…でも…ホンマに大切な奴何や…分かってほしい…』

当然、誰も反対はしなかった。むしろ早く会いに行つてあげてって気持ちがでいっぱいだった。

『おおきにー！ホンマありがとうな。じゃあわいは行くわ。』

『おう、銭形にヨロシクなー…』

『僕はもおいじめられてないよつと言つとけよー…』

『力力力、キキ…ええか！？ワイソロソロいくでー…？』

と光が言つと、

和茶に入つてから約30分ぐらこずっと抱きついていた事に今の今まで気が付いてなかつたらしく、

キキは今日の夕田の様に顔を真っ赤にして、凄い勢いで離れた。

『い…いつだらしゃい。』

『（（（アハハハハハ）））』

キキの慌てようと、片言の日本語に、キキ意外は皆笑えた。

『ほな、また明日な…。』

『おう…。』

『うん…。』

光はびしょびしょのまま外にでて、ドアをガタンと閉め…ガチャつとまた開け、一言だけ言つてまたガタンと閉めた。

『ちなみに…キキは〇カツブ！…ワイの好みやで…。』

『Eyes of the heart』

光がとんでもない事を言い残し、キキを落ち着かせるのに20分ほどかかりつた。

『キキチャンつて光の事が好きだつたんだね？全然気が付かなかつた』

『え！？』

『マジ！？』

流石にカオリンの読み間違いでしょ……つてか読み間違いであつてくれ……と思つたが

『ないないないない！……好きじやない！……』

結構冷静なキキの慌てようによつて4人とも確信した。俺と五右衛門にとつてはとても残念な確信である。

『へーキキが光ねえええ』

羽樹にいたつてはもおキキの口から聞いたよつた言い方でキキをからかいだした。

『羽チヤンまで……違つてば……さつきは……その……ねッ……あれだよ……あの……その……』

『アハハハ！！キキチャンやっぱり光の事好きなんだー』

『かーなんで光なのかね……俺でしょ！？』

皆で決めつけ、キキの顔はまたもや熟れ熟れの桃みたいにピンク色にほてつていた。

『何やねん！！キキ、わいのことすきやないんかい……ワイは『』つ キキの事すきやのになあ……』

キキはビクつとおろしていいた頭を上げ、『ちが……』……

声の主は鼻をつまんだ五右衛門だった。関西弁風に光の真似をしていた。

ヒューヒューと五右衛門がうなり、キキの照れていて可愛いかったピンク色の顔は、溶岩の「じ」とく赤に変わり、今にも噴火しそうだった。

『まつ！！いいんぢやない！？』

『うんうん！！あたしも光に気が無かつたら応援するよ』

『しゃーねーなあ。気に入らんけど正直に言えれば…』

『うひも、キキの味方だよ』

噴火しそびれた、キキは大きなため息…一息をつき、話し出した。

『本当に…すきとかじやない…と思つ…けど…』

『けど！？』

『けどお！？』

『光の事は…光を叩いた時からずつと頭から離れない…これって好きッてことなの！？たんに光を叩いた事で大切な友達が居なくなるつて思つただけじゃないかな？？』

微妙！！！凄い微妙な感じだつた。キキの言い分も一理あるし、でも…あの30分にわたる抱きつきシーンは…いつたい！？

『ふう～～～～ん』

俺のちよつとした揺るぎとは裏腹に羽樹にはまだ確信の気持ちがあるようだ。

『友達ねえ…光！！！ギュッ！？』

五右衛門もやつぱり、あの抱きつきシーンが気になるようだ。

『えーだつてキキチャン自分で光好きつて言つてたじやん？？』

『え～！？』

『何イ！？』

『わあお！』

『光たちを探しに行つて、雨降つてきたから、ココに戻つてきたじやんね。それからキキちゃんと羽チャンは少し疲れて寝ちゃつた時、あたしは疲れなくて寝転んでたけど起きてたの。それで…キキちゃんは寝言？かな？？それで光…光…ってずっと言つてたから、キキちゃんは光が大好きだね？？って寝てるキキチャンに聞いたら…うん…好きつて言つてたよ』

カオリンのお世辞でも上手いとは言えない演説が終わり、俺達はマジでキキは寝言で言つていたものだと思つた…がこれはカオリンの大嘘。

カオリンのカマ賭けにまんまとめられ、キキは落ち着かない様子だつたけど…認めた。

昨日までは好意をもつてなかつたとしても、今日は誰の目から見ても好意むき出しだったしな…實に不愉快極まりない。

雨は大降りになり、たまに雷が閃光と豪快な音が聞こえた。風もそれなりに風力があり、窓から見る雨は斜めに降つていた。

自然の音意外何も聞こえない空間にキキの声はやけに響いた。

『自分でも…少し不思議だけど…多分…好きなの…かな…』

途切れ途切れの言葉には何となく重みが感じられた。

少し、空気が重くなつたところにキキは『でもね…』と付け加えた。

『でもね…昔、付き合つてた子達とは何か、違う感情なの…楽しいから一緒に居たいとか…そんなんじゃなくて…ホントわかんないけど…』

戸惑うキキに自分でも不思議だつたが奥過ぎる…そしてべた過ぎる言葉をかけてしまった。

『それが恋なんじゃないのかな…』

人が人を好きになる。恋をする…

俺は昔、本気で好きになった女性が居た。勿論その人とは親密な関係にはならなかつたが…俺の一方的な片思つて奴だ。

当時俺は高校1年だつた。五右衛門や光だつて知つてゐるし、相談もしたりした。

自分の事なのに、何せ本気で人を好きになると言う事は初めての事だつたし、良く分からなかつた。

その子が他の子と仲良くしてると、胸が苦しくなつた。

俺に話しかけて来た時は目まいがするくらいで、会話は片言、相手の顔なんて見れたもんじやない。

一人で居る時は特に思い出していた。たつた一回の会話を何千回も…

この時はコレが【恋】だという事は全く気が付いてなく、光と五右衛門に教えられて要約気が付いたくらいだ。

ネット、携帯、雑誌、TV、時には国語辞典で【恋愛】、【恋】、【】などの項目を調べたりして、自分の気持ちが理解できた気がした。今でも忘れられないのはロミオとジュリエットで有名なウィリアム・シェイクスピアの言葉だ。

【恋は田で見ずに心で見る。だから絵にかいたキューピッドは翼を持つが畠田で、恋の神の心には分別がまつたくなく、翼があつて目ないことは、せつかちで無鉄砲なしるしだ。そして、選択がいつも間違いかだから、恋の神は子供だといわれている。】

難しく…深い言葉は、頭の悪い俺には殆どが理解できなかつた…でも…恋は目で見ずに心で見る。この一言は凄く理解…そして共感できた。

他人の恋なら目でも見ることができる…

イチャイチャと肩を寄せ合い幸せそうにしているカップル…

友人が好きな人を前にカチカチになつてゐる様子…

知り合いじゃなくとも、恋をしてるなつて目で見れば何となくわかる。

けど…自分はどうだらう…

好きな人にに対する苦しいような思い…

好きな人が話しかけてくれる嬉しさ、緊張、戸惑い…

告白し交際できるようになつた時の、喜び、幸福…

振られた時の、悲しさ、寂しさ、切なさ…

自分の気持ち、思い、感情、それは他人には目で見えても自分の目には映らない。

だから恋は目で見るんじやなく心で見るんだつて彼に共感できた。頭の悪い俺だ…天才的な彼の考えとは全く違つてゐかもしけないけど…自分なりの解釈で俺は俺の中でそう信じてゐる。

恋は目で見ずに心で見る…

『Star Festival』

『七夕とゆつたら、織姫と彦星の伝説が有名やねんな。』
『うんうん』

『織姫星はこじと座の「ベガ」で、夏彦星はわし座の「アルタイル」の事や。』

『へえ全然知らんかった…』

『ちなみに2つの星は15光年離れとるんやで…!』

『15光年つてなに!?』

『光の速さでも15年かかるつて事や…!』

『お前の足で15年!?』

『どないやねん!! 五右衛門はまだましどれ!!』

『1年に1回、会こに行くのも大変な距離やね…』

『せやでえ。』

…』

『7月7日に降る雨を「催涙雨」^{れいりゅう}とゆつてな、織姫と彦星が流す雨涙…と云えられどるんや』

『毎年毎年会えるとは限らないもんね…光の速さでも15年に1回

…』

『何か…切ないなあ』

『近年の台湾ではな、七夕をバレンタインデーと同様に男女がプレゼントを交換やる日とされてるんやで!! 織姫と彦星の神話を考えると、バレンタインデー以上にプレゼント交換に適した記念日と思うねんけどな…』

『じやあ今日は既でプレゼント交換だね』

『え』――』

そうー今日は7月7日ーー七夕ーー最高気温が…
25 以上の場合は夏日…
30 以上の場合は真夏日…
35 以上の場合は猛暑日…
一日の最低気温が25 を下回らない場合は熱帯夜と言つ知識を最近手に入れた。

そして今日は猛暑日… 気温35 以上のエアコン無しでは生きられないような暑さだった… 追い討ちをかけるかの「」とく、雨まで降り出した…

今は、学校が終わって、いつもの6人で和茶に涼みに来て七夕の話をしていた所なんだよね。

光の話によると、七夕に降る雨は催涙雨とか言つてたけど… 本当なのかな…
この雨が… 織姫、彦星の涙だと何だか… ねえ。

俺達は今から急遽プレゼント交換のために一人1000円までのプレゼントを用意する事になった。

この暑さ… そしてこの催涙雨… 今日だけは和茶でのんびりとしたかつた…
光の無駄すぎる濡縁と、カオリンの無邪気な乙女心のせいであは今、ショッピングモールに向かつて歩いている… 36 もある濡れた道を…

地面からは鼻に付くような匂い…
耳に付くグアグアと蛙の鳴く声…
頭にくる… 俺と相合傘している五右衛門…

『つーか何でお前傘ねーんだよーーー朝は傘持つてただろーー』

『いやあ、教室に忘れてさ、どおせ和茶に寄ると思つたから一本くらいい余分にあるかなつて…面倒ない…』

今回のプレゼント交換の買出しはペアで3組に分かれて行われた…あのバカップルに気を利かせてな。

バカップルと言うのは当然、光とキキだ。

結局キキが光に告白し、光も勿論OK…！

キキはめちゃめちゃ喜んでいたが、俺と五右衛門は100%OKだろつと思っていた。

『なんてつたつてめっちゃ可愛いもんな…』

『ああ。マジで光がうらやましいわ…キキなら性格もすんげー良いしな…』

と毎日の様に俺と五右衛門は愚痴をこぼしあい、今日もキキと光を話題にしながらショッピングモールへと向かった。

『ぐあ…涼しいな…』

『やべえ。マジ生き返るわあ』

歩く事30分…ショッピングモールに到着。俺は左半分、五右衛門は右半分、雨に濡れてTシャツの色が変色していた。

俺と五右衛門は自販機に直行し、取り合えず一服した。

『プレゼントつて…何を買えばいいんだ…?しかも1000円つて…』

俺は五右衛門の言葉になんて返事して良いのかわからず、『あ…』と軽く答えた。

『まあ取り合えず、俺雑貨売り場でも見てくるわ。30分後にまた口口集合な…!』

五右衛門は俺の返事を待たずさつと買い物に出かけた。ああ見て意外と買い物好きな乙女チックな所があるのが…まあいか。取り合えず俺は、もおプレゼントは決めてある。ビーサンこと、ビ

一チサンダル！！

時期、値段、手軽さ、どれをとっても完璧だ。

一つ言うならば、プレゼントは誰に送るのかはクジで決めるらしく、男にあげるのか女にあげるのかはまだ不明…

自分の名前を引いたら戻すというルールだったので、確立的に文物のビーサンを買つことにした。

『いらっしゃいませ！！』と女性店員に声をかけられた。

『ビーチサンダルは何処にありますか！？』

『彼女さんへのプレゼントですか！？』

『え…ええまあ』嘘をついた。

この店は女性物の靴類しか置いてなく、女性のペアが2組ほどとカツプルが1組居た。男だけできているのはどおやら俺だけみたいだ。女性店員は二三二と笑い、ビーサンのコーナーに案内してくれた。

『オススメとかつてありますか！？』

『そおですねえ。年齢にもよるんですけど、高校生くらいの方です
とこひからが一番売れてます』

『とんでもなく派手だつた…コレがビーサン！？』

花なのか、果物なのか良く分からぬい柄に、鼻緒には小さな薔薇の花が沢山ついていた…

【へえ…最近の女の子はこんなのはいてるんだ…】女性交際暦が乏しい俺には女の子の普段着を見る機会があまりなかつた。

【え…めちゃ高い…！ビーサンつて980円とかで売つてんじやないの！？】どの値札にも3980円とかかれており、色々な値札を見てみてもやつぱり3980円だつた。

女性店員はあれこれ、サンダルの説明をしてくる。彼女はどんな子ですか！？といには俺の架空の彼女の事まで質問してきた。

取り合えず、キキ、カオリン、羽樹を思い浮かべて、適当に答えた。

『えつと、皆大体身長は160くらいで体系は細身です、一人は髪の毛を染めてて、一人は黒です。』…何言つてんだ俺…

『え！？彼女さん…沢山いらっしゃるんですね…』と苦笑し、少し冷めた目で見られた。

『あ…いや、その、今の彼女は、一人です！…』…ありえない、死にたい…

『明るい感じの子です！？』

『あ。はい！…取り合えず全員に当てはまる質問で助かった…『これなんてどうでしょう！？』

女性店員に進められたのはさつきの一一番売れているものではなく、下地は白一色、鼻緒は黒と何ともシンプルな感じのビーサンだった。良く見るとヒールまでついている。産まれて初めてヒール付きビーチサンダルという物を見た。値段は勿論3980円…

【彼女のプレゼントって言つちやつたしな…】もしここで俺がもつと安いのありませんか！？何て聞いたら…

【えええ。彼女さんへのプレゼントなんですよね！…3980円もだせないんですか！…？】なんて心では思うに違いない…妄想…俺の悪い癖でもある。

【すいません、他の店も見てみます。彼女のプレゼントなもんで、色々選びたくて。アハハハハ】よしコレでいこう…！…

『あの…』

『あ！こちらになさいますか！？』

『あ…はい、それで。』

もお駄目だ…諦めよう…財布には4030円…なんとか買える。

【捨てるわけじゃないんだ！！大親友、もしくは大親友+大親友の彼女にあげるかもしないんだ！！そお考えるとたがが3980円じゃないか！？男ならビシッと！…】ポジティブに考えるのは俺のいいところでもあった。

『ありがとうございました またお越し下さいませ。』

【本当の彼女と一緒にきます】と云ふ、五右衛門との待ち合わせである自販機にもどった。

『Star Festival』

『おう……お前なにかつたん！？』

五右衛門はもお買い終わつて待つていた。

『あービーサンよビーサン。』

『え！？1000円以内で買えたん！？子供用じゃねーのそれ！…』
流石は五右衛門… 買い物好きなだけあつて最近のスリッパは100
0円では買えない事を知つていた。

『3980…』

『は！？』

『3980円した…』

『うッ…』

この、世間から見たら普通… 僕からしたら超高級のビーサンを買つ
ことになつた過程を話した。

『そ… そつか… まあ飲めや。』

『おう… さんきゅー。』

今俺にはジユースを買うお金がない… 財布をどれだけ振つても1
0円玉が5枚落ちてくるだけだ。

『ただいま～』

『優馬、五右衛門。遅かつたやんけ。』

『俺ら歩きで行つてたからわ…』

『めっちゃ遅いから心配したよー』

『わるいわるい。連絡入れればよかつたな。』

俺達が和茶に戻つた頃にはもおクジの準備などができるいて、今す
ぐにでも交換会が開始できる状態だつた。

『よつしゃー！ほな、みんな揃つた所で早速、順番にクジでも引き

ますか！！！！』

光の開始宣言に羽樹が待つてました！！と言わんばかりに拍手した。光が引いてもキキにあげれば良いし…五右衛門だけは引くな！！！と言つ思いでクジをの箱を見守つた。

出来れば…カオリン、羽樹、将来の彼女候補に引いてほしかつた。カオリン 羽樹 僕 キキ 光 五右衛門といつ順番だつた。五右衛門が最後で本当に助かつた。

『じゃあまずはあたしからだね』

【ひけー！！！優馬と書かれた紙を！！！】

カオリンは6枚しかない紙をグルグルとかき混ぜ、真剣に選んで、ターッと声を上げて引いた。

『はい！…ざんねーん。光です。その紙は煮るなり、焼くなり、捨てるなり、お好きにしてください』

『どないやねん！！！大切に保管しつかんかい！！』

羽樹の言葉に鋭く突つ込む、光を背にカオリンか本気で落ち込んでいた。

『おいおいおい…カオリちゃん…そないな顔せんといてくれや…かなしゅーてかなわん。』

俺も内心落ち込んでいた…カオリンは消えた…。

『ほいじゃあ、次はうちやね！！引きますよお』

【ひけー！！！優馬と書かれた紙を！！！】リサイクル発言…！

羽樹もカオリン同様、5枚となつた紙を真剣に選んでいた。ほい！と取り出した。

『力力力！！！コレこそ残念賞やないかい！！捨ててええで…！』

と言つ光の言葉に、俺は五右衛門か…と落ち込んだ。

『羽樹は優馬から、プレゼントをもろてな…！』

『なに！！！俺か！？』

羽樹の紙を自分の物の様に奪い取り、凝視した。

『ああ…神よ…あなた様は…私を見放しはしないで居てくれたのですね…ありがたや…ありがたや…』

『きもこつちゅーねん!!』

皆が引きまくる中五右衛門だけは良かつたなあと安堵の笑みを浮かべてくれた。

『光の言つ通り…コレは捨てた方が良いかも…』

『けしからん!!! ブラジャーと胸の間にでも挟んで大切に大切に、保管してくれいっ!!!!』 決まった…と思つたが…

俺の言葉に羽樹は本氣で捨てようとしたので、慌ててとめた。

『次は優馬だよ~』

『あー! 僕も貰えるのか!!!』 羽樹にあげる事の幸せをですっかりプレゼント交換会の趣面を忘れていた。

俺は何でも良いやつって感じで、一番上の紙をさつと引いた。

『なんと…コレは…当たりです!!! 羽樹ことつちから! のプレゼントです!!!!』

『((おおーーー))』

と皆、歓喜の声を上げていたが、ども考へても一番当たりは俺の紙だろ。と思つていた。

【まてよ…コレは…俺と羽樹のマンツーマン交換!!!!】

俺の中では催涙雨も晴天に晴れ上がつていた。

『イエーイ!!』 と数秒遅れて喜び、当然流された…

取り合えず全員引き終わった事で各自の紙を見せ合つた。ボードに書き込んだ。

カオリン 光

羽樹 優馬

優馬 羽樹

キキ 五右衛門

光 カオリン

五右衛門 キキ

なんとまあ。すげー結果になつた、各自が異性に上げると喜び…ま

さに七夕万歳つて気分だった。

『ほな、気になるプレゼント公開するでえ……まずはカオリン……わいのあげたものを……』

『これです……』

『（（うあ……ひで……））』

オロナミンの6本入りの奴……しかも一本飲んであるため正確には5本……

『キキ……あんたやつぱり光とは別れた方が良いんじや……』

『うん……考えてみる……』

『どないやねん……！確かに一本のんだんは謝る……せやかてそんな酷いもんやないとけやつか！？』

『……』

『すまん……カオリン……わいが悪かつた。どおしてもオロナミンのみたくて。よし……！氣を取り直して次のプレゼントの公表や……』
光は一刻も早く、自分のプレゼントの話題を変えたく、次の公表者羽樹にピンと右手を伸ばし、人差し指を向けた。

完全に空氣を沈んでいたが、俺としては結構良い空氣だつた。コレだけ落ちてくれれば普通でも目立つ俺のプレゼントをさらに引き立ててくれる。

『え……ッと。優馬からのプレゼントなんだけど……』【あれ……何があまり喜んでないような……氣のせいかな……】

『力力力力……あかんあかん……期待してたなら羽樹が悪いわ。優馬のプレゼントなんてワイのより酷いで……その辺で組んできた水道水でも渡されたか！？』
『んなわけねーだろ……羽樹、氣に入らなかつた！？』
『うーん。コレ優馬プレゼント間違えてないかな！？』
『え！？マジで！？』【あの店員……まさか、間違えて変な靴入れたりしてないよな……】

『ビーサンなんだけど、コレって他の子へのプレゼントやない！？』

『彼女とか！！』

『ないない。優馬に彼女なんておれへんで！？』

『うん！それが俺のプレゼント！！』

『えー？まじ！？』

さつきまで不安そうだった羽樹が雨の後の花の様に、輝きだした。

羽樹の反応にキキ、カオリン、光と、俺の渡した紙袋を覗き込んだ。

『（えー！…）』

『何コレ…めっちゃいいやん！…』

『いいなあ～オロナミンこと交換しない…？？』

『気に入ってくれた！？羽樹のサイズに合つてると良いけど。俺を選んでる最中にさ、織姫と彦星の気持ち考えててさ。それで、今日は雨できつと会えなくて泣いてるんだろうなって…だからさ…この行事もふざけてオロナミンとか買うのは酷いなって思つてさ…有り金4000円しかなかつたけど殆ど使い果たして、買ったんだけど。会えなくて泣いてる、一人の気持ち考えたら当然じゃないかな！？』

【やばい…かつこよすぎた…】

若干ナルシストな発言になつたけど、七夕って事もあるし、ロマンチストだと思つてくれるだらうと熱烈的に語つた。

『す、じ…』

とまず褒めてくれたのはカオリン、それに続いて羽樹、キキも褒めてくれた。羽樹にいたつてはクジで俺の名前を引いたことを本当に喜んでいるように感じた。俺の鼻はぐんぐん伸び、天狗状態になつていた。有頂天外だつかな…またまには良いよな。

次ぎ次ぎ…と光が不機嫌に言い放ち、俺は羽樹に貰つたものを皆に見せた。

羽樹から貰つたのは蝶の模様にスモークがかかつた小さいピンの香水だつた。

予算的に小さいのしか買えなかつたつ…と微笑んだ羽樹は普段から可愛いのだが今日は妙に可愛く感じた。

次ぎ！…次ぎ！…次ぎ！…と自分より下のプレゼントは無いのか…！と光は公表を急かした。

最後の五右衛門まで公表が終わり、結局光に劣る品は存在しなかつた。…当然といえば当然だな。

わいわいと意外と楽しかつたプレゼント交換会はアツと言ひ間だつたが、それなりに時間はたつておりもお20時半で外も暗くなつていた。

窓の外を見ると催涙雨もいつの間にか上がつていた。

『織姫ちゃんも泣き止んだね』とカオリンの言葉に皆頷き、俺達は帰宅の準備をして、和茶を一歩出た。

織姫の涙が星に変わり、流石は『七夕』と思えるほど星空だつた。『めっちゃ星でてるで…』

『うん』『だな！』『マジですげえな…』『おおおお』『すご

…』

丸い丸い月のと無数の星は、ついつい見とれてしまつほどの迫力と美しさがあつた。七夕といつたらやっぱり短冊に願い事だよねつと羽樹が言い出し、その場でノートに願い事を書き、和茶の庭にある細い木に掛けた。見た目はとても短冊とは言ひづらいけど、俺達にとっては立派な短冊だつた。

『なあ織姫たちって今日は会えたと思うか？？』

『会えなかつたから泣いてたんじやない？？？』

『だな。多分会えなかつたんだろ。』

『せやなあ。今日が晴天やつたら話は別やねんけどな……』

『催涙雨振つてたしね…』

『んー。でもセーーもしかしたら、無いと思つけど…』

『何やねん！-!じれつたい！-!はよゆわんかい！-!』

『俺の想像だけさ！-!もしかしたら今日は1-5年ぶつくらこに会えて嬉しくて泣いてたのかもしれないなつて思つてさ…-!…』

『（（…））』

『優馬もたまにはええ事ゆうな…-!…』

『（（（アハハハハハ）））』

皆も俺の意見に同感だつたみたいだ。と言つか、何か嬉しくて泣いたんだつて思つたかったのかもしれない。

七夕伝説が人の考えた伝説なら、やっぱり幸せであつてほしい…

『また、やううな-!Star Festival』

『アイノコクハク！？』

今日は8月1日。8（パ）1（イ）の日=牌の日……麻雀の日……あまり有名ではないため、ご存知で無い方も多数いるだろ？。日本では語呂合わせで の日と付いている日が沢山ある。

今日はそのうちの一つ麻雀の日だ！！

期末テストも無事ではなかつたが一応終わり、7月中に補習授業も受け、俺と五右衛門にとつては今日が夏休み初日と感じる。Summer vacation！！高校最後の夏休みを補習授業で潰した事には涙ができる…

いつもの田覚ましのセシトと解除し忘れた俺は、午前7時と言ひ驚異的な速さで田を覚ました。

ジイジイと鳴くセミは本当に耳に付く…セミ言ひ昆虫がもし、冬に鳴く昆虫だったらあの暑苦しいこと感じていふ鳴き声は、寒く感じるのだろうか…？？などとくだらない事を考えながら、再び眠つた。…があまりの暑さに一度寝は不可…！

起床5分で暇になつた俺は、手当たり次第電話してみた。

『おう……五右衛門……おきてたのか…？』

『寝む…じやつ』

ツーツーツーツー…

ツーツーツーツー…

『おう…光…暇か…？』

『暇や無いわボケ…！…寝る』

ツーツーツーツー…

『おう！…カオリン！…今何してんの…？』

『ん…誰え？…ムニヤムニヤ…』

『俺俺、優馬。メモリ入ってるだろ…？』

ツーッーツーツー…

『おう！…羽樹…切るな…！…』

『はあ…？』

『いや…起きから一晩、言いつと切られてたもん…』

『ふうん。で…？何…？』

やつと会話のリレーが続いたと思つたら羽樹はかなり不機嫌な様子…

『いや…忙しそうだな…またで良…』

『え…？別に忙しくないよ…！…勝手に決めないで…！…で…何か用…！…？』

『いや…暇かな…つて思つて…俺は暇だから…』

『で…？』

『その…ええ…と…羽樹も暇なら遊ばないかな…？…つて…他の奴ら寝てるみたいだし…』

『ふうん…！…要するに見事斷りられて、残りに残つた残飯のつちと遊びたいと言つわけ…！…』

『ちやうぢやう…！…メモリの上から順番にかけただけだから…！…それにキキにはまだかけてないし…！…最後ではないよ…！…』

『ふうん。そりゃキキは光の彼女だからそんなに簡単に誘わないでしょ…』

夏休み初日の午前7時から友達に怒られてる…マジで鬱になつそうだ…

『優馬…！…ちよつと聞いてる…？』

『うんうん…聞いてるよ』

『聞いてたら返事くらいしてよ…』つけぱり話して馬鹿みたいやん…うちも暇だから相手してあげる…1時間後に和茶！！またね…』

『え…？一時間後つて…』

ツーツーツーツー…

1時間後に和茶…家からだと自転車で20分かかる。要するに長くても40分で準備しなければならない…起きてすぐ電話を手当たり次第かけてる最中だつた俺は、まだパンツ一丁で寝起き同然…

残り時間30分で、風呂、歯磨き、準備…やばい…

意外にも俺は風呂が大好き。湯船でボーッとしたりするのがたまらなく好きだ。

しかし今日は湯船に入るどころか、お湯を入れることすら無理な状況だ…。

10分で風呂を出て、10分で髪を乾かし、3分で歯を磨き、10分で準備…

残り時間27分。何とか間に合つ安堵の息をつき、ほっと胸をなでおろした。

ゆっくりとは言つていられないが、それなりにのんびりと急ぐ事も無く普段のペースで自転車を走らせた。

和茶に近づくにつれ、羽樹がもあきていたことに気が付いた。

『おまたせえ～』

『5分前か…でも遅い…5分も待つたよ…』

『わるいわるい…』

どおやらまだ不機嫌のようだ…と言つか、俺は何しに来たんだ！？確かに暇だったから、羽樹には電話した。…が、あまりに不機嫌で話しなんて出来たんもんじやなかつた。

それに、羽樹と遊ぶって何して遊ぶんだ！？ こんな不機嫌な状態で…

俺は女の子と一入りで休日を過ごすなんてのはいまだかつて一度としてない！－

中学の時付き合つた子は居たけど、登下校や昼休みに少し話す程度だつたし…不機嫌な羽樹に対して何を話して言いか分からず黙つていた。

俺が、何を言つても気にさわつておせこひへ酷くビロ也被れるのが落ちだ…と考えた。

それは少しは効果を發揮したが、逆に無言過ぎるとイライラしだすのもで、羽樹は『なんで話さないの！－！－！？…クドクド…何か話してよ！－』とまあ20分以上は永遠に怒鳴り散らかしていた。とは言つものの、何を話して言いが分からぬ。ふと田に留まつたのは七夕にあげた、ビーサンだった。

『おー！ビーサン使つてくれてるんだ。何か嬉しいな』

満開の作り笑顔で羽樹に放つた。

『あッ、うん。』

俯きぢょっと恥ずかしそうに答えた。

『羽樹は俺の事どお思つてる！？』

話す話題も考え中だし、ちょっとした素朴な疑問を聞いてみた。

そもそも、女友達が居ないわけではないが、口口まで仲良くなつた女友達は羽樹、キキ、カオリンが初めてだつた。

単純に向こうが俺達の事をどお思つてるのか気になつた。
それにお互いの親友同士が付き合つてゐしな…。

『えッ！…何言つてるの！？ 何でいきなりそんな事聞くの！？』

…』

『んーちゅうと氣になつてや。』

『つひの答えは何か意味があるのー?』

『んつやあるやー...』

この時俺は...いや俺達はともでない勘違いをしていた。まあお互
いの心の会話はきつとこつながるだらう。ひどいにこなつそんな事聞くのー?・

『えー...もしかして優馬つてうちに氣があるのー?』

『んーちゅうと氣になつてや。』

【俺には良く怒るしさ、俺以外の4人と仲が良いから俺とも仕方な
くつるんだのかなって...まあこんな事言えないけど...】

『つひの答えは何か意味があるのー?』

【えー?もしかしてうちが好きだよって言つたら面白とかしてくる
のかな!ー?ー?ー?】

『んつやあるやー...』

【まあもし嫌いなら俺はなるべく羽樹とは関わらないこみついて...しな
いとな...残念だけど...】

とまあこんな感じだね。この後の会話で俺はハッとする所この会話
がずれているのでまとめて出した。

『ええと...その...んーと...』

【どおじょーーーこきなり過ぎるよーーそれに優馬はつひの事好き
なのかな!ー?】

『つへへ言へづらって事はやつぱつ俺の考え方中かな…』

【逆に歎かないわけ無いじやん…】

『あたりまえじやん…』

【逆に歎かないわけ無いじやん…】

『わっかかる…』

【当たり前なのかよ…】

『あのわ…逆に優馬はつちの事どうおもつてゐるの…?』

【取り合へず…優馬の考え方から…聞くから…聞かたいな】

『俺は、羽樹の事好きやを…?』

【あれ…?…羽樹も俺と同じ事で歎んでたのかな…?】

『え…?…わが本當…?』

【嘘でじょー?…からかってなこみやね…?】

『はー?…嘘なわけないやん…嫌いだつたら暇でも一回して遊びたい向でおもわねー』

【羽樹にしては珍しく神経質になつてゐるな…まあ俺は本当に嫌いじやないし、嘘は言つてなこはどな】

『わっかうだけ考え方せん…』

【…ひかじめびとーと鷹とーへばおはすのー?…わ】

『嫌でも流れ言へづらってことだらうな…』

『つさ…畏こね…もじ嫌なひそかれて…』

『嫌じやなー……優馬の事は好む……』

【やせ……言ひかけた……】

『オー……わつかーー良かつたあー……なんだ……早く言つてよ
駄目かと思つたやん……』

【ほお。お心や……】

『うーーうん……ヨロシクねー……』

【もお良こや……じおこでもなつりやべー……】

『おーーーーー宜しへーーーー』

【宜しへって何か不思議だけど……俺の中の誤解は解けたし……宜しへ
でも間違つてないか……】

『優馬が……彼氏かあ……何か不思議だなあ……』

【でも、何か楽しそう】

『うんうん。やつぱり不思議だよな……』

【つて……えええツーーーー今……彼氏とか言わなかつた……】

【?】

雲ひとつ無い晴天。

太陽で暑く眩しい和茶の庭。
7月にかけた短冊はマスターがゴミと勘違いし、いつの間にか捨てられていて、今は掛かってない。

変わりに2匹の小鳥が枝の上でイチャイチャしている。一羽が飛び立つともあ一羽も後を追うように飛び立つた。

『これからどうする！？

つい30分前までは怒り狂っていた羽樹も今では何か楽しそうに』
今日は天気が良くて気持ちい』だの『夏は皆で海行きたいね！…』
だのいつもの羽樹に戻っていた。で、今日はどうするのか…俺が聞
きたいところだ。

『んー…一つ聞いていい！？

『ん？？いいよ』

『今、俺は羽樹の彼氏なの！？

『え！？…ちがうの！？』

そうー俺は自分でも知らないうちに自分の口から羽樹に愛の告白と
やらをしていたらしく。

そおゆうことなら、あれだけ悩んでいたのも何となく分かる気がす
る。

嬉しくないのか！？と聞かれたらそりや嬉しい…とは言つもの…

『えつと…本当に俺が彼氏で良いの！？

『ええ！？何を今更…』

『んー。何か想像が付かなくてさ。だつて俺だよ！？俺が羽樹だよ

！？』

『うん。でー？』

『何か…羽樹ならもつと良い男だつて沢山寄つてくるんじゃないかな…つて…その…何だ…』

ブツブツと俺が一人で言つていると、クスクスと笑い、羽樹は『優馬と居ると楽しいし、うちがイライラしてる時でもちゃんと話は聞いてくれるし、何て言えば良いのか分からぬし…最初は戸惑つたけど…今は後悔しない…』

と言つてくれた。

無理…！今、俺が…『えっとね…何か勘違いしてるようにから言つけど…俺が好きって言つたのは友達としてで…コレからよろしくってのも…』何てナイフを突きつけられていても言えない…！

それに俺は羽樹に気が無いわけではない…羽樹は3人の中でも俺に一番近い気がした…と言つた気が合う…？

だから、俺にとつてはこの状況は美味し過ぎる…ありえない状況…

でも…本当に良いのかな…？

羽樹を可愛い高校生とする俺は精々ブルドック…クラス…釣り合わない…

友達としてワイワイ騒いでる時は緊張とか何もなかつたけど…

俺も知らないうちに彼女に…そんな事あるか…？

夢のようだ…夢の……よつ…？

ああ。

そつかコレはきっと夢だ…夢の中では幸せで起きたら現実に叩き落される、ゆわいる寝起き悪夢つてやつだ…ブツブツ…

ボカー！！

『いつて！！』

『もお！！何一人でブツブツ言つてるの！？』

『今、若干…頭部に刺激が走ったんだけど…俺はベットから落ちたのかな…』

『はア…？…ああ…先が思いやられるなあ…』

頭部の刺激…

不機嫌になる…現実ぽい羽樹の表情…

⋮

現実だ…！！

俺は羽樹の彼氏なんだ…！！

嬉しいような…嬉しいような…嬉しいような…嬉しいような…嬉しいんじやねえか…！！

でも…

『羽樹ッ…!!』

『はい…!!』

羽樹は俺の裏返った大きい声に、ビクッと背筋を伸ばした。

『俺には色々頼りない部分もあるし、ルックスだって良くない、頭だって光に劣るし、運動は五右衛門に劣る…何もとりえが無いって

言うと自虐的な言い方になるかも知れないけど……コレは事実、でも
もお一つ、誰にも負けない事実もある……コレから羽樹を大切に
思つて、1分でも多く笑顔で居られるように……色々楽しい思い出と
作りたいって思つ……それで……もし良かつたら……俺と付き合つて欲
しい……』

明らかに変な発言だけど、俺としてはトビおしても適当に付き合つ
のは嫌だつた。

羽樹に申し訳ない、知らないうちに彼氏になつてました。そんなの
人としてどうかと思つ。

だから……タイミング的には意味不明だけど、今を逃したらダラダラ
と彼氏気取りで付き合つことになりそつだつたから……
俺としては初めて、羽樹としては2回目の告白をした。

『え！？うん……いいよ サっき答えたつもりだつたんだけど……伝わ
つてなかつたかな！？アハハ』

当然つていつたら当然な結果かもしぬないが……
ちゃんと自分の意思で気持ちを伝え……それで彼女になつてくれると
言つ……スッキリした……それ以上に嬉しくて……嬉しくて……叫びたかっ
た。

2008年8月1日金曜日……午前10時22分……俺に高校生活で初
めての彼女が出来た……

俺達人間には、諦めなくちゃ……悟らなくてはいけない状況つてのが
ある……

どれだけ俺が人を愛したからってその人が必ずしも俺の所に来てく
れることなんて無い……むしろ好きな子……気になつてる子も……好きで

いてくれて、相思相愛つて言つパターンのが稀…

俺に欲しい物があつてそれが欲しいんだって願つて頑張つても…必ずしも俺の手に入るなんて事は無い…むしろ手に入らるケースのが稀…

そう。諦めは肝心。

無理なんだと考え、悟らなければならぬ…

行動せず後悔するより…行動して後悔するほうが良いと言つ事を聞く耳にする…

けど…

それは難しい…

それによつぱり失敗すれば自分が傷つく…苦しく…辛い…

だから、悟る…諦める…

俺は、心では羽樹が好きでも、無理だ…諦めるんだ…

今の状況もままならなくなるぞ…

友達で居られるだけでも幸運だよ…と考えていた。

でも…

俺の考えは間違つてた…

自分への自信のなさがそんな思考を生み出したんだ…

人生は何が起こるか分からぬ…

1時間前には想像も出来なかつた事が毎日の様に起つてゐる…

1時間前は友達と楽しく騒いでたサラリーマンも…一時間後は交通

事故を起こし、殺人犯になつてゐるかもしない…

1時間前は意識がなく植物状態だつた子が…一時間後には意識を取り戻し、親子で話しているかもしない…

1時間前は羽樹に怒鳴られ急いで準備し、自転車を転がしてた俺も今は…

うん。人生…何でも起こりうるだよな…

人生…と考えようとした時、むうっと膨れ上がつた顔と、開いているのか閉いてないのか分からぬいくらい細められた目ですつと見ている羽樹に気が付き、ドキつとした。

『妄想…してるでしょ…』

『してな…くもない…』

『えつちな事考えてたんでしょ…』

『アホか!!人生について…』

『ふうん…それにしても…あついねえ!!』

『だな…川でも行くか』

『賛成え』

『つてか…今朝はなんで不機嫌だつたの!?』

『…内緒…』

『EN 羽樹家』

暑い…もの凄く暑い…死んでしまうのではと思わせる程暑い…そんな中、俺は羽樹を荷台に乗せ川を田指した。

太陽の光が向かい風となり、セミの鳴き声は呪文に感じられ…俺の体力をドンドン奪つた…

しかし…！！！俺は背中に全神経を集中させた…死の淵から這い上ぐるために…

荷台に乗っている羽樹がギュッと抱きしめると…かすかに感じられる胸の膨らみ…全回復！！

まつ…！コレでこそ正常な男よ…！！！俺は決して変体じやないと、気合の入る下半身を言い聞かせ…川に着いた。

『川が…カラだ…』

『無いね…水…』

透き通つた水…丸い石が口ロ口ロと流れに逆らわず上流から下流へと転がつて…浅瀬には子供達がお父さん、お母さんと一緒に水を冷たがり遊んで…橋から飛び降り、スリルを楽しむ大学生…冷たい水を服をぬらしながらかけあう俺と羽樹…暑い日に冷たい水…それは…キラキラと太陽光を跳ね返す逆露天風呂…！！！

乾ききつて、100歳の老人でも田を凝らす事なく見える川底…急激の干上がりで、逃げ遅れた魚の死骸…それを残酷に突付く鳥の群れ…そんな鳥には気がつかずタダタダ走る、甲子園を田指した長袖

長ズボンの野球部員、それは、自然サウナ。

川に水が入っているのと入っていないのでは、こんなに違う物なのか…

そして現実は後者。

『優馬あ…暑い…』

『うん…』

この場に居ては俺たちまで干からびてしまうと思いつつ、取り合ひずコ
ンビニで涼んで、飲み物でも買って午後から何するかを話す事にし
た。

『うあ…あ…』

とコンビニに着くなり、羽樹は声を上げた。俺には何も心当たりが
無かつたが…

『なに！？どおしたの！？』

『うーん…』

と羽樹は少し顔が赤かった…

『顔…赤いぞ！？早く店はこうひ』

『背中…』

『背中！？』

『背中…見てみ…』と恥ずかしそうに手鏡を渡してきた。

『うあ…なにこれ…何で口だけ濡れてるの！？何かしたつけ？！』
と俺が体制を捻りやつとの思いで見たのは、背中に丸く着いた跡だ
った。

『多分…うちの胸で…そこだけ汗かいたんだよ…』

『アハハハハ！！！そんな事か！！』

俺に釣られたか、羽樹も苦笑し、一先ずコンビニで汗が引くまで雑誌コーナーで本でも見ながら休んだ。

店内は涼しく、10分ほどで汗が引いた。

ジュースを買い、店内で座りこれからどうするかを話した。

高校生は…実に不便…

色々と遊んだりしたいのに車が無いのだから…何処に行くにも熱い思いして自転車を転がすか、時間に囚われてお金まで掛かる電車で移動するか…コレくらいしか移動手段が無い…
原付バイク…それも…俺の行っている学校では禁止だった…

要するに小学生から唯一進歩したといつたら車輪がでかくなり沢山こがなくとも進むという事だけだ…

『うちに来る…？』

『え！？良いの！？今田付き合つたばっかりだよ！？』

『それこそ、え！？だよ…！』

『そうゆうもんなのか…』

所々で今までホントに女性との関わりが無かつたんだな…と思える場面がある…

と言う事で、俺は羽樹の家に行く事にした。取り合えず羽樹の自転車を取りに和茶に戻つて、それから…あの超絶な橋を渡つて羽樹家だ。

二人で話しながら走つていたせいか、羽樹の家が以前より大分近く感じた。

橋も知らぬ間に上り、知らぬ間に下っていたので体力的にも全く疲れなかつた。

羽樹に言われ、羽樹の自転車の横に並べるように停めた。

『よつこそ我が家へ！…アハハ

『お邪魔します。』

初めて女の子の家に上がつた。

シャンプーなのか香水なのか良く分からぬが妙に良い匂いがした
ような気がした。

玄関には羽樹の靴の他に2足あつたので、お姉さんと母親が居るの
だろうと少し緊張した。

靴棚は白く、花が飾つてあり、何といつか凄く綺麗だ。

『こちにまほ！お友達！？』

羽樹のお母上登場…いや、あれは姉だ！…前回見ておいて良かつ
たとほつと一息入れた。

『んーん、彼氏だよ』

と言ひ羽樹の言葉にドキッとした…！

『どうも、はじめまして、羽樹さんのお姉さんですね。羽樹さんの
彼氏を勤めさせていただいております、高橋優馬と申します。今後
長い付…』

ボコ…！

イテ…こきなり羽樹さん…羽樹に殴られ怯んだ。

『アハハハ 気持ち悪い説明は良いから…それに姉貴じゃなくて、
この人はお母さんだから…』

『ええ…マジすか！？』

足の爪先から髪の毛の髪先までゆっくりと目をスライドさせて凝視
した。コレが…今年18歳の娘を持つ母親…いや…姉さんも居

るんだ！……ありえない、うちのお袋が醜すぎる…

ウフフ と絵になるような微笑で俺を迎えてくれ、俺はそのまま羽樹の部屋へと案内された。

ちょっとした螺旋状の階段を上つて左側の部屋が羽樹の部屋だった。

ガチャ。『お邪魔しますです…』

部屋に一步足を踏み入れると、かすかに香水の匂いがした。壁は白に近いピンク色で、ドアと対角の壁には窓があり、さつきまで浴びていた太陽光が入り込んでいた。

日差しを避けるようにベットが置かれてあつた。床につくほど布団シーツは手形が残るのではないかと思われるほど厚みがあった。枕元には、小型のライトスタンドが着いており、その横には今、呼んでいると思われる小説らしき物が置かれてあつた。

今まで、見たものを忘れさせるくらいインパクトがあつたのは、小説の横に置かれた2リットルのペットボトルだつた。2本も… 中には水が入つており、俺は寝る前に筋トレでもしているのかと思った。

ドアの左側にはメタンラックが置かれており、友人との写真、CDコンポ、液晶TV、DVD・CDなどなどが綺麗に整頓され、置かれていた。

写真はキキもカオリンも写つていた。…何気に気になる、羽樹と俺の知らない男のツーショット…

DVDは主にジブリ…CDは洋楽のアルバムが殆どだつた。洋楽に関しては何枚は俺の持つているCDがあり、話のネタに出来そうだと思った。

右側には等身大サイズの鏡と衣類が入つていると思われるクローゼット。小説、雑誌、漫画の並んだ本棚が置いてあつた。

鏡には俺の姿が映っていた…少し恥ずかしい…

クローゼットの中には下着も入っているのだろうかと、少しながら想像もしたが、ニヤケ顔になるとまづいので頭から即消去した。

『なにボーッと突つ立つてんの？！エアコンつけたしドア閉めてよ羽樹の声で我にかかるまでは異世界にでも居たかと思えるほど、新鮮な空間だった。

『あー！悪い悪い。それにしても綺麗な部屋だな…』

『えー？ そうかな！？』

羽樹に言われるがまま、腰をおろした。羽樹は『着替えてくるからちょっと待つて』と言い、部屋を出て行った。

チャンス！…とせきまで気になっていた羽樹と男のツーショット写真を丸めてゴミ箱に捨て、そのままベットにダイブ！！。羽樹の香りとリンスと思われる匂いが舞い上がった。枕を抱きしめゴロゴロとベットを転がり、ピタッと止まった目の先には『立ち入り禁止』『開けるべからず』と書かれているようなクローゼットがあつた。

そのまま直立し、クローゼットへと足を忍ばせた。

両開きのドアを開けるとザラーッと並んだ服がかけられていた。眼内に埋め込まれた、暗視スコープをフル活用し、半身大サイズのタンスを発見した。

物理的に聞こえるくらいの心音を無視し、そのタンスに手を伸ばした。

一段目…【ツチ】ハンカチなどなどが綺麗に入っていた。

二段目…【くツ】靴下が色分けされて入っていた。

【口】かアーーー【と三段目を開けようとしたとき、ガチャーーー！

『お待たせえーーー』と声が聞こえ、俺の妄想タイムも終了した。

『Night Park』

『「ノーノーお母さんが食べてって』

『おーーありがとーー』

羽樹がもつてきたのはまだ暖かいクッキーと、よく冷えた紅茶だつた。

エアコンも大分効いてきて、居心地の良い環境が完璧なまでに整つた。が…何か妙に気まずい気がする。

普段は何気なく話していた会話が、詰まり無愛想な返事になつてしまつ…

【光やキキはどんな会話をしてるんだろう…】

【光の事だし、一人の時でも上手く盛り上げてるんだろうな…】

と俺が、考え込むと時が止まつたように沈黙の時間が流れた。

【このままではまずい…】と思い、ふと頭に浮かんだ疑問をぶつけみてみた。

『ねえ！羽樹はなんで俺と付き合つ気になつたの…？』

『えー…うーん…興味が合つたからかな…趣味とかもつひとつ優馬つて近いじゃん！？それで付き合つてみたら楽しいかなつて思つて残念ながらまだ好きにはなつてません 少し一緒に居て、恋人として見れなかつたら別れると思うし、好きになつていつたらこのままずっと一緒に居るんじゃないかな？？』

『ほう…』

恋愛に疎い俺は付き合つとはお互いが好きで成立するもんだと思つていたけど、羽樹の言つとおり、好きじゃなくても興味が合つて一緒にいて楽しければ自然と好意が持ててくるつて考え方もあるんだなと少し関心した。

『でええええもーーー』んな調子じやつあ好きになる所か興醒めも良
いとこだね』

『ええええーーー』

『だつて…友達で居た時のガちゃんと話できたり…』と羽樹が少
し残念そうに顔を俯けた。

『ちよつと…正直言つて、俺…女の子の部屋来るのとか初めてで…
落ち着かないつて言つつか…慣れてないと言つつか…これから期待して
て…』

このゆづきに訳じみた事は得意である…嘘つきにならないために今
後頑張らなくてはならんが…

『えー…初めての彼女ではないでしょーーー』

『んー。中学の時に付き合つた子は居たけど、登下校一緒にしたり、
昼休み話したりするくらいで、休日に入つくりで遊ぶなんて無か
つたから…』おゆう付き合つては初めてだな…

『もしかして…童貞ーーー』と羽樹に由つて見つめられた。

『…ぬつとけ…』

『18歳でーーー?』

『つるせえ…羽樹は処女じゃないん??』

『勿論…………秘密です!!』

『なんだそれ！！』

『（（ハハハハハ））』

対角に向かい合ひように座つて、距離を感じられたが、話が盛り上がりたり、アルバムを見せてもらつたりしているうちに次第に離れていた壁も壊れて、腕がぶつかるくらいの距離でも普通に話せるようになつていた。

エロトークから始まり、音楽の話題になり、高校1年、2年の出来事を話し合つたり、いつものメンバーの過去を教えあつたり…話をしているだけなのに…とてもなく楽しく幸せに思えた。夢の中に居るような…

『羽樹～羽樹～』

羽樹の母の声で夢から現実に戻つたら瞬間だったのが夜になつていた。

『はあい！！』

『ごめん…ちょっと待つってね』

『おう…』

羽樹が部屋をでて階段を下りる足音が聞こえた。

『ふう…』

長い間夢の世界に居たせいか…いきなり現実に連れ戻されたせいなのか…凄いため息がでた。

ダダダダダと今度は階段を上がつてくる音が聞こえ、何故か背筋を伸ばし、姿勢を整えた。

『ごめん…おまたせ…』

『何だつたの…？』

『ご飯どおするつて聞かれたから、出かける予定つて答えちゃつた』

『アハハハ。そんな予定あつたつけ！？』

『無いけど、も外もあんまり暑くないしどこか行ひつけよ』

『OK～』

最初の印象はどんな時でも大切だ…と思い、伸ばしても落ちるはずのない服のしわをピッピッと伸ばし、『紅茶とクッキー馳走様でした。お邪魔しました。』と苦笑する羽樹を背に礼儀正しく羽樹の母に伝え、深く会釈して家を出た。

『もおー！何がキャラちがく無いー！？』

『最初の印象つて大事だしセーーー羽樹に好かれてても羽樹の家族に嫌われてたらお互い嫌やんー！？』

『まあ…それもそつか』

外はすっかり暗くなり電灯が道を照らしていた。電灯には無数の小さい虫が集り、光の屑が飛び散っているようにも見えた。自転車を引きずり、会話の続きをしながら、コンビニでおにぎりを買い、近くの公園で腰を下ろした。

電灯の光も無い公園は月明かりだけが俺らを照らしていた。夜の道をトボトボと20分近くかけて歩いただけの事もあり、畠は闇に慣れ、暗くても近くに居れば相手の顔くらいは確認できた。

『なあ…一つ聞いていいー！？』

『まみー！？』口にじごく飯を含んでいた羽樹は少し濁らせて答えた。

『話してる間の時間がめっちゃ早く感じたんだけど…あれって俺だけ！？』

『あー、うちもめっちゃ早く感じたよー？楽しかった証拠やない！？』

？』

『やつかあ』

いつもよつ『空氣』がおいしい…

いつもよつ夜星が輝いて見える…

いつもよつ虫の鳴き声が綺麗に聞こへる…

いつもよつ胸が高鳴り生を感じる…

羽樹と西浦といふなうらつに思えた。

『人を好きになるって不思議だよな…』

『うん』

『今日せき合つたばつかりなのこのままあつと一緒に入れる『空氣』が

する…』

『うん』

『たまには喧嘩したりとかもあるのかな…』

『うん』

『わおやつて色々な思い出を作つてこせたいな…』

『うん』

『機会があつたらあこづらにも報告しないことな…』

『うん』

『わつときから『うん』ばつかりだな…』

『うん』

『…』

羽樹は星空を仰ぎただただうんうんと少し微笑んで答えるだけだつ

た。

普段なら、「聞いてる!？」って突つかかる所だが、可愛いなアつと頭を撫でたくなるのはきっと好きだからなんだろうなっと少しからず頬を赤めた。

『今日の朝は俺が羽樹を怖がって、羽樹は俺にイライラしてたんだよな…』

『うん…ってそれ言わないの』

結局この日はずーっと話詰めだった。普段無口でない俺でも1年分くらいは話した気がした。

来週当たりに皆で出かけようつて最後の最後に提案した意外は特に何の会話をしたのか部分的にしか覚えてないけど…幸せな時間だった事ははっきりと覚えてる。

俺は以前Tシャツかネットか忘れてしまったが、誰かがこんな事を言つていたのを思い出した…

『人が人を好きになるというのは理屈じやなくて感情だ。頭じやなくて心だ。だから好きになろうとしても好きになれないこともあるし好きにならないようしていても想いは止められない…』

今日はその言葉が心身納得できる一日だった。

公園についてどれくらいの時間が立つたんだろう…夏夜の月が、ゆらんと揺れて一人だけの公園のブランコ横に浮かんでいた。

銀と黒との公園に、程良くほんのり漂う時が月に揺らいだ歴史の銀と、夜の上擦る伝承黒を蝉の鼓動に合わせるように、幽かにふるんと混ぜていた…

柔らかな風に逆らう事無く流れる羽樹の髪は月の光を満遍なく受け、

気持ち良さそう…

またね …と別れたのは午後2時を回っていた。

2008年8月8日…スマイル記念日…がとてもとても笑える気温
じゃない事は重々承知。

熱帯夜で夜もエアコン無しでは1時間で日が覚めてしまうほどの暑
さだ。

どこが立秋だ…どう考へても真夏中の真夏…ソロソロ、立春、立夏、
立秋、立冬、を変えた方が良いのでは無いかとお偉いさん方に提案
したい所だ。

ジイジイと鳴く蝉に耳をやられ、太陽の日差しに顔を焼かれ、飛び
逝く体内の水分不足に喉を嗄られ、汗だくで起床した。

エアコンのつけっぱなしは体に悪いと聞いていたので、俺は寝る前
いエアコンを切つて就寝…故に6時間の睡眠時間無いに10回は暑
さで起きる事になつた。

よつて寝不足。

眠い目をゴシゴシと幼稚園児の様に擦り、今年になつて若干落ちた
視力をフル活用し、カレンダーを見た。

『金曜日…か…ふあ…!…!…!』

アクビの途中で日がパツチリと覚めた。8月8日（金）の欄には大
きく赤ペンで【旅行】と羽樹の字で書かれていたからである。
いつの間に！…！と言ひ疑問は少しからずあつたが、そんな疑問より
すっかり忘れていた！…！と言ひ焦りのほうが多く、俺は風呂場へと
足を走らせた。

元々、今日の日の旅行は俺…正確には俺と羽樹が言い出した事なの
だが、提案者の俺がすっかり忘れていた…

急がねば……と焦りながら体を洗うが、焦りすぎで逆に汗ばみ、風呂から出ても何かべつとりとしている気がしたのは気のせいだらうか……

ここからは俺のくだらない日常を早送りにしただけなので、皆さんには少し過去の話でも聞いてもらひ事にしよう。

先週、俺と羽樹が付き合つことになつたのは皆さんも存知だと思う。

隠すつもりも無ければ、否定する氣も無い、俺としては是非皆さんにも知つてもらいたいくらいだ。

俺の高校初めての自慢の彼女なのだから。

付き合つた翌日、俺は和茶に全員集合と言つメールを送信した。勿論、羽樹との事を打ち明けるために……

時は溯る事、約一週間……8月2日。

午前11時。全員集合と同時に、俺と羽樹はホワイトボードの前に並んで立つた。

不思議そうに、ポカーンと皆が見つめる中、最初に口を開いたのは俺。
『えーこの度は、ベラボーに暑い中お集まりいただき、真に感謝いたします。本日収集のメールをだしましたのは、皆さんにお知らせが合つての事です……』

何故羽樹が隣に立つてんの！？

お知らせくらいメールで言えよ！－！

などの罵声は略して、俺は坦々と話続けた。

『私こと、高橋優馬と隣に立つてゐる女性こと、白鳥羽樹は昨日より交際することになりました！－皆さんには色々と迷惑や、お世

話になると思いますが、長い目で見て、応援していただきたいと思つてゐるしだいあります。』

『と言つてるのであります！！』

俺と羽樹の告知は無事に終了…するはずも無かつた。
少しの間沈黙が流れ、光は五右衛門、キキはカオリンとそれぞれが
顔を合わせ、キヨトンとしていた。

俺も逆の立場で、五右衛門とカオリンが付き合つことになりました。
と報告を受けたら恐らく彼らと同じような反応をしただろう。
俺も羽樹も皆が声を発するまで、しばしの休憩…休めの姿勢で待機
した。

状況把握が一番早かつたのは、キキでも光でも五右衛門でもなく、
あのトロトロとしたカオリンだった。

『え～っと。オメテトウ…！だよね？？』

あまりにもシーンとした空間にカオリンの言葉は疑問的になつてい
た。

カオリンの発言で五右衛門、光、キキ、も何となく理解…と言つた
雰囲気…と一斉に疑問系の言葉を発しだした。

『え…？何で…？』…何でって言われても。

『いつから…？！』…昨日…だつてば。

『いままでずっと好きだったの…？！』…そ、それは。

とまあ約30分にわたり質問攻めにあい多少覚悟はしていた俺も羽
樹もくたくただつた。

冷やかされるまで落ち着いた頃には毎を回っていた。

マスターに軽い昼食…サンドウイッチセットを頼み、俺と羽樹は再びホワイトボードの前に立つた。

『えー？まだあるとかいなー…？』

そうーー皆に集まつてももらつたのはむしろこの為。

『あのせり、昨日羽樹と話しててさ、高校最後の夏休みだし、6人でどこかに旅行、旅、何でも良いから思い出を作つに出来かけませんか？！？』

こちらの告知、いや、提案にはすぐさま皆同意してくれた。羽樹と『よし！』とハイタッチ風に手を鳴らし、皆の座つている机やぶ台の輪に加わり、予定、計画などを立てる事にした。

『おー！サンドウイッチできたどーー…』と喜つマスターの声も耳に入らないくらいワイヤワイヤと盛り上がつていた。

マスターは顔に似合わず氣の聞く人で、俺らの楽しんでる中を割つては入つてはいけないと、サンドウイッチをドアの前に置いて、やそくさと退散した。

チツチツチツチツ、ゴーンー！ウッポウッポー！！と部屋に掛けられた鳩時計が豪快に鳴り響き16時をお知らせした…そして決定！—

俺達は静岡巡りに富士山、樹海、（まあこの辺は興味本意で…）そして伊豆の海、熱海の温泉。

キキは持ち前の記述能力を生かし、ホワイトボードにまとめました。

【TTT計画】

【Travels To Shizuoka】

- ・お小遣いは各自自由
- ・おやつは荷物にならない程度に
- （注）バナナはおやつではない、腐る恐れがあるので絶対に持つて来るな！！
- ・時間厳守

- ・靴は動きやすい物にする、ヒール系厳禁（女性用）
- ・携帯電話は必ず持参

etc...

円陣を組んで、『この約束は必ず守り楽しい旅行にしてやるーー。』『おオーー！』と誓って一週間後の今、俺は既に集合時間30分遅れてに家を出た…

家のドアを開けるとバジバジバジと玄関に止まっていた一匹の蝉が壁に体当たりを繰り返しながら飛びたつ。

一步外に出ると、家の中の蒸し暑さとは別の熱帯地獄がモワモワとアスファルトから透明の煙の様な気体を放ちながら待っていた。

直射日光こと、太陽の日差しの雨。

自転車を右、左、右、左、と足を動かすたびに顔、背中、腹部から本当に雨に濡れたように汗が噴きだした。

温泉のサウナ顔負けの自然サウナの中、俺は一秒でも遅刻を早めねば…と、ひたすらペダルを踏み続けた。

予定では和茶で待ち合わせ…その後、マスターの家（実家）に向かい送つてもらう事になっている。

携帯の時計が一分、また一分と時が流れることに焦りが増し、今朝、トイレに行き忘れた付けが回ってきた。

俺には、焦りや緊張すると尿意が近くなると言つ症状がある。チクショー…と心で叫びながらコンビニを素通りした。

もはや、体内の汗、といふか水分が無になり和茶が見えた頃には目まいがし、視界が危うかつた。

そんな危うい目にもハツキリと5人の塊が目に映った。

良かつた…すまない…良かつた…やばい…と安堵と不安の気持ちが俺の心でキャッチボールを始めだした。

キャッチボールの結果は…

『悪い、遅くなつた（激汗！！）』

『優馬、おっせーぞ！…ジユースくらいおじれ！…』

『そつだそつだ！…』

『おう！…本当に悪かつた。快くおじりさせてくれい』

俺の中でのキャッチボールの答えはそつでた…否。そういうであつて欲しかつた。

和茶に着き、皆が停めてある自転車の横に俺の愛車をそつと置き、皆の元へとフラフラ足に鞭打つて駆け寄つた。

さて、1000回近く繰り返した、キャッチボールの結果は当りなのか…期待と不安が入り混じる中、俺は5人のバッター目掛けて直球勝負で妄想どおりの言葉を投げ放つた。

『悪い、遅くなつた（激汗！！）』

【力キーン！…力キーン！…力キーン！…力キーン！…ボテツ！…バシッ！…ビシッ！…ブシッ！…ベシッ！…ポコッ！…】

俺の投げた球はキャッチチャーミットにおわまる」と無く、ガラガラの客席までホームランを放たれた。

カオリンだけはピッチャーゴロで伝説的な、5連続ホームランは免れたが、言つまでも無く「口を拾う氣力など残つていなかつた。

打順はこおだつた。

光、五右衛門、羽樹、キキ、そしてカオリン。

俺の妄想ではホームランと言う清清しい表現で記されていたが、現実はちがう…俺がホームランの音を想像する度に、俺の頭は新人自

衛隊の如くテキパキと、はたまた、横断歩道を渡ろうとする小学生のように右！－左！－右！－左！－と反意識的に動かされた。

頬には季節的にまだ早すぎる綺麗な紅葉が咲き誇っていた。右に2つ、左に1つ。

非紳士的…非乙女的…暴力的な4人に比べ、聖母カオリン様は優しく俺のフラフラの頭をポコと叩くだけだった。

『本当に…申し訳ない…』…我、コレにて切腹す…と冗談を付け加える余裕など微塵もなく、ひたすら、和茶の通りに額をこすりつけるだけだった。

忌々しいの太陽様は先ほどの説明より、はるかに勢いを増し、俺のこすりつけるアスファルトの温度を上げに上げた。

鉄板の如く熱いアスファルトは俺の額に5つめの紅葉…否。でかい根性焼きの刻印を刻もうとしていた。

『ねえ。もおいいんじやない！？優馬が可哀相…』【何！？】

誰だろう…罪深き俺を救ってくれる御方は…と躊躇ばれない程度にホタホタと涙した…

罪深き俺を救ってくれる御方は、俺に『さあ立ち上がり』と言わんばかりにゴットハンド差し出してくれた。

逆光で顔を確認できぬまま、あまりの嬉しさに、罪深き俺を救ってくれる御方に抱きついた。

こんな、罪深き俺を救ってくれる御方は…羽樹しか居ない…！確信

していった。

『う……優馬……』

『羽樹……暑い中待たせて」「めんな……皆も本当にすまない……』

俺は涙したことを躊躇すべく手を、ギュウッと瞑り、ギュウッと抱きしめ謝り続けた。

『まあ……わいはもお許しとるナビ……』

『うん……私も謝つてもらったし良っこよー』

『俺も～』

『あはひもお～』

『……』

妙に羽樹がもがいていると思い、皆の許しと比例し乾いていた涙目をそおっと空けた。

……あれ？？？何故羽樹が俺の胸の中と五右衛門の横と二人居るのだ？？？

……あれ？？？さつきまで怒り狂っていた皆が、許してくれたと同時に何をニヤニヤしひれおられるのだ？？？

……あれ？？？俺に優しく可愛らしいパンチをおみまいしてくれた薰こと、カオリンは何処にいったのだ？？？

俺のフラフラの頭の中がクエッションマークで埋め尽くされようと同時に全てのピースがそろいパズルが完成……
した時、罪深き俺を救ってくれる御方が羽樹では無く、カオリンだと言つ事に気がついた……

と同時に全てのピースがそろいパズルが完成……

と同時に暑苦しそうにカオリンが俺の腕の中から解き放たれた…

と同時に五右衛門の横に居た羽樹が一步一歩俺に近づき、今度こそ5つめの紅葉…否。今度こそ本当のホームラン…グーパンチが俺の誇らしい鼻に直撃…殴り飛ばすと言つ乱暴な言葉が現実になつた瞬間だった。

体重60キロはあるだらう俺の体は、小さじ缶コーヒーの缶ぐらいの細い腕によつて宙を舞つ事になつた。

アスファルトへの着地は見事に失敗、

ゲレグラと腹を抱えて笑う五右衛門、光に怒りを感じる余裕も無く、『羽樹…すまねえ』と良い、涙しながら氣絶した。

『愛車 ハルグランドでＴＴＳ…』

ガタガタガタ… キュ―――ピタ――!

「ココは何処…私はだーれ…と気がついた俺。何処からともなく皆の笑い声が聞こえてくる…

【ああ。そうか…俺は我が愛しの彼女…羽樹によつて殴り飛ばされ、硬く熱いアスファルトに頭を叩き付け、ただでさえ少ない能をばら撒いて、死んだのか…何たる結末…死してなお皆の笑い声が聞けるとは…ありがたや。ありがたや。】

とブツブツ心で呪文の様に唱えている時に、ドン――と言つ大きな振動で「ココは現実だ」といつ事に気がついた。

【「ココはマスターの車の中か…むう…何か柔らかくて気持ちがいい…】と俺は顔を猫の様に椅子にこすりつけた。

『「コラ――動くな――ぐすぐつたいでしょ――』

つと羽樹の声にビクリと上半身を起こし、キヨロキヨロと周りを見回した。

【ああ…椅子じゃなくて、羽樹の太ももだつたのか…何たる失態…気がつくべきでは無かつた…】と俺はまたもや羽樹の太もも目指し、軽く目をつむり、体を倒した。

ドカ―――

『イツテ―――』

これまた、何たる仕打ち…起きたならちゃんと座りなさい…!と羽樹はこともあろうことか、膝を突きたて、俺が幸せそうに倒れる顔

に、二一キックをかましたのだ。

ガハハハ！！、アハハハハハ！！と5人の大爆笑に鼻を押さえながら✓サインを出し、涙目ながら、ニイツと笑つて見せた。

『おう！優馬！！起きたか！！？もおすぐ着くからなあ！！』

いつもながら元気なマスターに言われ、俺はかれこれ4～5時間くらい眠つていたのか…と腕を抱えて、考えた。

『お前が羽樹に叩かれて、氣絶したからあの後大変だつたんだぞ！』

！』

と言う五右衛門の話に耳を向けた。

あれは…叩かれたと言う優しいレベルのパンチではなかつたぞと、後でこつそり五右衛門と光に通知した。

『羽チヤン…やばいよ…』…そう。コレは今から約5時間前に遡る。

羽樹に殴ぐり飛ばされた俺は、皆さんも知つての通り、と言つか情けない事に氣絶をしてしまつた。

『知らないから…』と涙声で羽樹は必死に声を出し、俺を放置してまま、和茶の玄関に座り込んだ。

キキはマスターにすぐさま電話し、『いつになつたらくるんだー！！』と豪快に出たマスターを無視し、状況を説明した。

光、五右衛門に肩を借り、ズルズルと両足を引きずりながら、和茶の日陰の庭に運ばれた。

5センチくらいに切りそろえられた、ふわふわとした芝生は、天気の良い日には日陰だけに、最高のベットだったに違いない。

サラサラとした湿気0%の風が、俺の疲れきった全身に癒しを『えくれただろう。

日陰になっていた芝生は、さつきまで転がっていたアスファルトに比べ、ひんやりと若干冷たく、感じられただろう。

10数分し、マスターの愛車、エルグランドが玄関横付けで停められた。

『をい！何してんだ！！？優馬は無事なのか！？！？医者はよんのか！？』と次ぎ次ぎ5人はマスターの質問攻めに対し、皆は『全ては優馬が悪い！！』と口を揃えて良い。

『ふむ。そうか。じゃあ仕方ないな。』とマスターもあつさりと納得しやがった。

マスターに言われキキの呼んだ医者は、5分くらいで到着した。

『ん～～～。こ…これは…』

『やばいんですか…』と敬語で訊くマスター。

『どないなってんねん。頼むわ。大丈夫なんやろ！？』光も真剣に訊く。

五右衛門、キキも光に続いて、大丈夫ですよね！？…と訊き、医者は口を開いた。

『ふむ…大丈夫、大丈夫ではないの問題ではなく…彼は眠っているだけです…よつて貴方方の問には大丈夫とお答えしましょ。』…まずココで俺の顔中にある打撲に気がついて欲しかったのだが…。

医者の冷静かつ沈着な態度、さらに俺がただ寝ているだけと知った皆の衆は俺を叩き起こそうとしたらしいが、医者の言葉に羽樹が泣いて喜び、本当に良かつた。ごめんね。ごめんね。と抱きついたらしい。

それには、皆もお手上げで流石に叩き起こす氣にはならなかつたと光氏は言う。俺としては、お金を出してでも是非見たかった光景だから残念で仕方ない。

結局俺は、単なる熱射病、脱水症状、【ツボイ】だけで、特に問題は無いらしく、そのままマスターの愛車で、静岡を目指す事になった。

一方、皆（羽樹を除く）が眠っている俺を起そつとすると羽樹はそれを死守したらしい。

勿論、五右衛門と光から俺を守つたのである。

こんな流れで、先ほど自力で目覚めるまでの4~5時間という長い時間、俺の睡眠は羽樹に守られ、今に至ると言つわけである。

『そつかあ…羽樹…ありがとなーー!』とマジマジとお礼を言い。『うちも、叩いてごめん…』と羽樹もフカブカと頭を下げた。

まあまあ、お一人さん、コレにて一件落着と行こうではないかと五右衛門が俺と羽樹の肩をポンと叩き、仲直りが完了した。

どうしてココまで揺れるのだろうと暨、マスターの愛車エルグラン
ドを疑問、不思議に思いながらもエアコンさえあればじつて事無
かつた。

高速はお金がかかるから下道でいくぞ……と言つマスターの言葉に、
反対できるはずもなく、田舎道を軽快に走らせていた。

俺が気がついた時には既にエヌ・SHINOSAKAで茶畑、緑が美しい山々が窓の外にいくつも視界に飛び込んできた。

誰も居ない、と言うのは嘘になるが、道は車一つ走っておらず、老人達がMY畠を赤色のデカイ機械に座りタバコをふかしているくらいだった。

俺達の故郷も、十分田舎だったが、ココはそんな俺達から見ても素晴らしいくらいの緑に恵まれていた。青々とした空は普段より涼しそうにおもえ、その空を鳥達が競い合つようにな回している。

『ああ……すばらしい……』と光が標準語になつてしまつのも分かる気がした。

そうそう、肝心な目的地だが、俺達は（野郎どもの要望……）富士の樹海を是非見てみたいと言う事で、辞めた方が良い……俺も昔、大学の頃、連れと見に行つたが……とマスターの不吉な助言にも俺達は聞く耳持たずで、そこではふざけたりするな……それが守れるなら連れつてやってやらん事もない……と最後の御告げを気持ち半分で大きくうなづき、GOGO……と最初の目的地は富士の樹海に決定した。

学生時代マスターは一度とあそこには近寄らないと、固く誓つた故、近くの銭湯で待つてゐるから、見学が終わつたら電話して來いとの事だった。

女性陣もマスターと一緒に待っていると主張したが、そんな意見は受け付けません！…と断固拒否し、結局、我々6人で行く事になった。

『ふう！…着いたぞ！…あそこに見えるのが富士の樹海…俺はその辺のジムか銭湯で待ってるからなるべく早く連絡よこせよ！…』

分かりました…とキキだけが丁寧に応答し、マスターは俺達を下ろして、そそくさと逃げ出すよう、その場を離れていった。

『よッしゃ！…意外にあつとゆうまやつたの一！…優馬のおかげで薄暗くて結果オーライやな！…』

本当は3時くらいの到着予定だったが、その3時間半遅れで、時計の針は6時半をさしていた。

夏の6時半なんて明るいもんなのだが、光の言ひつけ、何となく薄暗くどんよりとしていた。

『うう…なんか怖い…』

『ね…』

『うん…』

と女性達は口元を上げ、3人で寄り添つて歩いていた。

『樹海探索にいざ出陣！…』と五右衛門のでかい声により、ガサガサと樹海へと最初の一歩を踏み出した。

8月8日…午後18時38分…

五右衛門の掛け声と共に樹海へと足を踏み入れた俺達。

樹海の外も薄暗かつたが、樹海の中はもお夜みたいに暗く、懐中電灯無しでは危なげだつた。

ジメジメと湿度は高く、周りの木々が『入ってはいけない』と言わんばかりにガサガサと風に乗り揺れている。

『何だあれ！』と先頭の五右衛門が不気味な真っ黒な看板を発見した。

『命は親から頂いた大切な物…もう一度静かに両親、兄弟、子供のことを考えてみましょう…一人で悩まず相談して下さい…うげ、こんなのあるんだ…』

『うむ。自殺の名所やからな。あつても不思議やないな。』

光は冷静に判断していたが、女性達はまだ入り口にもかかわらず早くも撤退の声を上げていた。

実は、俺も心では撤退の声を上げていた。

五右衛門、光と並ぶように先頭で進みその後ろを俺、女性達は3人4脚でもしているかのように、綺麗に寄り添い歩いていた。

2~3分くらい進むと、今度は変な箱があつた。例えるなら郵便箱みたいなもんだ。

色は郵便箱とは正反対で白色の箱に赤い文字だつた。

【自殺防止呼びかけ箱】

と書かれた箱は酷く汚れており、蛾の死体や、コガネムシの死体が周りにばら撒かれるように落ちていた。

箱の中には数枚、呼びかけの言葉を書いた手紙が入っていた。見た感じ紙は持参の様だ。ピンク色の紙、白色の紙、黒色の紙と色々な紙に書かれていた。

意外にもキキが『私も何か書く！』と言い出し、小さいカバンから手帳を取り出し、最後のページをビリツッと豪快に破りつた。

『光う。ちよつと懐中電灯当てる』

『あいよつ。』

【あるがままの自分を認め、受け入れ、愛することができてはじめて、人生の何もかもがうまく行き始める。だから諦めないでください。】

『おお！…いい言葉や！…』と口から歓声を受け、キキは少し恥ずかしそうに頭をポリポリとかいた。

『…だから諦めないでください。以外【ルイーズ・ヘイ】の言葉もんけ…』

光の厳しさ溢れる言葉を無視するように、『あ、ドンドン行くぞ！…』と五右衛門が一瞬氷かけた空気を溶かし、再び前進しだした。

ここは本当に日本なのだろうか…そんな風に思えるくらい静かで、異様な雰囲気を放っていた。

歩きに歩く事、30分。いつしか、男女別々に進んでいたのが、【

光とキキ】、【俺と羽樹】、【五右衛門とカオリン】とペアになつて歩いていた。

『いの辺…なんか怪しいな』

大きな林道を歩いていた時に不意に五右衛門が言ひと田の前に地雷でもあつたかの様に皆が足を止めた。

…頼むからそんなこと言わないでください…

靈感も持ち合わせている五右衛門の発言に流石の俺も光も不気味なムードに氣圧され少々怖かった。

『ちょっとこの辺見てみよ! ザー…』と五右衛門の意見に皆は大反対だった。

五右衛門が言い出したのは林道を離れ、樹海の中（道の無い場所）へ探検したいと言い出したのだ。

『あかんあかん!! 正直ゆーて怖いってのもあるけど、実際問題危ない方が正しい!!』

『うんうん。あたしは怖いのが120%だけど、光の言ひとおり迷つたりしたら危ないよ…』

光、カオリンがごもつともな理由を述べ五右衛門的好奇心を抑えようとしたが、ふむ。じゃあコレがあれば良いな!! と言い、皆に口服を見せた。

『なしてそんなもん持つてんねん!!』

『ハハハ!! こんな事もあるうかと持ってきて正解だつたな!!』

『…』

五右衛門は大樹にロープをくくり付け、早くいくぞーっと林道を逸れて奥の樹海へと入つていつた。

一応安全のため、光とキキがロープを結んだ地点で待機。他の4人は死地へと向かつた…

『皆大丈夫かなあ』キキの目には若干涙が浮かんでいるようだつた。

『大丈夫や大丈夫！！五右衛門も優馬も居てるしな！！それにキキにはワイがついとる！！安心してええで！！』

ありがと…とキキは大樹の下にしゃがみこんだ。

ええねん…と光もキキを元気付けキキに寄り添うように腰を下ろした。

一方俺達4人は樹海の奥へと進んだわけだが、林道ですら不気味だつたのがココは不気味を通り越して恐怖すら感じられた。

道じやないだけに土が柔らかくて穴が一杯開いている…迷い込まセヨうとするように木が沢山立つており、酷く歩きづらい。

俺は羽樹の手を、五右衛門はカオリンの手をしっかりと握り、一步慎重に先を進んだ。

『誰がこの穴掘ったのかな…』

『さあ、掘つたんじやなくて木が根こそぎなくなつたのかもな…』

『アハハ 宇宙人の仕業！？ 宇宙人というよりお化けの方かもしれないね』

『…』

『ダハハ、違ひねえ！』

さつさ今までビクビクとしていたカオリンとは思えないほど、呑氣な会話を五右衛門と仲睦まじそうに話しておられるではないか…

『五右衛門とカオリンって仲良かつたんだっけ！？』

俺は一人には聞こえないくらい小声で羽樹に聞いてみた。

『んー。仲が良いのかは見れば分かるけど… ロコだけの話、カオリは五右衛門に興味あんのよ』

『なんと…』 … なんと… んと… と…

羽樹からのいきなりの告知に驚きのあまり、声を出してしまった。

五右衛門とカオリンがビクツツツツツツ…と振り向いた。

悪い悪いと謝罪すると、驚かすな阿呆…と頭を叩かれた。

イテ…と思ひながらも五右衛門とカオリンの事を考えていた。

【五右衛門はこの事を知らない…知つたらきっと喜ぶと思うが…】
まあ俺の口から伝える事ではないなと思い、カオリンがいつか勇気をだし、伝えるだろうと、密かなエールを送った。

光達と離れ、道の無い樹海を彷徨い続けていると、途中ロープが絡まって使い物にならなくなつた…

無理も無い…訳も分からず、グルグルと彷徨つてきたのだから。

さて、ロープと辿つて光とキキの元へと帰りますか…と提案しようとした時、

『じゃあ優馬と羽樹とカオリンはここで待っててくれ…』
『は…?』『へ…?』『え…?』

五右衛門はココからは一人で行くと言つ出した。

『……別れ……』

『いやいやいやいやいや……五右衛門君……流石にソロソロ戻つた方が良いぞ……光達も心配してると思つし……』

との俺の忠告にも『頼む……』と一向に引いつとはせず、仕方なく、早めに戻つて来いよ……とだけ言い残し、俺と羽樹はロープの頭を持ち、その場で待機した。

懐中電灯の光と、声が届く範囲にて五右衛門とカオリンは奥に進んだ。

そう……実はカオリンも着いて行つてしまつたのである……

俺と羽樹が仕方ないなあと諦めた時でも、カオリンは五右衛門に行かないで……と泣きそうな眼差しを送り続けていた。

にも関わらず、ごめんなあ……せつかくココまで來たし、もお少しみたいんよ……カオリンもくるか！？と五右衛門の発言に、俺も羽樹も『阿呆……』とため息をついたが、カオリンは『一緒に行つて良いの……？？』と何故か嬉しそうにしていた。

『恋ですね』

『ええ。恋ですね』

と懐中電灯を手に薄氣味悪い中、五右衛門とカオリンの帰りを待つた。

『大丈夫かな……五右衛門とカオリン、それと光とキキ……』

『光組は大丈夫だろ……でも五右衛門組は心配だな……』

『だねえ……一人とも少しつて言つてたけどかなり奥まで入ってるね、うちらの懐中電灯の光届いてるかな』

『まあ俺達もココを離れるわけにはいかないし、無事であることを祈るしかないな。』

俺は、弱弱しく答え、羽樹は俯いてしまった。

『五右衛門さああん！－大丈夫ですかあああああ？？？』

と俺が叫ぶと、五右衛門から、応答があつた。

『ああ～～～つき～～～ど～おお～の果てに～～～』

と五右衛門とカオリンの歌声が聞こえてきた。

『B～Zかよ…』

小さく舌打ちする俺を見てか、五右衛門達が問題なさそうながらか、羽樹は顔をあげてクスクスと笑つた。つられて俺も笑つてしまつた。

五右衛門も怖いのだろうか…歌いながら探索しているようだつた。

15分くらいすると2人が帰ってきた。

『優馬あああ…ちょっと…やばかつた』

五右衛門は鼻穴を大きく広げ、ぜえぜえと過呼吸状態だつた。五右衛門の背中にはカオリンがランドセルの様にくつついていた。

『お帰り！！大丈夫だつた！？どおかしたんか！？』

二人の様子から少々不安になりながらも、訊いてみた。

『歩いている途中、”五右衛門さん”つてどこから声かけられた』

『…………』

俺は羽樹と顔を合わせ震える五右衛門とカオリンには申し訳ないが必死で歯を食いしばり笑いを堪えた。

五右衛門は俺の声に歌で応答したのではなく怖くなつて歌いだしたのだった。

『いやあ、最初、カオリンかな?って後ろを見たんだけど、カオリンは俺の横に居たし…よくよく考えると、聞いたことのない男の声だった…』

ブツと羽樹が思わず、口から息を漏らすと同時に俺は深いため息を吐いた。

【毎日毎日3年間ずつと聞いてる声なのですが…】と言いたくてたまらなかつたが、カオリンの言葉に絶句し、少し震えた。

『あ…あたしもも子供笑い声…と泣き声…が…聞こえた…』

カオリンの震えかされた声に五右衛門は『大丈夫、大丈夫』肩に乗つた小さな頭をよしよしと撫でていた。

『え…カオリン…マジ…?』

カオリンは小さく頷き、多分、泣いたのだろうと思われるよつた鼻声で、『うん…耳を塞いでもずっと聞こえてきた…』と言つた。

棒立ち状態の俺の腕をギュッ よ羽樹がつかみ、胸元に引き寄せた。

その手は、小刻みに震え、羽樹の顔は蒼白く、いまにも泣き出しそうな面だった。

光とキキの場所に戻るためロープを巻き取るように、進みだした。

! ! ! ! !

突然の羽樹の馬鹿でかい悲鳴に俺も五右衛門も、本気で心臓が止まるかと思った。

『だ・だ・だれか・だれか居る・』

カタカタと歯を鳴らし、詰まる声で言つた羽樹は震えているのが目に見えて分かるほど震えていた。

『だれも居ないから大丈夫だよ…』と伝えても、羽樹はしゃがみこんで目を閉じ、耳を塞いでいた。

『おんぶしてあげるから、背中に乗りな。』といつになく優しい言葉をかけると、二回ほど頷いて、背中にへばりついた。

素直に喜べなかつた。

五右衛門と俺は、何も言葉を交わさず、ただただ光達の待つ、林道の大樹を目指した。

流石に、洒落になつてなかつた。

イッテ… 小さな小枝が地面から剥き出しになつてあり、ジーパン越しに俺の足を突つづいてきた。

『五右衛門… ストップ… ちょっとズボンに枝が引っかかった。』

ボロボロのジーパンに絡むよつに刺さつた枝を、イライラする思いで、強引に引き離すとビリッ… とジーパンは甲高い悲鳴をあげた…

【くぅ…ダメージのジーパンなんか履いて来るんじゃなかつた…】

『スマン… お待たせ。』 つと顔を上げると五右衛門とカオリンの姿は無かつた。

俺の背中で眠つていた羽樹を起こし、状況を全て説明した。

『ズボンに引っかかつた枝をはずしてゐ間に五右衛門とカオリンが消えていた… と。そのまま。』

『ううううう…』 と羽樹が両目に涙を溜めだすのを見て、胸がズキツツと痛んだ。

『取り合えず… ロープを辿つて光とキキのところに行ひついで… 五右衛門達もきっと先に行つたんだと思つ…』

と、羽樹だけでなく自分にも言ひ聞かせるよつに言つた。

『暗中摸索 光・嬉紀』

4人とも遅いなアと私は光の少し汗ばんだ服の袖をクイクイと引つ張った。その度に頭をよしよしと撫でてもうれて少し幸せに思えた。

光に身を任せ、頭を光の肩に乗せ、私は目を閉じた。『イヤアアアアアアアアア！……』…と羽ちゃんと思われる叫びが唐突に私の耳を駆け抜け、体勢を戻し、光に訊いた。

『ネエ！…今の羽ちゃんの声じゃなかつた！…？』

『ああ、羽樹の叫びやつたとおもつ…』

私達は、このとき移動するべきでは無かつた。

私と光は、何かあつたんだと思い、羽ちゃん達を探しにピンと張つたロープを辿つて4人の所へと進みだした。

『ねえ…光う…まだかな…？？』

『もおすぐやる…』

私は何度も光にまだかまだかと尋ねたが、光にも分かるはずも無く、ひたすら、ロープだけを辿つて、穴だらけの足場の悪い土の上を歩き続けた。

『えーーーー？』

『おいおい…どないなつてんねん…』

私達がロープを辿つて、着いた先は変な小屋のような…家のような…ボロボロになつた廃墟だつた。

草木が周り一面に生い茂つて、玄関と思われる入り口に続く階段には虫の死骸が無数に散らばっていた。虫の死骸を避けるように爪先で階段を上り、家に入ろうとする彼氏…

私が、やめようよ…怖い…と試してみたが、『Iの中に皆が居てるんかもしけんや』、そばに居るから行くで』と言った結果…湿った異臭を放つ家のドアを開いた。

『優馬あ、五右衛門、羽樹ちゃん…カオリさん…いてますか…』ドアを開け、真っ暗な闇に小声で光は4人の名前を呼んでいたが、当然返事は返つてこなかつた。

懐中電灯で部屋の中を照らしてみると壁は落書きだらけだった…

【来世は幸せになれますよ】

【この部屋…臭うよおーー】

【2000年7月21日、T・K参上ーー】

など他にも色々と落書きがあつたが、死に関する話題は意外に少なく、OO参上などと私達同様、見学者のふざけた落書きが殆どだつた。

『光う…居ないとと思うし、やつぱり戻ろつよ…』

私の声は家中でピングボールの様に反射し、声は響き渡つた。

『せやかで、ロープは口に縛られとつたんやし、居てへんはずないやり…』

と私を入り口のドアの前に待つてゐるやつに言ひ、懐中電灯を手に一步一步、照らしながら中へと入つていった。

ガツガガンッ…！

『キヤア！…』

『ウオオ！…』

私も光も悲鳴をあげ、光は一旦、ドアの前まで戻ってきた。心なしか少し安心し、私は光に寄り添つた。

所々崩壊していく、床はボロボロ、私の体重（内緒だけど）ですらギイギイと鳶張りなのかと思わせるような崩壊ぶりだった… 靈の心配より命の心配をした方が懸命な気がするのは私だけかな…

『靈の心配より命の心配をした方がええな…』

光も全く同じ事を考えていた事に、アハ と笑う状況ではないけど、ついつい笑つてしまつた。

『私も全く同じ事思つてた』

『力力力カツ！…つて笑い事ちやうで…もお少しで落下死しけけたツちゅーに…』

とか言いながらも引き返さず、結局中に進んでいくんだもん…ホント男つて阿呆だ。

でも、そこが少しがつこよぐ思えちやう私は、もっと阿呆かも… Hへ…

私が心でぼやいているうちに、光は足場の良さそうな所を2～3回、爪先でツンツンと確認しながら、奥に進んで行つた。

光が足を止め、懷中電灯を一点に向けていた。

どおしたの？…と少し前のめりになり、光に声をかけた。

『「…これは…エロ本！…」（爆）』

『…』

エロ本を発見し、「…ともあれ、」とか、彼女の私の目の前で少し興奮気味の彼氏をに前言撤回し、心で…阿呆！阿呆！阿呆！阿呆！…と何度も叫んだ。

『せやかで、何故にこないな廃墟に大量のエロ本が廃棄してあんねや…？』

『知りません…』と強く即答し、こんな光見てられない…と視線を樹海に向けた。

【入つてからどれくらい立つたんだろうな…マスター心配してるかな…そりや心配してるよね…怒られるのかな…そりや怒られるよね…】

ハツと何呑気な事を考へているんだと頭をポコポコと叩いていふと、階段に散らばつた虫の死骸が田に入り、視線を再び光に戻した。

！…！

私はびっくりした…と言ひつか、軽く引いた…

何故なら私の彼氏こと、十屋光はこんな状況にも関わらず、ボロボロの床の上に堂々と胡坐をかき、さつき発見した、廃棄されたエロ本を読みふけっていた…の。

その光景に、私の頭からは恐怖がシャボン玉の様にフツと消え、【怒】の一文字で埋め尽くされていた。

足場も確認せず、ドカドカとよそ様の家に土足で侵入し、懐中電灯で、本を照らし、フムフムとH口本を読んでいる、光の後ろに着いた。

『なんしようと！？今の状況分かつちる！？』

怒りのあまり、我をされた私は、ついつい隠しに隠してきた方言が出てしまった…

ジコワーッと炭酸飲料水の様に頭に血が上って生きたのか…私は今までに無いくらい赤面した。

『え！？…博多…弁…です？？』

光も方言…本来の標準語で応答し、怒りで埋め尽くされた頭は一転し、恥ずかしい思いでいっぱいだった。

『そ…そんな事より…な…なんでこんな時に変な本…読んでるの…！…』

私は噛み噛みながらも光に伝えた。

『は…！…こんなところで真剣にH口本何か読むかい…！…あほぢやうか…』

むむむ…と辯上升げる怒りを制御し、『じゃあ何してるの？？』と光の横にしゃがみこみ、どお見てもH口本と思われる本を覗き込んだ。

『やつぱりただのH口本じやん…』

『ワイも、最初はそお思つてな、一回手に取つたが直ぐ捨てたんや。』

汚かつたしな…』

『でも、今も読んでたじやん…』

『おー、客観的に見たら読んでた事になるな。実際中も確認してたしな。でもコレ見てみいや』

私は靴をズリズリと滑らせ、光のひつつき、誇りや煤で真っ黒になつた光の指元を『もお少し懐中電灯あててえ』と言しながら凝視した。

『2022年…2月22日発売…え…?』

本のタイトル、予定日、作品関係、色々な点で私も中身を見てみたけど（光よりしつかりと…）どうやら2022年2月22日というのはこのボロボロになつた本が発売された日のようだ。

こつちもみてみい。と光に言われ、私は周りの数冊の本の発売された日を見てみた。

2022年1月23日

2021年12月21日

2022年3月23日

この本はたまたま222…と2が連なつていたけど、单なる日付じゃん…と少し拍子抜けって感じだつた。

その事を光に打ち明けると、『はあ！？』と馬鹿にされたように笑われた。

むう。つと頬を膨らませ、じゃあ何が疑問なの！？と光に訊き、私はギヨシと目を見開いてしばらぐの間、光のそばから離れる事ができなかつた。

222のと連なっている事はそもそも何の関係もなく、この廃墟に
廃棄されボロボロになつた本は今より、14年も未来の本だつた。

あれ……あたし、寝ちゃつてたのかな……
五右衛門がおんぶしてくれてるんだ……

もお少しこのまま五右衛門の背中の上で寝ていたいな……と思いつながらも、汗だくで息をハアハアと荒げている五右衛門を見て、チヨンチヨンっと五右衛門の頬を突付いた。

『あーー！カオリンー！起きたのか。大丈夫か！？』
どお見ても五右衛門の方が大丈夫ではなさそうなのに、あたしの心配をしてくれて、少し涙腺が緩んだ。

『うん。もお大丈夫だから、自分で歩くよ……』
おんぶしてくれてありがとう、っと少し微笑んで軽く会釈した。

いえいえ、そんな気になさらなくとも……と五右衛門は汗でぐつしょり濡れた髪を研ぐように頭をかいた。

五右衛門に下ろされ、久しぶりに自分の足で立つた気がし、立ち眩みのような感じでフラフラっと体が流れた。

『やつぱりまだ、万全じゃないじゃん……気にせず乗った乗った』と五右衛門が再び、屈んで自分の背中をポンポンと叩いた。

気持ちちは、乗りたい。でも、それはただの甘えになっちゃう。ひとつ、自分に言い聞かせ。

足場が不安定だっただけ 体調は大丈夫だよ ヒーローと笑って、五右衛門の背中をポンッと押した。

『ねえねえ、羽チャーンと優馬は？？』

『え？？さっきまで直ぐ後ろに居たけど……？？居ない？？な。

』

申し訳ないと五右衛門は、矢印の様に目を瞑り、周りを見渡し、優馬ああつ、羽樹ううううと大きい声で叫びだした。

でも、反応が無く、あたしと五右衛門はまず光達に合流しようと、唯一の頼みの綱であるロープの先に進んだ。

むむ？？こんな場所通ったかな？？んーでもあの木には見覚え有るような…

自問自答を繰り返し、あたしはただ、五右衛門の作ってくれる道をトコトコと追いかけた。

『オー！！もお直ぐ林道にでれるぞ！』と五右衛門が大きな大木をカツカツと足で蹴つていた。

『ほらコレ』と五右衛門が蹴つている先を見ると白色の紙が丸められて捨てられてあつた。

『なあにコレ…』とあたしは徐に、丸くなつた紙を広い、ガサガサと音を立てながら、中を確認しギョッとした。

【自殺は、自分を殺す事です。自分も人間です。人殺しは罪です。
考え直しましょう。】

と綺麗な字で書かれていた。

【自殺防止呼びかけ箱】の中にあつた紙だ：

正直、馬鹿！！阿呆！！と五右衛門を叱りたかつたけど、状況的にそれはあたしの中で必然的に優先順位を下げた。

その代りに「言つたら変かもしないけど、完全にロックオンされていた、あたしから五右衛門へのlove arrowは少しながら照準があわなくなつた。

恐怖、不安、疲労、そして自分の恋、色々な事で頭が破裂しちゃいそうだった。

『ふう…！…着いたぞ…！…』

と五右衛門が袖で額を擦つて大きく一息ついた。

林道でも決して足場は良いとは言えないけど、獣道に比べたら砂利道とアスファルトロードくらいの違いだった。

『はあ…疲れた…』

とあたしはロープのくくりつけられた大樹に持たれて、しゃがみこんだ。

『光～キキ～』と五右衛門は懐中電灯の明かりを360度クルリと辺りにばら撒き、キヨロキヨロと顔を動かしながら光達を探していった。

ううう。本当にあたし達大丈夫なのかな…と顔を俯けポタポタと自分では涸らすことの出来ない、涙を地面に打ち付けた。

『カオリンー！カオリンー！』と呼ぶ五右衛門の声にぐりゅぐりゅ

になつた顔を隠すようにポケットにあつたハンカチを出して、顔を上げた。

『なあにい…』

『ちよつとコレ見てくれ』

『ぎやーーー』

五右衛門はあたしの顔の上に乗せてあつたハンカチをシュッとテープルクロス抜きでもするようになつさりとはずしてしまつた。

あわわ、あわわ、銳月の明かりに照らされる顔を泥まみれの手で隠すと、そんな手で顔触つたら汚れるだろ、つとせつとつたあたしのハンカチで顔を拭いてくれた。

『アリガト…』ってなんか違つきがする。とか思いながらも、なるべく顔を隠すように五右衛門が握っていた紙に視線を移した。

『また、防止箱から持つてきたやつ…？？』

と今度は完全にロックオンをはずとした時、ちがう、多分キキの字だと思う。と言われ五右衛門の額とあたしの額が合わさるくらいまで近づき一人でキキの置手紙をみた。

【先ほど、羽チャンの叫びが聞こえました。ひょつとしたら私の勘違いかもしれません。でもやつぱり心配なので、光と一人でロープを辿つて4人を探す事にします。もし、入れ違いでこの場所に戻つてコレを発見した時は、ココで待つていてください。私達も20~30分でもります。】

内容を見て、五右衛門と田を合わせた。

『あの、叫び聞こえたんだ…取り合えず、少しだけ待つてみるか…』
と五右衛門から提案され、あたしは小さく頷き、大樹の下で恐怖の象徴とも言えるような鋭く尖った角を見上げていた。

『なあ、カオリンは、何で男と付き合わないの？？前に沢山告白はされてるって言つてたのに。』

と五右衛門からいきなり現実的な会話が飛んできて、あたしは混乱して『い…今は好きな人が居るから。』とこともあろうことか五右衛門に言ちやつた。

『ふむ。そつか…前までは男に興味とかなかつたの？？？』

『うううん。そんなとこだね』

どうやら、好きな人が居ると言つた点についてはあまり突つ込まれなかつた事に安堵の息をもらしていると、『で…？今の好きな人つて！？』と不意打ちが入つて再び赤面し黙り込んだ。

『言いたくないなら、言わなくても良いよ。…俺は今はまだ好きな人は居ないし、教えあうつて訳にもいかんしな』

ガハハハハハハと笑う五右衛門をじつと見つめて居たけど、『好きな人が居ない』と言う言葉に、良かつた…でもあたしの事も好きではないんだ…と嬉しいような悲しいようなで、またまた、俯いた。

『うーん。おそいな。口についてからももう10分くらい経つし、羽樹が叫んでからももう30分は余裕で経ってるだろ。。。』

よひじらせ、と五右衛門が立ち上がると、『探しにいり一ぜ』と手を伸ばしてきた。

行きたくない…疲れた…行きたくない…足が痛い…行きたくない…歩けない…

でも『だね』と言ってしまひただよな。

あたしが渋々立ち上がると、今度は五右衛門が座っていた。
どおしたの？？行かないの？？と訊くと、『乗れ！』とドジャブ
でも見てるかのように背中をポンポンと叩いていた。

潤んだ瞳を隠すように五右衛門の背中に抱きつき、お願ひします。
おうーーと会話を交わし、ロープを巡つて五右衛門は前進した。

『ねえ。五右衛門』

『ん！？』

『…なんでもない』

『…』

あたしは、ギュッと五右衛門の背中にひしひしひと、上を見上げて、目に願つた。

prays for the achievement of
his first love.

『暗中模索 優馬・羽樹』

歩いても歩いても永遠とロープは続く気がした。月明かりと懐中電灯の光意外、私の視界を広げるものは無い。大量の木々に阻まれ、月からの光も私達を照らすのを困難とする状況だった。

本当に死んでしまうのでは…

コレが樹海…迷い込んだらもお抜けられない。

鏡の迷路とかとは違う何かを感じていた。

まるで、違う世界に居るような…

優馬が少し休憩する?と声をかけてきたけど、私は首を縦には振らなかつた…振れなかつたのかな。

私達が光と離れて、ロープが途切れるまでにこんなにも歩いたどうか…と過去の風景や、仕草を思い出してみたりもしたけど、直ぐにあの恐ろしい顔が頭に浮かんできて…私の思考をさえぎった。

優馬とも無言の時間が続き、ただただ歩くだけの状態に、ちょっととした物音にもビクビクしながら、私の精神はもおボロボロだった。

『羽樹！――羽樹！――ネエ！――』

優馬が声をかけてきたとき私は優馬の太ももに頭を乗せていた。

『あれ? ?うち…どおしたの? ?』

『さつき倒れたんだよ…ココからは俺がおぶつてやるから、少し寝たほうが良い。もお体力の限界だら…』

ああ……男って生き物は凄いんだな……と今まで思つた事も無い事を想い、その瞬間優馬と目がつたので、ドキッとながらも、なんだか、久しぶりに優馬がかっこよく見えた気がした。

『ありがとッ』とにつこり微笑むと優馬も笑みで応答してくれ、私は遠慮なく優馬の背中を借りた。

優馬の背中は少し汗臭い、それにベタベタしてて、太つてないからだと思うけど優馬の背中は硬くじつとしてる……でも、凄く居心地が良かつた。安心して、凄く眠い時にふかふかのベットにダイブしたみたいに。

『うーえもおおおんーー。』

ウトウトともお後1分もあれば気持ちはく眠れるという時に、耳元で優馬の大きな声が鳴り響いた。

『もおーーーうるさいな……びっくりするじゃん……』

アハハハと笑う優馬に私もついつい釣られて笑ってしまった。

優馬の声は結局木々に遮られたのか五右衛門達からの返事の声は聞こえてこなかつた。

目的に向かつて草木を分けながら、ひたすら進んでいた。

こうゆうのを敢^{カシイ}為^{マイオウ}邁往^{カウマイジン}つて言^ウつかのかな
いやいや、勇往邁進^{カウマイジン}でしょ……

と向氣ない会話を交わしていた。

『それにして、しんどい…羽樹…まさか太ったか！？』

『ばーか。』

『こりゃ、光達のことに着いたらそれなりの『豪美を頂こつかしら。

『アハハハ。じゃあ今『豪美あげる』

と言い私は優馬の頬に唇を押し付けた。

優馬への初めての頬へのキスは塩と土の味で…なんとも芳しくない匂いがした…甘いキスよりもちの方が意外と一生忘れないかもね…と心で少し笑い、顔を肩の上に戻した。

『や…やばい…下半身が…』

と言つ、アホ彼の下半身にグーパンチをおみまいし、狼が鳴いたかのよつた雄たけびをあげ、その場で崩れるよつこしゃがみ込んだ。

『だ…大丈夫…？？』

『だ…だめ…大丈夫では無いけど…ついたぞ…』

私は崩れた優馬を起こして、大樹にもたれさせ、周りにキキやカオリンの姿が無いか四方八方、見回した。

『あーー』と優馬の足元に何か落ちているのを見つけ、手に取つた。

『コレ。カオリンのハンカチだ…』

『えー？』

優馬も重たそうに体をこちらに寄せ、【薰】と書かれたハンカチ見た。

『ねえ、羽樹、その紙は何？？』と言つ優馬の言葉に視線を下に落とすと、4つにおられた手帳の切れ端の様なものが落ちていた。

何だろうと、中を見てみると、キキの字で私達を探しに行くという事が書かれていた。

『あ～…』

と私にさつぱり意味が分からなかつたけど、優馬は何か全てを悟つたように大きくため息を吐いた。

私は自分なりに頭の中を整理した。

まず…

光とキキはココで待つてゐる間に私の声が聞こえて皆が心配になつて、ロープを辿つて皆の元へと歩んだ。この時点で私達より先に進んでいたカオリン達にキキ達は合流していくても良いはず。

まさか当然のように合流していく、4人だけで帰宅した…とは到底思えない。

だとすると…

行動順としては多分こうじやないかな…キキ達が私達を探しにココをでて、カオリン達がココに戻つた時には既に誰も居ず、この手紙だけが残つていた。せつかく戻つてこれたのに、とカオリンが泣き出し、顔を拭くため取り出したハンカチをいつもの天然ツブリでしまつのを忘れていた。その時に五右衛門から戻つて皆を探そうと言われ、『はい』とか可愛らしい声をあげて付いて行つた。そして、再びだれも居なくなつたこの場所に私と優馬が到着し、カオリン達同様この手紙を発見した。。

でも……なんで、合流をしなかつたんだろう……」それだけが私の思考を遮り、これ以上考える事を許してくれなかつた。

やつぱり……わかんないや……

胡坐で座り、腕を組み、『うむうむ……』と呪文をみたいに唸つていた。

『あ～……』何氣なく声を出した時にピーンと閃き、それからは一人で私同様、頭の整理をしていたらしい。

どおやら頭の整理も終わつたよつだね。さあ聞かせてください。あなたの考え方。

私の心を見透かすよつて、いきなり優馬が話しう出した時は心底驚いた。

『俺達、このでっかい木にロープ結んで、中に入つて行つたじやんな。』

トントンとロープのくくりつけで有る大樹をノックするよつにたたきながら言つた。

うんうん、と相槌を返すと、『コレ見て……』ともつてこた懷中電灯を光を木のロープの結び目のところまで運んだ。

『ひげのロープだよね?..』

それがどおかしたの?..と聞くと、やつぱり!..と少し険しい表情になり、『じゃあコレは?..』と優馬は明かりを少し高い位置に移動させた。

『えー?』

『なつーーー?』

犯人はこれだよ…と優馬は自信満々に答えた。

優馬の照らしている光の先には、私達のロープと同じロープがあつた。正確に説明すると、現在優馬が照らしているロープが私達ので、最初に私が間違えたのが、知らないロープ。

『多分、俺達より前に来客者が居たんだな。そして、この大樹にロープを縛つて、俺達みたいにズカズカと興味本位で中に入つていったんだと思う。見た感じ結び目とかかなり汚れてるし、相当前のロープだろうな。10年くらい…もつとかも…。』

こんな偶然つてあるのかな…と足の先から頭の先までブルッと震えるようになん気が走つた。

何だか優馬と少しでも離れているのが怖くなり、私は優馬に近づき、手を握つた。

それに優馬も答えて握り返してくれると、『それでさ…』と話を続けた。

『それでさ、心配になつた光達はこっちの違うロープを辿つて行つたんだと思う。五右衛門達はココまで理解して違うロープを辿つたのか、偶然間違えたのかは分からぬけど、光達と同じロープを辿つて進んだ。…だから俺達に会う事が無かつたんだと思つ…』

『凄い…』と私は無意識的に声をもらした。え?なにが?と優馬が訊いてきた。

『優馬、頭良いじゃん！…少し…かなり見直したよ 何か、これからまた樹海に入らなくちゃいけなくて不安でいっぱいだつたけど、少し安心した 優馬が一緒に良かつた』

恥ずかしい気持ちも包み隠さず全て打ち明けると、ありがとう…！俺も羽樹と一緒に良かつた。と言い、私達は再び樹海に足を踏み入れた。

優馬の予想には凄い納得いくものがあつたけど、外まで戻つてマスター や警察に言つた方が良かつたのでは無いか…もしかしたらどんでもない一六勝負にててしまったのでは…と一步一歩奥に進むに比例して、私の不安は膨らみ始めた。

『廃墟 光・嬉紀』（前書き）

ロープを頼りに4人を追つてきた光とキキは、不気味な廃墟に着いた。「ここに皆居るのだろうか？？」と思いつながらも、家の中に入る。そこは床はボロボロ、壁には大量の落書き、廃棄されたエロ本があった。しかし、そのボロボロのエロ本は…

『廃墟 光・嬉紀』

『14年前の本なの！？……じゃなくて14年後の本なの！？』

キキの反応も当然の反応やな、と思いながらもワイ自身、正直どうゆう事なんか全くわからんかった。

なして、こないな廃墟にエロ本が大量廃棄してあるんや…それに、なして発売の日付が未来やねん。

一番重要なのは、他の4人は何処におんねや…

14年後の本なんて凄く興味がある。。。

キキが来る前に少し見た感じだと、14年後でも現在とさほど変わりはなさそうだ。

携帯電話だけは今より大分小型サイズに描かれていた。

もお少し見たい…がなしてエロ本やねん！！！

わいは…わいは…ただ調べたいだけなのに…嫌でも息子が反応してまうやないか…！！

クソッ…男っぢゅー生きもんはなんぢゅー阿呆なんや。阿呆…！タワケ…！…とワイは自分の髪の毛を貪るよつこかき混ぜた。

むむ…までよ…

せや、仏様は大体男や、中には女の仏様も居てるかもしけんが…そんな事はどうでもええ、肝心なのは無の心や、下心、欲に囚われない無の心や…！

ワイは目を閉じ、合掌するよつて手のひらを合わせた。

胡坐で座っていた足を組みなおし、足でも合掌するよつて足の裏を

合わせた。

肺一杯になるまで、ゆっくりと自然の空気を取り入れ…むふッ、大量のホコリを吸い込みむせそつになるのを寛大な精神で耐え、精神を統一し、瞑想した。

ワイは無や…女の裸が何や、Hシーンが何や、無になつて自分の追及すべき点だけを見ればええんや。

カーッ…!!

と心で叫び、目を限界まで見開いて、本を眺めた。

ウオ…何やねんこの部屋…ホコリまみれで…クソッティエ…目開けすぎ注意の札だしどけや…ボケエ

ブツブツと精神統一にも瞑想にも失敗し、ワイは悟りを開く事ができひんかった。

『聞いてるー?…』

とふとキキの声が耳に入つてきて、もお諦めるしかないといつ事を悟つた。

『え?ああ。すまんすまん。考え方してたんや。で何やつた?…?』

『もおーーJの本…』

『あーせやせや、キキは床の脆くない所でその本調べといでや。ワイは他にも何か無いか少し見てみるわ』

結局1~4年後のH口本はキキに頼んで、ワイは他にも何か変わった

物はないか探す事にした。

ひでえなあ。床抜けてるやんけ。

ん??

廃墟には地下があった。下はコンクリートで作られて、ベットと冷蔵庫らしきものとなにやら大量のビンが並べてあった。

覗くのをやめ、一階のフロアを懐中電灯で周りをくまなく見渡して見ると、2階もあるらしい。

足場を確認しつつ、階段を1歩、2歩、3歩と忍び足でそーっと2階を手指した。

4歩田を踏み出したりとして、ワイは足を止めた。

4段田は階段ではなく、くもの巣だった。

ひやあ、あぶねえ。と3段田に立ち、上を懐中電灯で見よひとつ試みたが、どうやらそれは無理な課題だつたらしい。

キキのところに戻り、部屋の状況を説明した。

『このボロ小屋、2階もあるけど、階段が壊れてて上れそうにない。地下には何とか降りれそうだけど、降りたら上がれんのかな……』

と状況報告をすると、キキはキョトンとワイの顔を見ていた。

『ん?..どおかしたか?..』

『光が…標準語で話すの久しぶり…初めて聞いたかも…』

まあワイかて家では標準語ではなしてんねやけどなーーだから、今標準語で話せつて言われても普通に話せるよ?/?/?とワイの奇妙な

話し方に、関西風の話方だと怖そ�で、標準語の方の光は優しそうと言わされたので、ワイはキキと一人の時は標準語で話事にした。

『別室あるんだあ。私も発見したよ。ほり口口、いの名前見たこと有るでしょ？』

と言われ、目を細めて見てみると、えー？… と心底驚いた。

『こいつって、ワイらのクラスに居る… 上坂里番… かー…』

『多分、里番ちやんだとおもつよ。…』

ワイが見たヌード写真の横には香里と書かれた名前があった。でも顔が全然変わつてないので直ぐに分かつた。

14年後って事は… と計算しただけでも気持ち悪くなるような歳のヌード写真じやん… と思ったのと、32歳でもこんなに綺麗な体してるのか… と感心する俺の下心が露ぎ出した。

『今は胸小さいけど、5年後にはこんなにでかくなるんだね… 私もなるかな…』

とキキがもらした言葉をワイは聞き逃さなかつた。取り合はず、フォローを入れるべく、もお十分綺麗なスタイルしてるじやん…!…と褒め、続けて、今5年後って言わなかつた??と訊いた。

『ああ。そうさう。ほり、2013年。ネ。他にも色々あるみたいだけど、一番未来のは22年だねえ。それと過去の本は無いみたいだよ。』

ほづみづ。よく調べたな。偉いぞ…!…とよじよしと褒めて、ワイも

負けてられないなど、腰を上げようとしたとれ…

アソシアソシアソシアソシア---

とドアが暴れる音に音を上げだした。

『（（-----））』

腰を抜かしその場にしゃがみこんだ。あまりの驚きにワイら一人とも声がでなかつた。

キキはワイに飛び乗るように抱き付き、ブルブルと振るえ怖い怖いとワイの肩に涙を落とした。

「大丈夫だよ」と言う一言が口から出てこなかつた。

何も大丈夫では無い状況に、そんな言葉をかけても無意味極まりない事は分かつていただけど……

徐にキキを力一杯抱きしめた。ワイにはそれくらいしかしてやれなかつた。

エハラ・エハラ・エハラ――

と鳴り止まないアの声がソワソワキの精神を一気に吹き飛ばす

もおあかん… ワイも震えがとまらへん。

ガタガタと笑う膝、カタカタと笑う顎、何がそんなに笑えるのか、理解不能の身体を最後の力で抑え、

『何やあ！――！――！クソッたれが！――』

と訳もわからず腹の底から吠えた。

10

同時に音は止み、先ほど同様シーンとした空気が流れた。
あまりの静けさにワイとキキの心音がやけにつるむく感じた。

舞つたホコリの群れが、床を田指し、ゅうくじと着地しようとして
いる。

キキも恐る恐るジアに視線をやると、

テノウ・テノウ

とさつきとは打つて変わって今度は優しい音をドアが鳴きだした。

キキはすぐれまあ田を閉じ再びワイの胸の中に顔を隠した。

ガチャ。 ギイイイイイイイイイイイイイイ！！

と詰つ耳に残る音と共にドアは開かれた。

『廃墟 五右衛門・薰』（前書き）

やつとの想いで光達の待つ、ロープのくくりつけた大樹まで辿りついたが、一枚の紙だけが残つており、そこには光達の姿は無かつた。紙の内容を理解し、五右衛門と薰は光達を探すため、再びロープを辿つて樹海の中へと進んでいった。

『廃墟 五右衛門・薰』

むむ……

俺が、この道はさつきとは違う道だと分かったのは、自殺防止の呼びかけの手紙がいくら進んでも落ちてなかつた事で気がついた。

WHY……

ロープは横にある……けどさつきまで俺達が通っていた道ではない……
夏の生ぬるい風が汗だくの髪の毛を駆け抜けると、同時にもの凄い恐怖と不安が湧き上がってきた。

背中で幸せそうに眠るカオリンを起こして、話をしたい気分だった。一人でこんな道を進んでいたら頭がおかしくなつてしまいそうだつたからだ。

けど……スースーと寝息を立てて眠るカオリンを俺は起こす事が出来なかつた。

話し相手が欲しい……一人では不安で怖い……
でも……カオリンは幸せな気分に浸つている、そんなカオリンも俺と同じ死地に戻すなんてあまりにも可哀相だ。

クソオ……

込上げてくる涙を拭う事無く、俺はひたすら前進するしかなかつた。

ロープの1メートル先は闇に飲まれ、確認する事が出来ない。足元と前方には十分に注意を払つて進んでいると、気のせいだろうか……やけに虫の死骸が目立つようになつてきた。

5センチくらいにあるだらうと思われる『カイ蜘蛛…

15センチくらいの蛾…

コガネムシ、蝉、カブトムシ… 無数の昆虫達の死骸が俺を案内している感じにも思えた。

『「J...Jめんなさい…寝ちゃつてた…』と起きたカオリンの言葉にもピクッと体は反応した。

『お…おうーーゆっくり寝てて良いんだぞ…』と起きてくれてありがとうと思いつながらも強がってしまう自分が居た。

『ううん。大丈夫、あたしも歩くからおりして』と、しゃがみこみゅっくつとカオリンを地面に下ろした。

ギヤアッと虫の死骸を見てカオリンは俺に飛びついてきた。…ウオ
！…！

れ…最悪だ…

カオリンが飛びついた衝撃で、しゃがんでいた体勢から、背中をボンと押されたような感じになり、両手を地面に思いつきりたたきつけるように…

右手で、蝉を…左手でモスラ級の蛾を…見事にプレスしたのだ。

『めん、大丈夫…と言つたカオリンの言葉にも怒りを感じるほどに死ぬほど恐ろしい体験だつた…

寒気と共に、狂った獣の様に鳥肌が立つた。

綺麗とはとても言えない土で手を洗い、何とかあのグチヨツとした感じは御払いできた。

『あれ？？』「」前と全然違つ道じやない？？』

『うん。俺もよく分からんのだけど、明らかに別の場所だと思ひ。』

怖くなつたのか、カオリンは俺の手をギュッつと握つて、少し幸せに思いながらも、こんな汚い手を握らせて良いのだろうか… 左手は… モスラ…

俺は、罪悪感を感じながらも、カオリンの右手を離さなかつた。

死骸とロープを辿つて、進んでいると、大きな壁にぶち当たつた。

なにこれえ…とカオリンの言葉に、俺もなんだこれ…と田を見開いた。

壊れた家？？？でも流石に誰も住んでいる気配は感じられなかつた。

入つてみると、カオリンの手を引いたが、胸を打ちぬかれるような可愛い上田遣いで『こわい…』と言われ、取り合えず入るのをやめた。

じゃあまず家の周りから調べてみよつか。と提案し、家の周囲を調べる事にした。

玄関へと続く階段は酷いありさまで、死骸が圧縮されたように固まつていた。何匹かつぶれている死体もある…

階段の脇には、階段を囲つように草達が生い茂つていた。

気持ち悪いね……と言つカオリンに正に同感と大きく頷いた。

家の東側に回ると、大きな彫刻のような墓石のよつな訳の分からん物体が置いてあり、なにやら文字が書かれていた。

【どうだ妹と二人暮らし、どうだ「もつ」とともりこし】

【正解を入力せよ……】

何だコレ。と石の前にカオリンと一緒に並んでしゃがみこんだ。

『入力しろって書いてあるけど……』

『うぬ、これに問題文なのか?? コレの言葉の意味が理解不能すぎる……』

大きな石の前にはパソコン用のキーボードが置かれており、コレを使つて入力するのだろうか……と少し首を傾げた。

電源はつながつていないし、モニターすらない……ただ答えと思われるボタンを押せと??

くだらぬーと想いさつさと他の場所を見に行こう。と立ち上がりうとすると、カオリンがズボンを引っ張り、もお少しだけ考えようよ……と言い出した。

しかたないなあともう一度腰をおろし、座禅を組み、両手の人差し指を舐め、その指で頭にクルクル輪を描き、その手を股間の前に持つていき、両手で丸みの帯びたをつくり目を閉じた。

そつー！俺はある有名な一休さんの如く、考えた。

どうだ妹と二人暮らし……これはどおゆう事なんだ……????妹と二人

で住む感想を聞いているのか？？：何だか色々とめんどくさそうだが…むむ！！！もしやこの【妹】というのは別に血のつながりのある妹とは限らないではないか。義理の妹にしても、妹と思っている存在の事なのかもしれない…

ふむ……待てよ……何か例はないのか

閉じていた目を少し開けると典型的な名探偵のTVの主役のよう、手を口に当て、考えているカオリンの姿が飛び込んできた。

レーダーの頭の中を電撃が通過した。

家に帰ると『おかえり』とカオリン（妹）が待つていて…

揺するカオリン（妹）…

て、これがから一瞬は寝てない? クスン…』と涙を溜めるガオリ

「今日はね……」「キロ二三が安が、だから買、てきか」と晩飯にトウモロコシを出してくれる…カオ…ん???

תְּלִימָדָה

【アーリーだニモウルサルニ】…【アーリーだニヘヘモウルセ、トカモロハ】

カオリンのような可愛い妹と二人暮らし…

そんな可愛い妹から、エウゼロニシ（俺の大好物）をも」といかか
？？と進められる…

ポクポクポクポクポクポクチーン！！！

『分かった！！！』

『え！？ほんと！？』

『ああ……これで間違いない！！！』

カオリンも考えるのを止め、俺をじっと見つめ、目をキラキラとさせていた。

入力するぞ……ウン！！

俺は自信満々に、「コードレス状態……いや……電気レス状態のキーボードに打ち込んだ。

【S・I・A・W・A・S・E】

『幸せ????って入力したんだよね？？？』

『おう！！！』

何も……起こりない……

……なんだよ……正解か不正解か教えてくれてもいいじゃねーか！！！
と石を蹴飛ばした……

その時、『うっ…』家中から一つの光が俺とカオリンの顔を撫でるよつに通り過ぎた。

不正解と思つたが、やはり正解だったのかもしれない、カオリンと田を呟わせた。

『いま、何か家中で光ったよな？！？』

『うん……』

俺の正解にカオリンも驚きを隠せない様子で、家中の中に入つて何が起きたのか確認したい！！！と言い出した。

すぐさま玄関に向かい、死体の山を踏みつけ、階段を上った。

ガツー！

ん？？何だこのドア、鍵かかつてんのかな？？？ヒドアノブをまわして押しても引いても動かなかつた。

『え？？開かないの？？』とカオリンも心配そうに手を向つてきた。

デンシデンシデンシデンシ……

デンシデンシデンシデンシ……

ぶち破つてやるって勢いで俺はドアをデンシデンシと叩いた。

う…とカオリンは耳を塞いでいた。

『何だコレ…まじであかねー…』

いまにも壊れそうなボロボロのドアなのに押しても引いても叩いてもびくともしなかつた。

俺はその辺に落ちていた角材のような物を拾つてきて、角材でドアを再び叩いた。

デンシデンシデンシデンシ……

デンシデンシデンシデンシ……

『○ あ…… × ……』

もお一発と振りかぶつた時、中から何か声が聞こえてきた。ドキつ
とし、のけぞり、カオリンに訊いた。

『い…今、家の中から何か聞こえたよ…ね？？』
『う…うん…』

俺が、叩いた事に後悔していると、カオリンがトントンとノックを
しだした、『誰かいるんですか～？？』と詮おうとするカオリンの
口を手で閉じて、『やめたほうが良いかも…』とカオリンに

もしかしたら…かもしれない…と少し大げさに云え、そそくせと立
ち去ろうとした時、

ガチャ。ギィイイイイイ

と何故か勝手にドアが嫌な音をあげながら開いた。

『廃墟 優馬・羽樹』（前書き）

4人が待っていると思われた大樹には誰も居なかつた。

キキの置手紙と、カオリンのハンカチ、そして2本のロープ。

全てをパズルのピースとして考えだした、優馬と羽樹。

優馬の閃きによつて導き出された答え。その答えを信じ、一人は4人を追つた。

『廃墟 優馬・羽樹』

凸凹とした一度田の死地が再び俺達の体力を食いつぶしてきた。羽樹から戻つて警察に言つてからまた探しに来ようと何度も言われたが、俺は羽樹を説得し、進み続けた。他の4人が心配でたまらなかつたんだ。

木々の擦れ合つ音と、虫の鳴き声それだけが耳でリピートされた。羽樹との会話はいつの間にかなくなつていた。何か話しないと…と思うのだが、喉で声が引っかかり、声がでてくれなかつた。

ちらちらと羽樹を見るが、目が合つと避けるよつと回避してしまつていた。

バサバサバサ！－クアクアクアア－！

つと日本のカラスとは思えないほどに大きなカラスが木々を搔き分け飛び立つた。

『キヤッ』と羽樹が悲鳴を上げた転ぶように尻餅をついた時に要約喉に詰まつていた声があふれ出した。

『大丈夫！？怪我とか無いか？？』

『うん…びっくりした…』

若干湿つぽい土をポンポンとズボンから払い、恥ずかしそうに『アハハ』と笑う羽樹を見て、少し心が癒された。

長かった無言の時間も幕を閉じ、思いつく限り一人で話題を考え話しながら進んだ。

『なんだあれ…』

『虫…？？』

『うん…でも殆ど死んでるな…』

『うん…気持ち悪い…』

『確かに…』

『インセクト・ローブス・ロードだね…』

何それ？？と阿呆な俺が訊くと、虫の死体の道となんともグロテスクな返事がきた。

歩くにつれ虫の量は増え続けた。

虫の死骸に混じれて五右衛門達の死体も落ちたら嫌だなつと[冗談]をかます俺に、羽樹は痛いくらいの視線をぶつけてきた。すいません。。。つと頭を下げ、再び沈黙に戻ってしまった。

【ああ…何やつてんだ、俺は…】と後悔をしてこると、ヒューッと俺の体を風が突き抜けた。

ブルブルツツと尿意が襲つてきた。【…こんな時に…】

出来るだけ我慢をして歩いていたが、尿意が近づくにつれ、足をクネクネとトイレを我慢している小学生のよう、歩いている俺に羽樹は心配の声をかけてきた。

『どうしたの？？何か歩き方変だよ？？足痛いなら少しやすむ…！』

『いや。痛いとかじゃないんだけど…』

『 けど？？？』

『 その…あの…、お手洗いに行きたお『やれこまし』て…』

あんまり離れないでね…しばしあ待ちを…と声を交わし、俺は直ぐ横の木を背にして、羽樹から見えない場所で用をたした。

ジョジョジョジョと地面に当たる尿が少し恥ずかしく、豪快に振り回して、音の鳴らないうように辺りに満遍なくばらまいた。

【 真に申し訳ない…お願いですので呪わないでください…】 と何度も咳き、チャックを閉め、羽樹の所に戻ろうとした時、俺の田に変なものが写った。

何だあれ…と懐中電灯を向け、光を当てた。

表紙に【樹海生活】と書かれた本のよつな、ノートのよつな、兎に角ボロボロの紙の集合体があった。

それを拾い、羽樹の所へ戻った。

『 お待たせ！…』

『 おそーい！…』

こんなのが落ちててや…とわざと拾つた本を見せた。みたいなもの

『 何コレ…汚い…ってか辺なの拾つてこないでよ…』 と捨てようと手をバシッとつかみ、ちょ一ぢょと待てーとページをめくつて見せた。

2月12日。

月夜の晩、ドーンといつすさまじい音と共に私の家の前に大きな墓石が落ちてきた。

私は、隕石か何かかと思い、家に落ちなくて良かつたと、胸を撫で下ろした。

2ページ目

2月13日

雨の日。私はいつもどおり食料を集めに虫たちを探していた。今日も大量と気分良く家に帰ると昨日落ちてきた石が雨に打たれ、若干綺麗になっているのに気がついた。意外と良いインテリアになるかも…と少しにやけた。

3ページ目

2月14日

一般の人達にとつてはバレンタインデー。私は、昨日の前に落ちてきた石を磨く事にした。

自前のタワシと貴重な水分をフルに活用し、半日かけて泥や苔を落とした。

すると、変な文字が書かれていることに気がついた。

【どうだ妹と二人暮らし、どうだいもつとどうもろこし】

それはいくら擦つても落ちる事は無かった。

4ページ目

2月15日

星の見える夜、私は部屋の掃除をした。客人なんて来ないし、掃除をすることに特に意味は無いが、いらない物を外に運び出した。ふと、私の目に降ってきた石が写った。四角い石が私にはパソコンのモニターに見えた。

ガラクタの山からパソコンのキーボードを取り出し、石の前に置き、

意味不明の文字の横に、

【正解を入力せよ…】を油性マジックで書き記した。ますます謎めいた石に一人でカカカカと笑い、私は少しテンションがあがつた。

と最後のページまでびつしりと毎日の日記が書き記されていた。最初の4ページは、しっかりと日記帳でしたが、5ページ目からはバラバラとめぐるだけで最後までめぐりきつた。

4ページだけしか見てないが、書き主は阿呆だ…と思つた。

空から石が降つてきた？？？

虫を食つてゐ？！？

石に落書きして笑つてゐー？

阿呆意外何者でも無いと確信した。

羽樹と顔を合わせ、少し笑えて來た。日記帳といつよりネタ帳みたいだね…と言う羽樹に俺は大きく頷いた。

俺はそのネタ帳（樹海生活）をポイとその辺に捨て、さてもおひとり歩きするか。と羽樹の手を握つた。

ドンッドンッドンッドンッ！…！
ドンッドンッドンッドンッ！…！

と突然何処からとも無く音が聞こえてきた。

なんの音！…？と羽樹が声を震わせて訊いてきたが、訊きたいのは俺も同じである…

音はロープの先から、聞こえてきた…

怖い気持ちも無かつたわけでは無いが、恐怖より興味つてね。
足早にロープを辿つて、音の下を手指した。

ロープの切れ端は意外とすぐだつた。大きな木にくくりつけられて
おり、目の前にはボロボロの家があつた。

なんだこのボロ小屋…と思い、家に近づこうとする『シ――』
と羽樹に口を押さえられ、木の陰へと引っ張られた。

『な、何！？どおしたの！？』

『だ…誰か居た…』

『え？？…』

羽樹は指を震わせその場所を指した。

目を凝らしてみてみると、人影が一つあつた…大きいのと小さいの
…顔までは暗くてはつきりと見えなかつた。
きっと五右衛門達だと羽樹に小声で伝え。

恐る恐る、近寄つた。

『……出会い……』

を残し一人で一つの影に近寄った。

一緒に行く！！一人にしないで…と言われ少し迷つたが、こんな森の中での影が人じゃなく獣だったらとするとやっぱり連れて行けなかつた。

忍び足で少しづつ距離をつめ、家の入り口と思われる所に立つている。

大きい方がドアをドンドンと叩いている…

ノックしているようにも見えるが…
獣がドアをぶち破ろうとしているようにも見えた。

巨大な雲が通りすぎ、月が顔をだし、辺りを月光で照らし、全てを映し出した。

生い茂つた草木…大量の死骸…とても大きな石…いまにも崩れそうな家…そしてドアを叩く一人。

『五右衛門！…』俺は小声で呼びかけた。

五右衛門とカオリンはビクツツと頭を四方に振り、キヨロキヨロと辺りを見回していた。

五右衛門達と分かり、俺は羽樹の元へと戻った。

五右衛門達だつたよ…と伝えると、羽樹は、良かつた…と大きく

息をし、ポトリと涙を落とした。

ゴシゴシと田を擦つて、無理に涙を止め、深呼吸して落ち着かせ、五右衛門達の元へと向かつた。

さつきまでキヨロキヨロと辺りを警戒していた五右衛門達の視線が一箇所に注目していた。

家中だ。叩いていたドアが壊れたのかな…??

虫の死骸を出来るだけ踏まないよう、ゆっくりと進んだ。

『光！…キキ！…』と五右衛門が家の中に向かつて叫んだ時は、ドキッとしたが、状況が飲み込めてくるにつれ、俺も羽樹も笑みで溢れていた。

虫の死骸などお構い無しに、大地を駆ける馬の様に走り出した。

『五右衛門！…光！…』

『キキ！…薰！…』

『優馬！…』『羽樹！…』

と俺達は要約合流する事が出来た。おお良かった良かつたつと野郎共と抱き合い、少し落ち着いた所でみんなの話を聞くことにした。

家の中に6人でいるといつ床が抜けるか分からぬ…とキキから恐ろしいことを聞かされ、俺達はつり橋でも渡るようにそおつと外に出た。

正直な所今すぐにでも帰りたかったが疲労のせいか、体が言つ事を

聞かず、下ろした腰を上げようとしなかつた。

こんな場所やからこそ、焦りはあかん！！疲れた時は休んだ方がええ。と言つ光の言葉に皆賛成し、家の横の比較的綺麗な場所で話した。

誰からから話そつかと迷いも無く光が話しだした。

『コレ見てくれ！！』

『え…』キキ以外の4人は皆同じ反応だつた。光は輪になつて座つた俺達の中心にエロ本をだしたのだ。

『コレ見てなんか思つたことあらへんか？？おかしいこととか、変わつたとこ…！』

と真面目に問う光に『お前が一番おかしいし、変わつてる…』と綺麗に皆揃つて同じ返事をした。

『皆の意見聞きたいと思つかもだけど、やつぱり先に説明した方が良いよ』

とキキが光に言つと、『うむ、せやな。と頷き本の右上を人差し指でトントントンと叩いて、『ココや』。

【2019年12月11日 第23号発売】

正直ただの印刷ミスか、こうゆう表紙にしただけだろつと思つた。

『まあ…そら、そつ簡単には信じんわな…』と光は一人で家に戻り何冊かエロ本を抱えて戻ってきた。

『全部見てみいや…』と豪快にばらまいた。

【2022年2月22日.. 第2号発売】

【2012年8月16日.. 第13号発売】

【2009年5月1日.. 第23号発売】

【2018年1月31日.. 第5号発売】

【2008年8月18日.. 第29号発売】

皆が言葉をなくし、光に注目した。ついやつを見つけた、コレを見るまではワイル少しからず疑つてたんや。と最後の本を指差した。

『うおーー』と五右衛門が真っ先に声を上げた。俺も続いて『あ…』と声を出してしまった。

『せやーー3日前に発売されたエロ本の次巻やーー』

嫌あああな視線を感じながらもパラパラとめくつて中身を確認した。見事…恐ろしくボロボロでパリパリになつた本は次ぎ発売される本だつた。

つて事は…「レは14年後なのーー??」とカオリンが一冊手に取り目を大きく開けて光に訊いた。

『やあゆう!』とになるな…』と田を閉じ、頷いて少し沈黙が訪れた。

各々の横に置いた6つの懐中電灯の光が天を照らし、中和するように月の光と交じり合つていた。

柔らかい風が俺達を包み、異次元に連れて行かれるようないや、もお既に別の世界に居るのかもしけない…
未来の本…本!?

ちょっと良いか!?と俺は沈黙を破り話し出した。

『さつさき羽樹と一緒に口に向かってる時に変な本があつたんだけ
ど…本というより日記帳かな…虫を食つて、樹海で生活してたみたい。
い。本の題名も樹海生活つて書かれてて、それつてもしかして口
に住んでたのかな？？？』

『その本つてどこにあるんや？？』と光に訊かれ、少し俯いて、氣
味が悪かつたから捨てきてた…とチラッと光に視線をやると、今す
ぐとつて来いといわんばかりの表情で俺をにらんでいた。

『はあ、すぐ近くだしちょっと取つてくるわ。』と言ひ、俺は来た
道を少し戻り、本を探した。

確かこの辺のはずだけ…

ガザつと虫達にいちいちビクビクしながら、宝物でも探すように必
死になつて探しした。

おーーあつた。あつた。と本を手に取ると。

本の下から大量のムカデ類の虫がワサワサとでてきて声を上げてひ
っくり返つた。

正直言つて…俺は虫が凄く苦手だ…見てるだけで寒気がする…

本も見つかつたし、早いとこ光達の下に戻りつとした時、田の前に
同じ本が落ちているのを発見した。

あれ？？…2冊田の日記帳かな…中を見てみると、前に見たのと全
く同じ文だった。

今発見したのが俺が先ほど捨てた本で、ムカデたちの家となつてた本の方が2冊目の本みたいだ。

足早に皆の元へ戻り、『おまたせ！』と声をかけた。

『お帰り』と言ひ既の手元には光が持つてきたエロ本があった。どうやら俺を待つ間読んでいたらしく…なんとも異様な光景に、少しだけ可笑しくなった。

『はい、これ』と一冊の本を出すと、一冊じゃなかつた？？と羽樹から横槍が入り、少し恥ずかしい体験談を話し、2冊目をGETした事を話した。

この本の内容を見て、五右衛門とカオリンが顔を合わせ、叫んだ。

『え！……』『マジカヨ……』

ビクツッと四人の視線が一人に向けられ、この日記に出てくる石、直ぐそこにあるぞ！…と五右衛門が興奮しながら言った。

嘘だろ…と思いつながらも全員でその石の前に座り、日記の内容と照らしあわすように眺めた。

『一緒にやな…』と光が言い、俺もあまりにも書かれたとおりの姿で置かれてある石に言葉をなくした。

『dance in the dark』

【どうだ妹と二人暮らし、どうだにもつととつもろい】

【正解を入力せよ…】

そして、その石の前にはエスケープのキーが壊れた、キーボードが置いてあった。

もお何が何だか訳が分からなくなた。

空から降ってきた変な文字の刻まれた石、未来の工口本、樹海生活と書かれた日記帳。

全部を照らし合わせると、いつゅうじことになる。

恐らく、世間が嫌になつた一人の人間が人気の無い樹海で生活を始めた。

食料に困つたその人は手当たり次第に食べる物を探し、拳句の果てにはその辺の虫を食つようになつた。

そんな毎日を日記に記していた。

そして、宿は今ココにあるボロ小屋、その人が自分で立てたのか、元々あつたのかは不明。

ある日、文字の刻まれた大きな石が空から降ってきて、家の横にめり込むように落ちた。

未来の工口本は恐らくその人のだらう…故に男性。

2本目のロープは樹海から出て外界（俺達の住む社会）に行くための田印だらう。『ミミでもあさるのだらう…

俺なりに頭の中で整理した。でも一つばかり気になる事があつた。

『降ってきた石に刻まれた文字…未来の本…』と光が呟いた。

俺も同感だった…恐らく皆もこの一つの事が、あまりに非現実的で、ファンタスティックに感じているだろ？

どれだけ考へても、何も俺達は検討が着かなかつた。

『ねえねえ…気になると思ひナビ…ソロソロ戻らない？？？…凄く怖い…』

とカオリンがいまにも泣き出しそうなかすれた声で呟いた。

その言葉に、何時だらうと時計をみたら、23時25分…11時半だった。

マスターも流石に心配してるとと思ひ、じつも怖いし、ソロソロ帰つたほうが良いかもねつと羽樹も言い加えると、そつだなつと皆納得し、俺達は帰る事にした。

ロープを辿つて一列に並び、ゆっくつと林道をめざした。

林道までの道のりは永遠不^{エイヨンフ}変に感じた。

歩いても歩いてもいつまでも変わらぬ風景は、精神的にも肉体的にも限界を超えていた俺達にとつては、苦痛意外何者でもなかつた。

『まだ…かな…』とキキが途切れ途切れに言つと、すぐさま光はあと少しや頑張ろうな…と励ました。

俺も何気なく羽樹を気にしていたが、フラフラといつ倒れても不思議ではない足取りだつた。

カオリンは五右衛門と手を繋いでこんな状況なのに一人だけ幸せそうにしていた。

先頭を歩いていた光は数分に一回休憩を挟んで歩いた。

ロープの括り付けられている大樹が目に入つた時には本当に涙が出るかと思った。

皆で大樹を守るようにもたれて座り込み『疲れたあ…』と大きく一息ついた。

10分の休憩を挟んで『よっしゃ帰るか!!』と光が元気に言うと、俺達も少しだけ元気になれた気がした。

自殺防止の呼びかけ箱を通り過ぎた時五右衛門とカオリンがなにやら変な紙を入れているのを目撃し、俺は少し感心した。

出口を目指し、一步一歩足を前へだしていると、一筋の光明が俺達をライトアップした。

光に目慣れしてないせいか、太陽の光を目の前で見ているように眩しかった。

『マスター…??』

マスターのヒルグランドが俺達をにらめ付けるようにハイビームで照らしていた。

俺達の姿を確認すると、マスターは車から降りて、こっちに来た。

『マスター…今電話しようと思つてたんやけど…もおきとつたん？？と光がマスターに問い合わせてもマスターは無言だった。

『マスター…おそくなつてごめんね…』と言つカオリンの言葉にも無言だった。

むしろ、しつかり握られた五右衛門とカオリンの手をみて眉間の皺がピクッと動いたようにも思えた。

『マスター…大丈夫？？？どおしたの？？』と羽樹が話しかけてもやつぱり何も言わなかつた。

マスターが何も言わない事で俺達まで無言になつた。
ふと、なにやら気配を感じ、俯けていた頭をあげると、俺の頭に雷が落ちた。

ドガツ！…！

あまりの衝撃に声すらでず、ただその場に頭を抱えて崩れ落ちた。

隣に居た光が『ドガツ！…！』と言つ頭蓋骨が粉碎したよつた音を上げて俺同様頭を抱えて崩れ落ちた。

ドガツ！…！ドガツ！…！ドガツ！…！ドガツ！…！

次ぎ次ぎと頭を抱えて崩れ落ち。

俺達全員が座り込んだ。

『バカヤロオオオオオオオオオオ…！…！…！』

とマスターが「コラの様に吠え、要約マスターに叩かれたのだと知つた。

マスターは男女関係なく6人の頭に6発、全力で拳骨を食らわし、吠えたのだ。

『どれだけ心配したと思つてんだ！！！！何時から待つてると思つてんだけ！！！！』

叫びすぎでもはや日本語に聞こえないくらいだつたが、俺達はボタボタと地面に涙を落とす事しかできなかつた。

散々怒鳴り散らかし、最後に『でも…マジでお前ら全員無事で良かつた…』とマスターがポタポタと涙を流すのを見て、俺は心の底から謝罪した。他の5人も同様に心から謝罪した。

こぼれた水を雑巾でふき取るようになりマスターは涙を服の袖でふき取り、車にもどつて変なバケツを6つ持つてきた。

一つだけもち、残りの5つを地面に置いて、俺の目の前に立つた。

まさか…水でもぶつかれるのでは…と思い、目を閉じたり開じたり。さぞ冷たかろう…

イデデデデデデデデ！！！

とバケツ一杯の塩を頭から豪快にかけられた。

『体中にこすり付ける…！』とマスターは言うが、虫に刺された傷や、木に引っかかるて出来た切り傷、体中に沁み、こすり付けるどころかもがき苦しんだ。

いてーいてーと塩の海でもがく俺を見てマスターと5人は腹を抱えて笑っていた。

しかしその笑いは一人、また一人と、絶叫に変わり、最後にはマスターだけが腹を抱えて笑っていた。

6人が横一列にならんで深夜12時に樹海の前でバタバタと足を振り、手を振り、もがいている姿はブレイクダンスでもしているようで、それはそれは素晴らしい光景だつたらしい。

闇夜のダンス…ダンスインザダーク…

『もおええやろ…深夜でもやつてる銭湯連れてつてやるから車に乗れ…!』

と汗と土と虫と塩だらけの俺達を愛車に乗せ、マスターの友人の経営している銭湯…温泉に連れて行かれた。

何あの子達…臭い…汚い…気持ち悪い…
と温泉に着くなり白い目で見られ、この上なく恥ずかしく不名誉極まりない事態だった。

顔を赤く染め、犯罪者の様に頭を隠し、そそくさと男湯と女湯に分裂し、温泉へと逃げ込んだ。

ロビーには結構人が居たが、温泉には誰も居なく貸しきり状態だった。

服を脱ぐ時に、何匹もの虫がボタボタと落ち、その度に震え上がった。

五右衛門の頭から8センチくらいの巨大ムカデが飛んできた時には
その場で失禁してしまうのでは無いかと感じた次第だ。

股間も隠さずマッパになり、『はあああ…お疲れっす…』と光と五
右衛門と三人で、紙コップに水を入れ、乾杯し、腰に手を当て、一
気に飲み干した。

『温泉…男湯』

湯煙が俺達の生まれたままの姿を包み込み、全身の疲労を吸いとつてくれるように感じた。

そのまま湯船に飛び込みたい気分だったが流石に泥まみれの体で飛び込むのは俺の善良な心が許さなかつた。

光達との会話はやっぱりあの事に絞られた。

『なあ…ども思ひ??.未来の本とか、空から降ってきた石とか。』
と五右衛門が言い出し、底からは川を下るよつに話は進んだ。

『ワイとことは、もお一回見に行きたいつて思つとる。』

『また樹海にか??.』

頭をゴシゴシと洗いながら光は軽く頷いた。

五右衛門と俺は顔を合せ、じつつの追求心は尋常じゃないな…と苦笑した。

『でも、もお一回行くつて言つても女子達や、マスターがOKしてくれるのは思わんぞ??.』

『せせな、やでワイら野郎だけでいくんぢ…』

ザーッと泡を流すシャワーの音と、ジャグジーバスのブクブクと言う音だけになり、浴室はシーンとした空気になつた。

勿論、俺も行きたくない。出来る事なら、この貴重な旅で羽樹との

時間を増やして親交を深め、我が家に帰宅したいこと」ひりだ。

一番に洗い終わった俺は、そのまま湯船に行かず、浴室で一番静かなサウナ室に向かった。

入る前に持っていたタオルを水に付け、軽く絞つて、冷たいタオルを持ってサウナ室に入った。

冷たいタオルはサウナ室で素晴らしい気持ちが良い。

タオルを頭に乗せ、豪快に股を開き、へたれきったマグナムを晒し、腕を組んで瞑想した。

キィーっと音と共に冷たい空気が入ってきた。

片手を開けて確認すると、俺より立派なマグナムを持った五右衛門だった。

【ふん。隠す事などせぬ。】と自分の大いなる意思とは裏腹に俺の膝はN極とS極の磁石の様にピタッとくっついた。同時に頭の上でもつらいでいたタオルは、丁度俺のマグナムが隠れる位置に飛び降りた。

五右衛門は頭にタオルを乗せ、マグナムを堂々と晒し、ドンと俺の横に座った。

『どうするよー?』コレが最初にサウナ室に響いた言葉だった。

『何が?/?』と俺は返したが、分かりきっていた。野郎だけでもう一回行くか?/?と聞いているのだ。

『樹海よ樹海』と五右衛門は知つていただろつと言いたげな答えつ
ぶりだつた。

『ああ…』つと適当に流し、再び沈黙が流れるかと思つた時、五右
衛門が語りだした。

『俺は、行つても良いかなつて思つてる。野郎だけ、俺達だけで行
くならな!!また皆で行くつてなると流石にそれは俺も反対だけど、
女子がいなら心配とかする必要ないし、正直言つて俺も光と同
じくらい、本と石のことが気になつてゐる。』

ふうん。つと鼻で答えると今度は本当に沈黙状態になつた。

冷やしておいたタオルもお湯になり、体内からは汗が噴出し、ソロ
ソロでた方が良いかな…つと思つた時、お先。つと五右衛門が立ち
上がり、サウナ室を後にした。

『カー!!何で今のタイミングに出て行くかな…』と一人でぼやき、
汗のしみこんだタオルを絞り、顔を拭き、よし!あと5分だけ粘る
うつと誓つた。

考えたくないと思つていても、やつぱり俺も五右衛門、光同様に、
本と石の事が気になつた。

ああチクショー!!と頬をパンパンと叩き、マグナムを覆つていた
タオルを取り、サウナ室をでた。

サウナ室の横にあつたウォーターサーバーで水分を補給し、爪先か
らゆつくりと水風呂に入った。

クウウウウウ…冷たい…体が絞られるように凝縮されるのが手に取
るように分かる。

15度という完全なる冷水に俺のマグナムも縮こまっていた。

ゆつく、頭の天辺までつかり、ゆっくり20秒数えた。

19
18
17
16
15
14
13
12
11
ブ
フ
ア
—
—
—
—

鯨が息継ぎをするように豪快に水しぶきを上げ、水風呂から飛び出た。

五右衛門と光が気持ち良さそうにジャグジーで覗いでいるのを見発見し、直行した。

『よひーー』元気に声をかけて見たが…

『ん？？』と相変わらずテンションの低い返事が来た。

まあこの重い空気は俺が作ったみたいなもんだしな……と納得し、
本と『石』の話題を出した。

『明日、朝一で本と石の謎でも解きに行くか！――！野郎だけで！』と言つた自分が恥ずかしくなるくらい声は響き渡つた。

『おう！――！』と光も五右衛門も俺の響き渡った声を搔き消すよう

力ー！ー！夏季でも露天風呂は最高だなー！ー！つと光が言い、俺達も最高だー！ー！つと夏の夜空に叫んだ。

『「つるわあああい』と一つ隣の竹で出来た壁の向ひつから聞き慣れたキュー^トな声が聞こえてきた。

『優馬氏、光氏…』と五右衛門があくびに目で俺達に訴えてきた。

俺も光もニヤリと笑い、無意識のうちに聞き手を前に出し、三人で手を合わせて、オー。っとやっていた。

作戦の指揮をとつたのは他でも無い天才児光だった。作戦開始！！
… GO !!

『覗き』

番台に座つたオッサンのよう一匹の鳥が男湯と女湯を仕切る竹の上に止まり、男湯をチラッと見て、女湯をジーっと見ていた。

憎たらしい鳥め…と思いながらも、俺達は俺達なりの閲覧方法で見学する事にした。

『誰か居てるのかあ？？』と光が聞くとカオリンから返事が来た。

『あたしだけ居るよ～』

『他の一人はもおでたの？？』と五右衛門が聞くと、スチームルームにいつたあと返事が来た。

『じゃあワイらはソロソロでるわ ゆっくり休めよ～』と光が言い放ち、ガラガラガラとドアを開け、ガラガラガラピシャー…と少し大げさにドアを閉めた。

『ココからは小声で話すデ…』

光の第一作戦は、まず相手に俺達がもお露天風呂には居ないと想わせる作戦。

出でーつと言い、ドアを大げさに開け閉めし、本体は室内には戻らず、カオリンの頭の中の男子達が戻つただけ。

その証拠に、さつきまで静かだた、カオリンが鼻歌を鳴らし、あまり上手いとは言い辛い歌声を披露していた。

『さあつて。ええ場所発見したで！』光の目が光沢を帯び、口は逆さまにした『へ』の字の様にニヤリと笑った。

どれどれ…と俺も五右衛門も、サササと爪先移動で光のそばへと近寄った。

なんと…最高のポジションだつた。隙間無くなれべられて居る竹が、口だけは竹と竹が若干曲がり、数センチだけ隙間が出来ていた。

三人がみたらしだんこの様に縦に連なり、五右衛門のマグナムが俺の顔の横にあつても微動打にせず、ひたすら女体を捲した。

カオリンのほかにも女性はチラホラと伺えた。こっちが貸しきり状態だけに女湯も貸切とばかり思つていた。

光が一時撤退の合図肩を二回叩くの動作をし、俺達に言った。

『やばいな…これは…犯罪やで…カオリンだけかと思つてたわ…』

ME TOO …と俺も五右衛門も少し躊躇した。

チラツと見たところ、カオリンを含む若い女性が3人くらいと老いた人が2人くらいだつた。

少し悩んだが、もおどおにでもなれ…俺達はあの死地から脱出した勇者だ…こんなくらいで怯むな…と、皆決意し、再びだんこのように連結した。

光が直立、俺が立てひざ、五右衛門が和式うんこ座り、通称ヤンキ

一坐りの体勢で凝視した。

夏の蝉たちが俺達の集中力を引き立て、闇が俺達の姿を隠蔽した。闇にライトアップされた女性達の生まれたての姿は、それはそれは美しく、老いた人をチラつと見たりし、脳を少し逆の刺激を与えた。静さを保つた。

いまにも俺のマケナムが戦闘体勢にならうとした。

『うむ、素晴らしい光景じやの。目の補強になるわい。』

老いたおっちゃんが立てひざで見学していた。

サササと爪先移動をし、一旦湯船に入り、「つて！！オツサン誰！！」と即座に聞いた。勿論小声で。

「ホホホ。わしもちみらと同様、ただの口いおつさんじや。」

ちみらつて…突っ込みたかつたが突っ込む気すら失せ、俺達は質問しまくった。

『おっさん、ええ歳して除きはあかんでー。』と咲の光は、「ええ歳しどのから除くんじや」と堂々と言ふ。

こつちも除いていた身……何も言い返せなくなり、仕方なく、仲間に
入れることにした。

頭は禿げ上がり、仙人かと思われるほどの立派な髭を生やし、何処からどおにても70歳は軽く超えていた……が心は青春時代の成年同様でおちやめな部分もあった。

追放…通報…されなかつただけでも俺達はラツキーだと、開き直り、今度はじいさんを含めた四人で拳を前に出し、オーッと誓つた。

先ほどと同様に、じいさんは俺の横に立てひざで並んでいた。じいさんの目はキラキラと頭に負けんぐらこの輝きを出し、全てを録画するように真剣な眼差しで見つめた。

『うー・やばー！40半ばと思われる見苦しい女体がこいつてくんで光が小声で叫んだ。

ドキッ！……や…やばい…四人の空気が止まり、じいさんにいたつては心臓まで止まりそうだった。

五右衛門が一番初めに動いた

ヤンキー座りの大勢から足の筋肉と足のバネだけでバクチュウ（三回転ヒネリ）をして最後は足のバネをクツショーンにし、爪先をピンツと立て、飛び跳ねた魚が着水するより綺麗に、わずか50センチくらいの水深の風呂に音も立てずに温泉に飛び込んだ。神業だつた……

人間、馬鹿力を發揮すると恐ろしいとは聞いたことがあつたが、あれはありえないだろ……と、俺と光とじいさんは飛び出た目を元に戻しながら言つた。

五右衛門はそのまま、音を立てずに湯から上がり、そそくさとドアを開けて室内に戻つていった。

裏切り者……という憎悪が込上りてくるが、そういうしている

うちにオバハンがドンドン近づいてきた。

今立ち上ると確実にばれる…【謝罪】・【逃走】・【二回転ヒネリ】じおするの俺！じおするのお…！…続きを読むWEBで…つとじMのようには終われないのが現実。

光も俺も何度も目を閉じては開け、を繰り返し、オバハンにレツツターンを祈つたがレツツゴーを貫き…謝るしかないな…と流石の光も諦めた。

『小僧…諦めるな』とじいさんが凜々しく勇ましく小声で呟き、ウインクをし、いきなりその場に横向きに倒れた。

『いのくせじじ…！…』と俺は顔面を踏みつけてやるひつと思つたが、光が何とかなるかもしけれへん、と俺の怒りを抑えてくれた。

その数秒後、事態は起きた。

キヤー！！！！という姿とは似ても似つかぬ可愛らしい甲高い声をあげ、係員の人と、女風呂に居た人たちがゾロゾロと集まりだした。終わった…何もかも…と俺はポトリと憎たらしく寝転がつたじいさんのボディー涙を落とした。

じおされました？…あ、あそこに覗きが…なんて会話してゐるのだから…と俺は体を震わせ、マッパでタイホされるシーンを思い浮かべていた。

ガラガラガラ。つとドアの開く音と同時に、『何をしてるんだ…！』と警備員の人人が服を着たまま入ってきた。

明らかに、入浴しに来たのではない…この状況はサルでも分かる…

『す…す…すいま』

『ちょっと手伝ってくれ！…じいさんが倒れたんや…』と光が目に涙を浮かべながら警備員の人訴えた。

は？？？何を言つてゐるんだ？？そのじじいは自ら…あ…！！…まさか。俺はボロを出さないために口にチャックをかけた。

『お前らそこで何してたんだ！…』と言つ警備員に光は迷う事無く、

『こいつ（優馬）ともお一人の連れ（五右衛門）とのじいさんと4人で風呂に入つてたらきなりじいさんが倒れて、それでおぼれるとあかん思つて、外に連れ出したんや！…そこにある連れがあんたら呼んだんちゃうんか！？』

と光は五右衛門を指差し、軽く合図を送つた。【あわせろ！…】

みんなの視線が一気に五右衛門に注がれ、五右衛門は俺と光を見ながら、『俺が呼びにいこうと外にでたら、いきなり警備員の人たちが入ってきたから、もお誰かが報告したんじゃないかと思つて。』と五右衛門も上手い事話をあわせた。

『奥さん、どおですか？？本当に彼ら覗いてたんですか？？』と警備員は少し服に汗を滲ませつき俺達を通報したオバハンに訊いた。

『確かに…その子達の横におじいさんが倒れてて…もしかしたら私の勘違いかしら。』と顔を真っ赤に染めて、恥ずかしそうに俯いた。

警備員の人は呆れたように、ため息をつき、俺達の元に駆け寄つた。

『おじいさん。おじいさん。大丈夫ですか！？』と警備員はさつき

とは全然違つ声で話しかけた。

『「ううむほんほん…」とじいさんは体を起こし、またやってしまったわい。と笑った。

『「の子達が覗きじやと? 今の今までわしと一緒に風呂で話しつたがの。この子達がおらなんだらわしは溺死しどた。ありがとなボーズ達。』と本田一回田の神業に俺は震えた。

警備員はニシココと微笑み、俺達に謝罪し、戻つていき浴室は落ち着きをとつめどした。

『ふうううううう。マジで心臓が止まりかけた。』

『ちがいねえ…』

『つむ。。』

俺達は完全に懲りた。全身の力が抜け、湯船に使つた体を支える事すら出来ず、湯船の壁にもたれ、ぐつたりとしていた。

「おゆづもんはな…とじいさんが語りだした。

『「おゆづもんはな、ええ歳になつてからやるもんじや。お前らみたいに若いうちは覗くなんてセコイ真似せんでも、おな」と遊ぶ機会など五万とあるじやろ。堂々と見ればええんじや…いかなる場合にても、喜び大ければ大なるほど、それに先立つ苦しみもまた大なり…お前さんたちにはまだその苦しみは背負えん。』

ほおおお。と俺達はエンドレスな、じいさんの人生話を体がふやけきるまで聞き、いつしか1時間以上も、じいさんの話を聞いていた。

『じゃあな小僧。』つと肩にタオルをかけ、背中越しに手を上げ、ケツをプリプリと揺らしながら、マグナムをブルンブルンと像の鼻の様に揺らし、俺達を振り返る事無くじいさんは脱衣所ではなく、ガードレールのような仕切りをまたぎ、森の闇へと消えていった。

『WHY…』

『 明日に向け就寝 』

樹海に居る時に見た月は不気味さを引き立てていたが、露天風呂から見える月は美しく、綺麗な三日月は手を伸ばせば届くんじゃないかと思わせるほど、大きかった。

そんな大きな月の美しさをさらに引き立てるのが澄んだ雲ひとつ無い夜空にある無数の星だ。

星とは何かご存知だらうか？？

宝石？？…いやいや
先祖？？…いやいや

キラキラと輝く星は分かりやすく言うと太陽なのだ。

そう。あまりに離れすぎていて、我々にはキラキラと小さく輝いているくらいにしか見えないのだ。

故に、あのキラキラと輝く星の周りにはこの地球同様にいくつもの惑星があると推測できる。

故に、宇宙人は存在する可能性が非常に高いと思われる。

故に、俺達同様、露天風呂につかり、ああ星は綺麗だ…と眺めていける可能性だつてあるのだ。

そんなことを考えながら、俺はブクブクと頭まで湯につかり、明日の朝野郎だけで行くの樹海の不安を消し去りつとしていた。

ザザーンと湯を切り、立ち上がり、脱衣所に向かつた。

光、五右衛門も俺に続くようにあがり、皆して巨大な鏡の前に座り、

ドライヤーで髪の毛をかわかした。

『あのじいさんマツパで何処いったんだろうな…』五右衛門が言
い、『マジで上せて外で涼んだるんやろ』と光は笑いながら言った。
ちがいねえな…と俺も五右衛門も笑い、髪の毛が乾いたのを確認し、
体を拭いた。

『おー！すげえ！』と光は一枚の紙を発見し俺らに公表した。

【なげーぞー！お前らー！今日はココで泊まるから。ドロドロの服
は着ず、その浴衣を着ろー！】マスターからの置手紙だった。

クタクタに疲れていた俺達にとっては温泉付きホテルで泊まるのは
最高の幸せだった。イエーイと3人でハイタッチを交わし、浴衣を
バサッと羽織つて、ギュッと帯を締めた。

最後に、カンカンに冷えたビール…じゃなくてコーヒー牛乳。

ピンク色のビニールをはずし、見慣れたマークのふたをポンっとあ
け、キーンっと乾杯し、腰に左手をそえ、若干反り返り、コーヒー
牛乳を一気に飲み干し、『カーッツツツ…うめえ…』っと曰
をギュッと閉じ、頭を2~3回横に振る。という動作を3人とも綺
麗に揃つてぱっちりきめた。

流石に俺達が1時間半以上温泉に入っている間、マスターは友人と
飲んだ暮れ、すっかりお休みモードだった。

一方女性方はとこつと、まだお風呂から出てない様子だ。流石に女

は長いな…と思ひ俺達はマスターに渡された鍵の部屋へと向かつた。

809号と書かれた鍵に合う部屋は8階にあつた。『809…』『…やな。』がチャッと光がドアを開けると、和風の畳のなんともいえない香りどがクーラーの程よい冷たさの風に乗つて俺達の鼻を刺激した。

目を閉じ、鼻から勢い良く吸い込みその香りを楽しみ、部屋の明かりをつけた。

『（（（オー！…！）））』

真っ白なシーツの布団が3つ綺麗に並べられていた。う~ん。良い匂いだ…と枕に顔を擦りつけ、ほんの10秒で眠りにつけそうな気持ちよさだった。

いかんいかん…!…こんな所で寝てしまつては時間がもつたいない…眠い体を起こし、冷蔵庫に入っていたコーラを片手に、出窓の椅子に腰掛けた。

俺の前の椅子に光が腰掛けた。

五右衛門は睡魔にやられ、グーがグーガと健康に鼾をかいて綺麗に敷かれていた掛け布団をぐぢゃぐぢゃに丸め抱きかかえて眠つていた。

『光…ちょっと良いか??』

『なんや??』

『実は…』

『何…マジか!!』

いや、まだ何も言つてねーだろ…と本題を話した。

『カオリンさあ。じゅやら五右衛門に恋してゐみたいだぞ…』

『は！？ホンマか…？』

飲もうとしていた缶コーヒーを机に置き、光は目を丸くして、驚いた。

『「うむ。じゅやら五右衛門…今日…いやもお日付変わったから昨日か、樹海でカオリンの様子みて少し不思議に感じてな。羽樹にじつそり聞いてみたら斤思い中みたいだそうだ。』

『ムムムムー！3人の中でも格段にかわいらしーあのカオリンがよりによつて3人の中で一番ふつ細工な五右衛門に恋焦がれてんのか？？』
つとグイグイグイと缶コーヒーを一気に飲み干した。

『うむうむ。それには、カオリンが異性に恋をしたのは初めてらしい…』

なんと…！…と光は何も知らずに幸せそうに眠る五右衛門に空になつた空き缶を投げつけた。

コーンと頭に直撃したが、五右衛門は少し寝返つて頭をポリポリかくだけで、再び豪快に鼾をかき、幸せそうに眠りに付いた。

『幸せものめ！カオリンはえーよなあ。キキは、色々厳しいねん。

ふむふむ、そつかお主も仲間よの。と俯く光にポンと手を当て俺も羽樹の事を語りだした。

『

『羽樹も一緒にいて楽しいし、元気になれる…でも色々と厳しいんだよな。。。』

『ワイもキキとおつておもういんやけど…』

はあ…俺ら絶対に尻に敷かれるっぽいよな…つと一人して大きな大きなため息を吐いた。

『せやかで、五右衛門はホンマに氣づいてへんのか??今日ずっとふたりでおつたんやろ??』と少し涙ぐんだ目を擦りながら光は再び五右衛門の話にもどした。

『いやあ。五右衛門さんも多分まさか力オリンが好きになつてくれてるなんて思つて無いんじやないかな??俺が見てた感じだと…力オリンは相当べた惚れしてるぽいが…』

『五右衛門にはおしえたらへんのか??』という光の意見に俺は『カオリンの初恋だし、カオリンに任せよう』と言い、光もそうだな…と小さく頷いた。

ぼんやりと浮かぶ月を見ながら、久しぶりに光と語り合つた。

光と語り合つたというより、偉大なお月様に俺達の悩みを聞いてもらっていたのかもしねえ。

静かに、何も言わずに聞いてくれるお月様は、時に流れ星を流し、返事をしてくれたりもした。

結局、最後には五右衛門とカオリンの話に戻つていた。

『まあ、五右衛門が相手ならカオリンも幸せになるだろ…俺らの知らん奴よりは全然良いはずや…』

『せやなーー!』

光は立ち上がり五右衛門にぶつけた空き缶を拾つて、『ハハハ箱にして、明日早いしもお寝るでーー!』と布団にもぐりこんだ。

【俺も寝るかな】と電気を消し、月明かりで眩しい出窓の襖を閉め、俺も就寝した。

明日も無事であつますよ!』……おやすみなさい。

『カオリからカオリンへ』

。リハビリテーション施設で、リハビリテーションの専門家による定期的な評議会が開催されています。

あたしつてそんなに、長風田あるタイプじゃないんだよね……
キキちゃんも羽ちゃんも見やすさるよ……

ボコボコと酸素がマグマのようになわ立てているジャグジーバスに3人で入つていたけど、キキちゃんと、羽ちゃんの長話＆長風呂に着いていけなくなり、あたしは再び露天風呂に行つた。

ヒューーっと夏なのに冷たい風が抜け、ブルブルッと強制的に体を振るわされた。

[た め に]

ガラガラつと中に戻ろうとすると、キキチャンたちの主婦顔負けのスペシャルトークが耳に入り、仕切りをまたぐ事無くドアをしめた。

仕方なく、露天風呂につかっただ。チラッと手を見てみると、シワシワになり、ふやけていた。

『五右衛門、光、優馬～誰かいる？？』…当然の様に返事は無かつた…ってあたし何言ってんだろ！…と少し頬を赤く染めた。

【はあ 暇暇】

空を見上げると沢山の星達が輝いていて、ほええっと遠い過去の記

憶がよみがえつてきた。

キーンローンカーンローン…

『力オリ!! 今日部活はどおするー?』

『あーあたしはパスピス、ってかメンドクサイしもお行かないーつてかあの先生うそこいんだよね… キモイし臭いし… 2年間我慢したけど、3年からは部活行かないー!』

そう… 実はあたしはつい最近まで、こんなブリーブリの可愛いかおりちゃんではなかつた。

高校2年も終わり、留年する事もなく、3年に上がれたあたしは、またまたキキちゃんと羽ちゃんと同じクラスで、少しほつとした。

『また一緒のクラスだねー!』と羽ちゃんの言葉に随で素直に喜んだ。

3年4組… か… 男子の列をズラーッと田を通した所、2年の時にあたしに付きまといってきた男子がこないことにせりじまつとした。

あたしは入学式の日に田立つように遅れてきた、田中洋介こと、五右衛門に一田ぼれしてしまつたのだ… 彼に続くように優馬と光も遅刻し、教室に入ってきたけど、あたしの田には五右衛門しか映つていなかつた。

ポート… とくわえていたオレンジ色のペンが床に落ち、ハツと我に返つた。

え!? まさかね… ほんの30分前まで男何てクソ食らえ… って思

つてたあたしが、今日始めて会った子に恋を…??

ないないないない…っとセツトした髪の毛がバサバサになるくらい頭を振り、深呼吸し、高まる心拍数を抑えた。

3人は遅ってきたこともあり、あたしより黒板に近い前方の席に座つた。

『惚れてなんか無い…！…惚れてなんか無い…！…惚れてなんか無い…！…』

何度も頭では、否定したが、あたしの視線は気がつくと彼をロックオンしていた。

『田中君と知り合い??.』と後ろに座っていたキキちゃんから小声で話しかけられた時は心臓が破裂してしまっては無いかと思つ何度も心音が体中を駆け巡つた。

ドクンッ…！…ドクンッ…！…ドクンッ…！…ドクンッ…！…

『違う違う違う違う違う違う…！…』と人生でこれ以上に無いくらい赤面していたあたしを見て、キキちゃんは田を細めてニヤニヤと笑い出した。

惚れでんだ!!…の言葉を第三者から聞かされ、あたしの魂はどこへやら…意識が朦朧とし始めた…やっぱり、あたし、惚れてる??

今まで異性を好きになつた事が無かつたあたしは、高鳴る鼓動を直ぐには恋をしているんだと自覚する事が出来なかつた。

シンシンッと突つっこてくるキキちゃん、いつも通り攻撃する事が出来ず、あたしは土偶の様に固まつた。

キーンゴーンカーンゴーン…と、鐘が鳴ると同時に、土偶の化した体を元に戻し、キキチャンと羽チヤンの腕を引っ張り、渡り廊下まで有無言わさず移動した。

『ハア…ハア…ちょ…ちょっとカオリ…?…どうしたの?…?』
何も知らない羽チヤンは驚き、少しごめんなさいって気持ちだつた。
にも関わらず『もお何も言わずに聞いて!…!…』とあたしは強引に
話し出した。

『あたし…恋しました…』

『えー…?…?…?…?…?…』と頗る驚く羽チヤンと『やつぱり…!…』と改めて納得するキキチャンに細かく説明した。

「と書つても【一皿まれしかけった】で全て終わりなんだけどね…
『と言つて…彼の情報色々教えて…!…』と少しだけ頬を赤くし、
隠すように頭を下げてお願いした。

『えーどうしようかなあ』と羽チヤンもキキチャンもからかつて
きたから、ついつい、キレイそうになつた。

略

『「」あたしが書つた言葉を書き記しておいた印象が酷く崩れちゃ
うの、想像にお任せします

略

『「冗談じゃん！」「冗談！！勿論協力するよ！…』つと二人とも快く引き受けてくれた。ほつとした。

入学式も終わり、休み時間になり、二人から彼の情報を色々と貰つた。

『田中君つて高橋君と土屋君とすつごに仲良いらしくよ！…』

『田中君つて頭は良くないけど、運動神経はめっちゃ良いってさ！…』

！』

『田中君つて意外とモテテるみたいだよ、うちには全然タイプじゃなかつたから少し驚き。』

『田中君つて…』

最後にキキチャンから放たれた言葉にあたしは絶望を感じた…最初の恋…実らない…恋だった…と涙腺を刺激し、涙が滝の様に流れ落ちた。

『ちょっとカオリ…！大丈夫？？』…大丈夫ではあるはずが無い…だつて、今日芽を出したあたしの片思いが、ものの1時間で踏み潰されたのだから…

『カオリだつて、女の子らしいと…』…ぱいあるじゃん…！…そう。最後にキキチャンが言つた言葉は…田中君つて女の子らしい可愛らしい子がタイプみたい…これだ。

あたしは、自分で言つとさらに性格が悪いと叩かれるかもしないけど…ルックスはそれなりに良いほうだと、自分でも感じている。現に高2の時には、色々な男から告白された。

でも…可愛らしさ…女の子っぽさ…ってのはあたしにはまるで無い…見た目は美人でも性格美人とは無縁だつた…人生初の恋をした相手がよりによつて性格美人…女の子がタイプだと聞かされた…

溢れ出す涙を自力で止めようとせざ、いつそのまま、脱水で死んでしまえば良いとおもつた。

泣きすぎて脱水で死ぬなんて阿呆の考える事…なんてことはあたしが一番理解していた。

恋が実らず泣いている子達の気持ちが今まで全く分からなかつた…けど今なら痛いほど分かる気がした。

潤んだ瞳に眩しい太陽が中庭で座り込むあたしを見つめていた。

『変われば良いじゃん…』…何を無責任な…人事だと思つて…！この恩知らず…！…馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿…！…といつには励ましてくれる羽チャン達にもハツ当たりした。

『そこを直すんでしょう…あんたのが馬鹿だよ…』とキキチャンから片思いが崩壊したての女の子には痛すぎる厳しい言葉が飛んできた。

『つむらも協力するからさ…』と今度は、優しい言葉飛んできて、思わず、抱き付き枯れかけた涙をまた噴水の様に噴出して号泣し、変われるかな？？？…変われるかな？？？…と泣きじやくつた。

何の迷いも無く『大丈夫…』と言つてくれる一人に背中を押され、あたしは恋して女らしく変わるんだ…！…と決意した。

『カオリからカオリンへ』

キーンゴーンカーンゴーン

『あーーーやっぱーーー』

2時間目授業の始まりの鐘がなり、あたし達は中庭から教室まで走り出した。

女らしくとは何ぞや…あたしはまずセレから考えなければならなかつた。

キキチャンや羽ちゃんの言づからしさってのは全然理解できなかつた。

そもそも…言つちや悪いけど…あの一人も女らしいとは思えない…

冷静に考えれば考えるほど、憂鬱な気持ちになつた。センチメンタル…
2時間目は役員決めらしひけど、今のあたしにはそんな事を考えるほど頭に余裕は無かつた。

とか言いながらも『3人一緒に何でも良い…』とちやっかり、発言した。

結局あたしは、実行委員になつていた。

実行委員つて何だろ??.まあ3人一緒に別にどんなでもいいか…
つと再び女らしさについてあたしは思考をめぐらせた。

『高橋！…………』『田中！…………』『土屋！…………』と言つ先生の声が耳に入り、と言つのは嘘で『田中！…………』と言つ先生の言葉だけが耳に入り、呼ばれた3人よりあたしの方がびっくりした。

どうやら、あたしの恋をした殿方は相当、変わり者らしい…役員決めにも関わらず友達と話していく、忘れていたようだ…

でも、ちょっと笑えて来た。アハハハハと心の中で笑つたつもりが、表面上にも出てきて、ニヤケ顔になっていた。

先生が『残りは…実行委員！…実行委員！…実行委員！…の3つだ！…』と全部、実行委員じゃん！…と心で鋭く突っ込んだが、同時に疑問が浮かび上がった。

【実行委員？？】…あたしは何だっけ？？？【実行委員】、何だか似てる名前だなあ…ええええ…

と羽ちゃんとキキちゃんを振り返ると呆然と口を開けていたが、あたしを見るなりグツッと親指を立ててウインクしてきた。

あたし達3人もコレは想定外の事で、正直皆びっくりした。

神様はあたしと田中君を応援してくれているのかな…と少し嬉しくもなつたが、ドクンドクンと心音が唸りだした。

全員の役員が決まった事で、先生は5分間の休憩てくれた。

あたしは、キキちゃんと羽ちゃんの元へ行き、思いつく限りの女のこらしさを話した。

『今日からあたしの事はカオリンって呼んで……』『はい？』

『それからあたしは今日から少しの間ぶりっ子する……』『ほえ？』
？』

『今までの過去のアクティブなあたしは消去して……』『ええええ
ええ！……』

お願い！…とあたしは何度も頭を下げた。

顔を見合させて呆然とする、二人も『分かったよ 協力する！…』
と大きく頷いてくれた。

あつという間に5分が経ち、班決めに入った。

あたしは、ぶりっ子、ぶりっ子と呪文の様にブツブツと呟き、色々
な想像をした。

先生が班決めについての話をし始めた。…正直最初の方は全然聞いてなかつたから覚えてない…あたしが覚えてるのは『実行委員』と
いうキーワードがでてからの言葉だった。

『最後に実行委員の人は実行委員班として班を組んでもらうので班長だけ決める事！…質問は一切認めません！以上！』

この言葉に、一瞬、あたしの思考回路はショートしかけた…あわわ
…あわわ…

今日出会い、今日恋し、今日同じ役員になり、今日同じ班になる…
こんな事ありえない…

あたしは羽チャンとキキチャンの所に行き、心の準備が…と弱気に呟いた。

『何言つてんの…– 憲にラッキーじゃん…』んなチャンスめったに無いよ…』とキキちゃん。

『やつやつ…役員も班も同じになれるなんて神様はカオリの見方だよ…』と羽チャン。

そおかなあ。。。つと自信無さげにあたしはチラシと班員となる男子を見た。

向ひつは向ひつで固まつており、いつを見ていふような感じがする…

田中頬がチラシといつちを見て一瞬視線が交じり合つた。ボフ…つと囁ひの音を上げて、あたしの頭の中は真っ白になつた。

『それでは行きますか』と羽チャンが男子の所に言つて自己紹介でもしようと言つ出した。

『無理無理無理無理無理…』と全否定したが、だめ!覚悟を決めなさい」と腕を引っ張られ、連れられていった。

男子が一ぱりに気がつき、キキチャンが最初に自己紹介をしだした。

『私は井上嬉紀。友達とかは皆キキって呼んでるけど好きに呼んで良いよ。よろしくね。』

【えええ…全然キャラがくない…】と驚いているつまこ一瞬であたしの番が来た…

もお行くしかない！…とあたしは覚悟を決め、できる限りの表現で頑張った。

『あたしは内藤薰。キキと一緒に名前で呼んでくれて良いよ。カオルじゃなくてカオリね。皆カオリンって呼んでるしあよんでも！ヨロシクウ。』

やってしまった…

名前で呼んでくれて良いよ。と書いたのばから皆カオリンって読んでるからなお呼んで…

これじゃあ可愛い以前にただの馬鹿じやん…とウルウルと田を濡らせ、キキちゃんを見たけど、あたしに気がついてくれなかつた。

この一時間くらいの間に積み上げてきた積み木の山が一気に崩れようとしていた。

質問タイムに入つてもあたしは、何も質問する事なくそしてされる事無く、ただただボーッとしていた。

ああ、何かだるい…はあ…と少しため息交じりに息を吐く。カオリンは何歳なの…？と男子の誰かに聞かれた。

あたしはとつさに25歳と答えてしまつた。実はコレはあたしの癖だつた。歳を聞かれるとき5歳（女が一番綺麗な時期…と勝手に思つてるだけ）。

えーと驚く男子に、嘘でないと黙つとケラケラと笑われ、あたしの恋は終わつたと思った。

⋮

あれから5ヶ月かあ…すっかり天然キャラも定着してきたな…と空に浮かぶ二日月を見上げ、温泉に涙を混ぜた。

『カオリンからカオリへ』

月から日を離し、大きな空をぐるりと一周見回した。星の数に目がくらみそうだった。

パサパサパサつと一羽の鳥が横にある森から飛び出してきて、温泉をチュポチュポと突付いて顔を突っ込んでいた。

少しするともお一羽やってきた。さっきのより一回りくらいテカイ…少し怖いな…って気持ちもあつたけど何故か動けなかつた。

2羽は寄り添うように並んで、一緒に顔を突っ込んではブルブルと振るえ、何事も無かつたかのように一緒に夜空に飛び立つた。

…「んな偽りの自分で良いのかな…」と思いつと涙がポタポタと落ち、音も無く温泉に吸収されていった。

一番最初に恋したあたしが、いまだ全然発展なし、それに比べてキチヤンや、羽ちゃんは…と思つとますます泣けてきた。

少ししたら、男子に対する苛立ちが湧き上がってきた。

『もお…大体さ…活発な羽ちゃんとキキちゃんと一緒に天然のおとなしいあたしが一緒に居るわけ無いじゃん…共通点全く無いし、その辺を不思議に思つて少しばかり感づいてよ…鈍感すぎて嫌になる…それ…』

それに…それに…と天然キャラを演じてきた今までのストレスが一気に噴出し、あたしの頭で愚痴の温泉が出来上がった。

『カオリン…』 と叫び声にドキッと首がついつなぐりこの速さで振り向いた。

キキチャンと羽チャンか…ほっとすると力が抜けた。

『もお…びっくりしたやん…』 とまだ残っていたストレスを二人にぶつけた。

ぶつける間、一人が何も反撃をしてこず、うんうん…と全部聞いてくれた事に今度は悲しみが溢れ出して来た。

『もおやだ…あたし、五右衛門諦める…このままじゃ自分がおかしくなっちゃいそう…』

結局この5ヶ月片思いを続けて何も出来なかつたな…やつたと言えば自分を偽つた事くらい…

『もお諦めるならさ、本当のカオリを見せてみたら?/?/?』 と羽チャンが言つと、キキチャンも『それが良い…』と決定事項の様にあたしの意見は無視で話を進めだした。

話し方がぎこちない…何か怪しい…そんな雰囲気が漂つていた。女のカンつて奴かな。

墓穴を掘つたな…！

一人の会話で『もしかしたら五右衛門の好みは元気な子だったのかもしれないし…』 と言つ羽チャンの言葉があたしの耳でリーピートされた。

あのや…と一人の会話を強引に割った。

『一つ聞いて良いかな？？？キキさん、羽さん』『羽さんって…』

『正直に答えてね。あなた達のためにも…』あたしの言葉に一人ともドキッとした表情を見せた。

『五右衛門のタイプひどおゆう子だつ子？？？』

『可愛らしき…子…』

『ホントに？？』

『うん…』

『ホントに？？ホントに？？』

『うん…』

『ホントに？？ホントに？？ホントに？？』

『……ううと…』

『実は…あの時、すっかり五右衛門のタイプの人を聞くのを忘れて…それで…男子に一番人気ありそうな…その…』

『めん…！…と二人が、お湯すれすれまで頭を下げて、謝った。

はあ…やっぱり…

このまま沈めてやろうかと思つたけど、気がつかなかつたあたしも悪いし、それに自分の好きな相手を友達に調べさせたのも悪い…

と自分でも少し反省し、聞こえないくらい小さい声で『『めんね…』とあたしも謝った。

下げっぱなしの一人の頭を『えい！』つと押し、一人はひっくり返った。

『アハハハハ！』これでいいよ』つとニーッコリ笑つて許してあげた。

もし天然キャラだつたせいで五右衛門に嫌われてたりでもしたら…こんなもんじゃすまなかつたけどね と付け加え、一人をギロリと久しぶりに目を細めにらめつけた。

『力オリ…だ…』

羽チャンの声であたしは心に引っかかっていた大きな塊がシューっと除呪されるようにすつきりした気分になつた。

『ふにゅ…なんだか疲れた…』

露天風呂から上がり、室内のお風呂にも入る事無く脱衣所に向かつた。

時計を見るところを回つていた…

『3時間以上入つてたなんて…』

『ホントだ…』

ドライヤーで頭を乾かし終わつた頃には3時半を回つていた。

体脂肪計付きの体重計があつたので、久しぶりに体重を量つてみた。

『42・1キロか…』

今日めっちゃ疲れたのにあんまり体重は減つてないな…それに何だ

かフルマラソンの距離みたい…

羽チヤンが乗ると44・3キロ…とで、ニヤリと微笑むと、羽チヤンは自分の胸を指差し、勝利の笑みを浮かべていた。

逃げるようにその場を立ち去り、100円で牛乳を購入し、グビグビと飲み干した。

『げ…』

すっかり忘れていた…服がベタベタ…それに凄い臭い…ロッカーのドアを開けたとたん凄い異臭がモアモアと漂い、塩と泥まみれの服を親指と人差し指でつまみ、羽チヤン達に見せた…

『う…そお言えば、着替えマスターの車の中だよね…』

『はあ…』とため息をはいて、渋々気持ち悪い服を着ることにした。

三人とも、気持ち悪い服を着終わって、脱衣所を出た。

『あれ??何これ…うちらの名前が書いてある』

【女湯には入れないので入り口に置いておく。気がついたら着替えてその部屋で休むと良い。マスター】

浴衣と810号と書かれた鍵が置いてあった。

アハハハハ…ハア…と空笑いからため息へと変わり、再び体を洗いにお風呂に入り、810号室に付いたのは4時を回っていた。

あたし達は明かりをつける事無く、倒れ込むように眠った。

【今日は本当に御疲れ様：バイバイ、カオリン】

『再び海へ』

輝かしい太陽もまだ出てない午前5時……五右衛門によつて俺は起こされた。

俺を起<じ>し終えると今度は光を起<じ>しに豪快に布団をめぐり飛はした。

『お前、起れぬ………』

五右衛門のちよつとした起こり口調すら、眠気あまり聞こえなかつた。

昨日あれだけ体力を消費した上、寝るのも24時を回っていたと言つたのに、この男は…

『おー!! 樹海いくんじやねーのか!?』

ああ……：そうか。今日は朝一で樹海に行くんだつたな。

嫌がる体を無理に起こし、バスルームで顔を洗つて、強引に眠気を吹っ飛ばした。

同様に光もフラフラと洗顔し、要約3人が目を覚ました。

『よつしゃ！ ほな少し集合やー！』

光に呼ばれ、オーシャンビューのテラスに集合し、朝日が昇るのを見ながら、作戦会議をした。

作戦会議とは名ばかりで、実の所は朝食をとつて、絶景の海を眺めながら雑談しただけだ。

一応計画みたいなのは立てた。帰宅時間と飲み物は忘れるな。それだけだ。

では行こうか……と五右衛門が張り切り口調で言い部屋を出た。念のため俺は羽樹に『光達と散歩していくねー!』とメールを入れておいた。

樹海からこの温泉までマスターの愛車で10分だったが、歩くとすさまじい距離に感じた。

『それにしても、遠いな…』

『だな…』

『せやな…』

徒步でひたすら歩き続けること45分…要約俺達は樹海の入り口の駐車場に着いた。

駐車場の角にある、自販機でジュースを買い、三人とも一気に飲み干した。

『だあああーー! お疲れーー!』

『おうーー! お疲れーー!』

『いやああ。疲れたなーー!』

地面に座り込み、疲れた、疲れたと己の疲れを強調しあつた。

整備されてるとはいえ山道の車道を1時間近く歩くのは本当にしん

どかつた。

『さて、帰りますか！…』

『（（おうーー））』

つてあほか！！

三人とも疲れた…帰りたい…で意見は一致していたが、口々まで来て引き返すことは出来なかつた。

と言ひか、体が樹海に吸い寄せられるようにも感じた。

林道つてこんなに短かつた？？？と思ひほゞ、ロープを括り付けた大樹は直ぐに姿を現した。

『口口や口口…』

『意外と近かつたな。』

『つむ。口口からがしんどいけどな…』

死地もこんなに短かつた？？？女性陣がいないせいか、樹海の死地もスムーズに進むことができた。

変わりに女性の癒しが無くなり、疲労は蓄積されていった。

樹海に入つて30分で俺達は昨日の小屋に着いた。

『樹海の中より、温泉から樹海までの道のりのが長かつたな…』五

右衛門の眩きに、俺も光も【うむつむ】と大きく頷いた。

夜とは打つて変わつて明るい樹海は意外と良いところだなと感じた。虫の死骸は相変わらず大量にあるのが気になるが…心地よい風が木々をすり抜け、俺達を癒してくれた。

『ん？？？……確かこの辺だったよな？？

『せやな……』

昨日俺達が家の外に持ち出したエロ本などなどが綺麗をつぱりなくなっていた。

俺達の後に誰か来て持つていったのでは……？？と五右衛門が言ったが、俺も光もそれは無いだろ？……と無くなつて居る事に疑問を感じた。

『考へてもしゃあないな……無くなつたもんは無くなつたんや！！家の中にまだ残つてたしそつち見てくるわ』

んじゅ俺も……光が開き直つて、家にある本を見に行くと、五右衛門も一緒についていった。

んじゅ俺も……と結局3人そろつて家の中に入る」と云した。

ギギギギギギギと嫌な音を立て、ドアは嫌そうに開いた。

おじやましまあす……と少しこ声でささやき、俺達は中に入った。

ギイギイと一步一歩、歩くたびに床が泣き、シーンとした空気を切り裂いた。

んあ？？？と言葉とは言ひ辛い声を上げたのは光だった。

『家の中にあるわ……』

はあ？？？俺も五右衛門も何を言ひてるんだ？？とばかりに顔を合

わせ首を傾げた。

『せやから、昨日外に出したエロ本と、優馬が拾ってきた日記がここにあんねや。』

w h y . ? ? ?

知るか？

『……地下……』

足場の良さでうな角に固まり、俺と光は昨日の日記を、五右衛門は家の中を見回った。

『おこ、二二二階もあるんだな……』

『せや、ちなみに地下もあるみたいやド』

へええっと五右衛門が一階に上がらうとしているが、あかん……やめとけ……と光が叫んだ。

ガコンッ……！

『ウオッ……！』アーッ……マジでマジッた。』

五右衛門が階段の一階田に足を乗せると、あたまじこ音をあげて、階段はつぶれたのだ。

『せやからあかん、ゆーたのこ……

『おせーよ……』

結局2階にはもお上がる事は出来なくなつた。
上がれるかもしけんが、命の保障は無い……そんなところに誰があがる。

『なあなあ。ちゅつと地下に降りてみんか？？？』

2階にあがるのが不可能になつたことで五右衛門は地下を見よつと言つ出した。

持っていた日記を床に置き、五右衛門が覗いている穴、床が抜けた場所までそろりそろりと歩みより、俺も光も覗き込んだ。

少しの沈黙が流れ、『（お前が行けよ……）』つと俺と光が同時に五右衛門を見た。

『アホか！』ココは正々堂々ジャンケンだろーー！いまどき多數決何て嫌がらせも良いとこやわ！』

五右衛門の意見に異議を唱える事もなく、ジャンケンで決める事にした。

『（最初はグー　ジャンケン！　ポン！　）』

五右衛門　チヨキ

光　チヨキ

俺　パー

よつしやあーーーっともの凄い勢いで喜ぶ一人を背に、俺は本氣で泣きそうになつた。

『3回勝負にしようぜーーー！』と張り切つて言つてみるが、五右衛門には懐中電灯を渡され、光からはコレ結び付けとけとロープを腰に巻かれた。

行つてきます……コレが俺の人生最後の言葉にならんことを祈りながら、穴から地下に向かつた。

ロープを結びつけた柱がメキメキと嫌な音を立てるたびに、へし折れるのでは無いかと不安になつた。

光達の姿が見えなくなると、毎秒1回くらいのペースで『おーい。ちゃんと居るか？？』と光達に問いかけた。

『おう！－居るから安心しin－』つと返りてみると少しほほとしたが、直ぐに不安が勝り、再び問う。

時に一人が俺をからかって、返事をせず、無視した時には、大量の涙が溢れ出し、『おい！－！光！－！五右衛門！－！』つとやけにデカイ声で話しかけた。

カカカカカつと上から笑い声が聞こえてくると、恐怖と寂しさと不安が全て怒りへと変わり、血管がはちきれそうにもなつたりした。

『おう！－着いたぞ！－！』と下から上を見ると光と五右衛門が覗いていた。

『何があるか？？？』と五右衛門にきかれ、辺りをみわたした。

1階とは違つて、地下は真っ暗で懐中電灯無しの裸眼では全くと言つて良いほど何も見えなかつた。

おまけに、空気が格段に悪い… 大量のホコリを吸い込み、何度もむせあがつた。

懐中電灯の光明が変なビンの行列を映しづくづくづくつと体中が震え上がつた。

『ああ。なんかあるな…』と小さく返事し、何があつた？？？と聞かれるまで口を閉じた。

『虫の缶詰…ビン詰めがあるわ…芋虫、カブトムシ、ムカデ、Mr. G…』

『「…」つと五右衛門達もそれを想像したのか、手で口を覆つた。が、現実は想像をはるかに超えていた。

テレビで見るより生生しく、芋虫にいたっては、恐らく100匹くらいの芋虫が一つのビンにまとめて入れられており、見るだけで恐怖を感じた。

そんな気色悪いビンが側面の棚にずらつとなれべて置いてあった。

ふと頭に浮かんだのは、日記に書かれていた、言葉だった。

【私はいつもどおり食料を集めに虫たちを探していた。】

うッ…っと嘔吐しかける口元を手で押さえ、何とか正氣を取り戻した。

家の前の階段に大量の虫の死骸があつたのは、こここの住人が食料（虫）を集めすぎて、瓶詰め状態で放置し、虫達が生きている間に食べきれず、死んだ虫たちをこのビンをぶちまけるように玄関にしてたのか…

と家の前の大量の虫の死骸と、この家を囲うように虫達の死骸がばら撒かれていたのが納得できた。風が何かで玄関から飛ばされたのだろう…

『他には何も無いか？？？』と五右衛門の無責任極まりない声が耳に入り、イライラしながらも地下の暗い部屋に懐中電灯の光をあたえた。

これ以外には特に何もなさそうだ……

あるとしたら、冷蔵庫のよつな箱…」んな物を五右衛門達に報告するとまたもや無責任極まりない言葉…開けるーーーと書いつ言葉が飛んでくる。

よつて無視。

意外と広い地下をくまなく見渡し、ベットみたいな物がある」とを確認し報告した。

『それ以外は何も無いか？？？無いなら引き上げるぞ…』

『今すぐたのむ…』と返事し、五右衛門達が口一言を引き出した。

凄いゆっくり体が宙に浮かび、その間も懐中電灯で回りを見ていた。

え――――――? 何だ――――! 今の――?――?――?

揺れる体を何とかバランスをとり、再び懐中電灯を向けた。

! • ! • ! • ! • !

『早く上げろっ…………』俺は産まれて初めて腹の底から声

を出した。

真つ暗な倉庫のような地下室で俺が見たものは人間だつた。俺が向けた光で、眩しそうに眉間に皺をよせ、目を細めて、こちらを伺つていのだ。

バタバタともがき暴れる俺を、『動くな！動くな！』と五右衛門達は言うがそんな事不可能だろ。

俺だつて、一刻も早く引き上げて欲しい、できれば一人がスムーズに引き上げれるように大人しくしていこうだ。けど…体が勝手に振るえ、脳は【早く脱出せよ】と命令を出し、手は無理やりにでもロープを上ろうと俺の意思とは別に勝手に体がバタバタと暴れるのだからどうしようもない。

二人に引き上げてもらつてからも俺の震えは少しの間止まることは無かつた。

襲つてくるわけでもなく、ただじつとこっちを見つめていた死地の住人はどこか見覚えがあるような顔だった。発汗は酷かつたが振るえも大分おさまり、一人に兎に角一回外に出ようと、必死で声を出し家の外に出た。

大丈夫か？？？…

怪我でもしたか？？？…

お化けでも居たのか？？？…

色々な質問を一人はしてきたが、答えは全て『否』ふたりもまさかこんな所に人間が今も住んでいるなんて思いもしなかつたんだろうな。

五右衛門に渡されたアクエリ亞スを一気に飲み干し、要約大きく深

呼吸が出来た。

『地下室に…人が居た…』

え！？と当然の様に驚く一人に、どこかで見たことがあるような顔だつたと付け加えた。

『人形の置物を人間と見間違えたんじゃないのか？？？』 とまだ信じきれない五右衛門が訊いて来た。

…そうかもしない…けど、それは多分【俺の見間違いであつて欲しい…】と言う俺の望みであつて、恐らくあれは本物だつと、俺は小さく顔を横に振つた。

『まさか…死体やないよな？？』 と光も少し声を震わせて訊いて来た。

否…

『間違いなく生きてるな、俺の目と奴の目が合つたし…あれは死体じゃない…』 力強く訴え、俺はそのまま大の字になつて寝転がつた。

何処で見たんだろうな…

確かに見覚えのある顔だつたなあ…

綿菓子のような雲が軽快に青い空を風に乗りながら散歩し、それと同時に周りの木々が会釀するようにザワザワとお辞儀した。木に張り付いて一イ一イと鳴っていたセミたちも大きな風と共に飛び立つた。

俺の顔の横の雑草は飛ばされないよう根に力を注いで踏ん張つていた。

野に咲く…花の様に…雨に打たれて…

野に咲く…花の様に…人を和やかにして…

何故か俺は、頭の中で【野に咲く花】を歌いだしていた。

恐怖の体験からまだ10分も経つていな無いと言つのに…何考えてんだ俺は…

そもそも、まだココは現場中の現場…家から外に出ただけで、あの家には謎の生命体が存在している…

こんな呑気に【野に咲く花】を熱唱している場合では無いではないか…

【野に咲く花】を歌いたい気持ちを押さえ、熱唱するのは温泉に戻つてからにしよう…と謎の誓いを立てた。

あ…？…温泉…？？

何だっけ？？？妙に温泉というフレーズが頭に引っかかった。

なあ…と一人に昨日の温泉での出来事を聞いてみた。

『あ？？』

『何やねん、黙りだしたと思つたらこきなり昨日の温泉の事かい！！』

『何か気になつてさ…』良いから細かく教えてくれと寝ていた体を

起こした。

『まあええけど、昨日マスターの知り合いの温泉に行って、水を手に乾杯して、貸しきり状態の風呂に入ろうとして、服を脱いだる時に五右衛門の頭から大きいムカデが出てきて、心底ビビって、その後に風呂で体洗つて、お前ら一人がサウナに入つて、その間ワイはジエットバスで寛いで、お前らがサウナから出たら皆で露天風呂行つて、露天風呂のつくりがうつすい竹の壁で出来とるに気がついたワイの提案で女風呂を覗くことになつて、そつからはもおドンチャンをわざで変なじいさんは出現しすわ、警備員はくるわ、』

待て！！！と光の長々しい演説を中断し、俺が戸惑いながら、言い放つた。

『じいさんだ…』

『は？？？』と光も五右衛門も何を言い出すんだといつ表情を俺に向けてきた。

『地下室に居たの…温泉で俺らと一緒になつて覗いてたじいさんだわ…』

『（（なにー？！？！？！））』

どこかで見たことがあると思ったらあのじいさんだったとは…脳裏に焼きついたあの不気味な顔と温泉での陽気なじいさんの顔は同じ顔でも雰囲気の違いでパツト見ただけでは同一人物とは思いもしなかつた。

俺は、あのじいさんと分かると安心感が湧き上がってきて、俺は光と五右衛門を置いて家に駆け出した。

待てよ……と光も五右衛門も俺の後を追い、再び家中に入った。

『じいさん…まだ居るか?』と六に向かつて話しかけてみると返事はなかつた。

『やつぱりまちがえじやねえのか?』と言わると少々不安にもなる…

『いや、小僧。間違いでは無いぞ。』

穴からではなく、俺達の背後から声が聞こえ、ビクッと三人揃つて穴に落ちかけた。

ふと後ろを見るとじいさんが勇ましい姿で立っていた。

『おー!じいさん!…』

『小僧達じやつたのか…わしほてつきり樹海の見物者かと思つたぞ…あいつらは本当に不届き者よ…』

俺達も見学者ですが…とは言わない方が良いなど、黙つて三入で暗黙の了解を得た。

俺達は爺さんの話を聞くべく、外に出て、爺さんの取つて置きの洞穴のような洞窟…のような奇妙な所に案内された。

期待と不安が高まる中、俺達は爺さんに着いて洞窟の方へと進んでいった。

最高のアウトドア日和

お天道様もテカテカといつもより綺麗に輝き、風も程よく、日光浴でもしながら一日過ごせそうな天気だ。磯の香り。大地の香り、ついつい鼻の穴を大きくして深呼吸したくなるような…

が俺達は今、外界とはまるで違つ真つ暗な洞窟に居る。

『なあ。じいさん。ソロソロ何か話してくれよ。何も言わずに、ただちょっと着いて来いって言われるままでこの懐中電灯無しでは歩けない変な洞窟まで連れてこられる…』

と五右衛門が言つと話を最後まで聞かず、じいさんは『よし、いいじゃ。』と言ひ、少し湿つた岩の上に腰掛けた。

『小僧。もお懐中電灯きつてええぞ。』

とつあえず言われるがまま明かりを消すと、一瞬にして、直ぐ隣にいる五右衛門や光の顔が見えなくなるほど暗くなつた。

『小僧！……すまんがもう一度明かりをくれーー。』

またもや言われるがまま明かりをつけると爺さんがマッチをジュバつと音をたて擦り火をつけた。その火を岩の上にある砂利の上にくづけ、辺りはほのかの優しい光に包まれた。

『消して良いぞ。』

なんだこいつ……とイライラする気持ちを抑えながら、俺達もその場に座り込んだ。

『さて、なにから聞きたいかね。』

『とっあんぱーつ田の質問や、なして、こなにな氣味の悪い洞窟にきたんやへへへ』

『じこわんは少し黙り込み、それは後から教える。とだけ言い、それ以上は答えなかつた。』

『なんやそれ。まあええわ。次ぎの質問や、あなたは『山（樹海）で何してんねん?』』

『生活じゅ。』

『は?..!..あんた、現実逃避者か?..?』

『まあその辺は好きに解釈してくれてええ。わしゃ山山で生活せなあかん理由があるんじゅ。や』

『あそこのボロ小屋がじこわんのマイホームか?..?』

『ナウじゅ。ボロ小屋つて嘘つてない。』

『あの山は向いやへ?..それてあの未来の日本、一番聞きたいのは何の?』

光の質問にじいさんの寝てるよつた表情が一気に変わり、キリッとした、表情で答えた。

『わしもその事を調べるためにかれこれ20年ここで住んどる。』

爺さんの話で色々と分かつた事があった。

まず本名だ。

爺さんの本名は石田密造と言うらしい。

年齢は87歳で見た目異常にかなり老いた人のようだ。

そもそも、ココに住むきっかけになつたのは、火事で家族が亡くなり、生涯孤独の一人身になつてしまつたことがきっかけらしい。

50年近く人生を共にしてきた最愛の女性…

色々と苦労をかけたが、立派に自立した白模の息子…

そんな息子からの最高のプレゼントとも言える、仕草がとても可愛い孫…

火事という事故で、一瞬にして、大切な人達が消えてなくなつてしまつた…

そんな孤独すぎる毎日が苦痛で自殺するつもりで、何ももたずに樹海に飛び込み、結局死ねず今に至る…

と言つのは全て嘘らしい。

『（（（嘘なのかよ！……）））』

カカカと笑い、じいさんは話を続けた。

当時わしはまだピチピチの60代じゃった。

仲間内での老人軍団の旅行でわしらは熱海の温泉旅行へ行つたんじや。

わしも昔はやんちゃしてての。色々なおなじを泣かして来たもんじや。

体力と知能とルックスには自信のあつたワシは、仲間内でもリーダー的な存在じゃつた。

熱海の温泉旅行も、無事に終了しての。ワシらはそのまま富士山を見に行つたんじや。

『小僧、達磨山つじつじよるか?』

知るはず無いだろつと首を横に振る俺達に、『わんは』ふむと頷き、『日本で一番綺麗に富士山が見える場所じゃ、小僧達も観光で静岡にきたなら是非行つてみるとええ。』と得意げに言い、『……話をそらすでない……』と謎めいた怒りを俺達にぶつけ、てめえが言い出したんだろ。……と言ひ気持ちを堪えて、爺さんの話の続きを耳を傾けた。

達磨山からの富士山は話に聞く以上に絶景じゃつたんじや。残り少ない命死きる前に日本一の山を是非間近で見てみたい、とい出した不届き者があつての。そのまま、ワシらは富士山の近くまで行つたんじや。

一人の阿呆が、『富士山には、死の樹海を通り抜けねば登る事すらできないんじや。皆の集心してかかれ。』と言ひ出しての。。。ワシらは無謀にも死の樹海を抜ける事にしたんじや。

といひがの、本当に樹海で迷つてしまつてな、老いた体には少し

の迷いが命取りになるんじや。

お天道様は意地悪での。…ワシリが迷つているのを知つてあるのこ
いきなり雨を降らせたんじや。

ワシリは少ない体力を振り絞つて逃げるよつて雨宿りできる場所を
さがしたんじやよ。それで今届るこの洞窟にたどり着いたんじや。

最初は入り口で雨が止むのを待つてたんじやがな、一向に止む気配
が無かつたもんで、ワシリは腰を下ろせる場所を探して、しばしの
休息をとったんじや。

何時間くらこかの。皆眠つてしまつてな、恐らく4~5時間くら
いこの洞窟で雨宿りしてたんだわな。

起きた頃にはすっかり日が暮れてて雨も止んでおつたわ。

お終い。

『え? ? ? なんやねんそれ! … ワイの質問の答へに全くもつてなつ
てないやんけ。』

爺さんの話が終わるや否や光は鋭く突つ込み、怒りをあらわにした。

『ソロソロかの。』

爺さんが光の怒を無視し、一人で呟き、「小僧。ソロソロ外にでるが。
」と言い俺達に有無言わせずそそぐと歩き出した。
止むを得ず俺達もムシャクシャとした気持ちを引きずりながら、爺
さんの後を追つて歩いた。

『はーーー?』出口が見え、俺達三人は絶句し、口をポカンとあけ、何度も携帯の時間を確かめた。

『入ったのはまだ、午前中だったよな??』俺の言葉に光も五右衛門も大きく頷き、足を止めた。

爺さんだけが、何事もなかつたかのようにタダタダ出口へと足を進めていた。

『何を突っ立つておるんじや。早くこっちに来い!!』

急に後ろから誰かに追われているような恐怖感に襲われ、俺達は足早に、外にでた。

『この洞窟は時忘れの洞窟じゃ……』

『 でお出かけ 』

ムニーヤムニーヤムニーヤ…ハツ…!!

『 今何時…!!…!!』

『 あ、薰おはよー。良く寝てたねえ。今は13時だよ 私と羽チャ
ンは10時くらいに起きてさつきお風呂から戻ってきたとこ。』

『 えつええ。なんで起こしてくれないの… あたしも一緒に朝風呂入
りたかったのにいい…』

『 起こしたよ…ほつぺたつねつたり、乳首つまんなり 』

なんと… そお言わると何だか頬と胸の辺りがムズムズとしてきた。
少し不貞腐れながらもあたしは、一人と一緒に昼食に行つた。

『 つてか何処に行くの??』 寝起きで、顔を洗つて歯を磨いて、服
を着替えて、何も聞かずに一人についてきたので少々気になつた。

『 朝マスターから聞いたんだけど、近くに普通のファミレスとは違
う美味しいファミレスあるらしいからそこに行こっかなつて 』

キキチャンも羽チャンも念入りに準備していただけあって、いつも
の一人より数倍可愛く見えた。

あたしひきたら… スッピンでジーパン、Tシャツ… 酷いなコレ…

羽チャン達と共にタクシーに乗り目的地に向かつた。

目的地つてのが何処にあるのかも、あたしは知らないけど…

スカイブルーとは正に今日みたいな天気の事を言うのだろうなど、
タクシーの窓を開けて海のある綺麗な空を眺めていた。

扇風機みたいにアアアアアアアアってやってみたけど上手く出来なか
つた…

それでもこの運転手結構飛ばすなあ。一体何キロ出してるんだろ…覗いているのがばれない用に後ろからチラつと見てみた。

時速80キロ
Dカップ

ふと昔やっていたTV番組を思い出す。

たしか、時速80キロで車で走っている時に窓から手を出して、モニモニってやつたらロカッピのバストと同じような感触になるーーとか言ってたよつなーー言ひてなかつたよつなーーまあ只だしやつてみよう

少しだけ手を出し、モリモリ…微妙。

自分の胸と比較しても良く分からぬ……ところよつこまこちピンと
来なかつた……

『うううと…何でひてんの…?』とキキちゃんに聞かれ、心拍停止するかと思つぱりびっくりした。

びっくりした事であたしあるいことに気がついた。

【あたしつてロカッピも無いじゃん…】

再び手を出し、今度は隣のキキちゃんの胸を鷺掴みにした。

お辞めなさい。とキキちゃんに頭はポカッと叩かれて、中断した。

【ふー…少ししか確認できなかつたからあんまり分からなかつたけど…何となく似てる様な…まあいいか】

髪が豪快に風に洗われ、早30分が経っていた。

気がついたらバツサバサ…

手クシではじおにもならないうらい爆発している事に気づいた頃には時既に遅し…

『「これからぶつとき』、と言われキキちゃんに帽子を借りて、あたしの頭は何か落ち着きを取り戻した。

そして目的地に着いた。

匂いは人のつもつがすっかりおやつの時間になつていた。

グゥグゥとお腹が恥ずかしい泣き声をあげて、お腹を訴えてきた。

よくよく考えたら昨日の匂から…何も食べてなかつたんだ…をお考えると余計にお腹が空いて、目が回りそうだった。

『「」かな?..』

『場所的に「」だね…』

ううう。お腹を押さえ俯いていた顔を上げて、一人の見ているお店を見た。

『えー? ハハ? ? ? ? これの何処がファミレスなのー? ? ? ?』

『だよね…』

『うん…』

何処をどう見たらファミリー・レストランになるのだろう…見た目は完全に居酒屋でお店の入り口には暖簾までかかっていた。

こんな昼間からやつてるのかな…と思しながらもあたし達はガラガラガラとドアを開けた。

『つらつしゃ いませえええ ! ! ! !』

『うつしゃ いませええ ! ! ! !』

と店長が叫んで、バイト、店員が続くよつよんであたし達を迎えてくれた。

『 3名をまで宜しいでしょ? かー? ? ? ?』

『はい。』

『 3名様じ案内です ! ! ! !』

と店の奥の席へと連れて行かれた。

周りを見ると、居酒屋とは思えないほど若者で溢れていた。

客層は…確かにファミレスだ…

メニューになります！…つとこれまた元気な声で手渡され、三人で
メニュー眺めた。

狂米
般若湯
九献
大神酒
豊神酒
白酒
黒酒
玄水
一夜酒
研水
間水
聖人
聖賢
霞
賢人
白玉
金波
白
真一
堕
白玉
濁賢
紅面
久志能
加美久志
久志
能
加美
久志
百薬長
軟口湯
なんこうとう
白玉友
ぎょくゆう
白
はく
真一
しんいつ
堕
はくた
白玉
はくぎょく
濁賢
はくぎょく
紅面
くしのめん
久志能
だくじゆう
加美久志
くしのかみくし
美祿
ひらく
百薬長
ひゃくやくのちょう

すり一つと見たことも無い日本酒が書かれているかと思つたけど、じつやいのメニューには全品ファミレスメニューみたいな安い単品がずらーっと書かれていた。

『おおお ファミレスじゃん 美味しそつ…』と羽ちゃんがジユルつとよだれを飲み込み、メニューに釘付けになつた。

あたしも、キキちゃんも負けじと食らこ付き、メニューをみながら注文もせず20分くらいが経ち、『お決まりでしょうか！？』とバイト君に声をかけられた…

『コレとコレとコレとコレとコレ…』

『あああとコレも…』

と自分達の食べたそうな物をひたすら指差して、女三人で食べるとは思えないほど量を注文した。

私達の注文した料理が次ぎ次ぎと運ばれてきた。

コーンスープに手羽先、薄焼きピザ。

野菜サラダにウインナー、ペperonチーノ。

他にもまだまだ沢山運ばれてきた。一つ一つ黙々とではなく話しながら食べていった。

『そー言えば羽ちゃんは何で優馬と付き合つことになつたの???. 薫がコーンスープをジュルジュルとすりながら羽ちゃんに聞いた。

『えー?んー……』

『えー?んー……ってあんたね。好きなんでしょう!?!』

『うん。まあ今は好きだけど、付き合つだしは何だか良く分からなかつたし。最初はお試し期間みたいだつたかなあ』

ほつほう。なるほど。なるほど。と薰はいつも持ち歩いている手帳に書き記した。

『ちょっとー!何かいてんの!?!』

『えー?だつて、あたし付き合つたこととか無いし……経験者の意見は素直に聞かないと……ね』

フフフと笑つて、薰は再び続きを書き出した。

『で、キキはんは？』とペンのキャップを咥えながら、もうじりと私に質問してきた。

『へー？…私の場合はもお大体皆知ってるでしょ！？！？』

『じゃあ何で3人の中から光だったのー？そもそも別に3人の中から選ぶなんて決まりは無いわけだしさ。』

『まず、五右衛門は薫が狙つてたから無理だし…羽チヤンは羽チヤンで優馬の事結構気に入ってるような雰囲気出してたし…それでその一人とはあまり関わらないようにしてたら、必然的に光との時間が増えて、それでかな…3人の中から選ばなくとも良いかも知れないけどやっぱり一緒に居る時間が長いと他の子達よりは親近感あるしね…』

つて私なに長々と語つてんだろ。。。

ウインナーを刺したフォークを片手に、長々と語っている間、薫と羽チヤンはスープを飲んだり、ピザを切ったりと全く話を聞いてないように思えた。

『でー？』と薫が何に対しても『でー？』なのかこっちが疑問に思うような質問をしてきた。

『でつてなにさー…本当に聞いてなかつたのかな…と質問に質問で返した。

『で…それから光とはー？！？！つて事じゃない？！』

『ほうほう』

羽チヤンのフォローにピザを口こつぱいに頬張りながら薫は頷いた。

別に…たいした事はしていないよ…とだけ答え、私もピザを食べた。

えーどこまでいったのねあ

キスはしたの！？！？

卷之三

と鋭い質問を繰り返し出してくる一人に『コーヒー取つてくる！』
と言い私は席を立つた。

おがしきにんじん

と結局3人分のドリンクを取りに行き、戻ったとたんにまたもや質問攻めにあつた。

『あ……なんでそこまで他人の事が気になるのかね……そっとしておいてくれよ……』と言いたかつた私だが、ニヤニヤと憎たらしい二人にそんな同情を乞うようなセリフははけぬと、『キスはしたよ！』と答えた。

オー！！つと何がオーなのか分からなかつたけど、少し私は照れた。

DRAFT

『DPって!?

『ディイイイイブ！？』

「ディープキスつていつからDPつて略すようになつたんだ…それにディープキスの略なんだから普通はDKなのでは…とか思いながらも『まあそだね…』と隠しても直ぐ問われる事は先ほどの経験で特と身に沁みて分かつたから、ありのまま答えた。

次の質問が来る前に。私は『薰はどおなのー?』これからどうするのー?』と質問される前に質問した。

『えーへ!ううん… 今日、一人で話してみるー。』

なんと… 予想外の回答に私も羽ちゃんも食べよつとしていたサラダを一皿小皿に戻した。

『えー? それってカオリンじゃなくてカオリで話すつて事だよね? !?』

『そだよ。』

『いきなりでからかわれるとか思つたりしないかなー?』

『ええ。そんなに変わってなくないー? 可愛い子演じたとしてもあたしはあたしだし…』

いやいやいや、キャラが今とは全然違いますよ… 多分びっくりするだらうな… 五右衛門… あ、光や優馬もびっくりするだらうな…

『まさか… 光と優馬にだけ言つてみたらー? !?』 羽ちゃん。 nice idea! -

『うんうん。それで優馬達に何気なく伝えてもらつた方が良いと思つけど…』 やだ!! つと言われる前に私もすぐさま賛成し、薰の言葉を奪つた。

『んー。… でも… やっぱり自分で言いたいし、今日話すよー。』 と結局は『やだ!!』 と変わらない答えだった。

『そつかあ上手く行くと良いね』 と羽ちゃんがグイッと親指を立

てて薫に微笑んだ。

私はと黙つとやつぱり上手く行かない気がして… 親友ながら少々不安を感じていた。

話しながらパクパクと注文した品と平らげて、案の定食べすぎで3人とも腹痛になつた。

1時間くらい外の風に当たつて、要約腹痛も落ち着きだした。

『ねえねえこの近くに神社あるみたいだし行つてみない！？』と羽ちゃんが提案してきたので、賛成 と節約のため、神社までは歩いて向かう事にした。

『 でお出かけ 3回 』

節約と言つ圭旨で歩き出した私達だつたけど、直ぐに疲れが溜まり、タクシー使おうよと言ひ声も上がりだした。

『 あんなに食べたんだし、運動しないと… 』の一言で私たちは息を吹き返し、地獄の上り坂を母から貰つた一本の足で歩きあつた。

『 着いたあ。地図だとこんなに近いのに…歩いてみると結構遠いね… つて車で10分つて書いてあるし…！…！…』

『 阿呆…』

ハアハアと久しづびりに息切れするほど運動し、球技大会以来運動不足だったのかな…と少しお腹をつまんでみた…

今夜あたりから腹筋でもしようかしら…。

フジサンホンゲウセンゲンタイシャ
富士山本宮浅間大社

んー…なんて読むのか分からいや…

この何たら神社には私たちの10倍以上のひとつもなく大きな赤色の鳥居はついつい見上げてしまつほどの大さだつた。

その大きな鳥居をくぐつて神社内へと足を踏み入れた。

中はとても広く、木々に囲まれてとても落ち着ける場所だつた。

『おやおや、若い女性が見学とは珍しいですね……』

『この住人かな？？私達の3倍、マスターの倍は歳を取られているのではと思つ』老人が私たちに話しかけてきた。

『あ…いえ、近くまで来て、あの鳥居の大きさにびっくりしてちょっと寄つてみただけです。』

軽く会釈すると良かつたら、『紹介しましょうか！？』老人は一ツコリと笑つて言つてくれた。

勿論お断り願いたい。

がせつかくのご老人の好意を踏みつける事など流石の私達もできず渋々とご老人にお願いしますと再び頭をさげた。

『こゝはのお、摂社・末社あわせて1・300余社を超える浅間神社の總本宮なんじや。』

『そりなんですか』と聞いてみるものの何のことやらさっぱり。

『富士山を御神体とする、本殿・拝殿・桜門などはなあ、徳川家康の建立寄進によるものでのお、ほいでな、あそこにある本殿と拝殿は重要文化財なんじやぞ。』

『へえ。凄いですね』と薰も二口と笑つて答えたが恐らく私以上にわかつて無いと思つ……

『お嬢さんは丁度間に来てしましたね……』

『はい？？間と言つと？？』

『毎年5月4日～6日にやぶさめ祭つて言う祭りをやっておつてな、馬に乗りながら』でパパパパつとの的を打ち抜くんじゃ。』

『おおお』以外にも羽チャンは『うみづ』話は好きみたいらしい、私と薰は少し安心し、ほっと息を漏らした。

『それでな、11月3日～5日の秋祭りがあつてのぉ、これには10万人の人人が訪れるじゃぞ。また来るようなら是非どちらかの祭りに参加しなされ。』

『はい！覚えておきますありがと『うみづ』』と羽チャンが頭を下げるのを見て私も慌ててありがと『うみづ』と頭を下げた。

『ああ、そうそう、境内には国指定特別天然記念物の「湧玉池」があるんじや。お時間が御ありなら是非みてくるとええ。』と最後に言い残し、二コ一コとしながら老人は去っていった。

『はあ…要約行つてくれたね…』
『だねえ…何か気疲れしたし…』

と私と薰が氣だるげに話していると羽チャンは『うちこよゆうの好きなんだよね それにこの神社思い出した』と頭の引き出しを次から次へと空けだした。

ご老人よりは聞きやすかつたけど流石に重々しい話で私も薰も頭がパンク寸前だつた。

正面大鳥居から鏡池に至る約50メートルの参道を進み、羽チャン曰く楼門より入り参拝して湧玉池神田川沿いのふれあい広場へと私達は足を進めた。

この神社には沢山の桜の木が植えられていて、春には私も是非来てみたいなあと思つた。

羽チャンが言うには500本以上の桜の木が植えてあるらしい。

『建物はあまり楽しくなかつたけど、外の景色とかは凄いねえ』
と薰の意見に私も同意だつた。

コレで桜が咲いていたら文句なしだなつと私もうんうんと頷いた。

羽チャンに案内され、東脇門を出ると平安朝の歌人平兼盛が「つかうべきかずにをとらん浅間なる御手洗川のそこにわく玉」と詠じた湧玉池があつた。

この歌なのか詩なのか良くならない言葉も、羽チャンが得意げに聞かせてくれた。

なんでそんな事知ってるの！？と訊ねると日本人なら当然でしょ…と当たり前の様に言われた。

普通の日本人はそんな事しりませんが…

『この池は富士山の雪解け水が何層にもなつた溶岩の間を通り湧出するもので、特別天然記念物に指定されてるんだってさ』

そんな事…言われてもねえ…それが凄いのか私には分からなかつた。

神社をぐるりと一周、一休み以上の時間をかけて回つた事もあり、いつの間にか、薄暗くさつきまで元気だつた太陽もソロソロ沈もうかなと、考え出している時間だつた。

『ソロソロかえりつゝか 今日はこれからが勝負だしね！－！薰！－！』と羽チヤンが言つと、あ－－－と思ひ出し急に緊張して硬くなつていた。

アハハハと私と羽チヤンが笑うと、小声で応援してね…と言つてる薰を見て、薰の本来の姿は実はカオリンのほづが近かつたのではないかな？？？なんて思つたりもした。

『（（勿論応援するよ ））』と羽チヤンと一緒に声をそろえて言うと薰は『ありがと』とニコニコと笑つていた。

私達は夜の戦に向けて、タクシーを捕まえてマスターの待つ温泉へと戻つた。

長い道のりを眠り過し、『お疲れさまでしたよ－－』と言つ運転手の声で起こされ、ちょっと待つててください－－と私だけ降りてマスターを呼んできた。

『なんやなんや－－』と慌てて浴衣の前を結んで、一人の待つタクシーの所まで連れて行つた。

『お金…宜しく』と私達は、走つて温泉の女湯へと逃げ込んだ。

『「アハアアアアアア－－－』と追いかけようとするマスターが熊みたに見えて本氣で面白く凄く笑えた。

『お姫さん－－－無償乗車ですか！？』

『あ…いや、今払います。いくらですか！？』

『8790日でやる』

『高...』

『時忘れの洞窟』

すっかり暗くなつた外に、戸惑いながらもキヨロキヨロとあたりを見回しながら、歩き、爺さんの家であるボロ小屋に着いた。

ちよつといじで待つとれい。と言われそのまま例の石の前で俺達は爺さんを見送り、再び戻つてくるのを待つていた。

『どお思ひよ…』

『どおつてお前…時忘れの洞窟とかありえねえだろ、非現実的すぎるし科学的にもおかしい…俺の尊敬するアルベルト・ainschytainせんの相対性理論だろ。爺さんの話に夢中になつてただけや…』

五右衛門の問いに俺も率直な感想を述べた。

『せやな、ホンマに時間を忘れてワイらも気がつかへんしちに爺さんの話に夢中になつとつただけかもしねへんな…』

『つむ、それしか考えられんだろう…あの謎めいた洞窟に入つたら勝手に時間が早送りされるなんてどお考へてもおかしいだろ…』

と俺達は戸惑いながらも【夢中になつていただけ…】と聞こ聞かせそれで納得しようとしていた。

『小僧、残念じゃがそれは違うぞ…ワシも昔はそお思つたんじゃがな…』と言ひながらランタンを片手に爺さんが戻ってきた。

ガチッと音をたて、ポンと俺達の周りを優しい光が包んでくれた。

虫達がワサワサとランタンの光田掛けて集まつてきて、大きな蛾を

一匹捕まえてむしゃくしゃと美味しそうに食つ爺さんを見て、ゾクゾクつと三人とも震え上がった。

『おお、すまんすまん。あまり見慣れぬ光景で気持ち悪いって思うのも無理はないな。忝い（かたじけない）…』爺さんは手についた蛾のりんぶんをズボンでパツパとはらつて、軽く頭を下げた。

『爺さん…唇に蛾の触角がついてるだ…』ひと五右衛門が言つて、『おつと、これまた失敬』と舌でペロリと当たり前の様にさりげなく駆走様でした。とゲッブした。

『それはそうと、小僧達はまだあの時忘れの洞窟を信じてないようじゃな。時忘れの洞窟と言うのはワシがネーミングしただけで実際は只の洞窟じや。あの洞窟はな、死者の魂が通常には考えられないほど集まつておつての…樹海で自殺した寂しい死者が集う洞窟なんじや。』

怖い事と坦々と当たり前の様に言つてのける爺さんに俺達はいつになく真剣な表情で話しを聞いた。

『ワシがさつきまでおつた、場所はその中でも靈が大量に集まる場所でな、気づいてたかもしけんが、あそこには壁に小さい穴が開いておつてな質量の無い靈達にとつてはあそこが交差点の中央みたいなもんなんじやよ。』

そんな事言われても…穴にも気がつかなかつたし、今までそんな不気味なとこに居たと思うと恐怖で氣絶してしまった。そんな俺達を無視し、爺さんは話を続けた。

『あそこの場所は時空間が歪むんじや、何年も前に死んだ人の靈、

最近死んだ人の、色々な種類の靈達があそこに集まるもんだから恐らく、時間が狂つたんじやうつな。まあ現実的に考えてありえない事じやからのお。言葉では説明できん、小僧らを納得させるこは体験させるのが一番じやう。』

そりやそりや。そんな事を言われても、まず信じるはずがない。現に体験した俺達でも俄かには信じがたい内容だつた。

『せやかで、爺さんはなして時間が歪んだって思うん！？ワイ達が言つてゐるみたいに単純に時間を忘れて夢中になつてただけかもしけんで！？』

『うむ……やうじやなあ。』と言ひ爺さんはランタンと一緒に持つてきた本を俺達の前にバサツとだした。

光が最初に見つけたエロ本だつた。

『これじや。コレには生が無い。夢中もクソもないじやう。ワシだつてな、実体験をどんどん繰り返しても信じれんかったんじや。ある日、ワシはあそこで一口過したらどおなるんだ！？』と言ひ疑問きかられてな……愛読していた本を持つて24時間こもつたんじやよ。』

このあとは何となく爺さんの言わんとする事が分かつた気がした。

『先週買つた本が未来の日付に……いや、未来の本に変わったんじや。流石にワシもたまげたよ。我が家に帰つて、その本を読もうと思つて家に帰つてみたんじや。すると一日しか経つてないのに家は崩壊状態、バリバリに割れた鏡に写る自分を見て開いた口がふさがらんかったよ……髪は伸び、ちゃんと白髪染めで黒くしていった髪の毛も真っ白になつておつてな……流石にどおしたものかと2~3日ほど寝込

んだわい。』

それだけ言つと爺さんは黙り俯いてしまつた。俺達も爺さん同様しばし沈黙し、自分達の体は大丈夫だろうか…とキヨロキヨロと体中を見回した。

『心配せんでええ… 小僧らがはいつてたのは20分～30分じゃああそこの時間にしても精々半日つてとこじや。1時間以上あの中に居ると丸一日寝てないと言ひ、疲労が後々襲つてくるがな…まあ問題ないわい。』

『それにしても何で靈が溜まると時間が狂うの！？呪われたりとか、そお言うのならまだ納得もできるんだけど…』

『せやな、時空間を歪めるなんて話聞いたこともないで…』

『つむ、そもそも何であそこに靈が溜まつてるつて爺さんは分かつたんだ！？』

これこれ、ワシは聖徳太子じやないんじや、質問は一人づつにしてくれ。と言つと、最初に発言した俺の質問から答えてくれた。

『まず、何故呪つたり襲つたりじやなく、時間が歪むのか… 小僧名前は…？』

『あ… 優馬つす。高橋優馬。』

『優馬、呪つだの襲つだのそのような靈に対しての印象は何処から來たんじや？？ 実体験ではなかろ？…』

『まあ… 実体験ではないつすけど、TVやネットとかではそおゆつ事を良く聞くから… ってか悪いイメージしか伝わってこないから…』

『ふむ。まあ人間と同じで靈にも色々、十人十色じやなく十靈十色つていうのかの。大きく分けると良い靈、悪い靈の一いつにわかるるんじや。おぬしはもし幽靈に出くわしたらどう思つー？』

え！？と少し戸惑つたが、正直に怖い…恐怖を感じる…と答えた。

『じゃあ。それが悪いイメージを拡大的にしてるんじや。』

『はー…どうこいつとなんー…』

爺さんはふう…と大きくため息をはき、説明してくれた。

『小僧例えばな、このまま進むと土砂崩れにあつて地面が崩壊する…そんな道を走つていたとしよう。おぬしは土砂崩れが起らるなど、考へてもいなからそこを走つとるんじやをな？？』

『まあ そお ですね。』

『そこには幽靈が現れたらどおする！？勿論、恐怖に駆られて逃げ出すじやろ！？お主は幽靈がでて怖かつた…でも実際はそれで土砂崩れからは助けられた…幽靈によつて命を救われた…』

『なるほど…でも…それが本当に助けられたか何てわからないつすよね？？』

『そうじやな。だから考え方次第なんじや。世間の幽靈のイメージが凄い良い存在だったら幽靈を見れただけで幸せな気分になる…固定概念によつて悪い印象しかないんじや…』

なるほど…と何となく納得できた。爺さんはそれでな…と話を続けた。

『それでな、ココからはその小僧の質問にも答えることになる。』

良く聞いておくんぢやよ。と爺さんは光を指差し、光は『はー』。
と頷いた。

『結論から言おう。あそこには靈は憑いてるぢや。と言つみり寂しい靈の集まりなんぢや。呪つたり、襲つたり、一瞬にして害を及ぼす事はせんがな。時間を歪める……と呪つのは、わしらの命を吸つとひひゅうことなんぢや。』

『幽靈は幽靈同士がお互い見えるわけじやない。幽靈になつても見えるのは生きている人間だけだ。死んだからつて死んだ人が見えるわけじやないんぢや。故に孤独。足もなく、体力もない幽靈は移動が殆ど不可能なんぢや。だから一箇所にとどまるんぢや。動けない…そして孤独。そんなところに人間が来る。』

『少しでも早く自分達と同じ世界に来て欲しいと思い、わしらの命を吸うんぢや。だから小僧ひが言つよつに呪い…と言つても間違いではないかもな。』

と爺さんは坦々と語つてくれた。爺さんはちょっと失礼、と言い水筒のようなものに入った。水をがばがばと飲み、俺達にも飲むか!?と進めてきた。

喉がからからでは非頂きたい。と思つたが、蛾をむしゃくしゃとまそうに食つていた爺さんの水だ…飲みたいのを我慢して丁重にお断り申し上げた。

時忘れの洞窟の正体は幽霊達の悪事だと聞かされ、爺さんが五右衛門の質問に答える前に少しの休憩に入った。

俺達は昼飯にと持ってきたおにぎりを食べ、流石に喉が渴いてしまつたので、爺さんに水を貰う事にした。

『力力力。心配せんでええ。コレは湧き水じゃ。ほれ、そこの』と俺達の不安そうな顔を見て、爺さんは笑いながら言い放った。

湧き水の場所を教えてもらひと、飲み干して空になつたペットボトルを片手に、3人で水を入れにいった。

『なあ…さつきから変な感じがしてるのんはワイだけか!?』と光が爺さんに聞こえないように小さい声で俺達に訊いた。

『いや、何かずっと、寒気がするつて言つか…見られてるつて言つか…』

『つむ、まあ一瞬にして半田ぐらじが進んだんだし体が違和感を感じるのも無理は無いかもな…』

不安な思いを解消する事も、解消するすべも見つける事すら出来ず、水を汲み終えると爺さんの所まで戻った。

『じゃあソロソロ、お主の質問を答えよつかの?…』と爺さんは顎をクイックと五右衛門に向け、語りだした。

五右衛門は畏まり、お願ひしますと言ふ爺さんの話に耳を傾けた。

俺と光も同様に話を聞いた。

『結論から言うかの。ワシが靈がある場所に溜まつていると言つ事は知人から聞いた話なんじや。ワシにも昔は友人と呼べる仲間がおつた。友人の中には靈感のつよいもんがおつての。』

『その靈感の強い友人つて洞窟で俺達に話してた仲間の事なんすか！？』と五右衛門が話を割つてはいるど、あの洞窟での話は単なる時間を稼ぐためのつくり話じや。ヒーヤーヤと笑い、再び話し出した。

『一人でこもるようになつてどおしても分からなかつた事は、さつきまでお主らが抱いていた疑問そのものじや。何故時が進むのか…』という点は実体験しても全くわからなんだ。そこでワシは依頼したんじや。樹海つて言う事で靈が関係してるんじやねえのかつてのは何となくだつたがの。まあ自分のカンを信じて靈感の強い友人に頼んであの洞窟を調査してもらつたんじや。EMFとか言う小型機械とか専門的な機械を使って本格的にな。で、結果は靈が大量に居るとの事じや。ワシも一日かけてその友人に色々な事を教えてもらつたよ。さつきお前らに話した内容はその時教えてもらった事のまとめみたいなもんじや。ワシに靈感があつたらの。もつと詳しい話を聞かせてやれたんじやが…いかんせん。ワシは全くといつて良いほど靈感オンチじや。』

すまんの。と俺達に小さく頭をさげ、爺さんの話は終了した。

まだ洞窟について語りたい事が山ほどあつたけど、俺達が次の質問に移つた。

『あの…その石は？？？』と俺は爺さんの背後の空から降つてきた

『「ひねか？？』と爺さんはポンポンと叩いて、俺の方を見た。

俺は小さく頷き、『外に落ちていた日記にひまから降つてきたと書かれてたんですよ…』と勝手に入様の日記を読んだ事を少々気まずい思いながらも爺さんに聞いてみた。

『「この石はワシにもわからんのじや。』

『えー？でも空から降つて来たのは見てたんですねー？』

『いいや。みといせん。わしが話したと思つが、わしが一日籠つて出でたら家がボロボロで血分血氣も老けていたと言つたわつー？ええ。と小さく頷き、そのまま俺は爺さんの話を聞いた。

『ワシは二〜三日寝込んだあと、身の回りの物を色々調べてたんじや。見物者によつて壁は落書きだらけ、家電製品も色々盗まれとつたわい。そして毎日つけこいていた日記帳じや。平常心を取り戻してわしの日課だった日記を書こうと思つてな、日記帳を開いたんじや。するとな、洞窟での勝手に過ぎてしまつた月日もびっしりと日記が記されておつたんじや。ワシの字でな。ここにある石はその時に記されていた一部でな。ワシも何故落ちて來たのかと言つのは全く分からんのじやよ。』

爺さんは一通り話終えると腕を組んで、考へ出した。少しすねと『ああ。やつじややうじや。やじじや』と一言付け加えた。

『ちなみにワシは元々、昆虫を食つ趣味があつたわけじやないぞ。

あの洞窟に籠つてから、飯が喉を通りなくなつての……それからと言つもの昆虫ばかりを食つようになつてしまつたんじや。』

ビクッとすゐ俺達を見て、おぬしらはほんの少しあがりさん。大丈夫じや。といへとわらひて爺さんの話は終了した。

『何も小僧達の解決には繋がらなかつたかもしれんがな、ワシかで全部把握しちよるわけじゃないんじや。添い……もお遅い。ソロソロ帰りなさい。』

とそのまま、ランタンと俺達を残して家の中へと入つていった。

『なあ……爺さんもああ言つてるしソロソロ帰るか！？』

『せやかで……謎は残つたままやないかい。このまま帰つてもひく

眠れへんわ。』

『五右衛門は！？』

『俺か……俺は正直帰宅したいって気持ちもあるな……けど……光が言つみたいに気にならないって言つたり體になるけど……』

結局俺達は爺さんに言われるがまま直ぐに帰宅させず、ランタンのキラキラと輝く光を見ながら、少し考え込んだ。

『なあ……やこの文字どもおもつよ。』最初に口を開いたのは五右衛門だった。

『俺はカオリンと一緒に初めて見つけたときは向のこちを全く分からなくてそのまま感想をキーボードに打ち込んだんだけど……』

『キーボードってあの爺さんが遊び心で置いた奴だろ？！？それも洞窟に籠つている間にさ……』

『ホンマに訳わからへんな……』

『で、五右衛門は何て打ち込んだん！？』

『うーむ。SI AWASE…』

『（（は！？））』

『幸せつて打ち込んだ！！だつてさ、義理の妹と一人暮らしだしトウモロコシは俺の大好物だし……でもあつてたと思つたんだけな…』

『（（WHY））』

『だつてさ、入力が終わつたとたんにそここの窓がピカ―――つて光つてさ……まあそれは結局光とキキの懐中電灯だつたんだけどな……ハハ……』

何言つてるんだこいつは……と俺は大きくため息を吐いて、石をじつと見つめ何か引っかかるんだよな……と頭の中を整理していた。

『あ――――』

と光の大声に俺も五右衛門も心拍停止するかと思つぽぢづくらじた……。

『何や――――つるせーな。』

『分かつたかもしけへん――――』

『M y s t e r y』

ほんのりと明かりを放つランタンが光によって慌しく光粉をばら撒いた。

地面に置いてあつたランタンを謎の石に近づけ、光は必死で文字を確認し、その文字列を地面に書き出した。

【どうだ妹と二人暮らし、どうだもつととつもろい】

【どうだいもうととふたりくらじ】

【どうだいもつととつもろい】

『これどお思うー?』と光は振り返り俺達に質問してきた。

『いや。ひらがなにしたのは分かるけどそれ以外は意味不明…』

『俺も五右衛門と同じくわかんね』

はあ…三人寄れば文殊の知恵とは嘘つぱぢやな。と言い放ち、再び一人で考え出した。

俺と五右衛門も必死で光の思考に追いつこうとしたが、いかんせん。そもそものEQが光とは天と地の差なのだから…

『俺らに出来る事は…』と五右衛門が言い出し、【何…】といつまで理解しだしたのか!?!【と一瞬ドキッとしたが、最後まで聞いて俺の胸の高鳴りも無駄だった。

『俺らに出来る事は光の邪魔をしないことくらいだな…』と自信満

々に五右衛門は言ご放ち、よつゝいひせと胡坐をかけて座り込んでしまった。

少しくらい光の手伝いをしたいと思つたが流石に無理そうだな、と俺も五右衛門の横に座り込み、天を仰いだ。

午前中は綺麗に輝いていたお天道様も、一瞬にして闇の覇者、お月様へと変わってしまつてゐる事に今更ながら変な違和感を抱いた。

お月様を引き立てるように満遍なくばら撒かれた星達が丁寧な光を放つていた。

樹海の中だけに湿度が多く、ジメジメと体中をナメクジが這つているのでは…と思つくりこで気持ち悪い感じでたまらなかつた。

真夏の夜に聞きたくないと言つても無理だろ？。

方向感覚を奪うよつな蝉時雨がザーザーと鳴り響き、天を仰いで居ると日が回りそつになつた。

『優馬！…五右衛門！…ちよつときてくれんか！？』と光に呼ばれ再びよつこらせと立ち上がり、石に食らう着いている光の元へと歩み寄つた。

『わかつたんか！？！？』と五右衛門が聞くと、たぶんな…と光もこつちを向いて座りなおした。

『まづな、実行する前にワイの結論を聞いてほしいねん。』

ふむふむ。と俺達は頷き、今日は話を聞いてばかりの一日前だな…

と思いつつも光の話に耳を傾けた。

『まあコレは隠語やねん。まあワイの予想やしな、絶対にあつてるとは言えへんけど多分当たつてると思うで。』

もつたいぶらずに早く言えよ……と俺と五右衛門で急かすと光は力力力と笑い説明してくれた。

『ワイの予想やけどコレは【灯台下暗し】って事やないか…。』

は！？とこまいち理解できない俺達にまあ待てと光は話を続けた。

『どうだ妹と二人暮らしどうだともつと玉蜀黍。この二つの共通点を搾り出したら【灯台下暗し】になんねん。』

『まあそお言われると何となく一つとも【灯台下暗し】って諺に似てる氣もするけど…それが何をいみしてんの…？？』と俺が聞こうと思つた事を五右衛門が先に聞いてくれた。

『はあ…そもそも灯台下暗しつて諺の意味はしつとるんか…？』

『まあ何となくだけど、灯台は周りを光で照らして自分の足元は暗いよつて意味だろ！？！？』

『ふむ、まあそれはそのままの意味だな。それは意味やないねん。単純に灯台下暗しつてのを長く言つただけや。本来の意味は身近な事情に疎いこと。これや。例えるなら、警察が犯人捜すために、色々な調査したりしてるとするだろ！？それで何日にもわたつて調査したけど結局犯人は警察署ないのしかも自分の相棒でした。つてのが灯台下暗しつて事何や。』

『せうせうせう。何となく分かったけど、なんでそんな事が「ココ」に書いてあるん?...?』

俺も五右衛門とほぼ同時に理解し、五右衛門と全く疑問を抱いていた。灯台下暗しって意味は光の説明でよくわかつたけど……なんでこんな石にそんな事が書いてあるのか!??

『さすがこはつきりとした事はワイもわからへん。この石はそもそもワイらやのおて爺さんへのメッセージやしな。爺さんの身近な所で何か変化があつたんやろな…』

『これの謎を解いたら、もしかしたら除霊されて爺さんも若返るかもな』と五右衛門がゲラゲラと笑いながら言った。

『アホか!! そないなファンタスティックな事いまどき映画でもあらへんで!!!』

『「冗談だわー!」「冗談ー!」流石にそんな事本気でおもつてねえよー!』

『五右衛門が書いたと何かマジド書いたるようになんて聞いたのは俺だけか!??』

『いや、ワイもや。』

『何だそれ。言つとくけど俺はそんなに馬鹿じやねえぞ!…光には言われてもしゃあないけど、優馬!お前に言われたくないね!…』

『なんと…』

俺と五右衛門がガヤガヤともめているのを光はビリビリも同レベルやないか…とケラケラと笑いながら見ていた。

『うん』……しね……』

『お前がうんこやり……あほ……』

『はー? ジャア、おめえはうんこ以下やわ……』

『あー? 俺がうんこ以下ならお前なんかウンコロスケだわ……』

『ウンコロスケってなんじゃそれ…まじでアホだろ…』

とまあ自分でも恥ずかしくなるほど幼稚な言い争いをしていたわけで、光もあまりの幼稚さに呆れ、『どおでもええけど。とりあえず爺さんに聞きに行つてみいへんか!?』と俺と五右衛門の痴話喧嘩を止めてくれた。

うむ… そつだな… と俺達は爺さんの残していくランタンを手に取り、爺さんの住んでいるボロ小屋に行く事にした。

もおすっかり見慣れたボロ小屋だが、流石に友達の家を訪れるよりは気軽に尋ねられない雰囲気がいつも漂っていた。

玄関の階段にばら撒かれたように転がっていた虫の死骸を見ては爺さんの【Time for meal】が頭によぎつてしまつて、口を手で塞いでしまった。

光は律儀にノックし『なんじゅ……』と声を返事を待つてから、ギギギと耳に付くドアを開けた。

『（うおーーーー）』

ドアを開けた瞬間に上から氷水が降ってきたかの様な驚きが襲つてきた。

ドアの数センチ前に爺さんが立つていたからだ。

『で……どうがウンロロスケなんじゅ……』になつて夜も寝られへんわ……』

『はーーー……』

『いや、さつき外でおまか二人で言い争つておつたぢゃる……』

『（（聞いたのかよーーーそりやこいつがウンロロスケだ）（）』

と見事にハモつて互いが互いに指を指し合つた。

カカカカカ力と大爆笑する爺さんみて、余計にイライラが込上げてきた。

『まあええて。そんな事より爺さん、ちょっと聞きたい事あんねやけど良いか！？』

と光は冷静に物事を進めていった。

『ワシには時間の縛り何て無いしの、ワシよりお主らは大丈夫なんかー？ もお結構遅い時間じゃ『ん。』

ふと携帯を見るともお 23時を回っていた。

【うわ。マジかよ… もお こんな時間じやん…】

『そおゆう事なら遠慮なく上がるで。』と光は土足のまま爺さんの家に入つていた。

『コレコレ。そんなどこ歩いちやいかん。床がぬけるぞい。』

と爺さんの言葉に先に言つてくれよ！…と光は忍び足でちいさに床つてきた。

『そこに地下の階段がある、地下で話を聞こへ。』

地下室…俺にはあまり良い思い出がない…虫のビン詰…想像するだけで嘔吐しそうになつた。

爺さんが先陣を切つて俺達は爺さんの後ろに連なつてコンクリートで出来た階段をカツカツと音を立てながら降りていった。

爺さんがパチッと電気を付け、驚きついとい声を上げた。

綺麗に掃除された床はベージュ色のフローリングで、純白の壁にはアイドルのポスターが貼られており、角に置かれたメタナラックにはCDがずらつと五十音順に並べてあり、何といえば良いのだろうか…A型の大学生の部屋の様に文句の言い様の無いくらい綺麗な部屋だった。

『二郎がワシの自慢のマイスイートルームじゃ。どうじゃ。』

『どうじゃって…爺さん…俺が上から降りた時はこんなに綺麗じゃなくなかつた！？！？』

『あーあれば倉庫じゃ。倉庫というより食料庫かの。力力力力。ちょうど、ワシが朝飯の品を選んだらおぬしらが来てのお狩人かと思って、電気消して隠れとつたんぢゃわい。力力力力』

『…』

『それにして、ホンマに綺麗な部屋やの。樹海に住む爺さんの部屋とは思へんわ。』

『うぬ。俺の部屋より綺麗だぞ…』

五右衛門も光も、爺さんの綺麗な部屋を褒め、3人とも少しだけ安心し、腰を下ろした。

光は簡潔に石について説明し、爺さんに身近な事で何か無かつたかと、訊いた。

『うーむ。身近な事での…灯台モトクロスか灯台下倉敷か知らんが、それって言つのは自分では中々気がつかない事を言つんじゃろ！？そんなお前さんらにいきなり言われても直ぐには…』

『だよなあ…流石にそんな事を急に訊かれても、『あーこれの事じやないか…？』なんて直ぐに出できたらとっくに謎は解明してるよな…』

心中で歎き、とつあえず考へて居る爺さんを見守つた。

『ふむ。恐らくあれじやうひ。』

『（（（（（…卑…！…もお心あたりあんのかよ……）（）』

三人同時に爺さんに突つ込み、爺さんはグラグラとお前ら面白い小僧じやのおと笑い出した。

『で…？なんやねん…！その心あたりあることは…』

『まあそお急かさんでくれ。お主らが笑わせるもんでうつかり忘れてしもおたわい。』

『…』

『まあ冗談じや。心あたりがあることは一つしかなくての。コレがはずれとつたら正直一生思い出せんじやろな。』

一人で納得し、ウムウムと腕を組んで爺さんは自分の世界に入つていた。

『ムフフフ…』

『早くその心あたりのあるつて事をおしえるよーーー。』
イライラとした五右衛門が爺さんにつけかつた。

『おつと、こりや失敬。当時の事思い出してたらのお女湯を覗いて
た事を思い出してしまつてのぉ…ムフフフ…ありや別嬪さんじや
つたのぉ…フフフフ。あつ…想像しただけで下半身が…』

『うお…俺も…』

『ウオラ爺ーー良こから早く聞けーーー。』

と俺は爺さんと五右衛門を叩き、話を元に戻した。

『最近の若いもんは短気で困るわい。老人の娯楽をなんじやひとおも
つとねんじや。全べ…あれは一年くらこ前のことじや。』

『長い夜の旅』

『一年つて……爺さんつて最近じやねえかよ…』

『やうでもないわい。ワシが口々に来た最初の頃じや。』

『えー? あんた、20年近く口々に住んでるんやけんかにー?ー?ー』

『ああ、世間的には20年、ワシの中ではまあやつと一年ちよこいつてとにかく。あの時忘れの洞窟のおかげでお…』

『ああ…』

小僧じも…ソロソロ、聞いてくれるか?…ビズズズズツと暑いお茶を啜りながら俺達に問い合わせ、俺達も黙つて頷いた。

『ワシが口々に来てまだほんの1ヶ月くらいの時じやつた。ワシはいつも通り部屋の掃除をし、風呂に入つて、樹海から近くのデパートへと買出しに行つていたんじや。まあわしかて最初から虫など食う趣味は無いんでね。買出しに行つて帰つてくると一匹の狐が倒れておつたんじや。』

『狩人にやられたみたいでのお…何発もの銃弾を受けて酷い怪我じやつたんじや…ワシは直ぐに手当をした、幸い致命傷になるところには当たつていなくてな一月くらいでその狐は歩けるまで回復したんじや。ワシは獣医免許どころか、人間の手当をすらした事の無いワシだけにそんなに早く回復するとは思いもせんかった。』

『狐と暮す一ヶ月間、ワシは愛着をもつてはいけんとは思つてたん

じやがのお狐に名前までつけて可愛がったんじや。【ビーハイブ】
それが狐の名前じや。』

『ビーハイブ！？中々センスの良い名前だな…』 とつさに五右衛門が呟いた。俺も爺さんにしては中々のネーミングセンスだと関心した。

俺はてつきり、コンタとかつけたもんだと思つた。

『どじがやねん… 悪趣味極まりないやんけ…』 五右衛門の言葉に光の鋭い突込みが入つた。

『爺さん、ビーハイブってどもせ蜂の巣の事ちやうん！？ ワイが思うに初めて発見した時に銃弾を浴びてのが理由やろ…』

『力力力力、いかにも。』

良く分かつたなと言わんばかりに爺さんは笑い、俺と五右衛門は前言撤回を言い放つた。

すっかり冷めてしまつたお茶で喉を潤させ、爺さんは再び話しうた。

『ワシはビーハイブのおかげで久しぶりに寂しさとは無縁の生活が送れたんじや。出来る事ならこのままこいつと一緒に過したいと思つたりもしてしまつたわい。それでも人間と野生の動物…』

『歩けるようにもなつたし、辛い気持ちを押し殺して、ソロソロ仲間の元へ帰れと野に帰してやつたんじや。一ヶ月も一緒に居たんじやビーハイブもすっかりワシになつての。ワシが森へ帰れと言

つても言つ事なぞ聞いちゃくれなかつた。』

『ワシはビーハイブを家から離れた場所まで連れ出して置き去りにするなど、色々可哀相な事までしたが、結局何日かしたら戻つてしまつたんじや。ワシは……』

カンペでも見てこのかと思つぽぢすらと話していた爺さんが、凍りついたように言葉を無くし黙り込んでしまつた。

肩を小刻みに上下に揺らし、下げた顔は床と平行を保つたままだつた。

俺達は顔を見合わせ、爺さんの様子を伺つた。泣いているのか……な
？？？

『爺さん。大丈夫か？…』

爺さんの啜り声が狭い部屋に響き渡る中、光が心配の声をかけた。

『ああ……大丈夫じや。すまんのお……昔を……あの時の事を思い出してしまつたわい。…』

無理なら、もお話せなくて良いぞと言つ五右衛門に、もお大丈夫じや。ブイイイイイ。つと大きく鼻をかんで一息ついて話を始めた。

『ちつとも本当の家族の元へ帰ろうとしないビーハイブにワシは狩用の銃を向けたんじや。一月前の嫌な思い出が一気に蘇つたんじやろうな。4本の足をガタガタ震わせて森の中へと消えていったよ。』

『ビーハイブと別れて数日後、ワシは悲惨な光景を目にしたんじや。』

ビーハイブが……ビーハイブが……。

『（（え？？））』

「「から先は爺さんの声が涙で言葉になつてなかつたので、恐らく
この俺達に伝えたでは無いかと思われる事を俺が述べよう。

【爺さんが帰宅するビーハイブが大怪我をして、家の前で倒れて
いたらしい。又怪我をすれば爺さんと一緒に居ると動物ながら考
えたのか、爺さんに見放され家族を探している間に出来てしまつた
怪我なのかそれは爺さんも分からぬままらしい。怪我が酷く爺さ
んが手当をして、ビーハイブは良くならなかつた。爺さんが
発見したその日のうちにビーハイブは死んでしまつたらしい。それ
を爺さんは自分のせいだと…】

自分が殺したようなもんだと、ガキの様に泣きながら俺達に訴えて
きた。長い人生に置いてあの日程、後悔した日は無い…と…】

爺さんが言つには、^{ビーハイブ}狐の死体は部屋の中にあるとの事だ。流石に口
レには俺も五右衛門もそして光も声を出して驚いた。

俺達他人から見たら只の白骨体だが爺さんから見たらまだ、昔の可
愛い狐^{ビーハイブ}なのだろう。死んでしまつていても、埋葬や火葬はできなか
つたらしい。

この言葉を訊いて、光がくらう着くように爺さんに質問した。

『なあ爺さん。あんたが昆虫食いだしたのはいつや？？それと、時
忘れの洞窟に一日籠つたつて言つのもいつの話だ？？そもそもあ
の洞窟が時忘れの洞窟だと言つ事が確信できたのは狐^{ビーハイブ}が死んでから
の事じやないんかい？？』

『…うむ。小僧の言つとおり、ビーハイブが死んでからじゃ。始め

に入った日は正直疲れて眠つて時間を忘れてただけかもしれんしの
お。それに今思つとあの中で何時間も寝てたはずなのに日付の変化
が今と比べて段違いじゃな……』

『爺さんのゆうどおり、あの洞窟は呪われてとるな。霊能力者か例
の縁茶だかしらねーが爺さんの友人の言つてた事も全て当てはまる
な……』

流石に頭の悪い俺にも五右衛門にも何となく光の言つている事が理
解できた。【恐らく狐の呪い】だらう…

『なあ爺さん。光の言いたい事わかるか?? 爺さんが子供の様に可
愛がつっていた狐…ビーハイブが死んでから色々な災難が続いてるん
だぜ?? その狐が爺さんを呪おつとしているのか…そんな事言わな
くても分かるよな。』

光るに続いて五右衛門が言い、それに続いて俺も話した。

『爺さん言つてたよな。時忘れの洞窟にいる靈は悪い靈じゃないと
…寂しいから死後の世界に誘つているんだと。ココが樹海つて事も
あるし、俺達も爺さんの友達の靈能力者も自殺した人の靈だと思つ
たんだよ。でも全ての発端はビーセントじやないか??』

『…ビーハイブじや…お前ら、ビーハイブを葬つてくれるか…??
ワシが自分でやるのが一番良いのはわかつとる。けど…あんな姿にな
つてもワシには今も動き出しそうで…とてもビーセントに火なぞ
つくれんのじや。。。』

『((ビーハイブだろ!-))』

俺達は爺さんに案内され、^{ビーハイブ}狐の死体がある場所に移動した。

その場所は意外に近く、爺さんの本家とも言えるあのボロ小屋だつた。

『この家の地下にビーハイブはあるんじゃ…お主は一回降りてきたじゃんつ』と俺の方を指差してきた。

『この地下か…』と俺は少し不安の声を漏らしながら、ふとあの時の光景が頭を過ぎった。

爺さんが何故あんなに氣味の悪い部屋に居たのか…あの大量の虫の死骸がずらりと並べてあったのは何故なのか…

全てを聞かされてから考えると、爺さんは狐に会いに地下に降りていた。そこに俺達が来て、樹海の見学者かと思い爺さんもビクビクしながら身を潜めていた。

あの大量の虫の死骸は、恐らく俺達人間で言つお供えものだらう…俺の考えが正しいのかどおかは爺さんに聞いて見ないと分からないうが、恐らく間違つていなかつ…おであつて欲しい。

俺が過去を振り返っている間に、五右衛門と光と爺さんは地下におりて、ビーハイブの入った箱のような物を抱えながら上がってきた。

それはそれも凄い異臭を放つているかと思つたが、それでも無かつた。3人の後に続いて俺も小屋の外に出た。

爺さんがランタンを近づけ、中確認すると、ポタポタと涙を流し、ビーハイブに最後のお別れの言葉をかけた。

『「めんのあ。お前を苦しめてばっかりじゅったな…お前が生きてる間はたつた一ヶ月くらいの付き合いのじゅったがワシは一時もあの一ヶ月の出来事をわすれぢやおりんよ。』

『最初は、お前がでつかい蛾を食べようとして、ワシが取り上げてデパートで買つてきたドックフードを食べさせたりもしたのあ、昆虫はお前の大好物だったのにな…今ではワシが昆虫を食べようになつとるわい…カカカッ』

『お前と近くの川に行つて、お前があほれて流された時は、心臓が止まるかと思ったのもよお覚えとるわい…本当に死にそうで焦つたのお前なのにな…』

『おい、ビーハイブ。お前あの一緒に女湯覗いた時の事覚えとるか？？、お前ときたら興奮しよつて女湯に飛び込んでいくもんじゃから、ワシ一人で逃げようかと思つたわい。まあお前のおかげである時はある意味美味しい思いをさせてもらつたけどな…ハハハハハッ。』

『ビーハイブ…ワシが死んで、お前と一緒に世界に行つた時には又一緒に暮そつな…あの世で元氣でやれよ…今度は狐の女湯覗こうな…』

…』

爺さんは俺達に『スマンが、これ以上見ると笑顔でお別れできそうにないわ…』と並び、ランタンを渡して座り込んだ。

俺達3人は爺さんの家の倉庫にあつたスコップを借り、少しでも柔らかそうな土を見つけ、昔タイムカプセルを埋めた時の様に必死で掘り出した。

50センチくらい堀り、ビーハイブの入つた箱をその穴に入れ、塩をまき、ガソリンを箱にかけて、火のついたマッチを放り投げた。

この後俺達は爺さんの綺麗な部屋にもどりビーハイブの事は話題に

せず4人綺麗に並んで眠りについた。

『一難去つて又一難』

ブウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ
ウ！

『ん……つむせえ……なあ……』

俺は眠い目を擦りながら、ポケットの中の携帯を取り出した。

ん？？…羽樹から…メールか…まだ7時半じゃねえか…はえええな
あ…

【優馬！…今どこに居るの！…？昨日も夜遅くまで薰とキキと
マスターでみんなの帰りを待つてたんだよ！…朝には戻るだろう
男が三人で出歩いてるんだから心配ないってマスターに言われて昨
日は寝ちゃつたけど今日の朝になつて優馬達の部屋に行つても誰も
いなかつたから…無事なら返事ください。それと早く帰つてきてく
ださい。】

羽樹の心配する文章に俺は水風呂に入ったかのように胸をギュッと
締め付けられ、半分眠つていた頭も、フル回転で活動しだした。

『や…やべえ…をい…！…光…！…五右衛門…！…爺さん…！…
！起きろ…！…！…』

俺は五右衛門の頬に平手をくらわし、光の布団をひつぺ返し、その
布団を爺さん目掛けて放り投げた。

『こいつてえなあ…！…朝つぱらからなんじや…！…』と五右衛門が怒。

『人が気持ちよお寝とつたのになにすんねや……ど阿呆……。』
と光が怒。

『小僧…………今日くらこゆつくり寝かせてくれてもいいじゃうつ
が……』と爺さんが怒。

『お前らアホか!!!!このメール見てみろ!!!!』と俺が怒。

と俺は携帯を前に出し、五右衛門達三人はそれを覗き込むように見
入った。

『薰とキキとマスターでみんなの帰りを待つてたんだよ……やべ……
……マスターに殺される……』と五右衛門が焦る。

『優馬達の部屋に行つても誰もいなかつたから……キキ……に殺される
……』と光が焦る。

『無事なら返事ください。それと早く帰つてきてください……可憐い
子チャンがワシの帰りを……』と爺さんが萌える。

『つて小僧……ワシは関係あるのか!!!!』と爺さんが我に返る。

あ……ついに無関係の爺さんまで起こしてしまった。【ブウブウブ
ウ】

爺さんのブウイングも無視し、俺達は身支度を整え……といつても何
も無いが……早急に帰宅しようとした。

『まてい……小僧……』

『なんやねん……爺さん……ワイヤ急がなホンマに命が危ないねん……』

と、爺さんはいきなり土下座し、話しだした。

『本当に感謝じや。お前らがいなかつたらわしは死ぬまで「ココで暮していたかもしれん。ベーハイブとの別れは正直心寂しい。』
『けど、コレで時忘れの洞窟も虫の呪いも全部開放されたとワシはおもつとる。その証拠に今、虫を見ても食べたいなどとこれっぽっちもおもわんしのあ。』

『恐らくベーハイブはワシにこんな所で腐つてたらダメだと伝えるために石の言葉や虫の呪い、時忘れの洞窟を用意したんじゃらうな。』

『死んでしまつても、ベーハイブはまちやんとワシの事を見ていくれたんじやな。…その気持ちに答えるためにもワシは今日を持つてココの樹海を去りゆうと思ひ。』

『あの世に行つた時にベーハイブに色々話してやれるようこ、残の人生を楽しんで生きよつと思つ……おぬしらのおかげじや。恩に着る……』

と爺さんはさすげていた頭を上げ、俺達にニコニコと微笑んだ。

『それにしても爺さん。行くあてあんのか? ? ? 』

『ない……じゃから旅をしようと思つ。松尾芭蕉の様にな。おぬしらの家にもいつか寄ろうと思つ。差し支えなかつたらおぬしらの住む土地だけでもおしゃてくれんかのあ……』

旅かよ……と突つ込みたかったが、俺達三人の同意で爺さんに俺達の

住所…ではなく【和茶】の住所を紙に書いて爺さんに渡した。

『これまた……遠いのぉ……コレはワシの田標じゃなあ。力力力力力力力力——』

『じゃあ爺さんワイヤーもホンマに需るわーー。元販賣でやるんやでー』

『覗きすゞで捕まるなよ！……』

『住所覚えて、死ぬ前に来いよ！死んでからは来るんじゃねーぞ……』

俺達は爺さんが見えなくなるまで何度も振り返り、手を振っては声をかけながら、立ち去った。

『あの爺さんなら、静岡からだらうが北海道からだらうがぜつてえ俺達のところまで来るな！――』

『ちげえねえ！－！』

『ちょっと女湯覗きたいがために、ここからあの旅館まで来るへり
いだしなあ！－！』

『((((八八八八八八))))』

『つて笑る一てる場合ぢやうで…待つとる4人が金棒もつて旅館の前でたつとるのが目に浮かぶで…』

光の追い討ち発言にブルブルつと体を震わせて、俺達は片道1時間

近くかかる所を駆け足で30分で帰宅した。

思つたより早く着いた俺達は近くの自販機でジュースを購入し、皆にどやつて説明しよう…と言い訳を考える事にした。俺達は作戦を計30パターンくらい考えた。

作戦1　『いやー。散歩してたら妊婦にばったり出くわしてや…いきなり倒れるもんだから、今日の朝まで病院で付きっきりだつたわ…病院に居る間は携帯つかえんくてなあ…』

妊婦付き添い大作戦！！

これは俺が考えた作戦だが、自分が病気にかかつてゐるわけでもなく、妊婦のご家族の方々が来たら我々が最後まで付き添う必要など全く無いとの事で却下。

作戦2　『ふう…やつと戻つてこれた。それにしても参つたよなー。すんげー追い風で遠くの方まで樂々に行けたんだけど、帰りは恐ろしい向かい風だもんなあ。参つたー！参つたー！アッハツハ！！』

向かい風大作戦！！

コレは言わずとも分かる五右衛門君による提案だ。勿論即却下。

作戦3　『おーおつたおつた。まさか一日もココに泊めてもらえるなんて思つてもいてへんかったからなあ。次のホテルまで三人で向かつてたんやわー。せやかて、夜になつても皆全然けーへんやん？？それでまさかと思つて戻つてきて良かつたわあ。良かつた良かつた。』

先走り大作戦！！

コレは光君の提案だ。案外良さそうだなと思つたが、光本人が、もしそれなら今の時代TELして確認ぐらいできるわな…と言つて出し、結局却下。

結局の所、素直に本当の事を話して謝るか…作戦30パターンの中で最も有力候補とされたあの 作戦21 で行くかと言ひ話し合いになった。

【実は樹海に再び探検に言つて、そこで虫を食う爺さんや、化け狐の呪いにかかるて色々と時間が経つてしまつて、その呪縛から開放された時にはもお深夜で、結局虫を食う爺さんの家に泊めてもらつてたんだよ。】

コレが本当の話だ…いや、今思うとあれは俺達の夢だったんじゃないのか…と実体験した俺達でも信じがたい様なファンタスティックな出来事だった。

そんな事信じてくれるはずもなく、それを話すくらいなら五右衛門が考えた 作戦11 の大名行列に巻き込まれて半日くらい土下座してました。その後は足がしごれて動けませんでした。

こいつの方がまだましに思えてくる次第だ…

よつて俺達は、 作戦21 を実行する事にした！――！

『 作戦21 前 』

午前9時。

焼け付くような太陽と、それを照り返すアスファルトが妙に俺達の集中力を高めてくれた。

心なしか静岡は俺達の地元より、空気が綺麗なのか、はたまた磯の香りで気分が良く感じられるからなのか良くなつたが、作戦21 を実行するに当たつては申し分ないモチベーションだった。

『ほな、作戦の説明するで、よー聞いとくんやで!!』

『コで、頭の悪い五右衛門と俺のために光が再度 作戦21 の段取りを説明してくれた。

作戦の説明中、流石に暑すぎるアスファルトに耐えかねた俺達は、大きな木の下の木陰に移動した。

光がちょうど良さそうな木の枝を拾い、それを使って地面にガリガリと作戦の内容など、要点をまとめてくれた。

そもそも 作戦21 と言つのは、昨日からずっと部屋に居ましたよ作戦なのだ。

ん！？…謎いつて！？…意味分かんねえよ…！つて？？

まあ無理も無い、君達より頭の良い俺ですら光に説明されるまではクエッショングマークが頭の中を飛び交つてたもんだ。

要するにだ。

昨日の帰りは確かに遅かつたけどけやんと帰つてきて、部屋にすつと居たんですが！？！？女性人ついでにマスターさん。そんなに慌ててどうかなされました！？！？！

とあたかも昨日からずっと部屋に居たかのように振舞う作戦だ。

俺達の部屋809号室にはロビーの横の階段、エレベーターを使わないと行く事はほぼ不可能。

そして、先ほど俺達がロビーを柱の影から覗いたら、マスター達は俺達の帰りをロビーにて待ち構えている。

それに気がついた時は、俺と五右衛門は作戦2-1もだめか…とため息をついた。

叱られるしかないな…と頃垂れる俺達の肩を光はポンと叩いてニヤリと笑つて見せた。

光だけは、首がロビーで待つてることを利用しようとした考えたのだ。

『ええか！？…こりゃ今までワイヤーがやつてきた中でもかなり危険な作戦やで…よお聞きや。下手したらマスターに2~3発殴られる方が軽傷で済むかもしけんこひけや。』光が真剣に言つた。

『うむ…確かにこの作戦…下手したら命落とすじゃねえかよ…』光の言葉に五右衛門も真剣に応答し、俺も睡を飲んで頷いた。

光が提案した作戦とは8階にある俺達の部屋に外から上ると書つて戦なのだ。

当然俺達も最初は、『無理！－無理！－無理！－無理！－』と断固拒否つた。

ロッククライマーでもあんな壁登れっこねえぞ…と叫び五右衛門の言葉に俺も大きく頷いた次第だ。

【まあ壁をよじ登るとなつたら、流石にロッククライマーでも無理やわな。けどな、ワイラが登るのは一つの階だけや。それも壁をよじ登るんやのとて、あの筒に足を引っ掛け登るんや。】

と光は俺達の部屋付近の壁を指差した。

太陽が射し、眉間に皺をよせながら俺と五右衛門は確認した。

『確かに、雨水を通す筒みたいなのはあるな…あれでを使って8階まであがるなんか！？！？』と五右衛門が無理だ！！と言おうとした時光が『アホか』と五右衛門の言葉を遮つた。

『ちやうちやうちやう…さつきもゆーたけど、あれを使って登るんは7階から8階だけや。それ以外はあの階段ですんなりといきやあええ。』と光が再びホテルの側面を指差した。

あつー！と俺は光の言いたい事が理解できた。俺の声に光はウインクし、親指を立てた。

『なるほどなあ…』と少し遅れて五右衛門も気がついた。

『IJの作戦俺達の部屋が809号室じゃなかつたらアウトだつたな…』と五右衛門が付け加えた。

『せやな。まあ運も見方してくれとる見たいやし、今回の作戦は上手く行くやん。』

俺達の部屋809号室はちよつけー一番端の位置にあり、その部屋の真下である709号室の横の壁に階段があった。

その階段を利用して、7階まであがり、7階まで来たら部屋の横にある雨水を流す筒をつたつて上に上がると言つことである。

『けど、なんであの階段7階までしかねーんだ！？！？』と俺が聞くと、確かに五右衛門も首を傾げた。

『まあその辺はよおわからんわ。元々7階までのホテルを客の入りが良いからつて事で改装して10階まであげたんかもしれへんしな。ワイラの部屋が709号室やつたら何の危険もなくいけたんやけどな。』

一通り、やる事を把握し、俺達は青空の下教室である木陰を離れ、ロビーのオープンなガラスからマスターたちに見られないように、ホテルの裏から周り側面にある階段へと足早に移動した。

『近くで見るとめっけや高いなあ…』と五右衛門が思つがまま声を出した。

『じゃつーとりあえず上がるでー！』と光が立ち入り禁止の掛けをまたぎ、カツカツカツと鉄の階段独特の音を鳴らしながら上がつていった。

それに続いて、五右衛門、そして俺と順番に上がつていった。

7階：樹海の件で2日間動きっぱなしの俺達の体には酷な階数だつた。

体力馬鹿の五右衛門は光をあつという間に追い抜き、俺と光が4階に到達した時にはもう7階で待機していた。

『なあ光よ……この作戦……膝にくるぞ……』

『優馬よ……わかつてゐるから、一々声にだしてゆるんでええやろ……余計にしこどこで……』

『すまぬ』

7階に着いた時には流石に尻餅をついて休憩する事しか出来なかつた。

『なつさえねえなあ。7階上つたくらいでハアハアハアと…おつさんじやあるめえし。』と待ちくたびれたぞと五右衛門が腕を組んで俺達を説教し始めた。

『ハア…せやかて、ハアハア…ここ2日間動きっぱなしで…ハア只でさえ体ボロボロやねん…しんどいっちゅーに…ハアハアハア』と途切れ途切れに光は五右衛門に反論した。

俺はと、五右衛門への反論を心で言い放ち、声に出すと言つ
労力は避けた。

『じゃあ、お前ら顔あげてみい！――！一気に疲れ吹っ飛ぶぞ！――！』と五右衛門が白い歯をキラリと太陽の反射で輝かせ俯く俺達の肩をゆすつた。

『うおおお……マジですげえ……』

『ホンマに疲れ吹き飛ぶでこれは……』

俺と光が声を出したのはほぼ同時だつた。

五右衛門が階段の手すりから体ごと乗り出して見ている先には、今までに見たことも無い凄い綺麗な風景があつた。

途切れる事の無い太陽の光が、澄み切つた海に跳ね返り、キラキラなんていう言葉では表せないほど輝き、波に乗つて泳いでいた。俺は羽樹にもこの光景の感想を伝えたい……そう思つたが、『すげえ……』ただコレしか言葉として表現できないのが悔しく思えた。もつと賢い人はこの光景を言葉にし、人に伝えられるんだろうなあ……と思うと何だか俺の知り合いは損をしているよりも思えた。

『それにしてもすげえなあ……』と光も口を開けて視線を海に送つていた。

『なつ……疲れ吹き飛んだだろ！？』と五右衛門の言葉に、ハツつと我に返りつた。

『せやな。何か癒されたわ！？』と光が笑いながら言い。

『うむうむ……』と俺も大きく頷いた。

変わるはずなのに、さび付いた階段がほんの1分前よりかなり汚い物体に思え『はあ……』とため息がでた。

『…「口からが慎重にならなあかんとこやな。ワイが最初に行くけど、一人はワイが登りきるまで口で待機やで！！登つたら合図送るわ！』と光は階段の手すりをヒョイッと越えて709号室のベランダへと飛び移った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7224e/>

和茶 6人席

2010年10月9日17時31分発行